平安・鎌倉期における男性文人の物語創作と享受をめぐって -漢籍受容の問題-

メタデータ	言語: Japanese
	出版者:
	公開日: 2018-07-31
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 芝﨑, 有里子
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/19567

明治大学大学院文学研究科

２０１７年度

博士学位請求論文

平安・鎌倉期における男性文人の物語創作と享受をめぐって
――漢籍受容の問題――

A study of the production and consumption of *monogatari* tales by men of letters in the Heian and Kamakura periods

—Issues on the use of classical Chinese works in their texts—

学位請求者　日本文学専攻

芝 﨑 有 里 子

平安・鎌倉期における男性文人の物語創作と享受をめぐって

――漢籍受容の問題――

目次

序章　研究動機と構成……1
一、研究の目的……1
二、研究の背景と動機……1
――『源氏物語』以前に成立した物語の研究とその限界
三、研究の方法――『源氏物語』注釈史への視座……3
四、各部の構成……9

第Ⅰ部　平安前期物語における漢籍受容
――『落窪物語』をめぐって

第一章　『落窪物語』の漢籍受容……21
一、はじめに……21
二、登場人物の発言に関する漢籍典拠……21
三、典薬助の和歌をめぐって……24
四、登場人物について……26
五、『孝子伝』との関係について……27
六、おわりに……29

第二章　『落窪物語』と『遊仙窟』……33
一、はじめに……33
二、『源氏物語』帚木巻との類似性……33
三、落窪の君との出会いと求婚……35
四、結婚第一日目から二日目①……40
――『遊仙窟』と『伊勢物語』第五三段
五、結婚第一日目から二日目②……41
――落窪の君と道頼の後朝と『遊仙窟』
六、おわりに……44

第三章　「しれもの」面白の駒をめぐって……47
一、はじめに……47
二、「しれもの」面白の駒……47
三、平安時代の「白物（しれもの）」……48
四、面白の駒の造型……50
五、面白の駒の大鼻……51
六、おわりに……53

小括……57

第Ⅱ部　創作と注釈のはざま　――源光行の翻案説話

第一章　『蒙求和歌』における「なさけ」……61
一、はじめに……61

二、平安時代の「なさけ」……61
三、『蒙求和歌』と「なさけ」〈1〉……63
四、『蒙求和歌』と「なさけ」〈2〉……64
五、「なさけふかき」人物像の創出……64
六、「無塩如漆」における改変……68
七、為政者と「なさけ」……71
八、おわりに……73

第二章　『百詠和歌』における破鏡説話の改変……77
一、はじめに……77
二、『百詠和歌』研究の限界……77
三、『百詠和歌』所収の破鏡説話……78
四、徐徳言説話の要素……79
五、『百詠和歌』への受容……80
六、末尾の曹文説話について……81
七、平安後期における破鏡説話の展開……82
八、『百詠和歌』における改変……83
九、おわりに……84

第三章　『百詠和歌』傅説（ふえつ）説話の成り立ちについて……88
一、はじめに……88
二、『百詠和歌』「独在二傅巖中一」……88
三、平安時代における傅説の故事の受容……90
四、和歌について……92
五、光行と吉野……94
六、鎌倉中期以降の注釈書における周公旦故事との関係……96
七、おわりに……98

小括……102

第Ⅲ部　『源氏物語』注釈における男性文人と漢籍典拠
——『光源氏物語抄』を中心に

第一章　『光源氏物語抄』編者の注釈態度について……105
一、はじめに……105
二、玉鬘巻「ひせんの国」と「ひこのくに」……105
三、典拠をめぐる検証……109
四、「心」の一致……113
五、おわりに……115

第二章　素寂注における周公旦故事の受容……118
——『尚書』引用にいたるまで
一、はじめに……118
二、『光源氏物語抄』素寂注の周公旦故事……118
三、『蒙求和歌』ならびに河内方注釈との関係……119

四、『蒙求和歌』「周公捉髪」……122
五、周公旦故事の『尚書』引用への波及……123
六、素寂の漢籍引用の手法……124
七、『源氏釈』『奥入』と素寂注の関係……126
八、おわりに……127

第三章　『光源氏物語抄』編者の経書引用に対する意識……132
一、はじめに……132
二、『光源氏物語抄』編者の経書引用……132
三、春秋左氏伝序「先レ経以始レ事」の説……133
四、清原教隆注との関係……136
五、おわりに……138

第四章　『光源氏物語抄』「俊国朝臣」について……140
——鎌倉期における紀伝道出身者の源氏学をめぐって
一、はじめに……140
二、「行平」注に見える「俊国朝臣」説……140
三、藤原俊国の経歴……141
四、俊国周辺と『源氏物語』の享受……142
五、「俊国朝臣」説と家学……144
六、紀伝道出身者の注釈と学問……145
七、俊国注の位置づけ……145
八、おわりに……147

小括……153

終章　研究の成果と今後の課題……155
一、各部の成果……155
二、物語創作と注釈の近似性……160
三、今後の課題……162

【主要参考文献】……166

序章　研究動機と構成

一、研究の目的

本研究は、創作行為のみならず、享受（注釈）までを視野に入れることで、物語文学と男性文人が対峙する際、漢籍の知識がどのように援用されていたのか、その思考を明らかにすることを主な目的とする。

文学史において『源氏物語』以前の物語はいずれも男性文人により書かれたとされている。「文人」という用語については詳細な定義も行われているが（1）、多くは「男性知識官人一般を包括する汎称として」（2）として用いられており、本稿もこれにならう。文人にとって漢詩文は職能とするところであるから、その知識が、仮名の物語を構築する際どのように関わっていたのという問題は、彼らがどのような作品世界を作り上げようとしたのかということに関わってくる。しかし資料が少なく、作者について具体的な個人を特定することは困難であり、漢籍の受容についても表現の類似以外に十分な論証ができないことが多い。また、文学史上においても、一般的には、『源氏物語』の出現にいたるまでの基盤として捉えられており、『源氏物語』が登場するや否や男性文人の物語創作は影をひそめてしまう。物語作者としての男性文人という視点から『源氏物語』以降の動向までを視野に入れた研究で、まとまったものとしては目加田さくを氏をあげられる程度である（3）。

そこで本論文では、平安期の男性文人たちの物語創作を受け継ぐものとして、鎌倉期の翻案説話である源光行の『蒙求和歌』『百詠和歌』と、鎌倉期の『源氏物語』諸注集成である『光源氏物語抄』所収の博士家出身の文人とその周辺に位置する人物たちの注釈を位置づけ、翻案説話や注釈における物語と漢籍の接合の仕方について、その実態を明らかにする。このうち翻案説話については、物語のあとに出現する男性文人たちの著作として目加田氏の著書でも『唐物語』が列挙されているが、詳しい検討はなされていない（4）。

これら享受史における流れをも視野に入れることにより、『源氏物語』に注いでいくのとは別に、平安期における男性文人の物語創作が影響を与えた文学活動があることを示し、平安前・中期における男性文人の物語創作の文学史的価値を見直すことを試みる。

二、研究の背景と動機
――『源氏物語』以前に成立した物語の研究とその限界

一般的に文学史において、平安時代の物語文学は、『源氏物語』を基準に、『源氏物語』以前・以後に分けられる。『源氏物語』以前では、『竹取物語』『伊勢物語』『大和物語』『平中物語』『うつほ物語』『住吉物語』『落窪物語』など、以後では、『夜の寝覚』『狭衣物語』『浜松中納言物語』などがある。このうち、『源氏物語』以前の物語は、和歌を中心に短い章段が構成されている『伊勢物語』『大和物語』『平中物語』を歌物語としてまとめ、『竹取物語』『うつほ物語』『住吉物語』『落窪物語』など、比較的長編で、一貫した主題を有する物語を作り物語として区分することが多い。なお、『源氏物語』やそれ以後の『夜の寝覚』『狭衣物語』『浜松中

納言物語』など、いわゆる平安後期物語もこの作り物語の系譜に連なる。平安後期物語は、その成立が平安後期であることによる呼称であるが、それに対して、平安前期から中期に成立した『源氏物語』以前の作り物語は前期物語とも呼ばれている。

この平安前・中期の物語の中でも主要な作品とされているのが、『源氏物語』においても「物語の出で来はじめの親なる竹取の翁」（②三八〇頁）（5）と称される『竹取物語』、日本文学史上長編物語の初発とされる『うつほ物語』、そして、それに準ずる位置付けとして、継子いじめ譚の『落窪物語』がある。この継子物語には『住吉物語』もあり、『源氏物語』内で言及されていること（6）や、後世の諸本の流布状況からして、当時は『住吉物語』の方が、有名であったと考えられる。しかし現存する『住吉物語』は中世の改作本であり、いわゆる古本『住吉物語』については、その全貌が明らかになっていないため、ひとまず置くことにする（7）。

『竹取物語』『うつほ物語』『落窪物語』といった『源氏物語』以前の主要な作り物語は、具体的な人物像は明らかにされていないものの、漢詩文の引用があることなどから、いずれも源順に代表されるような身分の高くない、漢籍の素養のある男性官人とされてきた。いわゆる男性文人である。かれらは本来漢詩文の才に長けており、それによって政治に関与していくこと、つまり文章経国の時代を理想としている。しかし摂関政治が確立されると、文人たちは出世の道を閉ざされ沈淪せざるをえなくなった（8）。このように漢詩文をなすことを本職とする彼らにとって、仮名で物語を創作することは副次的なものであったはずである。しかし、平安前・中期の物語の内部には、『竹取物語』の神仙伝の受容や、『うつほ物語』の俊蔭巻や藤英などに見られる学問の重視、仲忠や忠こそといった孝子の物語など、男性文人自身の興味に即した話題や設定がなされている。また『うつほ物語』の三奇人や『落窪物語』の典薬助達は、貴族社会に対して、批判的な視点を投げかける役割も果たしている。これらのことから、物語を創作するということは、単に婦女子に作品を提供するだけではなく、作者の男性文人たちの自己表現の一環であり、歴とした創作活動の一つであると考えられている。もちろん読者もまた女性や子どものみに限らず、作者と同様の立場にある男性たちにも読まれることを前提としていたであろう。

このように物語創作が一種の慰撫として成り立ったことには、あえて漢文ではない仮名であるということが関わってくると考えられている。文書など公的な世界を担う漢字に対して、仮名は私的性格を有している。そのため仮名で書く物語には、漢文とは異なり「公的に無効であることによって、逆に私的な世界の拡充と深化を果たし、表現を純化させる」ことができたと考えられている（9）。近年では大井田晴彦氏が、『うつほ物語』を念頭に、

漢詩文の制作を本業とする、彼ら文人にとって、物語の執筆は余技でしかなく、社会的な栄達とも無関係である。しかし、その手すさびに過ぎない物語の作者に徹することにより、かえって人間と社会の真実が発見されるのである。また、社会の矛盾を批判的にとらえるところから、過往の学芸尊重の時代が聖代として理想化され、憧憬の対象ともなる。

と、文人たちの物語創作の意味を見定めている（10）。物語文学への一階梯として『続浦島子伝』など漢文伝なども想定されているが（11）、仮名で書く方が「伝奇を書くにしても、明らかに漢文より自由奔放な創

作が可能になった」と考えられている（１２）。室伏信助氏は、この男性文人の作者層を「公的社会から逸脱し、またはその世界に安住しえぬ、不安な魂の持ち主としての男性官僚」と規定し、『源氏物語』までの物語がすべて男性に作者によるものと考えられることは、「あらため問い直さなければならない重要な課題」（１３）と捉えられている。

しかし、平安前・中期に著された物語の作者論については、作品内部の記述から男性文人であろうことは予測できても、資料にも限りがあり、具体的な作者を確定することは困難を極める。このような状況で漢籍受容をいくら指摘しようとも、具体的な作者が明らかにならない以上、おそくらく作者は男性文人であろうことを補強するにとどまり、彼らの創作の実態まで掘り下げることは困難である。またこれらの物語は、『源氏物語』に至るまでの基盤形成期として捉えられることが多く、『源氏物語』が出現すると、そこに収斂してしまい、男性文人の物語創作は埋没してしまう感が否めない。

三、研究の方法――『源氏物語』注釈史への視座

そこでまず、第Ⅰ部で平安期の『源氏物語』以前に成立した物語自体の漢籍受容の問題として『落窪物語』を扱う。そのあと第Ⅱ部第Ⅲ部で鎌倉期の翻案説話や『源氏物語』注釈書を用い、漢籍と仮名の物語をどのような発想で接合させていたのか検討していきたい。なお、今回は全体的な概要ではなく、個別のケースを分析することで、その実態を具体化していくことを重視している。

〈第Ⅰ部〉

『落窪物語』は、男性文人作者的な要素を持つとしながらも、漢籍受容に関する研究が進んでいない作品である。よって、まずは『落窪物語』の中にも漢籍を受容している場面を見いだすことからはじめたい。

『落窪物語』は、平安時代を代表する継子物語でもあり、その梗概は以下のようなものである。主人公である継子姫は、継母からいじめられ、屋敷の落ちくぼんだ部屋に一人住まわされていることから「落窪の君」と呼称さている。落窪の君は継母から裁縫仕事を押しつけられ、実の父親である中納言からもかえりみられないが、やがて左大将の息子道頼がひそかに通うようになる。落窪の君の唯一の味方である女童あこきと、彼女の夫帯刀の協力もあり、やがて落窪の君は道頼の妻となり繁栄する。道頼は落窪の君を継母の支配下から救出した後、継母や落窪の君の実父である中納言たちに対して、数々の報復を行う。しかし最後には父中納言と落窪の君は再会を果たし、その後は孝行を尽くした。成立は、寛和二年（九八六）以降長保二年（一〇〇〇）ごろまでとされている（１４）。

『落窪物語』の本文中には、孝の思想が含まれていたり、卑猥な表現や尾籠な場面が躊躇なく描かれていたりすることから、源順に象徴されるような、身分の高くない学識ある男性が作者とされている（１５）。たとえば、継子と継母、それに継母とともに継子いじめに荷担した父が和解したあと、継子が父や継母に孝行を尽くす場面がある。一方卑猥な要素というのは、まず、継子姫の名前でもあり、題名にもなっている「落窪」である。「落窪」は、落ちくぼんだ場所（継子姫の住まい）の意だけでなく、「くぼ」に、女性器の意味があり、「おち」いうのは「結婚できない不毛な、きたない」といったマイナスの意味づけであるとされている（１６）。このほかにも『落窪物語』には、「寝」「臥す」といった情交

を指し示す表現が見られ、さらには典薬助が腹を冷やし下痢をしてしまう場面などスカトロジー的な志向もある。このような傾向を高橋亨氏は「猿楽精神は祝祭的な想像力に支えられたもので、漢文的な精神に結びつく男性的な要素がつよい。」（17）と評している。

しかし、『竹取物語』や『うつほ物語』といった他の『源氏物語』以前の男性文人が作者であるとされる物語と異なり、『落窪物語』の漢籍受容については、積極的に議論されてこなかった。まとまった先行研究としては、稲賀敬二氏（18）・三木雅博氏（19）の研究がある程度である。具体的にどのような漢籍が指摘されているのかについては、第Ⅰ部の第一章でまとめることにして、ここでは、『落窪物語』研究における漢籍受容の問題を検討する意義を示しておきたい。

『落窪物語』の漢籍受容について、はじめてまとまった研究を行った稲賀敬二氏は以下のように述べる。

> 『宇津保物語』の「忠こそ」の物語や、『住吉物語』など、『落窪』に雁行する「まま子いじめの物語」は数多いし、それは平安朝時代から中世にかけて一つの系脈を作ってはいるが、そういう文学史的な知識を前提にしなくては面白く読めないというのであれば、この『落窪物語』の価値も学者の知的興味の対象にすぎなくなってしまう。（20）

その上で、稲賀氏は「まずさしあたり、『落窪』を平安朝の「物語」一般の中へ置いて、作者の筆力が古い時代の読者たちにおのずから訴えかけていたであろう表現の質を検討してみるところから始めたい。」（21）として、漢籍と仏典について引用を検討していった。これは、『落窪物語』研究が継子物語としての特徴ばかりについて着目してきたことへの反省であると言え、稲賀氏の発言した一九七七年当時の状況を踏まえたものであるが、その後の研究でも状況はあまり変わらなかった。

継子物語は、『源氏物語』蛍巻に「継母の腹きたなき昔物語も多かるを」（③二一六頁）とあり、『源氏物語』にも継子いじめ譚のプロットが変奏されているなど、平安朝物語を代表するプロットのひとつであった。よって、『落窪物語』を継子物語として分析していくことは、妥当で必要不可欠な視点である。しかし継子物語としての分析ばかりが先行した結果、一九八〇年くらいまでに、作品の特徴については一通り指摘が出揃ってしまい、その後の研究は閉塞の感が否めない。漢籍受容の問題についても、稲賀氏とそれを継承した三木氏の後、十分に検討が尽くされたのかというと、そうとは言えない状況にある。ごく近年こそ新しい研究が発表されるようになった（22）が、修士論文（二〇一〇年一月提出）でこの問題に着手したときは、ほとんど顧みられていない問題であった。

このような状況を踏まえ、本論文では、稲賀氏と同じく、『落窪物語』を男性文人による物語創作として『源氏物語』以前の作り物語の系譜の中に位置づけるために、『落窪物語』の中に見える漢籍引用について検討していく。

〈第Ⅱ部〉

『落窪物語』の成立からまもなく、『源氏物語』が出現し、男性文人と物語文学の関係は影をひそめてしまう。その中で、再び立ち現れてくるのが、『唐物語』『蒙求和歌』など漢故事の翻案説話である。

『唐物語』の成立は、『詞花和歌集』からの引用が『唐物語』にあるこ

とから仁平元年（一一五一）以降『宝物集』に『唐物語』からの引用があることから下限は文治四年（一一八八）であるとされ、およそ一二世紀中～後期ということになる。作者については、太田晶二郎氏が紹介した『桑華書志』所載の「古蹟歌書目録」に「漢物語一帖成範作」とあり（２３）、藤原成範（一一三五―一一八七）が有力とされている。成範は、南家藤原氏に属し、博学として名高い通憲の子である。平治の乱（一一五九）の際には成範も一時下野国に配流となった。成範自身は勅撰集に一三首入集するなど、歌人とし活躍しており、漢籍を博捜する一方で和歌を取り入れながら翻案説話を編んだ人物として条件的には可能性が高い（２４）。

『唐物語』でとりあげられている故事は、人口に膾炙したものが多く、楊貴妃や上陽白髪人をはじめ、男女や主従間の愛情をテーマとした話が目立つ。また、必ず一首以上の和歌を含み、感想・感慨・批評・教訓など評語のあるものが多い（２５）。その叙述は、単なる中国説話の翻訳ではなく、歌語や物語の要素を取り入れ情趣化されていることから王朝物語に近く、和歌を伴うため「歌物語」としての性格を有することが指摘されている（２６）。早く吉田幸一氏は、「唐物語は、翻訳文学のやうに言はれるが、むしろ題材を漢故事にとつた物語的な創作であつて、」と『唐物語』と物語文学の近似性を認めている（２７）。

このように翻案説話が物語的な要素を有するということができ、作者とされる藤原成範は、鴻儒通憲の子であることからも、物語創作と漢学に通じた文人の関係が浅からぬことをうかがわせる。前述の通り、目加田氏も漢籍に長けた作者の物語創作に続くもののひとつとして、翻案説話のうち『唐物語』を上げていた（２８）。

しかし、『唐物語』は作者が確定されている訳ではない。また、前述のように、本論文は、平安時代の男性文人たちの物語創作を、注釈行為へと続くものとして見通していきたい。このように、物語創作と注釈という一見すると相反する行為を一本の線の上に捉えようとする時に注目されるのが、時代は下るものの物語的要素と注釈的な要素両方を合せ持つとされる源光行の『蒙求和歌』と『百詠和歌』である。『唐物語』の方が、王朝物語的要素が強いとされるが（２９）、『蒙求和歌』や『百詠和歌』にも単に漢故事を和文脈にしただけというにはおさまらない創作的な部分を持ち合わせている。『蒙求和歌』『百詠和歌』は、跋文から源光行の作品であることが明らかである。よって本論文では、光行の翻案説話を主な研究対象とし、関連する箇所については、『唐物語』についても触れることにする。

源光行（一一六三―一二四四）は、河内方源氏学の祖であるが、漢学を南家藤原氏の孝範に師事しており、博士家の学問に連なる人物と言える。『蒙求和歌』『百詠和歌』は、散佚した『楽府和歌』と三部作であり、その成立はいずれも元久元年（一二〇四）、光行四十二歳の時とされている（３０）。『蒙求和歌』『百詠和歌』どちらも当時幼学書として読まれていた『蒙求』『李嶠百詠』から用いられている故事を選び、注本に基づいて翻訳したもので、各章段の末尾には、その故事にちなんだ和歌を詠み付している。

『蒙求和歌』の序文に

イトケナクテコノ書ヲツタヘヨムトイヘドモ、竹ノエダニムチヲウテ、サカヒヲカヘリミルコトワスレ、サカリノ時ハソノ心ヲサトラムトスレバ、又ヤナギノハヲアムニモノウクシテ、オクヲキハムルニオヨバズ。ナカゴロハ北闕ノ北ニ家ヲワスレテ、霜ヲフミ星ヲイ

タダクニイトマナク、今ハ東邑ノ東ニスダレヲトヂテ、雪ヲカカゲホタルヲトモスニタヨリアリ。トキニ男コ女ナノ名ヲ一巻ノウチニヌキイデテ、カシコクオロカナルタメシヲアマタノフミノソコヨリウカガヒイデタリ。歌二百五十ヲツラネテ、巻一十有四ヲナセリ。（３１）

とあるように、幼少期には理解することができなかった、「カシコクオロカナルタメシ」を解き明かすことを目的としているとある。この執筆動機については早く池田利夫氏が注目されており、単に『蒙求』の故事を仮名の文章に直すだけでなく、故事に含まれる「人間くさい葛藤」や「男女の機微」をわかりやすく提示することが目的のひとつであったという。そして後年、漢学の師である紀伝道の学者藤原孝範がこの三部作を称賛しているのも「これが漢学者流の単なる翻訳でないことを意味している」と指摘されている（３２）。このことは近年『蒙求和歌』の翻案手法を整理した田坂順子氏にも登場人物の心中思惟を詳しく書くというかたちで指摘されている（３３）。

そのため『蒙求和歌』の記述は、光行が参照していたであろう古注『蒙求』と比較すると、『蒙求』注の記述から逸脱した説明がある。それは他の漢籍典拠による場合もあり、和書に基づく場合もある。さらには光行自身の創作と考えられる場合もある。ここでは田坂氏のあげる中からひとつ例を示すと、『蒙求和歌』第三秋部「伯瑜泣杖」では以下のようにある。まず、光行が見たと思われる古注『蒙求』を引用する。

韓子外伝に曰く、伯瑜過ち有り。母之を笞うつ。泣く。母曰く、他日未だ嘗て泣かず。今泣くは何ぞや。対へて曰く、他日痛し。今母老いて力無く、之を笞うてども痛からず。是を以て泣く。（真福寺本）（３４）

それに対して、『蒙求和歌』では、次のようにある。

伯瑜、イトケナキトキ、心ニタガフコトアレバ、母、ツエシテウチケリ。伯瑜ツエヲウケテ、イタミナクコトナシ。母オイテ後、マタ伯瑜ヲウツニ、伯瑜オホキニイタミナキケリ。母ノ云ハク、「我ガ昔ウチシニ、ナクコトナカリキ。今、サラニイタミナクコト、我ヲウラムル心アルベシ」トアヤシミ云ヘリ。伯瑜コタヘテ云ハク、「母ノワカクシテウチシツエハ、ツヨクアタリテ、ミニシミシカドモ、心ニハイマダイタマザリキ。今モ、ツエヲイタミウラムルニハアラズ。ツエノヨワクアタルニツケテ、ヨハヒオトロヘテ、チカラノツヨキハテタルコトヲウレヘナクナリ」ト云ヘリ。母、コレヲキクニ、セムカタナクアハレトオモヒケリ。

『蒙求和歌』では全体的に記述が詳しくなっているが、母が老いを案じる伯瑜の心情について、古注では、「他日痛し。今母老いて力無く、之を笞うてども痛からず」とある。それに対して『蒙求和歌』では、傍線部のように、伯瑜の心情を身と心の対比のうちに詳しく説明している。そして説話末尾には、それを聞いた母の心情が付されているが、これは古注にはないものである（３５）。もちろん他書によった可能性はあるが、それにしても、光行は伯瑜の孝子ぶりよりも母と子双方のお互いを思う心を描き出していることになる。

なお、『百詠和歌』もまた仮名序に「十歳の昔、此文を読伝へて、四旬の今、心をしるしあらはせり。」とあり、その発想は、『蒙求和歌』と同様のものであった。

漢籍を引用しつつもあらかじめ仮名により物語を創作していくことと、漢籍の故事に沿ってそれを翻案していくことは、ぴたりと重なるわけではないが、漢籍の枠組みを用いながらも、改変を加え和文脈として書い

ていくことは、仮名の物語の創作に通うところがある。とくに漢籍の故事の枠組みに、前掲の池田氏が言うところの「人間くさい葛藤」や「男女の機微」といった心の動きを捉えようとしたのは、神仙伝や羽衣説話の枠組に基づきつつ、かぐや姫に「あはれ」を語らせ、残された翁や帝たちに「不死の薬」を拒絶せしめた『竹取物語』のような、伝承・伝奇から物語文学への脱却と似たプロセスと言えるのではないだろうか。

一方で、すでに池田利夫氏や相田満氏が指摘されるごとく、漢籍を翻案するということは、光行の解釈を示すことにもなる（３６）。事実『原中最秘抄』や『河海抄』には『蒙求和歌』や『百詠和歌』の一節が「蒙求注曰」「百詠注曰」として引用されている（３７）。よって、この『蒙求和歌』と『百詠和歌』を創作と注釈の中間に位置するものとして措定したい。

本研究では、主に物語的な要素の方に着目して、考察を試みたい。他書からの引用をはじめ、『蒙求和歌』がもとの古注『蒙求』をどのように改変しているかについては、野村八良氏・山岸徳平氏・池田利夫氏・川口久雄氏など諸氏により検討されており（３８）、和歌や『源氏物語』など平安時代の和書をも視野に入れた検討が山部和喜氏・柳瀬喜代志氏・田坂憲二氏などによりすすめられている（３９）。また章剣氏の『『蒙求和歌』校注』（溪水社、二〇一二年一〇月）が発表され、標題ごとに、光行が『蒙求和歌』を書く際参考にしたとされる古注『蒙求』、『蒙求和歌』の片仮名本と平仮名本の本文が対照できるようになった。このように『蒙求和歌』の研究は前進しつつあるが、約二五〇話ある説話の一話ごとの検討はまだ十分には尽くされていない。よって、光行が『蒙求和歌』を通して描きたかった、「カシコクオロカナルタメシ」とはどのようなものか、その一端を明らかにしたい。

『百詠和歌』の研究は、池田利夫氏の伝本をはじめとする基礎研究（４０）、杤尾武氏による出典調査（４１）の他、まとまった研究は行われていない。説話集や軍記に採録された『百詠和歌』の章段や、『源氏物語』あるいはその注釈との関係（４２）は言及があっても、『百詠和歌』自体については個別の考察はほとんどなされていない（４３）。注釈作業も胡志昂氏、山部和喜氏、中村文氏の三人により始められたが、すべてそろわないまま途絶えてしまっている（４４）。よって、この注釈作業を引き継ぐべく、個々の説話の検討を進め、光行の改編の意図や物語性、または注釈書でもあるということを意識しつつ、光行の故事の捉え方についても言及したい。

〈第Ⅲ部〉

鎌倉期の『源氏物語』の諸注集成である『光源氏物語抄』には、複数の博士家の学者ならびに、その周辺に位置する人々の注釈が散見し、それらのなかには漢籍典拠を指摘した注もある。漢籍を典拠として指摘し、物語の新しい解釈を行おうという注釈行為は、男性文人と物語ということを軸に考えると、平安期の男性文人の物語創作を継承するもののひとつとして位置づけられるのではないだろうか。しかもこれらの注釈は、注釈者と物語理解に用いた漢籍が明確であり、漢学をルーツにもつ男性たちが、物語と漢籍を結びつける際に、どのような思考をめぐらせていたのか、たどっていくことが可能である。

鎌倉期になると、『原中最秘抄』や『光源氏物語抄』といった『源氏物語』の諸注集成の形式をとるものが出現する。この時代は、専門家の意見を優先する風潮があり（４５）、その中には、漢籍を専門とする博士家

の人々の注も散見する。紀伝道では、藤原永範・孝範・経範・茂範、藤原基長、菅原為長・公良、藤原通憲、そして第Ⅲ部第四章で検討する藤原親経・俊国の注釈が掲載されている。明経道の清原教賢・俊賢等がいる。彼らの注釈は、漢字の訓を示す字義の解説や語釈、有職故実などで、すべてが漢籍引用に関わる訳ではないが、中にはその専門知識が生かされた注釈もある。

この時代、漢学を専門とする男性文人の立場は、沈淪にあえぐ平安前期や中期とは異なっていた。平安末期より、家格や職能が固定化していく中で、博士家出身者は、文事を重んじる院や摂家に院司や家司として仕え、実務面のみならず、詩会への詠進、学問の伝授などを通して、権力者との結びつきを強めて栄達を遂げていった。そのため藤原親経や菅原為長、藤原基長など、学問の家柄にもかかわらず公卿に至る者が現れのである（46）。この文事の隆盛は『明月記』にも「近日儒家之事、過二上古之明時一。驚二耳目一事不レ可二勝計一。」（建保元年正月十日条）（47）と、平安期の「文章経国」の理念がもてはやされていた時代と比較されている（48）。

今回主な分析の対象とする『光源氏物語抄』（『異本紫明抄』とも）は、第一冊目の本奥書に「建長四年十月廿八日、見二一合伊行定家等抄物并談儀聞書等一書写了。」（二〇一頁）（49）とあるように、伊行や定家の注に加え、当時活躍した人々の説を集めた『源氏物語』の諸注集成である。成立については、第一冊目の本奥書の他、同じ第一冊目の内題にも「光源氏物語抄一［文永四二廿三始レ之］」（一四八頁）とあることから、建長四年（一二五二）に第一次集成が行われ、文永四年（一二六七年）から第二次編集が始まると考えられている（50）。各注記の下に誰の説によるものか出典を示しながら列挙していき、出典についても傍記があることも多い。素寂、清原教隆、西円など関東で活躍した人物の注釈が多く含まれていることから、その成立もまた関東で行われたかとされている。また、「今案」というかたちで編者のものと思われる説が見える。注の内容は、簡単な訓注から、語釈、漢籍や引歌など典拠の指摘、有職故実、作品理解を助けるような説明まで多岐にわたり、問答形式による注記も目立つ。堤康夫氏の調査によると、「今案」注は一七九項目あり、素寂、定家、西円、伊行についで五番目の多さであるが、項目のみで注記のない箇所が五七項目もあり、実質的には一二二項目にとどまるという（51）。編者の具体的な人物像については堤氏の金沢実時説が有力視されているものの（52）、近年、栗山元子氏（53）や李興淑氏（54）により、なお検討の余地を残すことが指摘されている。

『光源氏物語抄』のなかには、前掲の博士家の学者のうち、南家藤原氏の孝範が一例、明経道の清原教隆一五六例、それに今回第Ⅲ部第四章で検討する藤原氏北家内麿流の親経・俊国父子がいる。人数としては、『原中最秘抄』に及ばないが、談義や問答の様子など、当時の注釈が成り立っていく過程がよく現れているのが特徴である。

先行研究においても、『原中最秘抄』については、田坂憲二氏により、注釈者が家分けで整理されており、博士家出身者についても触れられている（55）。さらに田坂氏の調査を補足修正した落合博志氏の論考もあり、田坂氏が飛鳥井雅有の弟かとした（56）「基長」は、式家藤原氏出身で、文章博士でもあった紀伝道の学者藤原基長の方が適当であるとした（57）。それに対して『光源氏物語抄』はというと、引用漢籍については河野貴美子氏の諸論の中で触れられてきたが（58）、博士家出身者の注釈者それぞれに焦点を当てた研究はあまりされてこなかった。数少

ない先行研究として、門澤功成氏が、教隆の『長恨歌伝』引用について、『白氏文集』抄出本への加点作業との関連を検討し、両本文の系統が異なることを明らかにした（５９）。教隆は、一五六例と注釈数も多く、『光源氏物語抄』全体を代表する注釈者の一人でもあるため、編者との関係（６０）や全体的な注釈の傾向（６１）などが注目されているが、家学など漢学の専門家としての立場はあまり注目されて来なかった。それでも第Ⅲ部第四章の拙稿より後にはなるものの、河野貴美子氏は、教隆が帚木巻冒頭の構造を『春秋左氏伝』の構造になぞらえて捉えていることについて、清原家の家学との関連を指摘された。他にも教隆注ではないものの、唐の帝王学の書である『帝範』や臣下の心得を説いた『臣軌』などが用いられていることについて、いずれも清原教隆が将軍九条頼嗣や宗尊親王に講義をおこなった書であり、当時の学問状況に即した注釈であるといえること、素寂注所引の『貞観政要』が、南家本あるいは菅家本であることを指摘している（６２）。このように、『光源氏物語抄』の博士家出身の文人たちの注釈を分析すること自体あまり研究が進展しておらず、本研究は、物語創作との関係だけでなく、『源氏物語』の注釈史としても、新たな一面を提示することになる。

また、第Ⅱ部で論じた『蒙求和歌』とこれらの注釈書をつなぐものとして、源光行の子素寂による周公旦故事の引用についても論じたい。前述の通り、光行は南家藤原氏の孝範に漢学を師事しており、光行そしてその子である素寂もまた、博士家の学問の周辺に位置する人物の注釈として位置づけられる。

以上のように、男性文人たちが物語を創作するということを捉える方法のひとつとして、漢籍受容の問題を軸に〈創作〉から〈創作と注釈の二つの要素を持つもの〉、そこから〈注釈〉へという文学史の流れを追いたい。そして、このように三者を据えることで、その初発に位置する男性文人たちの創作について、改めて評価をしてみたい。

四、各部の構成

第Ⅰ部では、物語創作自体の問題として、『落窪物語』における漢籍引用について検討する。それにより、『落窪物語』が『源氏物語』以前に男性文人により創作された物語としての性格を有していることを補強する。

まず第一章では、『落窪物語』について、これまで指摘されている漢籍典拠にはどのようなものがあるか、整理して概説したい。それにより『落窪物語』においても漢籍受容を検討していくことが妥当な方法であることを確認する。

第二章では、『落窪物語』における『遊仙窟』の受容について検討する唐代伝奇『遊仙窟』の張文成と十娘が出会い、恋が成就するまでの展開は、物語の基盤として『伊勢物語』や『源氏物語』に取り入れられていることが報告されている（６３）。『落窪物語』においても、落窪の君と道頼が出会ってから逢瀬を経て打ち解けるまでの場面には、『遊仙窟』が踏まえられていることを提示し、唐代伝奇の取り入れ方としても、『落窪物語』が一般的な平安物語の系譜の中に位置づけられることを論述する。なお、『落窪物語』の唐代伝奇受容については、三木雅博氏により、『鶯鶯伝』との人物関係の対応が指摘されているが（６４）、そもそもこの『鶯鶯伝』は、『遊仙窟』の影響下にある作品である。よって『落窪物語』における『遊仙窟』引用が、『鶯鶯伝』と重層的な受容になっている可能性

にも迫りたい。

第三章では、物語には公的世界では満たされない心を慰める効果があったというが、そうした要素が現れた結果のひとつとして、面白の駒の造型を考えてみたい。面白の駒は、「しれもの」として周囲から嘲笑される存在である。面白の駒については、モデル論を通して早くから着目されてきたが（６５）、「白物（しれもの）」や「痴」は、仕官と関わる概念であり、源順「高鳳が貴賤の交りを同じくするを刺る歌」（『本朝文粋』巻一所収）のように漢籍作品の直接のテーマにも選ばれるなど、男性文人にとって関心の高いテーマであった。このような認識が面白の駒の造型にどのように投影されているのかということを明らかにする。

第Ⅱ部では、創作と注釈の中間に位置するものとして、源光行『蒙求和歌』『百詠和歌』の個々の章段を詳しく検討することで、光行の表現や創作意図にせまりたい。

第一章では、光行が『蒙求和歌』を通して主張したかった人物像にせまりたい。『蒙求和歌』の翻案手法は考察が進められつつあるが、すべてを網羅するには程遠い状況であり、また、作品を通して一貫している特徴については、概説的な部分は説明されていても、もう一歩踏み込んだ具体的な部分については、検討の余地を多く残す。そこで、『蒙求和歌』の説話本文中の「なさけ」の語に注目することにより、光行が描き出そうとした人物像とその手法の一端を明らかにする。

第二章では『百詠和歌』所載の説話についても光行の手が加えられ情趣化されていることを、『百詠和歌』第一天象部「月」に引用される破鏡説話をもって提示したい。従来明らかにされている漢籍典拠（『神異経』や徐徳言説話）（６６）に加え、平安後期における破鏡説話（曹文説話など）の受容を含め再検討することにより、先行研究で指摘されているよりも多岐にわたる類話が取り込まれていることを明らかにする。またこれらの典籍を取り入れながら、光行が破鏡説話にどのような主題を込めたのか論証する。

第三章では、第二章に続き、『百詠和歌』第二坤儀部「野」の「独在二傅巖中一」における傅説説話について、光行の創作手法を検討する。なお、本章では、光行が読み取った登場人物の心中思惟をどのように表現していくのかという、注釈的性格の部分にも言及したい。また、この章段は『紫明抄』明石巻に「他の朝廷にも、夢を信じて国を助くるたぐひ多うはべりけるを、」（『源氏物語』②二三一頁）の典拠として引用されている。このため山部和喜氏は、『百詠和歌』の記述が創作される際にも『源氏物語』の当該箇所が踏まえられたとする（６７）。光行の翻案作品に『源氏物語』が踏まえられていることは、前述のとおり、『蒙求和歌』において指摘があり、本論文でも第Ⅱ部の第一章で言及するが、この傅説説話については、再度検討を要することを提示する。

第Ⅲ部では、『源氏物語』の注釈書『光源氏物語抄』を取り上げることにより、男性文人の中でもその中核に位置する博士家の学者と、その周辺に位置する文人たちが、『源氏物語』をどのように把握していたのか検討する。物語を理解する際にどのようにして漢籍が用いられていたのか、その背景にせまりたい。さらに、この博士家の文人たちの注釈が、当時の『源氏物語』の理解にどのような影響を及ぼしていたのかについても言及する。

第一章では、まず従来議論のある『光源氏物語抄』の編者の人物像について、私見を述べることとする。『光源氏物語抄』には、「今案」とする注記が散見するが、これは編者の注と見られている。具体的な名前と

しては、藤原時朝や金沢実時が取り沙汰されて来たが、確証は得られず、なお検討が続けられている。本研究においても、作者を特定するには至らないが、従来の人間関係が浮き彫りになる一部の注記に関心が集中していた状況を見直し、「今案」注記の内部を検討していく。それにより編者の注釈の傾向や学問態度について明らかにする。

第二章では、『光源氏物語抄』の漢籍受容の一環として、素寂注における周公旦故事を中心とした『尚書』引用について論じる。素寂の周公旦故事の引用は、どのような背景から生み出されたのであろうか。従来の研究では、『奥入』など前代の注釈書からの流れや、経書への興味といった当時の学問状況との関連などが指摘されてきた（６８）。本稿ではこれらに加えて、父光行の『蒙求和歌』と通底する要素、光行・親行といった河内方宗家の『源氏物語』注釈との関係、さらには、素寂自身の注釈の手法なども関わっていることを提示したい。

第三章では、『光源氏物語抄』の経書引用の実態にせまりたい。経書引用の実態といっても内容ではなく、『光源氏物語抄』編者が、経書を用いて『源氏物語』を読むことをどのように捉えていたのかということを明かにする。その契機のひとつとして明経道の学者清原教隆の注釈との関係に注目して検討していくことにする。

第四章では、『光源氏物語抄』桐壺巻に「内裏御沙汰の時俊国朝臣の申すと云々」（一五二頁）とある一節をめぐって、まず「俊国朝臣」の存年代、経歴や学問的素養、また親族に『源氏物語』享受者がいることから、代々紀伝道の学者を輩出した北家藤原氏内麿流の俊国であることを指摘する。さらに俊国が、桐壺帝の寵愛をめぐる桐壺更衣と弘徽殿女御をはじめとする他の女性たちの対立を、『後漢書』の和帝をめぐる鄧皇后と陰皇后の関係に基づき理解していることについて、家学との関わりがあることを指摘し、鎌倉期の『源氏物語』注釈の形成において、紀伝道の学者たちの学問がどのように作用していたのか検討したい。

本論文で扱うテーマは、それぞれの分野の研究としても考察の余地が残る部分であり、それらの個別研究の進展にも寄与するものである。そこで各部では、個々の課題について検討を行い、平安期の男性文人の物語創作から『源氏物語』の注釈に向けて、どのような文学史を描けるのかということについては、終章でまとめたい。

注

（1）工藤重矩「平安朝における「文人」について」『平安朝律令社会の文学』（ぺりかん社、一九九三年七月）

（2）渡辺秀夫『竹取物語』と神仙譚―初期物語成立史階梯」『平安朝文学と漢文世界』（勉誠社、一九九一年一月）。この他鈴木日出男氏は、文人を「すぐれた漢詩文の教養によって、社会や人生の実相を批判的に見つめようとする詩文家のこと」と定義している。その発生要因として、摂関政治により、「律令的な文章経国の理念」が後退したことをあげている。「官人としての詩文的教養を発揮する場を失った文人たちは、その精神的基盤を官界や世俗の外に置くことによって、かえって社会と人生を鋭く凝視しうる詩的批評精神を確保するようになった」という。そして自身に対する揶揄を含んだ「居直るような覚醒された批評精神」が「男子官

人には無用な子女相手の物語を書くという文人の余技を生み出したのかもしれない」とする。具体的には兼明親王、慶滋保胤、具平親王、源順などをあげている。（「詩と和歌―『和漢朗詠集』前後」『古代和歌史論』東京大学出版会、一九九〇年一〇月）。

（3）目加田さくを『物語作家圏の研究　増訂版』（パルトス社、一九八六年一〇月。一九六四年七月武蔵野書院より発行）。目加田氏は、彼らの教養上、恋愛・好色譚には否定的であり、物語が恋愛を主題にするようになると、「物語様式」から離れていったとする。そして『大鏡』など「歴史批評文芸」、軍記、「翻案説話の『唐物語』等々」へと移行していったとする。軍記については、著書の中でも論じられている。先行研究として示唆に富む。

（4）前掲注（3）目加田氏著書。また、一貫したテーマのもとでの考察とは言いがたいが、本論文で扱うテーマすべてに言及している研究者として稲賀敬二氏がいる。著書として、『源氏物語の研究　成立と伝流』（笠間書院、一九六七年九月）、『源氏物語の研究　物語流通機構論』（笠間書院、一九九三年七月）など、著作集に『稲賀敬二コレクション』一～六（笠間書院、二〇〇七年五月～二〇〇八年二月）がある。

（5）『源氏物語』の本文は、『新編日本古典文学全集』（小学館）による。

（6）『源氏物語』蛍巻で、筑紫流離の末、六条院に迎えられた玉鬘が、『住吉物語』の絵巻を見て、自らの境遇を住吉の姫君に重ね合わせる場面があり、「主計頭がほとほとしかりけむなどぞ、かの監がゆゆしさを思しなずらへたまふ。」（③二一〇頁）とある。

（7）その内容は概ね同じであるとされているが、登場人物や、作品の後半分に現存本と異なる展開があることが知られている。堀部正二氏は、古本『住吉物語』の内容を示唆するものとして、異本『能宣集』を提示し、現存本との七つの相違点をあげている（「新資料による住吉物語の一考察」『中古日本文学の研究』教育図書株式会社、一九四三年一一月、一九四〇年九月初出）。論考の結果のうち、主要部分のみ簡潔に述べると、まず、呼称の違いとして、現存本において男主人公は四位少将であるが、異本『能宣集』では、侍従となっていること、「右近のきみ」は現存本では姫君の乳母子、侍従にあたるという。また、異本『能宣集』にあり、現存本にない場面として、男主人公侍従が姫君を求めて「ならひの池」のほとりに立つ場面、侍従が神名備社あたりを通ってひそかに吉野へ通う場面（現存本では姫君をすぐに都に迎えている）、侍従が右兵衛佐と共に摂津へ行き、津の守が二人を出迎える場面（「右兵衛佐」は、現存本のそれとは別人物）などがある。異本『能宣集』からは物語の後半部分しか窺えないが、前述の通り、『源氏物語』蛍巻で、玉鬘が、大夫監に結婚をせまられたことを、「主計頭がほとほとしかりけむなどぞ、かの監がゆゆしさを思しなずらへたまふ。」（③二一〇頁）と重ねていることから、古本にも、姫君が主計頭に襲われそうになった場面があったことがわかる。

（8）藤原克己『菅原道真と平安朝漢文学』（東京大学出版会、二〇〇一年五月）参照。

（9）室伏信助「物語と物語文学」（『王朝物語史の研究』角川書店、一九九五年六月）。
（10）大井田晴彦「物語作家の世界―その文人精神をめぐって―」『うつほ物語の世界』（風間書房、二〇〇二年一二月、一九九九三年三月初出）
（11）渡辺秀夫「『竹取物語』と神仙譚―初期物語成立史階梯」『平安朝文学と漢文世界』（勉誠社、一九九一年一月、一九八三年三月初出。）など
（12）高田祐彦「かな文学の創出―『竹取物語』の成立と享受に関する若干の覚書―」青山学院大学文学部日本文学科編『文字とことば―古代東アジアの文化交流』（青山学院大学文学部日本文学科、二〇〇五年五月）
（13）前掲注（9）室伏氏論文。
（14）『枕草子』「成信の中将は、入道兵部卿の御子にて」の段の記述が基準になる。「交野の少将もどきたる落窪の少将などはをかし。」とあるが、源成信が中将であったのは、長徳四年（九九八）一〇月から長保三年（一〇〇一）二月四日に出家するまでである。上限についての定説はない。有力な説は以下の通りである。男主人公のモデルとされる藤原兼家の六男である山の井大納言道頼の没年（長徳元年（九九五））から長徳年間成立とする説（塚原鉄雄「落窪物語の人物とその成立」日本文学研究資料刊行会編『日本文学研究叢書　平安朝物語Ⅲ』有精堂出版、一九七九年一〇月、一九五〇年九月初出）。物語内に描かれた風俗や歴史的事実との一致から、花山朝から一条朝にかけて、あるいは円融朝以前とする説（『新編日本古典文学全集』一七（小学館、二〇〇四年一二月）三谷邦明氏解説、所弘「落窪物語の成立期に就いて」『国語と国文学』一三―六（一九三六年六月））。代替わりに先行する賀茂臨時祭、賀茂祭日、法華八講など行事の時間軸を足がかりにする研究もある（原国人「『落窪物語』論―その成立について―」『平安時代物語の研究』（新典社、一九九七年七月、一九八〇年七月初出）。
（15）高橋亨「落窪物語」三谷栄一編『体系物語文学史』第三巻（精堂出版株式会社、一九八三年七月）など。源順作説は、稲賀敬二「落窪物語の成立とその作者・補作者」『源氏物語の研究―物語流通機構論―』（笠間書院、一九九三年七月、一九七四年三月初出）、長沼英二「作品形成の成立過程―学的方法の批判展開―」『落窪物語の表現構成』（新典社、一九九四年九月、一九八四年八月初出）などによる。ただし、源順の没年は永観元年（九八三）であるため、一条朝かとされる『落窪物語』の成立年代と矛盾してしまう。
（16）高橋亨氏の「〈落窪〉の意味をめぐって―物語テクストの表層と深層―」『日本文学』三一―六（一九八二年六月）による。
（17）前掲注（16）高橋氏論文。
（18）稲賀敬二校注『新潮日本古典集成（第一四回）　落窪物語』解説（新潮社、一九七七年九月、のちに『前期物語の成立と変貌　稲賀敬二コレクション2』笠間書院、二〇〇七年七月所収）。稲

賀氏がこの問題を最初に提起したのは「落窪物語の成立とその作者・補作者」『広島大学文学部紀要』三三（一九七四年三月）である（のちに『源氏物語の研究―物語流通機構論―』（笠間書院、一九九三年七月所収）。指摘している典拠などは同じであるが、『落窪物語』研究において漢籍受容を指摘することの新しさに引きつけて書かれているのは、『新潮日本古典集成』の解説であるため本書による。三木雅博氏も注（19）文献において、稲賀氏の論の出典として『新潮日本古典集成』の解説をあげている。

（19）三木雅博『『落窪物語』を読む」片桐洋一他編『王朝物語を学ぶ人のために』（世界思想社、一九九二年一一月）

（20）前掲注（18）稲賀氏解説。注（18）「落窪物語の成立とその作者・補作者」では、継子物語の系譜の中で読む意義を認めつつも、それだけでは、「なぜ落窪が、あれほどの数多かった平安朝の物語の中で、散逸する事もなく今日まで残ったのかという問題の解答にはならないだろう」と批判している。

（21）注（18）稲賀氏解説。

（22）梁丹「『落窪物語』における孝養譚の位相―北の方をめぐる最後の記述を起点として―」『語文研究』一一五（二〇一三年六月）、森あかね「『落窪物語』北の方における継母造形―継子譚における迫害行為―」『国語国文』八五―二（二〇一六年二月）、森あかね「『落窪物語』における孝養―継子いじめとの関わりから―」『国語と国文学』九三―一二（二〇一六年一二月）など。

（23）太田晶二郎「「桑華書志」所載「古蹟歌書目録」―「今鏡」著者問題の一徴証など」『太田晶次郎著作集』第二冊（吉川弘文館、一九九一年八月、一九五四年一一月初出）

（24）成範については、小林保治全訳注『唐物語』（講談社、二〇〇三年六月）解説など参照。成範・朗詠注・『唐物語』という三者のの関係も注目されている。三田明弘「『唐物語』の素材と主題―朗詠注との関わりから―」『説話文学研究』三九（二〇〇四年六月）など。

（25）安田孝子「唐物語―編纂の意図―」太田義憲編『説話の講座　第四巻　説話集の世界Ⅰ　―古代―』（勉誠社、一九九二年六月）を参照した。

（26）片寄正義「唐物語考」『今昔物語集の研究　下』（芸林社、一九七四年六月）、猪熊範子「『唐物語』における作中和歌の位相」『国文学研究』一一七（一九九五年一〇月）など。

（27）吉田幸一「唐物語は平安時代の作品なり（下）」『平安文学研究』二一（一九五八年六月）

（28）注（3）目加田氏著書。

（29）川口久雄『三訂　平安朝日本漢文学史の研究　下篇』（明治書院、一九九〇年九月）など。

（30）池田利夫「源光行の生涯とその文学」吉岡曠編『源氏物語を中心とした論攷』（笠間書院、一九七七年三月）。池田氏は読者について、当時十三歳であった新将軍源実朝に献上されたものかと推測している。（池田利夫『新訂河内本源氏物語成立年譜攷』貴重本刊行会、一九八〇年五月参照。）

（31）『蒙求和歌』『百詠和歌』の本文は、『新編国歌大観』（角川書店）による。表記を改めた箇所がある。傍線は私に付した。

（32）注（30）池田氏論文。池田氏の言う孝範の称賛というのは、『百詠和歌』の末尾に付された孝範の跋文のことである。池田氏

は跋文の時期について、「いつとは定めがたい」としつつ、光行は数年で京都に戻り、建保元年（一二一三）四月以降（光行五一歳）、『蒙求和歌』に「改篇改稿」を施し、他の二作と併せて孝範に見せ、跋文を加えたとする。なおこの時の『蒙求和歌』こそ、現在想定されている初稿本にあたるものであるという。（「蒙求和歌の成立過程と執筆動機」『渡辺三男博士古稀記念日中語文交渉史論叢』桜楓社、一九七四年四月）

（３３）田坂順子「『蒙求和歌』叙述の方法」『福岡大学人文論叢』四六―三（二〇一四年一二月）

（３４）古注『蒙求』の引用は、池田利夫編『蒙求古註集成　上巻』（汲古書院、一九八八年一一月）による。本文は書き下し文に改め、句読点などを付した。

（３５）注（３３）田坂氏論文の分析を参照しつつ述べた。ただし、『孝子伝』（船橋本）には、母が伯瘉の孝行心を知り「還た自ら共に悲しみ痛む。」とあり、光行は他書を参照して、末尾の母親の心情を加筆した可能性がある。今後検討したい。

（３６）池田利夫「唐物語と古蒙求の伝本」『日中比較文学の基礎研究　翻訳説話とその典拠』（笠間書院、一九七四年一月）、相田満「幼学・注釈の世界と説話―『蒙求』・『職原抄』の注釈学を例として―」『説話文学研究』三四（一九九九年五月）

（３７）主な例は以下の通りである。

・天理図書館蔵『源氏物語抄』（永仁七年〈一二九九〉書写）末摘花巻「三つの径」→『蒙求和歌』第八・閑居部「蒋詡三径」。

・『原中最秘抄』末摘花巻「松の雪のあたゝかげにふりつめり」→『百詠和歌』第四・嘉樹部・松「鶴栖君子樹」。

・『原中最秘抄』（行阿注）幻巻「そこにこそは門はひろくひろげ給はめとなどの給ふ」、『紫明抄』『河海抄』薄雲巻「このかどひろげさせ給で侍らずなりなんのちもかずまへさせて給へ」→『蒙求和歌』第六・祝部「于公高門」。

・『光源氏物語抄』（光行釈）・『紫明抄』帚木巻「九月九日の宴」→『蒙求和歌』第三・秋部・菊「桓景登高」。

・『光源氏物語抄』（素寂注）・『紫明抄』幻巻「なか〳〵かゝるさびしき御ひとりねに…」→『百詠和歌』第六・祥獣部・象「万推方演夢」

・『紫明抄』明石巻「人の御門にも夢をしむじて」→『百詠和歌』第二・坤儀部・野「殷武丁夢傅説」

『蒙求和歌』『百詠和歌』の『源氏物語』注釈への引用については、稲賀敬二「中世源氏物語注釈の一問題―『正和集』から『原中最秘抄』へ―」『源氏物語の研究―物語流通機構論―』（笠間書院、一九九三年七月、一九七二年七月初出）、池田利夫「唐物語・蒙求和歌の世界」市古貞次・大島建彦編『日本の説話　第四巻　中世Ⅱ』（東京美術、一九七四年六月）、同氏「中世における源氏物語研究と蒙求」『和漢比較文学研究の構想』（汲古書院、一九八六年一一月）、河野貴美子「『源氏物語』古注釈書にみる和漢の往還―『光源氏物語抄』所引漢籍考―」小山利彦・河添房江・陣野英則編『王朝文学と東ユーラシア文化』（武蔵野書院、二〇一五年一〇月）等を参照した。

（３８）山田孝雄「蒙求と国文学（二）」『國學院雑誌』一九―一一（一九一三年一一月）、野村八良『鎌倉時代文学新論』（明治書院、一九二六年五月）、山岸徳平「中世説話の大陸的素材―蒙求及び唐

物語と蒙求和歌に就いて―」『国語と国文学』一八―一〇（一九四一年一〇月）、前掲注（30）（36）池田氏論文、同氏前掲注（37）「唐物語・蒙求和歌の世界」、前掲注（29）川口氏著書など。

（39）山部和喜「『蒙求和歌』における〈翻訳〉」『川口短期大学紀要』八（一九九四年一二月）、山部和喜「『蒙求和歌』小考」『川口短期大学紀要』一〇（一九九六年一二月）、柳瀬喜代志「『百詠和歌』『蒙求和歌』を媒體とする軍記所載の漢故事―受命の君と忠臣像の變容譚二、三題をめぐって―」『日中古典文学論考』（汲古書院、一九九九年三月、一九九七年二月初出）、田坂憲二「『蒙求和歌』と『源氏物語』『源氏物語の政治と人間』（慶應義塾大学出版会株式会社、二〇一七年一〇月、二〇一五年一〇月初出）など。

（40）池田利夫「百詠和歌と李嶠百詠」『日中比較文学の基礎研究　翻訳説話とその典拠　補訂版』（笠間書院、一九七四年一月）

（41）杤尾武『百詠和歌注』（汲古書院、一九七九年四月）

（42）乾克己「十訓抄と文鳳抄・百詠和歌」『金沢文庫研究』一五―二（一九六九年二月）、前掲注（40）池田氏論文、注（39）柳瀬氏論文、金文峰「『徒然草』における『蒙求』『蒙求和歌』の受容について」『岡大国文論稿』三四（二〇〇六年三月）など。山部和喜「翻訳における和歌の機能―『蒙求和歌』と『百詠和歌』を基点として―」『説話文学研究』三一（一九九七年六月）、太田美知子「七毫源氏「須磨」巻の頭注「百詠注」について―破鏡の寓意がもたらすもの―」（豊島秀範編『源氏物語本文の研究』國學院大學文学部日本文学科、二〇一一年三月）など。

（43）注（40）池田氏論文や山崎誠「「李嶠百詠」雑考　続貂」『中世学問史の基底と展開』（和泉書院、一九九三年二月、一九八三年七月初出）などのうちに多少言及されるところがある。

（44）胡志昂・山部和喜・中村文「『百詠和歌』注釈（一）～（三）」『埼玉学園大学紀要　人間学部篇』七～九（二〇〇七年一二月～二〇〇九年一二月）

（45）『原中最秘抄』が有識者の説を精力的に集めたことについては、田坂憲二「河内方の源氏物語研究」『源氏物語享受史論考』（風間書房、二〇〇九年一〇月）に言及がある。その他、『光源氏物語抄』初音巻に見える建長五年（一二五三）三月二八日の談義では、「当世和歌之有議」に問い合わせをしている。この談義には清原教隆や西円が参加していた。また『河海抄』には、「後嵯峨院御時此物語の御談義ありけるに、以〻扇招〻月事諸道に尋られけるにいづれも無二所見一」（橋姫巻）などとある。

（46）大曽根章介「中世漢文学の諸相―転換期における漢文学―」『日本漢文学論集　第一巻』（汲古書院、一九九八年六月）

（47）『明月記』の引用は、国書刊行会本による。

（48）堀川貴司「新古今時代の漢文学―真名序を中心に―」『詩のかたち・詩のこころ―中世日本漢文学研究―』（若草書房、二〇〇六年一一月）参照。

（49）『光源氏物語抄』は、中野幸一・栗山元子編『源氏物語古註釈叢刊』第一巻（武蔵野書院、二〇〇九年九月）による。

（50）注（4）稲賀氏著書。

（51）堤康夫「『異本紫明抄』編者に関する一考察―清原教隆との関係を中心にして―」『源氏物語注釈史の基礎的研究』（おうふう、

一九九四年二月、一九八七年一月初出）。筆者が数えた結果も、巻により一、二箇所の増減はあるもののほぼ同数となった。しかし「今案」としていなくても編者の注と思われるものがあるなどさらなる検討を要する。

（52）注（51）堤氏論文。織田百合子「北条実時と『異本紫明抄』」（『源氏物語と鎌倉―「河内本源氏物語」に生きた人々―』銀の鈴社、二〇一一年一二月）などにより継承されている。

（53）栗山元子「『光源氏物語抄』編者考―金沢実時説の検討を中心に―」陣野英則他編『平安文学の古注釈と受容』第二集（武蔵野書院、二〇〇九年九月）

（54）李興淑「『光源氏物語抄』編者をめぐって」『文学研究論集』三六（二〇一二年二月）

（55）田坂憲二「『原中最秘抄』の基礎的考察」『源氏物語享受史　論考』（風間書房、二〇〇九年一〇月、一九八六年六月初出）、同氏「中世源氏物語享受史の一面―『原中最秘抄』を中心に―」『源氏物語享受史論考』（風間書房、二〇〇九年一〇月、一九八七年一二月初出）

（56）前掲注（55）田坂氏「中世源氏物語享受史の一面―『原中最秘抄』を中心に―」

（57）落合博志「『原中最秘抄』小見―一、二の人物と逸文資料など―」『法政大学教養部紀要』九三（一九九五年二月）

（58）「『河海抄』の『源氏物語』注―和漢の先蹤計ふるに勝ふべからず」小林保治監修『中世文学の回廊』（勉誠出版、二〇〇八年三月）、「古注釈からみる源氏物語と唐代伝奇」日向一雅編『源氏物語と唐代伝奇　『遊仙窟』『鶯鶯伝』ほか』（青簡舎、二〇一二年二月）、「和語が漢語を紡ぐ文―古注釈を通してみる」仁平道明編『源氏物語と白氏文集』（新典社、二〇一二年五月）、「古注釈を通してみる『源氏物語』の和漢世界―『河海抄』、『花鳥余情』―」中野幸一編『平安文学の交響―享受・摂取・翻訳―』（勉誠出版、二〇一二年五月）、「『源氏物語』古注釈書にみる和漢の往還―『光源氏物語抄』所引漢籍考―」小山利彦・河添房江・陣野英則編『王朝文学と東ユーラシア文化』（武蔵野書院、二〇一五年一〇月）、「『源氏物語』古注釈書が引く漢籍由来の金言成句」『アジア遊学』一九七（二〇一六年六月）、「幼学書・注釈書からみる古代日本の「語」「文」の形成―漢語と和語の衝突と融合」『アジア遊学』一九九（二〇一六年八月）など。また、河野氏他編による『日本「文」学史』第一・二冊（勉誠出版、二〇一五年九月・二〇一七年六月）は、和と漢の知の接合・受容について、文学のみらず、政治や歴史、学問、信仰などさまざまな視点から包括的に捉えようとしている。

（59）門澤功成「十三世紀の関東における漢籍受容の一側面―『異本紫明抄』に引用された「長恨歌伝」一本文の検討から―」（『アジア遊学』別冊二（勉誠出版、二〇〇三年一〇月）、同氏「十三世紀の関東における漢籍受容の一側面―『異本紫明抄』に引用された「長恨歌伝」本文の検討から―」『白居易研究年報』六、（二〇〇五年一二月）。

（60）前掲注（51）堤氏論文。

（61）八木意知男「異本紫明抄と紫明抄」『源氏物語講座　第八巻』（勉誠社、一九九二年一二月）教隆注全般の性格について、語句

に漢字を当てること、語釈、有職故実に関係するものなどがあり、引歌は少ないという。

（６２）前掲注（５８）河野貴美子「『源氏物語』古注釈書にみる和漢の往還―『光源氏物語抄』所引漢籍考―」小山利彦・河添房江・陣野英則編『王朝文学と東ユーラシア文化』（武蔵野書院、二〇一五年一〇月）

（６３）新間一美「伊勢物語における遊仙窟受容について―第五十三段・第五十四段を中心に―」山本登朗編『伊勢物語　虚構の成立』（竹林舎、二〇〇八年一二月）

（６４）前掲注（１９）三木氏「『落窪物語』を読む」。

（６５）前掲注（１４）塚原鉄雄氏論文、森田実歳「落窪物語論考」『日本文学試論―異国文化の受容と純化―』（明治書院、一九八一年三月、一九六八年一二月初出）、春田宣「特に落窪物語における諸問題　面白の駒について」『中世説話文学論序説』（桜楓社、一九七五年四月、一九五六年七月初出）、音無幸子「面白の駒に関する五つの考察」『国語と教育（大阪教育大学）』三〇（二〇〇五年三月）など。

（６６）古田島洋介「『唐物語』第十話原拠再考」『比較文学・文化論集』一（一九八五年三月）、新間一美「大和物語蘆刈説話の原拠について―本事詩と両京新記―」『平安朝文学と漢詩文』（和泉書院、二〇〇三年二月、一九九一年初出）、増田欣「「陳氏の鏡」と両京新記―唐物語の翻訳手法―」『中世文芸比較文学論考』（汲古書院、二〇〇二年二月、一九九七年初出）、日向一雅「平安文学における『本事詩』の受容について―徐德言条・崔護条を例として―」『源氏物語　東アジア文化の受容から創造へ』（笠間書院、二〇一二年三月、二〇一一年三月初出）

（６７）前掲注（４２）山部氏論文。

（６８）李興淑「『光源氏物語抄』における儒教的言説」『日本古代学』四（二〇一二年三月）、日向一雅「源氏物語古注釈における『尚書』と周公旦注」同氏編『源氏物語　注釈史の世界』（青簡舎、二〇一四年二月）、前掲注（５８）河野貴美子「『源氏物語』古注釈書にみる和漢の往還―『光源氏物語抄』所引漢籍考―」小山利彦・河添房江・陣野英則編『王朝文学と東ユーラシア文化』（武蔵野書院、二〇一五年一〇月）。

第Ⅰ部

平安前期物語における漢籍受容 ――『落窪物語』をめぐって

第一章　『落窪物語』の漢籍受容

一、はじめに

本章では、『落窪物語』の漢籍受容研究について概説したい。まず、研究史を確認し、その後具体的にどのような指摘があるのか見ていくこととする。

今一度稲賀敬二氏の研究（1）の確認するところからはじめたい。『落窪物語』に漢籍典拠を見いだすこと自体は、日尾荊山『落窪物語証解』（天保八年〈一八三七〉）や、中村秋香『落窪物語大成』（一九〇一年）にもすでに指摘がある。また、森田実歳氏が落窪の君の造型について『列女伝』などをあげたこともある（2）。しかし、稲賀敬二氏の漢籍典拠の指摘（3）は、序章でも述べた通り、『落窪物語』を継子いじめ譚の系譜ではなく、男性文人により創作されたひとつの作品として捉えようという意図のもとに行われたという点が、研究史上大きな意味を持っている。森田氏の研究においても、『落窪物語』を、『源氏物語』に見られるような、「高次のリアリティに至る一つ手前の男性的な真実への踏み込みが、たいそうあざやかに、この作者によってなされた」と評価し、作者については、長く沈淪にあえぐ男性であるとしている（4）ものの、稲賀氏のような継子いじめ譚の枠組みにこだわることに対する危機感や閉塞感は持ち合わせていない。

その後稲賀氏の成果を継承したのが三木雅博氏である。三木氏は、『落窪物語』の作者について触れた部分で、稲賀氏の試みを次のように評価している。

そうだと断定できる証拠もないのだが、作者が漢文学とまったく無縁の人物ではありえないことは、新潮日本古典集成『落窪物語』の解説で稲賀敬二氏がすでに明らかにされている。稲賀氏は一見何気なく見過ごしてしまいそうな物語の表現の中に、漢文学の要素が隠されているとして、いくつかの例を指摘された。（5）

そして、稲賀氏が主に個別の表現にかかわる典拠を指摘したのに対して、三木氏は、

個々の文章表現だけでなく、もっと大きなところで作者は中国の作品を利用してはいないだろうか。（6）

と、唐代伝奇『鶯鶯伝』との人物関係の類似を指摘されている。

また、近年、梁丹氏や森あかね氏の研究により、『孝子伝』との関係も再度注目されている（7）。

二、登場人物の発言に関する漢籍典拠

三木氏は、稲賀氏の指摘された典拠の特徴を、「個々の文章表現」と捉えているが、それらは、いずれも登場人物の発話内であることが多い（8）。

〈『列子』湯問篇「愚公移」山〉

次の場面は、典薬助が、落窪の君の侍女あこきから、焼石をとってくるよう頼まれた場面である。典薬助は、継母の伯父の好色の翁である。継母はいじめの一環として、典薬助に落窪の君を襲わせようとする。そ

こで侍女のあこきは、典薬助が落窪の君に近づくことができないよう、体調のすぐれない落窪の君のために、焼石を持ってきてくれるように典薬の助に頼んだのであった。

典薬うちわらひて、「さなり。残りの齢少なとも、一筋に頼みたまはば仕うまつらん。いは山をとも思へば、まして焼き石はいとやすし。思ひにさし焼きてん。」と言へば、（巻二、一〇四頁）（9）

この中で、稲賀氏は、「いは山をとも思へば、まして焼き石はいとやすし。思ひにさし焼きてん」に、『列子』湯問篇「愚公移山」の故事がふまえられているという。その故事は以下のようなものである。九十歳の老人愚公が自宅の前にある太行・王屋の二つの山を動かそうとして、手作業で山を崩していた。これを聞いた山の神は、崩すことをやめない愚公を案じて天帝に報告したところ、天帝はその誠意に感心して、夸蛾氏の二人の息子に言いつけて山を背負わせて動かしてやったというものである。『落窪物語』では、六十余歳の典薬の助が、自らを愚公に対比させることにより、落窪の君に誠意ある態度を示すと同時に、さらに「上帝だって愚公の誠意に感じたじゃないか。姫君にだって、わしの誠意は必ず通ずるはず」（10）という諒解が含まれているという。なおこの指摘は『新日本古典文学大系』の脚注にも踏襲されている。

〈『荘子』天地第十二「寿則多レ辱」〉

道頼であると信じていた四の君（継母と中納言の子）の夫が、白痴の面白の駒であったことに不満をもらす中納言の発言である。しかもそれは、露見の儀という公衆の面前で暴露されたのであった。

おとゞは、「老の上にいみじき恥見つる世かな」とつまはじきをし入りてゐたまへり。（巻二、一三八頁）

この「老の上にいみじき恥見つる世かな」は、『荘子』外篇、天地第十二の「寿則多レ辱」（三七三頁）（11）を踏まえたもので、『源氏物語』桐壺巻に桐壺更衣の母が「寿（いのちなが）さのいとつらう思ひたまへ知らるるに」（①二九頁）（12）と言った箇所についても、『紫明抄』以下の古注釈が同じ箇所を典拠として指摘している。この引用については、『落窪物語証解』にも早く指摘がある。

〈『史記』項羽本紀、『漢書』朱買臣伝〉

これは、父中納言から継子の夫である道頼に送られた手紙の一節である。中納言は、落窪の君と道頼のもとを訪れたとき、下賜された装束に対するお礼を述べた。

（中納言）（前略）御おびもさらにかゝる翁の身には闇の夜に侍べければ、返しまいらせんと思給れど、御心ざしの程過ぐしてとなんさぶらひつる。（巻三、二一八頁）

傍線部は、『史記』項羽本紀、『漢書』朱買臣伝の「富貴不レ帰二故郷一如二衣レ繡夜行一」（四六四頁）（13）を踏まえたものであることが、稲賀氏校注の『新潮日本古典集成』二一六頁の当該箇所の頭注に見える。この典拠については、早く『落窪物語大成』（一九〇一年）が指摘しており、『日本古典文学大系』（岩波書店）や『新日本古典文学大系』（岩波書店）の頭注や脚注にも継承されている。『新日本古典文学大系』の脚注が述べるとおり、この故事は、『古今和歌集』秋下・紀貫之の歌に「見る人もな

くてちりぬるおく山の紅葉はよるのにしきなりけり」（１４）、『うつほ物語』祭の使巻や『源氏物語』澪標巻などにも引かれおり、当時の慣用的表現であったと考えられる。

稲賀氏は、「長恨歌」の引用も指摘するが、稲賀氏自身が校注を施した『新潮日本古典集成』の底本、広島大学文学部国語学国文学研究室蔵延享三年奥書本に基づくものであるため、検討の余地を残す（１５）。

稲賀氏自身、「原典を知らなくても読めるが、知っている人にはその知的興味を満たすような工夫」であるとし、『落窪物語』が男性文人たちの遊びとして書かれ、享受されたものであることを強調している（１６）ように、指摘されたすべての典拠が絶対的なものであるという訳ではない。それでも積極的に漢籍受容を探ることで、今までとはことなる視点から『落窪物語』を捉えようとしたことの意義は大きいと考えられる。

その他近年梁丹氏が、継母の以下の台詞における中国『孝子伝』の受容を論じている（１７）。

（継母）「世にあらん人、まゝ子にくむな。まゝ子なんうれしき物はありける。」との給て、又うち腹立ち給時は、「魚の欲しきに、われを尼になしたまへる。産まぬ子はかく腹ぎたなかりけり。」となんの給けり。（巻四、二九一頁）

これは、物語終結部分近くに見える継母の台詞で、機嫌のよいときには継子である落窪の君に感謝するものの、そうでないときは、落窪の君が継母の来世を案じて出家させたことを、魚が食べたくても食べられないようにするためだと文句を言っている場面である。梁氏によると、これは、親のために好物を調達しに行くが、得られず困っていると、その孝行心に感じて奇瑞が起り、求めていた食材を手に入れることができるというパターンの『孝子伝』の説話を踏まえたものであるという。梁氏が指摘するように、「王祥」では、孝子である王祥が、母のために魚を捕りに行ったが、冬で池が凍っていた。王祥が凍った池をたたきながら泣いたところ、氷が砕けて魚が躍り出たため、これを採って母に食べさせることができた。「姜詩」でも、母のために江水と魚を調達しに行くという孝行心に感じて、庭に泉が湧き出して「鯉魚一双」（一五八頁）（１８）が毎日踊り出るようになった。こうしたモチーフは『うつほ物語』の仲忠にも引用されているものである。仲忠が食母のために材を求めに行くものの、やはり冬で氷が張っており魚をとることができなかった。その時、仲忠が「まことのにわれ孝の子ならば、氷解けて魚出で来。孝の子ならずは、な出で来そ」（①七三頁）（１９）と泣いたところ、「氷解けて、大いなる魚出で来たり」（①七四頁）と魚を獲ることができたとある。

そしてこれら孝子譚の話型を踏まえて、前掲の「魚の欲しきに、われを尼になしたまへる。産まぬ子はかく腹ぎたなかりけり。」という継母の台詞を解釈するのであれば、

落窪の女君は親に孝行を尽くす実子（王祥や仲忠等）とは違う継子である。だから、母のために真冬に魚を釣るどころか、自分は魚が食べたいのに尼にした。世間では、継母は腹がきたない（意地が悪い）というが、継子（落窪の女君）こそこんなにも腹がきたないものだった。（２０）

と解釈できるとする。

三、典薬助の和歌をめぐって

これらにもうひとつ追加するとしたら、次の典薬助の和歌がある（21）。前述の通り、典薬助は、継母の許しを得て落窪の君のもとへやってきた。典薬助は、落窪の君の肌に触れるところまで接近するものの、あこきが落窪の君は体調がすぐれないと機転をきかせて防ぎきり、結局、落窪の君が典薬助にただ寄りかかるかたちで一夜を明かしたのであった。その後典薬助からは次のような手紙が届けられた。

翁の文見ん事のゆゝしうて、「あこき返り事せよ。」と書きつけてさしいでたれば、文取りて立ちぬ。あこき、翁の文を見れば、

いとも〳〵いとほしく、夜一夜なやませ給ひける事をなん、翁もののあしき心ちし侍る。あが君〳〵、夜さりだにうれしきめ見せ給へ。御辺りに近く候はば、いのち延びて心も若く成侍りぬべし。あが君〳〵、

老木ぞと人は見るともいかでなほ花咲き出て君に見馴れん

なほ〳〵なにくませ給ひそ。

と言へり。あこき、いとあいなしと思ふ〳〵書く。

いとなやましく見えさせ給ひて、御身づからはえ聞こえたまはず。

枯れ果ててていまはかぎりの老木にはいつかうれしき花は咲くべき

と書きて、腹立ちやせんとおそろしけれど、おぼゆるまゝに取らせたれば、翁うち笑みて取りつ。（巻二、一〇八―一〇九頁）

典薬助は昨夜逢瀬をはたせなかったことを悔やみ、せめて今宵なりともと懇願している。注目したいのは、和歌の「老木」に「花咲き出でて」という表現である。典薬助の歌を受けたあこきの歌では、「老木」は「枯れ果ててていまはかぎりの老木」と言い換えられている。典薬助の歌について、『新編日本古典文学全集』（一二九頁）の頭注では、「見」に「実」、がかけられており、「実」「木」「花」は縁語の関係にあることが指摘されている。また、日尾荊山の『落窪物語証解』が『古今和歌集』の兼芸法師の歌「かたちこそみ山がくれのくち木なれ心は花になさばなりなむ」（巻十七、雑歌上、八七五「女どもの見てわらひければよめる」）をあげているが、参考歌に留まるものである。『落窪物語』に先行する和歌についても、管見の限り典拠と言えるような歌や類似表現は見当たらない（22）。

してみると考えられるのが、漢籍由来の表現に基づくものではないかということである。『文選』には以下のような例がある。曹子建「七啓八首」（『文選』巻三十四所収）では、巧みな弁論が起こす奇瑞として、枯木に花を咲かせることができるとある。

鏡機子曰、夫弁言之艶、能使窮澤生流、枯木発栄。庶感霊而激神、況近在乎人情。（後略）（23）

（鏡機子曰く、「夫れ弁言の艶なる、能く窮澤をして流れを生じ、枯木をして栄を発かしむ。庶はくは霊を感ぜしめ神を激せしめん、況や近く人情に在るをや。」（後略）（三六頁～）

なおこれと同様の表現が『三教指帰』にもある。巻上「亀毛先生論」では、亀毛先生の学徳を讃える表現として以下のように用いられている。

亀毛先生といふもの有り。天姿弁捷にして面容魁悟たり。九経三史心蔵に括嚢し、三墳八索意府に諳憶せり。三寸纔かに発すれば枯れたる樹栄え花く。一言僅かに陳ぶれば曝せる骸反つて宍づく。（八六頁）（24）

『平安末書写三教指帰敦光注』は、『三教指帰』巻上の当該箇所について、「張文成遊仙窟曰々、白骨再宍、枯樹重ㇾ栄ㇾ」と指摘している（25）。『遊仙窟』には次のようにある。

余因詠曰、薬草倶嘗遍、並悉不相宜。惟須一箇物、不道自應知。十娘答詠曰、素手曽経捉、繊腰又被将。（割注略）即今輸口子、餘事可平章。下官斂手而答曰、向来惶惑、実畏参差。十娘憐愍客人。存其死命、（割注略）可謂白骨再完、枯樹重花。伏地叩頭、慇懃死罪。

（余因つて詠じて曰く、「薬の草は倶に嘗むること遍し。並に悉に相宜からず。惟だ一箇の物を須ては、道はずとも自ら知ぬべし。」十娘答へて詠じて曰く、「素き手は曽て経に捉られぬ。繊き腰は又将せられぬ。（割注略）即ち今口子ふに輸はれぬ。餘事平章とあげつらふべし。」下官手を斂めて答へて曰く、「向来惶惑とをのゝきて、実に畏る参差とかたゝがひなり。十娘客人を憐愍とあはれむ。其の死命を存せるものならば、（割注略）白骨再び完づき、枯れたる樹重ねて花さくと謂ふべし。地に伏し頭を叩き、慇懃とねんごろに死罪とかしこまる。」）（53オ―53ウ）（26）

引用したのは、張文成の求愛に仙女十娘が屈しようとしている場面である。頻りに求愛する文成であったが、一旦礼を尽くして、非礼を詫びた。十娘が、「客人」つまり文成を憐れみ、お許し下さるのであれば、白骨にも再び肉が付いて蘇り、枯れた木もまた花が咲くでしょう、という。やや解釈しにくいが、非礼を許し、思いを受け入れてくれたならば幸甚である旨を述べたものと考えられる。『遊仙窟校注』に、当該個所について、「樹枯根死，自然無法開花，故「枯樹重花」、「枯樹再生（枝）」、「「枯樹重栄」，皆為再生之意。」（27）とあるように、これらは再生の意であるが、本来枯れたものが時間を遡って蘇ることはありえない。だからこそ奇瑞となりえる。『遊仙窟校注』で例としてあげられているのが、『白氏文集』五八巻「府斎感懐、酬二夢得一」（府斎感懐、夢得に酬ゆ）である。

府斎感懐、酬二夢得一［時初喪二崔兒一。夢得以レ詩相安云。従レ此期レ君比二瓊樹一。一枝吹折一枝生。故有二此落句一以報レ之。］

府伶呼喚争先到　府伶呼喚して先を争つて到り
家醞提攜動輒隨　家醞提攜して動もすれば輒ち隨ふ
合是人生開眼日　合に是れ人生眼を開くの日なるべし
自当年老斂眉時　自ら年老いて眉を斂むる時に当る
丹砂錬作三銖土　丹砂錬り作す三銖の土
玄髪看成一把糸　玄髪看成る一把の糸
労寄新詩遠安慰　新詩を労寄して遠く安慰するも
不聞枯樹更生枝　聞かず枯樹の更に枝を生ずるを（28）

白楽天が崔児を失った時、「夢得」こと劉禹錫が「従レ此期レ君比二瓊樹一。一枝吹折一枝生。」と賦したのに唱和したものである。その尾聯において、せっかくなぐさめてくれたが、老齢のわが身はもはや若返りえないことを「不レ聞枯樹更生レ枝」と表現する。『白氏文集』では、「枯樹」と「枝」であるが、『遊仙窟校注』では、「枯れたる樹重ねて花さくと謂ふべし」の類似表現として引かれている。

してみると典薬助の歌「老木ぞと人は見るともいかでなほ花咲き出て君に見馴れん」もまたこれらと同様の発想の上に理解できるのではない

か。つまり枯木が蘇り花を咲かせることが難しいように、年老いた典薬助が若返るようなことはありえず、起こればそれは奇跡である。そのことは、「いかでなほ」とあるように典薬助自身もそのように理解している。しかしそこをどうにかして若返りたいという奇跡を信じ、あなたと夫婦としてなれ睦びたいと希望するところに、女体へのあくなき執着が浮き彫りになる。最後にあげた『白氏文集』の例は、「花」と「枝」の違いはあるが、老体を枯木にたとえたのみならず、そこに若返って新たに子をなすという性的なニュアンスを含むという点で典薬助の例に近い。また逢瀬を懇願する場面としては『遊仙窟』にも近いが、どれかを典拠として特定するというよりは、枯れ木に花が咲くという漢籍由来そのものとの関わりを広く想定しておきたい。

漢籍において「枯れ木に花」という表現が、「白骨再完」（『遊仙窟』）、「一言僅かに陳ぶれば曝せる骸反つて宍づく。」（『三教指帰』）といった表現とたびたび対になっていた（２９）。『落窪物語』でもこの直前に「あが君〳〵、夜さりだにうれしきめ見せ給へ。御辺りに近く候はば、いのち延びて心も若く成侍りぬべし。」とあり、完全には重ならないがやはり喜びを表すものであり、表現の組み合わせからも何かつながりがあるのではないかと思わせる。

四、登場人物について

前述の通り、三木雅博氏が、『落窪物語』の構想に影響を与えたとするのが、唐代伝奇『鶯鶯伝』である（３０）。『鶯鶯伝』は、白居易の親友としても知られる詩人元稹の作で、『会真記』とも称されている。その内容は以下の通りである。才子張生は、旅の途中、蒲郡の普求寺で宿をとった時、遠縁の叔母にあたる鄭の娘鶯鶯に出会う。鶯鶯に思いを伝えようと、張生は鶯鶯の侍女である紅娘に取り次ぎを頼んだ。張生は紅娘の助言に応じて、詩をつくり鶯鶯への思いを詠んだが、鶯鶯はなかなか打ち解けてはくれなかった。張生があきらめていると、二、三日後の夜、紅娘が、鶯鶯を連れて、寝具を携え張生のもとにやってきた。二人はその後も逢瀬を重ねるが、張生はやがて、旅立たなければならなかった。

三木氏が着目されるのは、人物関係の対応である。まず『落窪物語』の女童あこきと『鶯鶯伝』の紅娘が対応しているのではなかという。あこきは、落窪の君に、落窪の君の母が生きている時代から仕えていた女童であり、落窪の君と道頼の仲を取り持っている。これに対して、『鶯鶯伝』の紅娘は、鶯々の侍女で、張生を鶯々のもとへ導く役割を果たしている。

さらに、どちらの物語も、女主人公には琴の才能があり、それが男主人公の心を捉える点も類似しているという。本文と照らし合わせて確認すると、落窪の君は、

母君の、六七ばかりにておはしけるに、習はしおい給けるまゝに、箏の琴をよにをかしく弾き給ければ、向かひ腹の三郎君、十ばかりなるに、琴心に入れたりとて、「これ習はせ。」と北の方のたまへば、時ゝ教ふ。（巻一、四頁）

とあるように、亡き母から習った箏の琴を習っていた。また、

女君、なほ寝入らねば、琴を臥しながらまさぐりつゝ、なべて世のうくなる時は身隠さんいはほの中に住みか求めて

と言ひて、とみに寝入るまじければ、又人はなかりつと思ひて、格子を木の端にていとよう放ちて、おしあげて入ぬるに、いとおそろしくておきあがる程に、ふと寄りてとらへ給ふ。（巻一、二五頁）

と、道頼が訪れる直前、姫君は一人それを奏でていた。それに対して『鶯鶯伝』では、「異時独り夜琴を操り、愁弄悽惻す。張窃かに之を聴き、之を求むれば、則ち終に復た鼓せず。」（三〇七頁）（３１）とあるように、張生は、鶯鶯が夜一人で琴を弾いているのをこっそり聞いており、もっと弾いてほしいと求めたが、鶯鶯はそれ以上弾かなかった。

さらに三木氏は、「一脈通じるところもありそうである」（３２）と述べるに留まるが、男主人公道頼の造型にも『鶯鶯伝』の張生が影響している可能性を指摘している。してみると『鶯鶯伝』と『落窪物語』では、紅娘―あこき、鶯鶯―落窪の君、張生―道頼という主要登場人物が対応しているというのである。しかし琴が登場するのは、『落窪物語』に限られたことではなく、また結末についても、『鶯鶯伝』では、張生が心変わりするのに対して、『落窪物語』では道頼は落窪の君以外の妻を儲けることなく添い遂げておえり、相違点が見られるなど、『鶯鶯伝』と『伊勢物語』「狩の使」、「長恨歌」『長恨歌伝』と『源氏物語』桐壺巻の関係のような、プロット全体に及ぶ密接さはないという。しかしその一方では、

漢文学の素養のある男性が作者と考えられる『落窪物語』においても、「鶯鶯伝」という当時よく読まれた唐代の伝奇小説が何ほどかの影を落としているかもしれない、ということを考えてみるのも、決して無駄なことでないだろう（３３）。

と、新たな読みの可能性を模索している。この唐代伝奇の受容については、第二章で詳しく論じたい。

五、『孝子伝』との関係について

前述の通り、梁丹氏は、巻四の継母の台詞の中に『孝子伝』の受容を見いだしていた。梁氏は、『落窪物語』で落窪の君が粗末な格好をさせられているのも、『孝子伝』「閔子騫」の影響があるという（３４）。「閔子騫」は、「後母に事う。後母无道たるも、子騫之に事えて怨色有ること无し。」（一七七頁）とあるように、継子いじめを受けても耐え、継母を恨むことなどしない孝子であった。閔子騫は、「手冷たし。衣を看るに衣薄く、晩子の純衣新錦の如からず。」（一七七頁）とあるように、粗末な衣しか着せられていなかった。一方の落窪の君の身なりについても、

・（父中納言）「おちくぼをさし覗きたりつれば、いと頼み少なげなる白きあはせ一つをこそ着てゐたりつれ（後略）」（巻一、一二頁）

・ひとへぎぬはなし。はかま一つ着て、所〳〵あらはに身につきたるを思ふに、いといみじとはおろかなり。（巻一、一八頁）

と、物語の中でくり返し語られている。

さらに森あかね氏は、継子いじめから孝養譚まではひとつの構想として続いていることから、『落窪物語』もまた中国『孝子伝』の継子いじめ譚に想を得て、「いじめを経た上でも尽くされる継子の孝」を描こうとしたものであると分析している（３５）。

『落窪物語』は、①継母による継子いじめ、②求婚者の出現と苦境脱

出、③継子の結婚、④継母への報復と父との再会、⑤継子一家の繁栄と継母の零落という、継子いじめ譚のプロットに沿って展開されていくが、最後の⑤は、継子姫の栄達と実父と継母への孝行譚となっている。⑤に該当するのが、巻で言えば巻三の途中から巻四で、具体的な孝行としては、父中納言のために法華八講を催す、継母に自分を頼るよう申し出る、継母腹の四の君を帥中納言と再婚させ身の安定をはかる、継母を出家させて後世の功徳を積ませるなどがある。これらの孝行は、

・（継母）「人は産みたる子よりもまゝ子のとくをこそ見けれ。わが七人あれど、かくこまかに心しらい帰見るやはある。（後略）」（巻四、二七六頁）

・「いや〳〵まゝ子のとくをなん見る。さ知りたまへれ。（後略）」（巻四、二七八頁）

・尼にいとめでたくてなし給へりけるを、よろこびのたびいますがりける。「世にあらん人、まゝ子にくむな。まゝ子なんうれしき物はありける。」との給て、（巻四、二九〇頁）

など、「継子の徳」として継母の目を通して語られることにより、落窪の君の孝子ぶりが引き立つ結果となっている。従来、孝行譚の部分は継子いじめの話型から逸脱した蛇足と言われることも多かったが、森氏が指摘するように『孝子伝』の継子いじめ譚を踏襲するものとして見れば、孝行譚も含めて構想のうちと納得することができる。森氏も指摘するように、孝子の継子いじめ譚としては、『うつほ物語』の忠こそがある。忠こその物語と『孝子伝』の関係については、三木雅博氏が、『孝子伝』「伯奇」が忠こその物語に影響を与えていることを論じている（３６）。忠こそは、右大臣橘千蔭の愛息である。千蔭は北の方が亡くなった後、左大臣源忠経の未亡人を後妻として迎えた。つまり忠こそとは継子と継母という関係である。この継母は、忠こそに懸想をするものの、忠こそは受け入れなかった。そのため忠こそが父である千蔭を失脚させようと企んでいると讒言し、千蔭は忠こそを追放した。忠こそは落胆のあまり失踪し後に出家してしまう。父千蔭はのちに忠こその無実を知って探すものの、ついに再会することは叶わなかった。三木氏はこのうち、①継母が継子を陥れるような讒言を父に対して行い、父がそれを信じてしまう点、②父に信じてもらえなかったことを悲しみ失踪し、悲劇的な結末を迎える点、③真実を知った父が息子を探すものの再会を果たすことができない点が、『孝子伝』「伯奇」と類似しているという。

なお、中国『孝子伝』と『落窪物語』の関係は、以前より石原昭平氏が、注目している。石原氏は、本朝説話や中国の『孝子伝』、『法苑珠林』を念頭におき、ここでいう「継子の徳」とは、「孝」であるとして、いじめとの関係を、以下のように述べている。

この物語の、継母に虐待された女君のもたらす「徳」とは、「或曰以レ徳、何如、子曰、何以報レ徳、以レ直報レ怨」（論語、憲問三六）に引く、徳をもって怨みを報ず、怨恨ある者を憎まず、恩恵、善意で報いる、を実践したものであろう。作者は、儒教的な教養をもって、怨をある程度、懲らしめるものの、徳をもって報いる。そこに現実にあるとは思えない、本朝の継子いじめ譚の理想的な物語が語られ

ている（３７）。

ただ、石原氏は、落窪の君自身としての徳というよりも、それを支援し、落窪の君に孝行を実現させている道頼の方に着目しており、『竹取物語』のような伝奇的な要素を廃して、孝子というあくまで現実世界の理想を体現してみせたと論じている。田中徳定氏は、石原氏の説を継承し、『孝子伝』の影響下に造型された『うつほ物語』の仲忠、『落窪物語』の道頼が、孝子という男主人公の理想像を形成し、それが『源氏物語』の光源氏にも継承されたという男主人公の系譜を示した（３８）。そして『孝子伝』と『落窪物語』のプロットそのものの近似性に言及したのが、前述の森氏の指摘であった。

また、三木氏は、物語内の人物造型にとどまらず、男性文人たちがなぜ継子物語に興味を示したのかという点について、家の秩序の安定という問題があったのではないかと指摘している（３９）。三木氏は、『孝子伝』の「曾参（そうしん）」において、曾参が、妻を失っても再婚しない理由を問われた際、「我は吉甫に非（あら）ず」と答えたのは、家の秩序を保つという儒教的な観点があるという。吉甫とは周の宣王時代の功臣で、息伯奇は孝子であったが、吉甫が後妻を迎えたため、継子いじめを受けた。そして伯奇は継母の奸計により、父吉甫から継母に手を出したと誤解され、衝撃のあまり家を出て、河に投身してしまう。真実を知った父が追いかけたものの間に合わず、鳥と化した伯奇と再会するというものである。これを踏まえたのが、曾参（そうしん）の「我は吉甫に非（あら）ず」という発言であった。一夫多妻制であり、女性とは異なり男性はすぐに再婚することも多かった時代において二妻をもうけるべきではないことは、六朝時代の家訓『顔氏家訓』の「後娶」の項目に伯奇や曾参に触れつつその弊害が述べられており、本朝でも、吉備真備撰の家訓『私教類聚』に「両妻を娶らざる事」（題目のみ）、また大伴家持にも不倫を諫めた「史生尾張少咋に教へ喩す歌」（『万葉集』十八―四一〇六～四一一〇）がある。してみると『うつほ物語』の「忠こそ」や古本『住吉物語』『落窪物語』といった継子いじめは教訓書ではないが、「成立の根底には、当時の男性たちに対してこうした倫理（モラル）を喚起しようとする思いが息づいているのではないか」というのが三木氏の論である。特に、『落窪物語』の道頼が登場当初は色好みとして描かれているにもかかわらず、落窪の君と結婚後は一夫一妻の理想を貫いているのもその一環なのではないかという。

六、おわりに

このように、先行研究は少ないながらも、『落窪物語』の漢籍受容は、登場人物の発話に引用されたものから、『鶯鶯伝』や近年の『孝子伝』の受容など、登場人物の設定や物語構成など大きく作品全体に関わるもの、さらに深くその根幹を支える思想的な部分など、さまざまなレベルで指摘されている。よって、『落窪物語』の中に漢籍受容を求めることは、『落窪物語』の作品世界を明らかにしていく上で有効な手段であると考えられる。

注

（1）稲賀敬二校注『新潮日本古典集成（第一四回）　落窪物語』解説（新潮社、一九七七年九月、のちに『前期物語の成立と変貌　稲賀敬二コレクション2』、笠間書院、二〇〇七年七月所収）

（2）森田実歳「落窪物語論考」『日本文学試論―異国文化の受容と純化―』（明治書院、一九八一年三月、一九六八年一二月初出）。主なものをあげると、落窪の君が父中納言に孝行をしたいと道頼に申し出る際、「老い給へれば、夜中暁の事も知らぬを、見奉らで止みなむと心細く」といったのは、唐時代成立の『女論語』事父母章第五に「父母年老、朝夕憂惶…」などとあるのによるという。また落窪の君が聡明で「おほかたの心ざまと」きというのは、『列女伝』賢明伝で、周宣の姜后について「賢而有レ徳。事非レ礼不レ言。行非レ礼不レ動」とあることや、仁智伝の魯の公乗姒が「婦人之事。唱而後和」とあるのに類似すると述べる。他にも裁縫が得意であることについても同じく『女論語』訓男女章第八に悪女の例としてある「不レ能二針指一」の裏返しであるとし、『女戒』婦行第四に「不レ道二悪語一。時然後言。不レ厭二於人一。是謂二婦徳一。」「幽閒貞静。守レ節整斉。行レ己有レ恥。動静有レ法。是謂二婦徳一。」とあるのも、落窪の君の美質と重なるという。

（3）前掲注（1）、稲賀氏解説。

（4）前掲注（2）、森田氏論文。

（5）三木雅博『『落窪物語』を読む」片桐洋一他編『王朝物語を学ぶ人のために』（世界思想社、一九九二年一一月）

（6）前掲注（5）、三木氏「『落窪物語』を読む」。

（7）梁丹「『落窪物語』における孝養譚の位相―北の方をめぐる最後の記述を起点として―」『語文研究』一一五（二〇一三年六月）、森あかね「『落窪物語』北の方における継母造形―継子譚における迫害行為―」『国語国文』八五―二（二〇一六年二月）、同氏「『落窪物語』における孝養―継子いじめとの関わりから―」『国語と国文学』九三―一二（二〇一六年一二月）。

（8）以下に紹介する稲賀氏の説は、いずれも前掲注（1）解説による。

（9）『落窪物語』の本文は、藤井貞和校注『新日本古典文学大系一八　住吉物語　落窪物語』（岩波書店、一九八九年五月）による。なお、仮名違いについては歴史的仮名遣いに改めた。傍線は私に付したものである。

（10）前掲注（1）、稲賀氏解説。

（11）『荘子』本文は、『新釈漢文大系』（明治書院）による。

（12）『源氏物語』の本文は、『新編日本古典文学全集』（小学館）による。

（13）引用は『史記』による。『史記』の本文は、吉田賢抗『新釈漢文大系第三九巻　史記（二）』（明治書院、一九七三年四月）による。

（14）和歌の引用は、すべて『新編国歌大観』（角川書店）による。

（15）簡単にその概要を示すと以下の通りである。道頼とのわだかまりもとけた中納言とその子である越前守が、道頼邸で饗応をう

ける場面である。帰邸した越前守は「三十人の女房たちの中に籠りて。おほくこそ強ひたれ。」（新潮日本古典集成本）と、道頼邸での歓待ぶりを語る。ここを「四十人」とする本もあるが、その中で「三十人」とするものについてその意味を問おうとするならば、「長恨歌」の「後宮華麗三千人」という「多くの女性に取り囲まれた豪華な逸楽をあらわす慣用的表現」が踏まえられているのではないかという。ただし三千人では非現実的であるため、「三十」としたのではないかとしている。このほか稲賀氏には仏典に関する指摘もある。

（16）前掲注（1）、稲賀氏解説。

（17）以下の梁氏の指摘は、前掲注（7）梁氏論文による。

（18）『孝子伝』の本文は、幼学の会編『孝子伝注解』（汲古書院、二〇〇三年二月）による。本文は書き下し文に改めて引用する。

（19）『うつほ物語』の本文は、『新編日本古典文学全集』（小学館）による。

（20）前掲注（7）梁氏論文

（21）この節については、二〇一〇年度中古文学会秋季大会で発表した内容を大幅に改訂したものである。

（22）平安時代も後期になると、枯木に雪が積もった光景を花が咲くことに見立てたり、不遇をかこつ表現として確認することができる。たとえば以下のような例がある。「ゆきふりておいきには なもさきぬればいとどこまつのするぞゆかしき」（『経信集』一三）、「一とせに春は二たび立ちぬれど老木の花はいかがさくべき」（『永久百首』四一六）、「はなさかぬわがおいきにはとしをへて身のなるさまぞあやしかりける」（『広田社歌合』一七四、述懐、素覚）、「雪ふればちかひたのもし初瀬山かれたる木にも花咲きにけり」（『続詞花和歌集』四七二、覚延法師）

（23）『文選』の本文は、『全釈漢文大系』（集英社）による。字体等表記を改めた箇所がある。傍線は私に付した。

（24）『三教指帰』の本文は、『日本古典文学大系』（岩波書店）による。字体等表記を改めた箇所がある。傍線は私に付したものである。

（25）北山円正「シンポジウム『唐代伝奇と平安朝物語』にちなんで」（『和漢比較文学』四四、二〇一〇年二月）。なお、「枯樹重テ栄ユ」とあるが、高野山宝寿院蔵『三教勘注抄』（平安末期～鎌倉初期書写）と尊経閣文庫蔵『三教勘注抄』（鎌倉初期書写）では、「ハナサク」と読んでいる（太田次男『空海及び白楽天の著作に係わる注釈書類の調査研究』勉誠出版、二〇〇七年六月参照）。

（26）『遊仙窟』の本文は、蔵中進編『江戸初期無刊記本遊仙窟　本文と索引』（和泉書院、一九七九年）により、古写本をも参照した。なお、醍醐寺本では以下のような異同がある。「下官手を斂めて答へて曰く」→「下官曾（すなは）（ち）頓（かたぶ）け而して答へて曰く」、「十娘客人を」→「十娘手を斂めて繁（く）客人を」。築島裕監修『醍醐寺蔵本遊仙窟總索引』（汲古書院、一九九五年四月）参照。傍線は私に付したものである。

（27）李時人・詹緒左校注『遊仙窟校注』（中華書局、二〇一〇年

五月）

（２８）『白氏文集』の本文は、『続国訳漢文大成』（国民文庫刊行会）による。字体等表記を私にあらためた箇所がある。割注は［　］で括った。傍線は私意。

（２９）この他、『文選』巻三七の劉琨「勧進表」では「則所謂生二繁華於枯荑一、育二豊肌於朽骨一、神人獲レ安、無レ不二幸甚一。」とある。これは、混迷を極める晋を安定させるために司馬睿に帝位につくことを推薦したもので、司馬睿が即位すれば、即位すれば、枯れた荑（つばな）に花を咲かせ、朽ち果てた骨に豊かな膚をつけるというものであり、最上の喜びだと表現する。小尾郊一『全釈漢文大系第三十巻　文選（文章編）五』（集英社、一九七五年五月）の注が指摘するように、もとはそれぞれ、「枯楊生レ稊。」（『易経』「大過」）、「吾見二申叔一。夫子所謂生レ死而肉レ骨也。」（『春秋左氏伝』襄公二十二年伝）に基づくものであろう。本朝では、菅原道真の「請レ罷二蔵人頭一状」（『菅家文草』巻九）に、讃岐守の任期が果て再び上京する喜びを表すものとして、「臣官を南海に罷め、命を北辰に帰す。枯苑更華さき、死骨重て肉づく。」とある。

（３０）以下に紹介する三木氏の指摘は、前掲注（５）、三木氏『『落窪物語』を読む」による。

（３１）『鶯鶯伝』の引用は、『新釈漢文大系』（明治書院）による。本文は書き下し文に改めて引用する。

（３２）前掲注（５）、三木氏『『落窪物語』を読む」。

（３３）前掲注（５）、三木氏『『落窪物語』を読む」。

（３４）梁丹「『落窪物語』における漢籍受容の一考察―「閔子騫譚」との比較を中心に―」（発表要旨）『和漢比較文学』五二（二〇一四年二月）。当該箇所の詳しい分析については、梁氏が論文を発表されるのを待ちたい。

（３５）前掲注（７）、森氏『『落窪物語』における孝養―継子いじめとの関わりから―」。注（３４）梁氏発表要旨でも『孝子伝』における継子譚と孝行譚の共存に注目している。

（３６）以下、忠こそと『孝子伝』の関係については、三木雅博『『うつほ物語』忠こその〈継子いじめ譚〉の位相―『孝子伝』の伯奇譚・クナラ太子譚との比較考察から―」『国語国文』七三―一（二〇〇四年一月）による。なお、三木氏によると、「忠こそ」で、継子いじめの原因が、継母の邪恋を継子が拒否したことになっているのは、クナラ太子譚によるものであるという。

（３７）本章で言及また引用する石原氏の説は、すべて石原昭平『『落窪物語』―徳孝と「さいはひ」を語る」『解釈と鑑賞』五九巻三号（一九九四年三月）よる。

（３８）田中徳定「平安朝物語と儒教―「孝」と「三従」を中心として―」『孝思想の受容と古代中世文学』（新典社、二〇〇七年二月、二〇〇一年二月初出。）

（３９）以下、三木氏の説は、三木雅博「〈継子いじめ〉の物語と中国文学―『うつほ』忠こそ・落窪・住吉の成立を考えるために」『国文学』五〇―四（二〇〇五年四月）による。

第二章　『落窪物語』と『遊仙窟』

一、はじめに

本章では、落窪の君と道頼の出会いから、逢瀬を経て落窪の君が道頼に打ち解けるまでの場面に、『遊仙窟』の要素が取り入れられている可能性について述べてみたい。従来唐代伝奇の受容については、三木雅博氏により、『鶯鶯伝』との登場人物の対応関係が指摘されてきた（1）。後述するように、『遊仙窟』は『鶯鶯伝』に先行する唐代伝奇であり、『鶯鶯伝』に影響を与えた先行作品でもある。よって、『遊仙窟』単独の影響に加え、二つの唐代伝奇の重層的な受容も行われているのではないかということにも言及する。

二、『源氏物語』帚木巻との類似性

臥し給へれば、女、死ぬべき心ちし給ふ。ひとへぎぬはなし。はかま一つ着て、所〴〵あらはに身につきたるを思ふに、いといみじとはおろかなり。涙よりも汗にしとゞなり。をとこ君もそのけしきをふと見給て、いとほしうあはれに思ほす。よろづ多くの給へど、御いらへあるべくもおぼえず。はづかしきに、あこきをいとつらしと思ふ。からうして明けにけり。鳥の鳴く声すれば、をとこ君、

「君がかく泣き明かすだにかなしきにいとうらめしき鳥の声かな」

いらへ時〻はしたまへ。御声聞かずはいとゞ世づかぬ心ちすべし。」とのたまへば、からうしてあるにもあらずいらふ。

人心うきには鳥にたぐへつゝ泣くよりほかの声は聞かせじ

と言ふ君、いとらうたければ、少将の君、なほざりに思ひしを、まめやかに思ふべし。（巻一、二八―二九頁）（2）

これは、『落窪物語』の道頼が落窪の君のもとを訪れ、無理矢理関係を結んでしまった場面である。落窪の君のうわさを聞きつけた道頼は、たびたび落窪の君に手紙をおくり求愛するものの、一向に返事は返って来ない。そこでいよいよ、継母たちが石山詣に出かけて留守の間に、落窪の君の住む中納言邸を訪れて、部屋へ忍び込んでいった。落窪の君もこの男が道頼であることは、再三手紙が送られてきているから察しがつく。それよりも継子という境遇ゆえ、着る物も満足に整っていないことが恥ずかしくてたまらない。落窪の君はただ泣くばかりで、一言も答えることなく、夜明けを迎えてしまう。

さて、この場面は、『源氏物語』帚木巻の光源氏と空蟬の逢瀬との類似が指摘されている（3）。

鶏も鳴きぬ。（中略）（光源氏）「いかでか聞こゆべき。世に知らぬ御心のつらさもあはれも浅からぬ夜の思ひ出は、さまざまめづらかなるべき例かな」とて、うち泣きたまふ気色いとなまめきたり。鶏もしばしば鳴くに、心あわたたしくて、

つれなきを恨みもはてぬしののめにとりあへぬまでおどろかすらむ

女、身のありさまを思ふに、いとつきなくまばゆき心地して、めでたき御もてなしも何ともおぼえず、常はいとすくすくしく心づきな

しと思ひあなづる伊予の方のみ思ひやられて、夢にや見ゆらむとそら恐ろしくつつまし。

身のうさを嘆くにあかで明くる夜はとりかさねてぞ音もなかれける

ことと明くなれば、障子口まで送りたまふ。内も外も人騒がしければ、引き立てて別れたまふほど、心細く、隔つる関と見えたり。（①一〇二―一〇四頁）（4）

改めて比較してみると、夜明けを告げる鶏鳴、その「とり」を詠み込んだ歌の贈答、内容についても、男の歌が、ただでさえ女の冷淡な態度がつらいのに、その上鶏が別れをせきたてるのをうらみ、それに対して女の歌は、鶏と一緒に泣くしかないことを詠んだものと共通する。また『落窪物語』では、道頼がただ泣くばかりの落窪の君を、「いとゞ世づかぬ心ち」と評していたが、光源氏も引用した箇所の少し前で、打ち解けない空蟬の態度を「むげに世を思ひ知らぬやうにおぼほれたまふなむいとつらき」（①一〇二頁）となじっていた。

新間一美氏は、帚木巻のこの場面について、いくつかの『遊仙窟』的要素を指摘するが、夜明けを告げる鶏鳴が繰り返し強調され、男女それぞれの詠歌に「とり」が詠み込まれているのもその一つだという（5）。

『遊仙窟』は、作者張文成が、河源に使いとして派遣される途中に仙境に迷い込み、仙女十娘と一夜を共にするが、公務の途中であるため、翌朝断腸の思いで仙境をあとにするという筋である。二人の逢瀬の様子はかなり露骨な表現を伴い、中国においては早くに散佚してしまうものの、日本では珍重され、山上憶良や大伴家持ら万葉集歌人をはじめ、平安朝の漢詩文、『伊勢物語』『源氏物語』など物語文学にも影響を及ぼした。

張文成は、詩の応酬の末、やっとのことで十娘との逢瀬を果たすが、その様子は以下のようにある。

然して後に自ら十娘と綾の帔を施ぎ、羅裙を解き、紅の衫を脱ぎ、緑の袜を去る。（中略）一たび嚙ひ一たび意快く、一たび勒き一たび心傷まし。鼻の裏痠＝といきたはしく、心の裏結繚とむすぼる。少時りて眼華き耳熱り、脉脹び筋舒ぶ。始て知ぬ逢ひ難く見難く、貴ぶべく重ずべし。俄頃としばらくある中間に、数廻相ひ接はる。誰か知らん可憎の病鵲の、夜半に人を驚かす。薄媚狂雞の、三更に暁を唱ふ。遂に則ち衣を被り対ひ坐て、泣涙としほたれて相ひ看る。（五四オ―五四ウ）（6）

※＝…「疒」に「虎」。

傍線を付したように、夜明けを告げ、二人に別れを促す鶏の声について、「薄媚狂雞の、三更に暁を唱ふ」とある。新間氏によると、「可憎の病鵲の、夜半に人を驚かす。薄媚狂雞の、三更に暁を唱ふ。」は、『新撰朗詠集』にも採録されるなど、平安時代に有名な箇所であり、『伊勢物語』第五三段では、この一節を中心に『遊仙窟』的な世界が構築されているということである。帚木巻では、「鶏も鳴きぬ」「鶏もしばしば鳴くに」「とりかさねてぞ」と、別れをせき立てるものとして「とり」が繰り返し強調されており、とくに「とりあへぬまでおどろかすらむ」は、『遊仙窟』の「可憎の病鵲の、夜半に人を驚かす。」を踏まえたものだという。続く第五四段も「つれなかりける女」（一五四頁）（7）との

「夢の中での出逢い」をテーマとした『遊仙窟』的な章段であるとする。空蟬の打ち解けない態度を「つれなき」とするところに『遊仙窟』が踏まえられており、紫式部は、『伊勢物語』第五三・五四段における受容を承知した上で、帚木巻の当該場面にも『遊仙窟』を取り入れたとする(8)。

後朝の別れにおいて、鶏の声が強調されていることは、『落窪物語』でも同様であった。特に道頼の「君がかく泣き明かすだにかなしきにいとうらめしき鳥の声かな」という歌は、落窪の君が一晩中泣き明かして心を開いてくれなかったことさえ悔やまれるのに、夜明けを告げる鶏までもが鳴いて別れなければならないというらめしさを訴えたものであるが、その際、夜明けを告げて別れを促す鶏鳴を「いとうらめしき鳥の声」とするのは、『遊仙窟』の「薄媚狂雞(なさけなきうかれどり)の、三更(まだあけざる)に暁を唱ふ。」に類似する。してみると、『落窪物語』の道頼と落窪の君の逢瀬についても、『遊仙窟』がふまえられているのではないだろうか。二人の出会いから逢瀬にいたるまでの箇所を検討し、『遊仙窟』受容の可能性を補強していきたい。

三、落窪の君との出会いと求婚

まず、道頼が落窪の君の存在を知ってから、その姿を垣間見るまでのところまでについてである。

①人物関係

両作品の間では、一対の男女と二人の恋の成就を促す女性という人物関係が共通する。すなわち、張文成と道頼、十娘と落窪の君、五嫂とあこきという対応である。『遊仙窟』の張文成は、詩により十娘を口説き一夜を手に入れたが、諸田龍美氏によると、この艶詩を巧みに操る文成は、業平をはじめ、平安時代物語の色好みたちの淵源となる人物だという(9)。それに対して道頼もまた、落窪の君と結婚した後は、彼女一人を愛する男性として描かれるものの、それ以前は、あこきの言葉に「いみじき色好みと聞きたてまつりし物を。」(巻一、七頁)とあるように、「色好み」の男主人公として登場していた。十娘と落窪の君は、美貌の女主人公として対応する。

五嫂は、十娘の兄嫁にあたる女性で、なかなか煮え切らない二人の関係を後押しする。それに対して『落窪物語』の女童あこきは、落窪の君の母が生きている時代から仕えていた女童であり、乳母や乳母子もいない落窪の君の唯一の見方である。道頼が落窪の君の存在を知ったのも、あこきが夫の帯刀に話したことがきっかけであった。帯刀は道頼の乳母子でもある。あこきは、通いはじめこそ感知していなかったが、道頼がひとたび落窪の君を訪れてからは、落窪の君をさとし、道頼が通い続けるように夜具を整えたり、三日夜の餅を手配したりと、一人落窪の君のために奮闘する。『遊仙窟』の五嫂は、「人と為(な)り饒劇とたはぶる」(二五オ)とあり、張文成をやりこめるようなことを言って、たびたび十娘に叱責されていたが、あこきも機知に富んだ「されたる女」(巻一、三頁)であり、通うところがある。なお『落窪物語』では、道頼側の帯刀も、道頼が忍び込む隙を作ったり、三日目の夜雨の降りきる中、ともに落窪の君を訪れたりと、主人の恋のために奔走する。

人物関係については、三木雅博氏の『鶯鶯伝』に関わる指摘を踏まえる必要がある（１０）。三木氏が注目したのは女童あこきの役割である。作者のまわりに能力の高い侍女が実在したり、「老練な思考力・行動力」は亡き実母の役割を投影させた可能性は棄てきれないものの、「侍女あこきの原像」を、『鶯鶯伝』の紅娘に求めてはどうかとする。『落窪物語』以前で、あこきのように「侍女が重要な役割を果たす作品」はほとんどなく、中国文学においてもそのような作品は『鶯鶯伝』以前や同時代で、さらに日本に将来されたものとなると『鶯鶯伝』以外にあまりないという。『鶯鶯伝』は唐代伝奇の一つであり、作者は白居易の親友元禎、才子張生と佳人鶯鶯の恋物語である。紅娘は鶯鶯の婢で、張生の詩を鶯鶯に取り次いだり、鶯鶯を連れてきて逢瀬を実現させたりと活躍する。もちろん『鶯鶯伝』と『伊勢物語』「狩の使」、「長恨歌」『長恨歌伝』と『源氏物語』桐壺巻の関係のような、ストーリー全体の構成に及ぶ密接さはないものの、

漢文学の素養のある男性が作者と考えられる『落窪物語』においても、「鶯鶯伝」という当時よく読まれた唐代の伝奇小説が何ほどかの影を落としているかもしれない、ということを考えてみるのも、決して無駄なことでないだろう（１１）。

と、『鶯鶯伝』が『落窪物語』の創作に寄与した可能性を示唆している。

確かに、機知に富んだ女童は、『うつほ物語』にもみえるが、あこきのようには活躍しない。また、落窪の君の世話をしているのが女童であることは、落窪の君の不遇をあらわすもので、類例として『うつほ物語』俊蔭巻で俊蔭の娘に仕えた嫗や、忠こそ巻で零落した忠こその継母に仕える下仕えのよもぎがいる（１２）。親に先立たれて後見もなく、荒れ果てた屋敷にひっそりと暮らす俊蔭の娘を、若小君が見つけてひそかに通うといった場面は、落窪の君と道頼の恋愛に通じるところがあるが、嫗は二人の恋の成就には関わっておらず、俊蔭の娘が出産する際に活躍する。

さらに、『鶯鶯伝』は、主人公の名称を『遊仙窟』に倣っており、『遊仙窟』の影響下にある作品であるとされている（１３）から、『落窪物語』は、『遊仙窟』と『鶯鶯伝』を併せて下敷きにしていると考えてはどうだろうか。後述するように、『落窪物語』にはいくつかの『遊仙窟』的な要素が含まれているが、二人の結婚のために活躍するのが女童という点は、十娘の兄嫁である五嫂よりも、婢という『鶯鶯伝』の紅娘の方があこきの立場に近い。また、十娘は、もともとは弘農郡の楊府君の長男の妻で、戦乱により夫を失った未亡人であった。それに対して『鶯鶯伝』の鶯鶯は初婚であり、落窪の君の立場は鶯鶯に近い。よって単に『遊仙窟』ないしは『鶯鶯伝』との対応ではなく、道頼＝張文成（『遊仙窟』）・張生（『鶯鶯伝』）、落窪の君＝十娘（『遊仙窟』）・鶯鶯（『鶯鶯伝』）、あこき（帯刀）＝五嫂（『遊仙窟』）・紅娘（『鶯鶯伝』）というように、二つの唐代伝奇が重層的に投影されているのではないだろうか。

②「つれない」女性像

道頼は、帯刀とあこきを通じて落窪の君に求婚するが、一切返事はなかった。

あこき、御文を脂燭さして見れば、たゞかくのみあり。

君ありと聞くに心をつくばねの見ねど恋しき嘆きをぞする

「をかしの御手や。」とひとりごちゐたれど、かひなげなる御けしきなれば、おし巻きて御櫛の箱に入れて立ちぬ。（巻一、一一頁）

これは、道頼からはじめて手紙が届けられたときの様子である。あこきが「をかしの御手や」と落窪の君の興味を引こうとするが、落窪の君は見向きもしない。その後も落窪の君に手紙を送り続けるが、「何しに。上も聞い給ては「よし」とはの給てんや。」（巻一、一〇頁）とあるように、落窪の君には、継母に対する気兼ねもあって、「御返りなし」（巻一、一四頁）、「日ゝにあらねど、絶えず言ひわたり給へど、絶えて御返りなし。」（巻一、一四頁）、「中の君の御をとこの右中弁とみにていで給、うへのきぬ縫ひ給ほどにて御返なし。」（巻一、一五頁）と全く手応えはない。

こうした求婚につれない女性像というのも『遊仙窟』の十娘と共通する。十娘は、当初張文成の漢詩による誘いに靡かなかった。例えば、十娘が弾く箏の音を聞いた文成が、次のように詠みかける。

自れは姿則とうつくしげなる多たることを隠して、
他を欺きて独り自ら眠る。
故故とねたましがほに纖かなる手を将て、
時時に小き絃を弄らす。
耳に聞くだも猶気の絶へなんとするものを、
眼に見んとき若為か憐からん。
従しや　渠　痛だ不　肯ならば、
人更に別に　天　に求めんや（五ウ）

「箏の音でさえ息が絶えそうなのに、お顔を見たらどんなに愛しさがつのるだろうか」と求愛するが、十娘は、

面は他の舎の面に非ず、
心は是れ自家の心。
何れの処にか天の事に関いて、
辛苦となやましく漫りがはしく追ひ尋ぬべき。（五ウ・六オ）

と、自分など取るに足らない女であるから追わないでほしいと言って靡かない。またあるときは「十娘詩を見て、並に読み肯ぜず、即焼き却てんと欲す。」（一三オ・一三ウ）と詩を見ることなく焼き捨てようとした。こうしたつれない女性像と「夢の中での出会い」をテーマとして『伊勢物語』第五十四段が構築され、それが『源氏物語』の空蟬に受け継がれていくという新間氏の指摘については既に述べた。ここでもう少し詳しく紹介すると（14）、『伊勢物語』第五四段には、

むかし、男、つれなかりける女にいひやりける。
ゆきやらぬ夢路を頼むたもとには天つ空なる露や置くらむ
（一五九頁）

とある。『遊仙窟』では、十娘のつれない態度について張文成は、「無情とあぢきなき明月のみぞ、」（一一オ）と有明の月に喩えており、ここで「無情」に「あぢきなし」と訓が付されているのが、第五十四段の「つれなかりける女」にきわめて近いとする。そして『源氏物語』帚木巻でも、源氏の歌に「つれなきを恨みもはてぬしののめに」とあった。『落窪物語』においても、落窪の君の素っ気ない態度が、「つれなき」と表現される。

「絵一巻下ろし給はらん。」と申せば、君、「かの言ひけんやうなら

んをりこそ見せめ。」との給へば、（中略）白き色紙に、こゐひさして口すくめたるかたをかき給て、

召し侍は、

つれなきをうしと思へる人はよに笑みせじとこそ思ひ顔なれをさな。　（巻一、一八頁）

これは落窪の君側が絵を所望したのに対して、道頼が、あなたの「つれない」仕打ちをつらいと思っている人は決して笑顔は見せまい、とうらんだもので、「笑みせじ」に「絵見せじ」がかけられている。

恋愛の初期段階において、男からの求愛を女が冷たくあしらったり、切り返すような返歌をしたりするのは、平安時代の常套ともいえるが、山本登朗氏の考えでは、こうした常套そのものが、『遊仙窟』から学んだものではないかという（15）。

③垣間見

落窪の君は、一向に返事をよこす気配がない。そこで道頼は、ついに忍び込もうとする。しかしその前に、ひとまず落窪の君の姿を垣間見る。というのも期待はずれだったらば、そのまま引き上げるつもりだったからである。

「まづかいば見をせさせよ。」とのたまへば、（中略）君見たまへば、消えぬべく火ともしたり。木丁、屏風ことになければよく見ゆ。向かひゐたるはあこきなめりと見ゆる、やうだい、かしらつきをかしげにて、白ききぬ、上につやゝかなるかいねりのあこめ着たり。添ひ臥したる人あり。君なるべし。白ききぬのなえたると見ゆる着て、かいねりのはりわたなるべし、腰より下に引きかけてそばみてあれば、顔は見えず。かしらつき、髪のかゝりば、いとをかしげなり、と見るほどに火消えぬ。くちをしと思ほしけれど、つひには、とおぼしなす。（巻一、一三頁）

落窪の君はあこきと二人くつろいでいるところであった。落窪の君は臥しているため顔を確認することはできないが、髪の様子から容姿の美しさが期待され、道頼は侵入することを決意する。

『遊仙窟』では、張文成が十娘を垣間見る場面がある。

余詩を読むことを訖はつて、頭を門の中に挙（さしの）べて、忽ちに十娘が半面とはたかくれを見る。余即ち詠みて曰く、「斂咲としたえめるものから残の靨を偸（かく）せり。含羞とはぢらへるものから半ばの脣を露す。一眉（かたまゆ）にも猶ほ耐へ叵（がたき）きものを。双つ眼は定て人（われ）を傷（そこな）いてん。」（六オ）

この時文成が見たのは十娘の横顔であり、それでも美しいのに「双つ眼」つまり正面から見たらどんなものかという。

物語文学の垣間見と『遊仙窟』の関係については、早く丸山キヨ子氏により提唱された論をふまえる必要がある（16）。『伊勢物語』初冠の段は、

むかし、男、初冠して、奈良の京春日の里に、しるよしして、狩にいにけり。その里に、いとなまめいたる女はらからすみけり。この男かいまみてけり。（一一三頁）

と始まる有名な章段である。元服を終えたばかりの男が旧都奈良春日の地で、大変美しい姉妹を垣間見たという章段であるが、丸山氏によると、

辺境の地で思いがけず二人の美女を垣間見たという設定は、『遊仙窟』の文成が、河源に派遣される途中、十娘と五嫂の二人に邂逅したことを踏まえたものではないかといい、そうすることにより、なぜ「女はらから」という設定がされているのかということが氷解するというのである。さらに、『源氏物語』の光源氏が北山で若紫や尼君を垣間見る場面（若紫巻）、あるいは薫が宇治で大君、中の君姉妹を垣間見る場面（橋姫巻）は、『伊勢物語』初冠の段が『遊仙窟』にちなむものであることを知った上で、紫式部が『遊仙窟』を受容した場面だという。この丸山氏の指摘は諸氏により継承・補完されている。『落窪物語』においても、垣間見られる対象は女性二人である。落窪の君だけでなくあこきもまた「やうだい、かしらつきをかしげ」なる女性であった。二人のいる落窪については、本文中に、「寝殿の放出の、また一間なる、おちくぼなる所の二間なる」（巻一、三頁）と説明されるものの、具体的にどこを指すのかは不明である（１７）。しかし、疎外された継子が閉じ込められているのであるから、本来若い姫君が住むにはふさわしくない場所であろう。

この丸山説を承けた山本登朗氏は、垣間見という行為そのものの『遊仙窟』性を述べている。垣間見について、「自分の世界とは違う世界、すなわち異界を、越えてのぞく行為」とし、その行為を書くことにより、「相手の女性が男性とは別な世界にいる他者であること、すなわち、場合によってはそれまでまったくその存在を知らなかったり、ふれあうことが許されていなかった存在であることが示される」（１８）と規定する。そして、『遊仙窟』の「男性と異界の女性との境界を越えたふれあいと別離という主題は、『遊仙窟』の影響を受けている『万葉集』にはまだ希薄な形でしか見られず、平安時代になってはじめて、さかんに和歌や物語で用いられるようになる」という（１９）。この女のいる空間の異界性と、「それまでまったくその存在を知らない」「ふれあうことが許されない」という点は、落窪のや落窪の君の境遇にもあてはまる。継子いじめ譚は、子供であった人格が死に、成人として再生する成女戒を基盤とする話型であり、大人として再生するためには、死の苦しみを伴う試練が課せられる。落窪の君の場合、それは落窪に籠められいじめられることに象徴され（２０）、落窪は、落窪の君にとって、忌み籠もりの空間であり、異郷に相当する（２１）。落窪の君はここに幽閉され、裁縫仕事に従事させられており、「仕うまつる御たちのかずにだにおぼさず、」（巻一、三頁）、「きんだちとも言はず、御方とはまして言はせ給べくもあらず」（巻一、三頁）、とあるように、継母の娘としてはもちろん、上流女房にも数えられない。落窪の君が自ら「人に知られぬ人」（巻一、一九頁）と表現するように、存在しないも同然であった。しかし、どんなに憎らしくとも、継母は落窪の君に出て行かれては困る。というのも落窪の君は裁縫に長けており、彼女が縫い上げた衣装は鍾愛の婿蔵人の少将にも評判がよいからである。継母は、男により盗み出されることを警戒しており、まして、権門の貴公子に迎えられ幸福になることなど言語道断である。よって後に道頼が通っていることが発覚した際には、食材を保管してある物置部屋に施錠して閉じ込めた上、好色漢のおじ典薬助に襲わせることで、結婚を阻止し、落窪の君を屋敷内に留めようとした。あこきが落窪の君の境遇をいたわしく思い、「いかで思ふやうならん人に盗ませたてまつらん」（巻一、六頁）と帯刀にもらさなければ、権門の貴公子道頼と、孤立

無援の継子姫は巡り会わなかったにちがいない。

以上のように、落窪の君と道頼の出会いから、道頼が落窪の君の部屋へ忍び込むまでは、『遊仙窟』の要素がふまえられていた。『遊仙窟』単独で『落窪物語』と結びつくだけではなく、『鶯鶯伝』との重層的な受容も行われていた。そしてこれらの要素は、恋物語の展開をささえるものとして『伊勢物語』そして『源氏物語』へと繰り返し変奏されているものであった。

四、結婚第一日目から二日目①
――『遊仙窟』と『伊勢物語』第五三段

落窪の君を垣間見た道頼は、いよいよ落窪の君のもとへ侵入し、一夜を過ごす。前述のように、落窪の君は心を閉ざし、そのまま夜明けを迎えてしまうが、その際二人を引き裂く鶏の声が、「鳥の鳴く声すれば」、「いとうらめしき鳥の声かな」、「人心うきには鳥にたぐへつゝ」と、強調されていた。前述のとおり、この場面は、『源氏物語』帚木巻との類似が指摘されており、さらにその箇所には『遊仙窟』受容の可能性があった。ここでは、『遊仙窟』と『落窪物語』の関係について検討する前作業として、すでに指摘されている『遊仙窟』当該箇所と『伊勢物語』第五三段の関係を確認しておきたい。『伊勢物語』は、『落窪物語』に先行する作品であり、後述の通り、『落窪物語』には『伊勢物語』の一節を踏まえた箇所もある。よって『遊仙窟』受容の先行例として確認しておきたい。以下新間氏の論に沿って述べていく（２２）。

『伊勢物語』第五三段は以下のおとりである。

むかし、男、あひがたき女にあひて物語などするほどに、とりの鳴きければ、

いかでかはとりの鳴くらむ人しれず思ふ心はまだ夜ふかきに

（一五八頁）

『伊勢物語』第五三段は、せっかく「あひがたき女」と一夜を過ごしていたのに、鶏が鳴き、心残りにも別れなければならないことを詠んだ章段である。この章段について、『遊仙窟』をはじめて指摘したのは、契沖『勢語臆断』である。

たび〳〵あひみむだにあるを、ことにあひがたきに逢て鳥の音聞たらん心、おもひやりて見るべし。遊仙窟云始知難逢難見可貴可重。可怜病鵲、半夜驚人。薄媚狂雞、三更唱暁。伊勢集枇杷左大臣歌

あふ事のあけぬ夜ながら明ぬれは我こそかへれ心やはゆく

新古今集に忠見が歌に

いづかたに鳴て行らん郭公よとのわたりのまた夜深きに

此落句は今の歌より出たる欤（一〇九頁）（２３）

『勢語臆断』が指摘するのは、文成と十娘の後朝の場面で、「始て知ぬ逢ひ難く見難く、貴ぶべく重ずべし。俄頃としばらくある中間に、数廻相ひ接はる。誰か知らん可憎の病鵲の、夜半に人を驚かす。薄媚狂雞の、三更に暁を唱ふ。」（五四ウ）とあるうちの、傍線部を省略したものである。新間氏によると、相手の女性が「あひがたき女」であること

と、「まだ夜ぶかき」時分に鶏が鳴き夜明けを告げたところが共通している。

まず、「あひがたき女」については、『勢語臆断』が引く『遊仙窟』に「始知難レ逢難レ見可レ貴可レ重」とあるのに一致する。新間氏が指摘するように、『遊仙窟』には、逢う機会がなかなか得られないという「あひがたき」（「恨むる所は別れ易く会ひ難き、去留乖き隔てんことを。」）もあるが、契沖の指摘する「始知難レ逢難レ見可レ貴可レ重」は、文成にとって十娘がいかに貴重な女性であるかを知ったという部分であり、めったに巡り会えないほどすばらしいという意味での「あひがたき」である。よってこれを踏まえて第五三段を解釈する場合、会う機会が少ないことと併せて、「人知れず深い思いを抱いているとすれば、めったに逢えないほどの魅力を持っているからなのだ」（２４）ということをも読み取るべきであるという。ちなみに塗籠本では「あひがたき女」を「ありがたかりける女（あひかた一本）」に作る。

次に、「まだ夜ぶかきに」鶏が鳴いたというのは、「薄媚狂雞の、三更に暁を唱ふ。」に対応する。『遊仙窟』では、「三更」とあり、「まだあけざるに」と読んでいる（『勢語臆断』では「まだよひに」と読む）。

この「三更」「まだあけざるに」について少し補足しておきたい。平安時代の「あく」には、「夜が明けて明るくなる」という場合と「日付が改まる」という場合がある（２５）。平安時代の日付変更時点は、丑の刻と寅の刻の間、現在の午前三時頃にある（２６）。「三更」は、現在の午後の十一時から午前の一時頃を指すから、「まだあけざるに」は後者であり、まだ日付の変わらない深夜ということになる。つまり『遊仙窟』は、せっかくの一夜限りの逢瀬であるにもかかわらず、日付が変わる前の深夜のうちから、薄情にも鶏が鳴き出し別れをせき立てたということになる。

『伊勢物語』の第五三段では、和歌に「いかでかはとりの鳴くらむ人しれず思ふ心はまだ夜ぶかきに」とあった。「どうしてまだ夜ぶかいのに鶏が鳴いたのだろうか。」といい、そこに「人知れず」相手を思う気持ちが深く名残惜しいことが重ねられている。「夜ぶかき」（２７）が指す時間帯は、夜が更けた深夜の場合と、日付が改まった暁方のまだ夜明けにはほど遠い暗い時分をいう場合があるが、『遊仙窟』の「三更」と重なるのは、まだ鶏の鳴くべき時間ではない深夜となる。

五、結婚第一日目から二日目②
――落窪の君と道頼の後朝と『遊仙窟』

落窪の君と道頼の逢瀬ではどうだろうか。まず鶏鳴の方から見ていきたい。「からうじて明けにけり。鳥の鳴く声すれば」（巻一、二八頁）と、やはり別れをせき立てるものとして、鶏鳴が登場する。しかし「明けにけり」とあるから、日付が変わってからの鶏鳴であった。この場面は、年立だと十一月十八日にあたる。昨晩落窪の君のもとへ忍び込む前に、翌朝の迎えについて「御車は、『まだ暗きに来。』とて返しつ。」（巻一、二二頁）とあり、実際、前掲の「とり」を詠み込んだ和歌の贈答の後すぐに、「御車ゐてまゐりたり。」（巻一、二九頁）と迎えに来ているから、「からうじて明けにけり。」は、あたりが明るくなったことではなく、日付が変わったことを指すとわかる。

愛し合う二人を引き裂く鶏鳴を嘆かわしいとするのは、『遊仙窟』に限ったものではなく、後朝の別れを惜しむ和歌にも詠まれている。中には、

・ひとりぬる時はまたるる鳥のねもまれにあふよはわびしかりけり

（『後撰和歌集』巻十三、恋五、八九五　小野小町があね）

・こひこひてまれにあふよのあかつきはとりのねつらきものにざりける

（『古今和歌六帖』二七三〇「あかつきにおく」閑院大臣）

（２８）

のように、『伊勢物語』第五三段や『落窪物語』同様、まれの逢瀬とわかるものもある。しかし、落窪の君が、会う機会に恵まれていないと同時に、比類ない魅力的な女性でもあるという点において、二人の逢瀬は、やはり『遊仙窟』的なのではないだろうか。

まず、落窪の君は一人落窪に住まわされ、娘としてはおろか女房の数にも入らないため、世間にその存在を知られていない。また、継母に監視され、結婚することを許されておらず、会う機会に恵まれない女であった。前述の通り日常生活から隔離されたという意味では、落窪も仙境と同様に非日常空間である。

では、めったにないほどすばらしいという意味での「あひがたき」はどうであろうか。『遊仙窟』の「始て知ぬ逢ひ難く見難く、貴ぶべく重ずべし。」（五四ウ）は、一連の露骨な情交の描写の後に続いており、張文成が一夜を共にすることにより、いかに十娘が魅力ある女性であり、いかに愛すべき存在であるかを認識したというながれである。文成は公務があるため一夜限りで十娘のもとを旅立ったが、

口の上に脣裂け、胸の間に気満つ。涙の瞼千行（ちつら）、愁の腸寸（ずたずた）に断ゆ。

端坐とうつゐにして琴を横たへ、涕（なんだ）と血と襟（ころも）に流る。千の思ひ競ひ起こり、百の慮り交はり侵す。（六三ウ・六四オ）

と、彼女のことを一時たりとも忘れることができなかった。十娘はそれほどまでに文成を魅了したのであり、それを言ったのが「始て知ぬ逢ひ難く見難く、貴ぶべく重ずべし。」（５４ウ）ということになる。

このように逢瀬により相手のたぐいまれなることを認識したというのは、『落窪物語』についても言えそうである。前述のように、道頼は、落窪の君が心を開かないまま鶏鳴を聞き、屋敷を去らなければいけない気持ちを「君がかく泣き明かすだにかなしきにいとうらめしき鳥の声かな」と歌にこめた。そして「いらへ時ゝはしたまへ。御声聞かずはいとゞ世づかぬ心ちすべし。」と促したところ落窪の君がやっと応じたのが、「人心うきには鳥にたぐへつゝ泣くよりほかの声は聞かせじ」の歌であった。その内容は道頼の仕打ちをうらむものであったが、ほんのわずかに落窪の君が心を開いた瞬間でもあった。その結果「いとらうたければ、少将の君、なほざりに思ひしを、まめやかに思ふべし。」とあるように、それまで生半可だった落窪の君への愛情を確固たるものにしたということが、語り手の目線から記されている。「なほざりに思ひしを」とあるが、道頼の落窪の君への求婚は、当初、「あはれ、いかに思ふらん。さるわかうどほり腹ななりかし。我にかれみそかにあはせよ」（巻一、七頁）という、皇統の血を引く不憫な姫君に対する興味本位なものであった。

「さればこそ入れに入れよとは。婿取らるゝもいとはしたなき心ちすべし。らうたうなほおぼえば、こゝ迎へてん。」と、「さらずは、あなかまとてもやみなんかし。（巻一、九頁）

とあるように、左大将の息子である道頼からすれば、中納言家で娘の数にも入らない女性を、正式な手順を踏んで妻に迎えるのは不釣り合いであり、気に入らなければすててしまおうという軽い気持ちであった。それが、逢瀬を経て鶏鳴が響くのと同時、最後の最後に、落窪の君が心を開き、愛情を深めたという。

その結果、一日でやむことなく、次の日も落窪の君を訪れている。

こよひははかまもいとかうばし。はかまもきぬもひとへもあれば例の人心ちし給て、をとこもつゝましからず臥し給ぬ。こよひは時々御いらへしたまふ。いと世になうあるまじうおぼえ給て、よろづに語らひ給ふ程に、夜もあけぬ。（巻一、三七頁）

この日は、あこきのはたらきにより衣装も整い、落窪の君も昨日よりも打ち解けてきている。そのような落窪の君を、「いと世になうあるまじうおぼえ給て」と、比類なくめったにないほどすばらしいと受け止めている（２９）。このように『落窪物語』では、二日間にかけて段階的に愛情が勝っていくが、逢瀬を経てその女がいかにかけがえのない存在であるかを発見したというのは、『遊仙窟』の「始知難〻逢難〻見可〻貴可〻重」を意識したものではないか。「いと世になうあるまじうおぼえ給て」とあるのは、二日目であるが、一日目の逢瀬の去り際に愛情を深めたことが、二日目の通いを引き出しており、一日目にして彼を引きつけた魅力はすでに相当のものであったことになる。のちに、落窪の君への愛情がいつまさったのかについて、道頼はこの場面ではなく、「かのおちくぼの言ひたてられさいなまれ給し夜こそいみじき心ざしはまさりしか。」（巻四、二六八頁）と答えている。それにもかかわらず、結婚第二日目のところで、「いと世になうあるまじうおぼえ給て」とするのは、かえって『遊仙窟』の「あひがたき」女を意識したものではないかと思わせる。

なお『遊仙窟』では、文成と十娘の情交の様子が、露骨に描写されていた。『落窪物語』もまた、他の平安時代の物語と比較して、「寝」「ふす」といった性愛表現をそのまま書く傾向があり、第一日目の道頼と落窪の君の逢瀬も、「少将、とらへながら、装束解きて臥し給ぬ。女、おそろしうわびしくて、わなゝき給て泣く。」（二六頁）など、それなりに経過がわかる書き方となっている。しかし、そこに『遊仙窟』のような官能性はなく、「ひとへぎぬはなし。はかま一つ着て、所〻あらはに身につきたるを思ふに、いといみじきとはをろかなり。涙よりも汗にしとゞなり。」（二八頁）と、逢瀬の様子の一環として落窪の君の装束に言及することにより、継子として冷遇されている状況が浮かびあがる。さらに、『落窪物語』では、落窪の君と道頼の逢瀬だけでなく、あこきと帯刀の逢瀬をまじえ、両者を交互に描写しつつ進行していく。性愛描写を含むことは『遊仙窟』ほどではないものの、『鶯鶯伝』の会真詩、『霍小玉伝』、『李章武伝』などにも見られる傾向（３０）であり、唐代伝奇と『落窪物語』の関連を考える上でも留意しておきたい。

以上のように鶏鳴だけでは、『遊仙窟』的な要素か判断しかねるものの、逢瀬までの過程や「あひがたき」女といった他の要素と複合的にみて、夜明けを告げ、別れを促す鶏鳴についても、やはり『遊仙窟』的な要素といえるのではないだろうか。

しかし、次の三日夜で、その愛情のほどが早速試されることとなる。正式な結婚であれば、男は、三日間空けることなく通いつづけ、三日目の露顕（ところあらわし）をもって正式に婿として迎えられ披露される。ここは、あく

まで私的な結婚であるが、あこきは、三日夜の餅を用意して、かたちばかりでも儀式を行いたいと思っている。三日目に来るか来ないかは二人の間で結婚が成立するか否か大事な日である。しかし、この日は、あいにくの大雨であった。道頼は一度躊躇するが、結局は帯刀に励まされて、大雨の中、途中盗人の嫌疑をかけられながらも、落窪の君を訪れた。この場面では、落窪の君の言葉に「降りぞまされる。」（四五頁）、「身を知る雨のしづくなるべし」（四九頁）とあり、「かずかずに思ひ思はず問ひがたみ身を知る雨はふりぞまされる」の歌がたびたび引かれ、諸注が指摘するように、『伊勢物語』第一〇七段を意識した構成になっている。

（藤原敏行）「雨のふりぬべきになむ見わづらひはべる。身さいはひあらば、この雨はふらじ」といへりければ、例の男、女にかはりてよみてやらす。

かずかずに思ひ思はず問ひがたみ身をしる雨はふりぞまされる

とよみてやれりければ、みのもかさも取りあへで、しとどにぬれてまどひ来にけり。（二〇六頁―二〇七頁）

『伊勢物語』第一〇七段では、藤原敏行が、雨が今にも降り出しそうなので、女の家を訪れかねていると、女のもとから「かずかずに」の歌が届けられる。これは業平の代作なのであるが、これに感じた敏行は、雨の中びしょ濡れになりながらやってきたという。

道頼が愛情を深めた結婚第一日目と二日目は、『遊仙窟』をふまえた構成になっており、それは、『伊勢物語』第五三段にすでに取り込まれ、物語化されている要素であった。作者はこれを承知しており、よって第三日目には、その『伊勢物語』の一章段を用いて、道頼の愛情を試すような展開に仕立てたのではないかと、想定してみたくなる。「かずかずに」の歌は、『古今和歌集』『古今和歌六帖』などにも所収されており、すでに雨が降っていたという点においては、『古今和歌集』の詞書に近いが（31）、雨の中濡れながらやってきたというくだりは『伊勢物語』にしかない。

六、おわりに

以上のように、道頼と落窪の君の出会いから結婚当初、落窪の君が道頼に打ち解けるまでの場面には、『遊仙窟』的な要素が取り込まれていた。いじめに苦しむ継子姫の前に権門の貴公子が現れ、恋愛関係となり、継子姫が苦境を脱出した後、やがて正式に妻として迎え繁栄させるというのは、『住吉物語』とも共通する継子物語のプロットである。また、近年指摘されているように、継子による孝行譚の要素を有していることは、『孝子伝』の継子譚の系譜にも位置づけられる（32）。『落窪物語』ではそれら継子物語のプロットの土台のうえに、さらに二人の恋愛を具体的に語る基盤として、『遊仙窟』の要素を取り入れているのではないか。そのことにより、本来出会うはずのない継子姫と権門の貴公子を引き合わせて、愛情を深めさせ、継子の救済者としてその出発点に据え置いたと考えられる。人物関係については、『鶯鶯伝』からの影響もある。また『遊仙窟』の要素が継子物語の要素と結びつき、落窪の君が継子として冷遇されている様子が浮き彫りになっていた。

なお『落窪物語』の『遊仙窟』の要素は、いずれも『伊勢物語』や『源

氏物語』といった平安時代の他の物語文学における受容と軌を一にするものであった。

注

（1）三木雅博『『落窪物語』を読む」片桐洋一他編『王朝物語を学ぶ人のために』（世界思想社、一九九二年一一月）

（2）『落窪物語』の本文はすべて、藤井貞和校注『新日本古典文学大系一八　住吉物語　落窪物語』（岩波書店、一九八九年五月）による。仮名遣いを歴史的仮名遣いにするなど表記を改めた部分がある。傍線は私に付したものである。

（3）坂本共展「紫上構想とその主題」『源氏物語構成論』（笠間書院、一九九五年一〇月）

（4）『源氏物語』の本文はすべて、『新編日本古典文学全集』（小学館）による。傍線は私に付したものである。

（5）新間一美「伊勢物語における遊仙窟受容について―第五十三段・第五十四段を中心に―」山本登朗編『伊勢物語　虚構の成立』（竹林舎、二〇〇八年一二月）。同氏「宮廷文学としての漢詩―平安朝における遊仙窟の受容を中心に」仁平道明編『王朝文学と東アジアの宮廷文学』（竹林舎、二〇〇八年五月）についても参照した。

（6）『遊仙窟』の本文はすべて、蔵中進編『江戸初期無刊記本遊仙窟本文と索引』（和泉書院、一九七九年八月）による。本文は書き下し文で掲載した。割注は省略し、字体や、濁点を付すなど表記を改めた箇所がある。傍線は私に付したものである。

（7）『伊勢物語』の本文は、すべて『新編日本古典文学全集』（小学館）による。傍線は私に付したものである。

（8）前掲注（5）、新間氏「伊勢物語における遊仙窟受容について―第五十三段・第五十四段を中心に―」

（9）諸田龍美「中唐恋情文学と国文学の展開―〈好色・色好み〉篇」『愛媛大学法文学部論集　人文学科編』二三（二〇〇七年九月）

（10）前掲注（1）、三木氏「『落窪物語』を読む」

（11）前掲注（1）、三木氏「『落窪物語』を読む」

（12）斎木泰孝「類型化と個性化のはざま」『物語文学の方法と注釈』（和泉書院、一九九六年六月）

（13）陳寅恪「附　讀鶯鶯伝」『元白詩箋證稿』（生活・読書・新知三聯書店、二〇〇九年一二月）参照。

（14）前掲注（8）、新間氏論文。

（15）山本登朗「「女歌」の源泉―平安時代の女性像と『遊仙窟』―」『礫』二四〇（二〇〇六年一〇月）、同氏「『遊仙窟』文化圏」構想は可能か―「かいまみ」と「女歌」―」『和漢比較文学』四四（二〇一一年二月）

（16）丸山キヨ子「源氏物語・伊勢物語・遊仙窟―わかむらさき北山・はし姫宇治の山荘・うひかうぶりの段と遊仙窟との関係―」『源氏物語と白氏文集』（東京女子大学学会、一九六四年八月）

（17）落窪については、服喪の際に籠もる「土殿」や厠の空間などが想定されている（高橋亨氏の「〈落窪〉の意味をめぐって―物語テクストの表層と深層―」『日本文学』三一―六（一九八二年六月）を参照）。なお、川本重雄氏によると、『台記』や『年中行事絵巻』より、落窪は西北の北廂から孫廂に位置し、儀式の時に厠として使用されていたことがわかるという（二〇〇八年度中古文学会春季大会（於龍谷大学）の源氏物語千年紀記念公開講演会川本重雄「『源氏物語』と『源氏物語絵巻』の空間表現」。高橋亨氏による総括、「『建築と絵からみた源氏物語』司会の記」『中古文学』八二（二〇〇八年一二月）を参照）。

（18）前掲注（15）、山本氏「『遊仙窟』文化圏」構想は可能か―「かいまみ」と「女歌」―」

（19）前掲注（18）、山本氏論文。

（20）三谷栄一他校注・訳『新編日本古典文学全集一七　落窪物語堤中納言物語』（小学館、二〇〇四年一二月）三谷邦明氏解説。

（21）高橋亨「前期物語の話型」『物語と絵の遠近法』（ぺりかん社、一九九一年九月）、同氏「〈話型〉継子譚の構造―実例『落窪物語』」『国文学』三六―一〇（一九九一年九月）参照。

（22）前掲注（8）、新間氏論文。

（23）『勢語臆断』の本文は、『契沖全集』第九巻（岩波書店）による。濁点を付すなど表記を改めた箇所がある。傍線は私に付したものである。

（24）前掲注（8）、新間氏論文。

（25）小林賢章「アク考」『アカツキの研究　平安人の時間』（和泉院、二〇〇三年二月）

（26）小林賢章「日付変更時点とアカツキ」『アカツキの研究　平安人の時間』（和泉書院、二〇〇三年二月）

（27）「夜深し」について、吉海直人「後朝の時間帯「夜深し」」『『源氏物語』「後朝の別れ」を読む』（笠間書院、二〇一六年一二月）に詳しい考察がある。

（28）和歌の引用はすべて『新編国歌大観』（角川書店）による。

（29）「あるまじうおぼえ給て」の部分については、「いと世になう」と並列して落窪の君の魅力が卓越したものであると解するのが大半であるが、『新日本古典文学大系』には、道頼が生きていられそうにないほど落窪の君を恋しく思っているという解もある。

（30）近藤春雄「愛情小説の世界」『唐代小説の研究』（笠間書院、一九七八年一二月）参照。

（31）『古今和歌集』の七〇五番歌の詞書には、「藤原敏行朝臣のなりひらの朝臣の家なりける女をあひしりてふみつかはせりけることばに、いままうでく、あめのふりけるをなむ見わづらひ侍るといへりけるをききて、かの女にかはりてよめりける」とある。

（32）森あかね「『落窪物語』における孝養―継子いじめとの関わりから―」『国語と国文学』九三―一二（二〇一六年一二月）など。本部第一章参照。

第三章　「しれもの」面白の駒をめぐって

一、はじめに

「面白の駒」は、兵部少輔のあだ名である。色白で鼻孔が馬のように広がっていることにより付けられた。また、面白の駒は、「しれもの」（1）であり、外見、内面的な資質どちらも劣っていることから、周囲から笑われ、貴族社会から疎外された存在であった。

男主人公道頼は、この面白の駒を、継母に対する報復の手段として利用する。道頼は、継母の娘四の君との縁談を持ちかけられると、自分の代わりに面白の駒を通わせたのである。露顕で通ってきていたのが面白の駒であったことが明らかになり、道頼だと信じていた継母やその夫中納言に大恥をかかせた。さらに四の君は面白の駒の子を妊娠してしまい、以来かしずいていた三の君の婿蔵人の少将も中納言家から離れていくなど、ますます中納言一家を憂慮させるのであった。本稿では、主に、面白の駒の「しれもの」という造型に注目し、漢文作品との関わりを見ていきたい。

二、「しれもの」面白の駒

すでに紹介したとおり、面白の駒の最大の特徴は、馬のように広がった鼻孔であるが、資質の面でも劣っていた。それは、「しれもの」「しれたるもの」という語で表現される（2）。

①女、かゝるしれ物とも知らで臥し給けり。明けぬればいでぬ。（巻二、一三二頁）（3）

②みむまの時まで手をも洗はせず、かゆも食はせで、ありとあるかぎり、その御方にとて多かりし人〻も、たれかそのしれ物に使はれむとていで来にも出で来ず。（巻二、一三九頁）

③宿世心うかりける事は、いつしかとつはり給へば、「いかでと産ませむと思少将の君の子は出で来で、このしれものの広ごること。」とのたまふを、四の君ことわりにて、いかで死なんと思ふ。（巻二、一四一頁）

①は結婚初夜、四の君がまさか相手が面白の駒とは知らず同衾したことをいう。②は四の君つきの女房たちが、面白の駒の世話を放棄する場面であり、③は、四の君が面白の駒の子を妊娠してしまったことを継母が嘆く場面である。

また『落窪物語』内で初めに面白の駒のことを説明した箇所では、以下のようにある。

④北の方の御をぢにて、世の中ひがみしれたるものに思はれて治部卿なるが、まじらふ事もなき人の大郎、兵部少と言ふ人ありけり。（巻二、一二七頁）

これは面白の駒の父治部卿について説明したものであるが、「まじらふ事もなき人の大郎」と言い、この後具体的に面白の駒が「しれもの」であることが描写されていく。よってこれもまた間接的に面白の駒について言及したものと言える。このように「しれもの」という呼称や位置づけが面白の駒に定着していることが確認できる。

「しれもの」は、日本漢文においては「白者」「白物」と表記し、観智院本『類聚名義抄』では「白人」を「シレモノ」と読ませている（4）。これがいわゆる「痴」に相当することは、観智院本『世俗諺文』に「朝野僉載云。借二他書一第一痴。道二他書一第二痴。」とあり、「痴」には「カタクナナリ」と訓が付されているものの、その表題には「借者白物」（「カスハシレモノ」）とあり、その下に「倭之謂也」と注を付してあることから認められる（5）。

いずれもよく引かれる例であるが、「痴」は、『説文解字繫伝』に「不慧」「痴者神思不レ足、故亦病也」（6）と説明されており、『春秋左氏伝』成公十八年に、「周子有レ兄而無慧。不レ能レ弁二菽麦一。故不レ可レ立。」（7）とある。周子の兄は大豆と麦を見分けられなかったため「无レ慧」と見なされ君に立てることができなかったという。ここでも杜預注が「不慧、蓋世所レ謂白痴」と説明している。このように「痴」とは知能が低く、思慮分別に欠けることを言い、日本でこれに相当するのが「白物（しれもの）」である。

これらの要素は面白の駒についても当てはまる。道頼から自分の代わりに四の君のもとへ通うよう持ちかけられると、やすやすと行ってしまうなど思慮分別に欠けている。また無教養である点も指摘できる。四の君に後朝の歌を送る際には、自力で和歌を詠むことができず、道頼に代作してもらう。その上、その歌が「世の人のけふのけさには恋すとか聞きしにたがふ心ちこそすれ」（巻二、一三三頁）という愛情など全くこめられいない、相手を否定するような内容であるにも関わらず、分別のつかいない面白の駒は、「ふと遣らんとてうたをによひをる程に、かくて給れば、よき事、と思ひていそぎ書きて遣りつ。」（巻二、一三三頁）と、そのまま四の君へ渡してしまう。さらに四の君は面白の駒と離婚後、帥中納言と再婚し、共に下向することになる。その際面白の駒からも洲浜が届けられるが、このことについて「面白の駒は思ひ寄らざりけれど、いもうとどもの心ありければ」（巻四、二八六頁）と、妹たちの配慮であると言い、逆説的に面白の駒が機転の利かない人物であることを物語っている。

三、平安時代の「白物（しれもの）」

面白の駒の造型については、モデル論の立場から藤原兼家の四男道義や村上天皇の第八皇子永平親王といった史実における「しれもの」との類似が指摘されている（8）。モデルとの比較もさることながら、もう一つ重要な点は、宮廷社会において、「しれもの」が仕官に関わる語で、官人としての賢愚は漢文作品の題材になるなど、『落窪物語』の作者層において関心の高いテーマであったということである。

先行研究の指摘する通り、平安時代の「しれもの」の定義には有職故実に疎く政務怠慢の人物のことを含む（9）。たとえば藤原顕光は、日ごろから失策が目立ち、『御堂関白記』長和五年一月三〇日条では、「七十大臣の所作極めて不覚なり。件の人本より白物なり。仍て致す所なり。」と非難されている（10）。また清涼殿の再建を割り当てられたものの、期日内に竣工できなかった木工寮頭藤原周頼や修理大夫藤原通任がいる。

件職寮大夫・頭等懈怠、白物等なり。前度の造宮各作り合はず、仍て此度も合はざること尤もなるか。（『御堂関白記』長和五年二月二六日条）

この他諸道に通じる才能は有していたものの、日常の政務については懈

怠の目立つ藤原定頼や源博雅も痴れ者とされていた。

定頼の才能太だ賢なり。然れども緩怠極まり無し。博雅の如き者なり。博雅文筆・管絃の者なり。但し天下の懈怠白物なり。

（『小右記』長和五年四月八日条）（１１）

また、藤原克己氏によると、『白氏文集』の世路難の主題と「名利の追求を断念して止足諦観しようとする時、風月こそがその代償であり、心の支え」という発想は広く平安時代の官人たちに指示され、彼らの生き方に影響を与えたというが（１２）、この発想を支えるものとして韜晦の痴がある。

兼明親王の「遠久良養生方」（『本朝文粋』巻一所収）は、左大臣の座を追われた親王宣下後の失意の隠逸生活を綴ったものである。その一節に以下のようにある。

王湛よりも痴れ、嵇康よりも慵し。行楽に任せ、坐忘に入る。擯俗の地、無何の郷。心自得し、寿無疆なり。（一三五頁）（１３）

傍線部のように、俗世間を離れ逍遙する様を中国六朝時代の賢人王湛と嵇康に擬えているが、「痴」に関連するのは王湛である。

王湛字は処沖、（中略）身長七尺八寸、龍額大鼻にして、言語少なし。初め隠徳有るも、人能く知る莫し。兄弟宗族皆以て痴と為す。

（『晋書』七五　列伝四五　王湛伝、九五二頁）（１４）

『晋書』によると、王湛は、陰徳の持主であったが、口数が少ないため、父の昶以外の親族は彼が白痴であると思い軽んじていた（１５）。しかしある時、王湛の兄の子、済が王湛の床に周易が置いてあるのに気がつき、その才が知られることとなる。「遠久良養生方」に先立ち、王湛のことを、陰徳のために「痴」と見なされ官吏につくことができなったが、その分禍難を逃れることのできた存在として引用したのが、『白氏文集』巻五十七「想二東遊一五十韻　并序」（東遊を想ふ。五十韻　并びに序）である。序によると、大和三年春、病により官を辞した白居易が、かつて杭州に赴任した際の閑適な生活を回想したものあるが、その一節に次のようにある。

幻世春来夢　幻世は春来の夢
浮生水上漚　浮生は水上の漚
百憂中莫入　百憂中に入る莫く
一酔外何求　一酔外に何をか求めん
未死痴王湛　未だ死せず痴王湛
無兒老鄧攸　兒無し老鄧攸
蜀琴安膝上　蜀琴膝上に安んじ
周易在牀頭　周易牀頭に在り（１６）

「未だ死せず」というのは、『晋書』王湛伝で、武帝が王湛の甥の済に対して王湛を愚弄して言った「卿家痴叔死。（卿が家の痴叔死なずや。）」を踏まえている。「周易牀頭に在り」もまた、王湛の陰徳が明らかになる契機となった、

済嘗て湛に詣りて、牀頭に周易の有るを見て、問ひて曰く、叔父何にか此を用ふることを為る。湛曰く、体中佳ならざれば、時に脱くは復た看るのみ。（九五二頁）

という箇所を念頭においている。兼明親王もまた白居易に傾倒していた一人であり（１７）、「遠久良養生方」は直接的には白居易の「想二東遊一五十韻　并序」に依ったものであろう。

このように「陰徳の痴」の実践もまた、「痴」者が仕官するにふさわしくない人物であるという価値観に立脚したものである（１８）。

四、面白の駒の造型

「しれもの」とは仕官に関わる事柄として、男性文人層にも身近な問題であったが、漢籍作品ではこれが直接のテーマとして論じられている。『本朝文粋』巻一所収の源順「高鳳が貴賤の交りを同じくするを刺る歌」には以下のようにある。

高鳳高鳳、彼は誰が人の子ぞ。正六位下の孫、従七位上の子。年官を志摩の国に待ちて、月俸を内膳の司に期す。口はこれ木訥、天鼓の声頻りに鳴る。才はこれ土偶、地望の胤最も卑し。其の帯を腰の間に訪へば、出雲の石老ゆ。其の韈を足の下に尋ぬれば、また信濃の布穿てり。初め蔵人所へ参る朝、布袴責を招き、偸かに帯刀の陣に過る夕、烏帽嘲りを取る。昔高鳳といふものあり、書を読みて賢士の名を伝ふ。今も高鳳といふものあり、障文に愚老の字を注さる。高鳳高鳳、名同じく性異なり。昔は賢人、今は愚かなるかな、愚かなるかな。何ぞ啻に壁上の張文は冊人のみならんや。言ふに足らず、嘲るに足らず。共に恥づ白物の青雲に入れることを。（一三六頁）

高鳳とは、不才の高橋某の名前に天子にも譬えられる「鳳」の字を加えて、相手を嘲笑したものである（１９）。さらにそれを同名の『後漢書』逸民伝に載る賢者高鳳と比較する。『後漢書』逸民伝によると、高鳳は若いころより僅かな暇も惜しんで勉学に励み、妻から庭に干してある麦の番を頼まれた時も、夢中で経書を誦していたため、雨が降って麦がすっかり流れてしまったのにも気がつかなかったという。後に名儒となり、官吏に招聘されるも承けることなく隠逸を通した。「高鳳が貴賤の交りを同じくするを刺る歌」では、高鳳こと「高橋某」の不才ぶりを並べ立て、最後には、「言ふに足らず、嘲るに足らず。共に恥づ白物の青雲に入れることを。」と朝廷にこのような愚か者が出入りすることを厳しく非難している。「青雲」とは官位や学徳が高いことで、これが「白物（しれもの）」と対になっている。

この「高鳳が貴賤の交りを同じくするを刺る歌」の「白物」自体は、近世期の注釈書である日尾荊山『落窪物語証解』において、面白の駒の父治部卿について説明した、前掲本文④「世の中ひがみしれたるもの」（巻二、一二七頁）の注として指摘されている。ここでは他に『春秋左氏伝』成公十八年の周子の兄の例や、『万葉集』巻九「水江の浦島子を詠む一首并せて短歌」の「愚人」の例、『竹取物語』も挙げており、この注自体は単に「しれもの」の語例を提示しただけであると思われる。しかし、源順が『落窪物語』の作者にも擬されているという問題は措くにしても、作者とされる文人層が「白物」をどのように捉えていたがわかるという観点から再評価されるべき指摘である（２０）。賢愚を対比させ、官人としての資質を論じていくことは、早く都良香の「薫蕕を弁ずるの論」（『都氏文集』巻第三・『本朝文粋』巻第十二所収）にも行われている。学問により身を立てることが出来ず、卑官に沈淪することを余儀なくされた摂関期の文人たちにとって、仕官に関わる問題は最大の関心事だったはずであり、学才を自負する彼らにとって不才の者に対する批判は、停滞する官位に対する不満と相俟って、おのずと先鋭化されるだろう。つまり、面白の駒のような「しれもの」を登場させたことは、彼らの関心に即した設定であり、換言すれば、『落窪物語』の文人作者的な要素と言えるのではないだろうか。面白の駒の場合、官人としての不才が直接非難されているわけではない。しかし「わらひ立てられたるほどだに過ぎぬれば、宮仕へしつきぬる物なり。」（巻二、一二七頁）、「殿上にてものよりことに「面白の駒離れて来たる」とてわらふなりけ

り。」（巻二、一三七頁）とあるように、宮廷社会において交じらえないことを言っており、やはり「宮仕へ」つまり官人として出仕することができない人物ということが念頭にあると捉えてよかろう（２１）。

また、面白の駒の場合直接的に哄笑の対象になっているのは、大きく広がった鼻孔である。

⑤さすがに笑みたる顔色は雪の白さにて、首いと長うて、顔つきたゞ駒のやうに、鼻のいらゝぎたる事かぎりなし。いうといなゝきて引き離れていぬべき顔したり。向かひゐたらん人はげにわらはではえあるまじ。（巻二、一二九頁）

他の箇所でも、四の君との結婚初夜に暗くて面白の駒の顔がよく見えなかったことを「その夜はしれも見えで、火のほの暗きに、やうだい細やかにあてなりければ」（巻二、一三二頁）とするように、面白の駒の「しれもの」には容貌に対する侮蔑も含まれる。その一方で、面白の駒の資質が「しれもの」の定義にあてはまることは既に述べた通りであり、思慮分別がないからこそ、道頼の言いなりになり、継母への復讐の道具として機能していた。さらに永平親王の場合「いとうつくしくおはしませど、あやしう、御心ばへぞ心得ぬさまに生ひ出でたまふめる。」（『栄花物語』巻一）（２２）、「御かたちなどは清げにおはしたれど、御心きはめたる痴れ者とぞ、」（『大鏡』師尹伝）（２３）とあるように、「しれもの」と容姿が醜いことは、必ずしも直結する訳ではない。面白の駒の資質の劣りが、物語において重要な要素であることからすると、面白の駒の醜貌は、彼の「しれもの」という負の属性を具現化する容姿として選択されたものと見るべきであり、面白の駒に向けられた哄笑は容姿だけでなく、資質にも関わってくるものと判断される。

もちろん『落窪物語』において面白の駒を登場させたのは、継母や父中納言への報復が目的であり、『うつほ物語』の藤英が沈淪の嘆きを正面から取り上げたように、官人の賢愚に対する作者の主張が直接的に述べられている訳ではない。あくまで契機としてであるが、面白の駒のような人物を登場させて、それに対して罵倒を浴びせ、復讐の道具に使おうとしたのは、作者の価値観に基づく選択である。歴史物語や古記録を見るに、「しれもの」を愚弄するのは、貴族社会に一般的に行われていたことであるが、漢文作品のテーマとなるなど、作者とされる文人層に関心の高い事柄であったことはおさえておくべきである。男性文人にとって不才にも関わらず立ち交らう「しれもの」の存在はとうてい容認できないものであり、物語創作には公的世界では満たされない心を慰める効果があった（２４）とすると、『うつほ物語』のように顕著ではないが、その魂の開放が、負の方向に作用したのが面白の駒の描写ではないだろうか。

五、面白の駒の大鼻

「高鳳が貴賤の交りを同じくするを刺る歌」や「薫蕕を弁ずるの論」のように賢愚を対比的に捉えることからすると、馬のように広がった鼻孔についても、先行研究とはまた異なった見方もできるように思う。

面白の駒の鼻孔は、前掲の本文⑤の「顔つきたゞ駒のやうに、鼻のいらゝぎたる事かぎりなし。」以外にもたびたび言及され、哄笑されている。

⑥首よりはじめて、いと細くちひさくて、おもては、白き物つけけさ

うしたるやうにて白う、鼻をいらゝがし、さし仰ぎてゐたるを、人々あさましうてまもるに、この兵部の少に見なしては、念ぜず、ほゝとわらふ中にも、蔵人の少将は、はなぐくともものわらひする心にて、わらひ給ふことかぎりなし。「面白の駒なりけりや。」と、扇を叩きてわらひて立ちぬ。（巻二、一三七頁）

⑦つくぐくと臥したるに、四の君見るに、顔の見苦しう、鼻の穴よりは人とほりぬべく、吹きいらゝげて臥したるに、心づきなくあいぎやうなくなりて、（巻二、一三九頁）

⑧（少納言）「嘲弄して聞こえさせ給へるなり。御鼻なん中にすぐれて見苦しうおはする。鼻うち仰ぎいらゝぎて、穴の大きなる事は左右に対建て、寝殿も造りつべく。」（巻二、一五八頁）

一貫して鼻孔が大きいことが強調されている。「いららぐ」とは「角立つ」とか「とがる」という意味で、『今昔物語集』は、狐や獅子や盗賊の鼻息の荒々しい様子を「鼻ヲ吹キイラヽカシテ」「鼻ヲ吹キイララケテ」（巻五第二〇話）、「鼻ヲ吹キイラヽカシテ」（巻一〇第一五話）と表現している（２５）。

先行研究では、大きな鼻が平安時代の貴族たちの美的感覚からはずれる醜貌の一つであること（２６）や、馬のように広がった鼻孔については「好色の暗喩（メタフォー）」であり、「新猿楽記のような漢文表現における烏滸（おこ）のグロテスク・リアリズム」との関わりが論じられている（２７）。勇ましく吹き鳴らす馬を好色と関連付けるのは、『新猿楽記』で「不調白物の第一」とされる十四の御許の夫が好色漢であることを「戯れを愛して早く面暴し」（一四五頁）といっており、『日本思想大系』がその注として「よそに見しおも荒の駒も草馴れてなづくばかりに野はなりにけり」という『好忠集』の一首をあげていることからも首肯できる。「おもあらし」は、顔の猛くあらあらしいことをいう（２８）。さらにそれが「不調白物の第一」である人物の特徴として述べられているのであるから、「しれもの」と「好色」の結びつきも確認できる。

その一方で大きな鼻孔は良馬の特徴でもある。『本朝文粋』巻一二所収の都良香「良馬讃」に、良馬の形象について「耳尖（するど）に鼻大きにして」（三三〇頁）と鼻が大きいことを上げている。『斉民要術』「養牛馬驢騾　第五六」にも「肺欲レ得レ大、鼻大則肺大、肺大則能奔」（２９）とある。鼻が大きいことは肺が大きいことであり、よってその馬は肺活量も多く勢いよく走ることができる。また『初学記』所収の伯楽『相馬経』には「鼻孔欲レ得レ大」（鼻孔大なるを得んと欲す」（３０）とある。『落窪物語』本文において、前掲の⑤で、「いうといなゝきて引き離れていぬべき顔したり。」（巻二、一二九頁）とあったのは、『斉民要術』の説明で鼻孔の大きな馬がよく走る奔馬としていたことと一致する。また、道頼が清水寺詣に赴いた際、前を行く中納言家の車が遅く進まないことを、「牛よわくは面白の駒にかけ給へ。」（巻二、一四六頁）と罵った場面がある。もちろん愚弄しているのではあるが、面白の駒を馬力のある馬と見なしていることが本文の描写からも確認することができる。

大きな鼻はもともと醜貌であるが、それを資質の面でも劣る面白の駒の形象とし、さらに鼻孔の大きな馬と見立てた。本文ではひたすら戯画化されているが、大きな鼻孔は良馬の相でもあり、それをあえて無能な人間に取り合わせたというところに、作者の意地の悪い意図がひそめられているのではないか。良馬の相を与え、道頼の発言を通してであるが、

馬力のある馬としての活躍を期待するのは、間接的に面白の駒が人としては無能な存在であることを言っていることになる。

六、おわりに

本稿で扱った問題や資料はとくに新出のものではないが、従来とは異なった観点から、面白の駒の「しれもの」性を捉え直すことができた。面白の駒の「しれもの」性は、モデル論を通して早くから着目されてきたが、モデルと登場人物との類似性だけでなく、「白物」や「痴」は仕官と関わる概念であり、男性文人とされている作者層にとって関心の高い問題であったことも重要である。さらにこうした価値観から面白の駒の大鼻の捉え方についても従来の好色性のみに留まらない、賢愚の対比に基づいた悪意がこめられているのではないかということにも言及した。

『落窪物語』の場合、官人の賢愚や、愚者が出仕し立ち交じらうことを非難すること自体に物語の主張があるわけではない。面白の駒は、あくまで継子いじめに対する報復のために、中納言家を貶める手段として利用されるだけである。しかしこのような人物を登場させ、報復の手段に用いたというところには、作者の価値観が反映されているはずである。物語本文でも面白の駒はたびたび哄笑されるように、「しれもの」を蔑むということは貴族社会全体の共通的な価値観であるが、漢文作品の直接の創作テーマとなるなど、文人層においても関心の高いテーマであったことは、注目されるべきである。

注

(1) さまざまに表記がされているが、本稿では原則「しれもの」で統一する。

(2) 面白の駒は「しれがましう」(一二八頁)、「しれ」(一三二頁)と評されることもあった。

(3)『落窪物語』の本文はすべて、藤井貞和校注『新日本古典文学大系一八　住吉物語　落窪物語』(岩波書店、一九八九年五月)による。仮名遣については、歴史的仮名遣いに改めた。傍線は私に付したものである。

(4) 正宗敦夫校訂『類聚名義抄』第一巻(風間書房、一九六二年五月)による。

(5)『世俗諺文』の本文は天理図書館善本叢書和書之部編集委員会『天理図書館善本叢書　和書之部　第五十七巻　平安詩文残篇』(八木書店、一九八四年一月)による。

(6)『説文解字繫伝』の本文は、『百部叢書集成』(芸文印書館)による。返り点は私に付した。『説文解字』には「不慧」のみ。

(7)『春秋左氏伝』の本文は、『新釈漢文大系』第三一巻(明治書院)による。

(8) 塚原鉄雄「落窪物語の人物とその成立」日本文学研究資料刊行会編『日本文学研究叢書　平安朝物語Ⅲ』(有精堂出版、一九七九年一〇月、一九五〇年九月初出)、森田実歳「落窪物語論考」『日

本文学試論―異国文化の受容と純化―』（明治書院、一九八一年三月、一九六八年一二月初出）。また『今昔物語集』巻第二八第二一話に登場する「青経」（重明親王息の源邦正とされる）もモデルとして指摘されている。春田宣「特に落窪物語における諸問題　面白の駒について」『中世説話文学論序説』（桜楓社、一九七五年四月、初出一九五六年七月）、音無幸子「面白の駒に関する五つの考察」『国語と教育（大阪教育大学）』三〇（二〇〇五年三月）など。

（9）飯沼清子「「白物」攷」『風俗史学』二（一九九八年一月）、冨永美香「よのしれもの―『大鏡』道義評をめぐって―」（『お茶の水女子大学人文科学紀要』五一、一九九八年三月）。平安時代の「しれもの」の用例は、両氏の調査により、文学作品から古記録までほぼ網羅的に紹介さている。それによると「しれもの」の用法は、①無能で思慮分別を欠いた人物や、常軌を逸した行動をとる人物、②有職故実に疎く政務怠慢の人物、③恋愛において積極的に出ることのできない人物、④人を叱責する際の言葉というところに納まるという。なお、冨永氏がモデル道義との関連に言及しているものの、面白の駒自体の詳しい検討はない。冨永氏「増賀伝の形成―「道義記」をめぐって―」『中世文学』四〇（一九九五年六月）をも参照した。

（10）『御堂関白記』の本文は、『大日本古記録』（岩波書店）による。本文は書き下し文にて示す。句読点を付すなど、表記を改めた箇所がある。傍線は私に付した。

（11）『小右記』の本文は、『大日本古記録』（岩波書店）による。本文は書き下し文にて示す。句読点を付すなど、表記を改めた箇所がある。傍線は私に付した。

（12）藤原克己「世路難と風月」『菅原道真と平安朝漢文学』（東京大学出版会、二〇〇一年五月）

（13）『本朝文粋』の本文は、大曾根章介・後藤昭雄・金原理校注『新日本古典文学大系二七　本朝文粋』（岩波書店、一九九二年五月）により、訓読は、小島憲之校注『日本古典文学大系六九　懐風藻、文華秀麗集、本朝文粋』（岩波書店、一九八三年一一月）、柿村重松『本朝文粋註釈』（内外出版印刷、一九三〇年九月）をも参照した。傍線は私に付した。

（14）『晋書』の引用は、『和刻本正史』（汲古書院）による。書き下し文にて引用する。句読点を付すなど表記を改めた箇所がある。

（15）中国において「大鼻」は必ずしも醜貌ではないが（例えば『漢書』遊侠伝所収の陳遵伝では、「長八尺余、長頭大鼻、容貌甚偉」とある）、「痴」と「大鼻」が結びついている点は、面白の駒の造型に何らかの示唆を与えたか。王湛の故事は他にも『世説新語』や『蒙求』の「済叔不痴　周兒無慧」（ただし古注本は残っていない）など、平安時代に読まれた漢籍に採録されている。なお、王湛と面白の駒は、以下の点でも類似する。『世説新語』賢媛篇によると「王汝南少くして婚無く」「司空（筆者注―父の王昶）は其の痴にして、会ず婚処無からんことを以ひ」とあるように、王湛は白痴のため結婚相手がいなかった。王湛は、自ら選んだ家格の低い郝普の娘と結婚するが、彼女は容姿ふるまいともに端麗

であり、王湛との間に、良吏として『蒙求』にも載る王承を産み王一族の母儀となったという。これも王湛の陰徳にまつわる話の一つと言える。一方話の展開は異なるが、面白の駒も結婚相手がいないという設定が、男主人公道頼の替え玉として四の君のもとへ通うきっかけとなる点は注意される。また、後述の通り、『晋書』王湛伝では、王湛の甥である済は、武帝から「卿家痴叔死。」と叔父の王湛のことを愚弄されていた。それに対して『落窪物語』でも、中納言や継母はもちろん、面白の駒と相婿になった三の君の夫蔵人の少将もそのことをからかわれ、中納言家から離れていく。いずれも決定的な典拠とは言い難いが、王湛の故事は漢文の素養がある人物を作者として考えるならば、知っていた可能性の高い、無視できない故事であり、『落窪物語』の作品世界が構築されていく過程を考える際には、広く視野に入れておくべきである。

（16）『白氏文集』の本文は、『続国訳漢文大成』（国民文庫刊行会）による。

（17）前掲、注（12）藤原氏論文。

（18）新編日本古典文学全集本『落窪物語』（三谷栄一・三谷邦明校注・訳、小学館、二〇〇四年一二月）の一五〇頁頭注が、父治部卿について「世の中に、ひがみ痴れたる者」とあるのに対して、ひが者は、実力があるにも関わらず摂関体制の中で、出世できないことにより生まれたもので、「後の隠者の系譜へとつながるが、常軌を逸した変り者としての生活を送ることで世間に対する不満を解消し、文学とも深い関係がある」とするのも参考になるか。ただ父治部卿も面白の駒も陰徳の人物ではない。

（19）『新日本古典文学大系』一六頁脚注二参照。「高鳳」の説明として「年官を志摩の国に待ちて、月俸を内膳の司に期す。」とあるが、『職原抄』下巻、志摩注に「高橋氏為二内膳正一者任レ之」とある（同脚注三参照）。

（20）なお『落窪物語証解』は作者を源順と特定することについて、「此物がたりは、古来、能登守順朝臣の作といひつたへたれど、さだかに、それとは定めがたし。」（六一三頁）としつつも、その可能性を検討する。『落窪物語証解』の本文は、『国文註釈全書』一〇（國學院大學出版）による。濁点や句読点は私に付した。

（21）面白の駒は、道頼が訪れた際、まだ自室で寝ており、道頼から「しれがましう」と評されている。これは、「遠久良養生方」で王湛と対になっている嵇康が、「与二山巨源一絶レ交書一首」（『文選』巻第四三）で、自身がいかに出仕するに向かないかを述べた中に「臥して晩起を喜む」（『全釈漢文大系』〈集英社〉による）と朝寝坊であることを挙げていることなどと同じ発想か。

（22）『栄花物語』の本文は、『新編日本古典文学全集』（小学館）による。傍線は私に付した。

（23）『大鏡』本文は、『新編日本古典文学全集』（小学館）による。傍線は私に付した。

（24）室伏信助「物語と物語文学」『王朝物語史の研究』（角川書店、一九九五年六月）

（25）『今昔物語集』の本文は、『新日本古典文学大系』（岩波書

店）による。傍線は私に付した。畑惠里子氏は、『今昔物語集』の用例を踏まえ、「これらは威嚇や誇示である」とする。さらに「面白の駒の「いららぐ」しぐさにも、本人が自覚していなくとも、自己を誇示する印象が付随していた可能性がある」とする。（「蔑称という報復」『王朝継子物語と力―落窪物語からの視座―』新典社、二〇一〇年一〇月）

（２６）高橋亨「中心と周縁の文法」『物語と絵の遠近法』（ぺりかん社、一九九一年九月）、山折哲雄「中世の武士の顔　倨傲と決死の面魂」『日本人の顔　図像から文化を読む』（日本放送出版協会、一九八六年五月）。

（２７）前掲注（２６）、高橋氏著書。これをさらに面白の駒の負の属性を表すものとして、その造型や作品の構造に取り込んだ、前掲注（２５）、畑氏論文もある。

（２８）『新猿楽記』の本文は、山岸徳平他校注『日本思想大系八　古代政治社会思想』（岩波書店、一九七九年三月）による。四二一頁補注参照。『新猿楽記』は大曽根章介氏により校注がほどこされている。

（２９）『斉民要術』の本文は、『和刻本諸子大成』（汲古書院）による。

（３０）『初学記』の本文は、『初学記』（中華書局）による。返り点は私に付した。

小括

まず、男性文人の物語創作に関わる問題として『落窪物語』の漢籍受容について論じた。

『落窪物語』は、『竹取物語』や『うつほ物語』といった他の前期物語と同様に、男性文人の作とされながらも、継子いじめの話型に焦点があてられることが多く、男性文人らしい要素は十分に検討されて来なかった。そこで、文人らしい要素、つまり彼らが興味のある要素のひとつとして漢籍の受容を検討し、『遊仙窟』の受容と、漢文作品と共通のテーマとして仕官に関わる問題があることを新に指摘した。

第二章で述べた通り、『落窪物語』における唐代伝奇の受容は『鶯鶯伝』から影響を受けていることが指摘されていたが（1）、『鶯鶯伝』は『遊仙窟』の影響を受けた作品であるため（2）、重層的な受容ということをも想定した。実際、登場人物の対応に関してはあこきと紅娘をはじめ、『鶯鶯伝』の方が近かった。第一章で整理した先行研究で指摘されていることも含めると、『落窪物語』は、古本『住吉物語』と共通する継子いじめ譚のプロットに、孝行譚を重要視している点は『孝子伝』系統の継子像、登場人物の関係については『鶯鶯伝』、恋物語の展開としては唐代伝奇の『遊仙窟』と、重層的に話型や漢籍の知を取り入れて構成されていることがわかる。さらに細かく言えば、『遊仙窟』の要素も継子物語としての展開に影響を及ぼしている。まず『遊仙窟』の仙境性は、現実化され、落窪の君の住まいである落窪に継承されている。これは中納言家の中にあるが、生活空間からは隔離された場所であり、落窪の君は、継母によりここに閉じ込められていた。こうした『落窪物語』の現実志向については、先行研究でも指摘されるところであり（3）、唐代伝奇の受容においてもその傾向は一貫している。また、情交場面を詳しく書くことも、『遊仙窟』をはじめとする唐代伝奇の影響を想定したが、それにより落窪の君の装束が粗末であることが浮かび上がり、継子として冷遇されている立場が強調されるように機能していた。

これら『遊仙窟』や『鶯鶯伝』は、『伊勢物語』や『源氏物語』にも影響を与えた作品であり（4）、唐代伝奇の受容の方法から見ても、『落窪物語』も継子いじめ物語に限らず、広く物語一般の系譜の中に位置づけられることを確認した。

第三章で論じた賢愚や仕官に関わる事柄は、男性文人の実生活と密着したテーマであると考えられる。前述の通り、仕官に関する問題は『うつほ物語』にもあり、『落窪物語』と『うつほ物語』の近さ、前期物語同士の共通点を新に加えることができた。

以上のように、男性文人と物語というテーマの第一の問題として、従来継子物語の系譜で語られることの多かった『落窪物語』が、男性文人の作品と言えるだけの特徴を有することを漢籍受容の面から補強した。作者について具体名を明らかにすることは難しいが、第三章で論じたように仕官の問題に対する鬱憤を晴らすような筆致から推測すると、やはり実生活では沈淪にあえぐ不遇の男性文人があてはまるのではないだろうか。

注

（1）三木雅博『『落窪物語』を読む」片桐洋一他編『王朝物語を学ぶ人のために』（世界思想社、一九九二年一一月）

（2）陳寅恪「附　讀鶯鶯伝」『元白詩箋證稿』（生活・読書・新知三聯書店、二〇〇九年一二月）参照。

（3）日向一雅「落窪物語―現実主義の文学意識」『初期物語文学の意識』（笠間書院、一九七九年九月）参照。

（4）新間一美「伊勢物語における遊仙窟受容について―第五十三段・第五十四段を中心に―」山本登朗編『伊勢物語　虚構の成立』（竹林舎、二〇〇八年一二月）など。

第Ⅱ部　創作と注釈のはざま　――源光行の翻案説話

第一章　『蒙求和歌』における「なさけ」

一、はじめに

序章でも述べた通り、『蒙求和歌』が、古注『蒙求』を仮名書きで示したのは、単にその内容を読み取りやすくするためだけではない。『蒙求和歌』の仮名序の一節には以下のようにあった。

トキニ男コ女ナノ名ヲ一巻ノウチニヌキイデテ、カシコクオロカナルタメシヲアマタノフミノソコヨリウカガヒイデタリ。歌二百五十ヲツラネテ、巻一十有四ヲナセリ。（1）

若い時分には悟りえなかった故事の「心」に迫り、『蒙求』に登場する人々の「カシコクオロカナルタメシ」を解き明かそうとしたのであり、光行が『蒙求』の「人間くさい葛藤」や「男女の機微」（2）の「心」描き出そうとしたことについては、つとに池田利夫氏をはじめ先行研究でも注目されている（3）。個別の事例に関する検討についても、和書を含めた『蒙求』以外の文献との関わりを中心に、光行の翻訳手法について検討が重ねられてきた（4）。

しかしおよそ二五〇話あるうちのすべてについて考察が十分に尽くされたとは言えない状況であり、一話ごとの検討を続けていく必要がある。そこで本稿では『蒙求和歌』における「なさけ」に注目し、光行の描き出そうとした人物像とその方法の一端を明らかにしたい。

二、平安時代の「なさけ」

まず「なさけ」（5）の語義について確認しておこう。「なさけ」とは、相手に対する思いやりや配慮のことを指す。その中には、

・わざとある御返りなくは情なくやとて、紫の鈍める紙に、

（『源氏物語』葵巻、②五二頁）（6）

・かやうにてものをも聞こえかはし、をりふしの花紅葉につけて、あはれをも情をも通はすに、憎からずものしたまふあたりなれば、

（『源氏物語』椎本巻、⑤一八三頁）

のように、機を捉えて歌を詠み交わすこと、自然や音楽などの情趣を解することも含まれる。さらに、

「（前略）同じき木草の姿も、ここのは情けありて、おもしろくなむ見ゆる」とのたまふ。（『うつほ物語』春日詣、①二五九頁）（7）

のように、風景などにも用いる。

『枕草子』第二五一段に

万づのことよりも、情あるこそ、男はさらなり、女もめだくおぼゆれ。（下一一六頁）（8）

とあるように、「なさけ」あることは平安時代の理想的なふるまいである。そして、

無げの言葉なれど、切に心に深く入らねど、いとほしきことをば、「いとほし」とも、あはれなるをば「げに、いかに思ふらむ」などいひけるを、伝へてきたるは、さし向かひていふよりも、嬉し。

と続くように、相手を尊重して体面を損なわないようにする社交の上で

の配慮という側面が強い。平安時代の「なさけ」はとくに『源氏物語』にその用例が多く、大野晋氏によると、それらは「肉親間の真情を示す」場合には用いられず、正妻と妾妻など「真実の愛情を持ち合うことが」できない関係において、「相手に対してつとめてする愛情のそぶり」であるという（9）。なおその例としては、

よしありとおぼえある女御、更衣の御局々の、おのがじしはいどましく思ひ、うはべの情をかはすべかめるに、

（『源氏物語』椎本巻、⑤一八〇頁）

などが当てはまる。藤原克己氏は

・草木などは、心生ひに生ひたるはつたなきものなり。人近にて朝夕べ撫でつくろひたるなむ、姿、有様情け侍る。

（『うつほ物語』吹上・下、①五一三頁）

・まして人の心の、時にあたりて気色ばめらむ見る目の情をば、え頼むまじく思うたまへえてはべる。（『源氏物語』帚木巻、①七〇頁）

などの用例をあげつつ、「作為性」と「外面性」が前面に押し出された語であるとしている（10）。

またこの相手を傷つけない配慮は、『伊勢物語』の在原業平（昔男）や多くの女性のもとに通った光源氏など、色好みたちの属性であることが今西祐一郎氏により指摘されている（11）。九十九髪章段では、年老いた母の願いを叶えてやりたいと男を求める三男の言葉に、「こと人はいとなさけなし。いかでこの在五中将にあはせてしがな」（12）とあるのが象徴的である（13）。

一方で漢字の「情」のうち「憐憫の意を表す「情」をナサケと訓じたことによって」漢文訓読資料では『情け深い』の意にも用いられる（14）。例えば『今昔物語集』に

彼ノ死人、生タリシ時キ、事ニ触レテ我ニ情ケ有キ。

（『今昔物語集』巻二十・四十四話、四、三〇九頁）（15）

などが見え、『唐物語』にものちの孝恵帝の為人について「春宮はわかくおはしますれども、御心をきてなさけふかく、礼儀をたゞしくし給」（第十七話）（16）とある。ちなみに出典とされる（17）『漢書』「張陳王周伝」の記述と比べてみると、「仁孝恭敬」（18）とあり、その翻訳が「なさけ」であることがわかる。なお孝恵帝については『蒙求和歌』「袁盎却座」（第三・秋・女郎花）にも「孝恵帝ナサケフカキココロニテ」とある（19）。ちなみに『沙石集』第三（七）「孔子ノ物語事」では、仁について、

仁ト云ハ、広ク人ヲメグミ愛ス。老タルヲバ親ノ如クニ敬ヒ、幼ヲバ子ノ如クニアハレム。若人仁ナキワ（ママ）、鬼畜ノ如シ。情ケ深ク、メグミアツキ心、セバキ時ハコレヲ仁恵ト云、広キ時ハ慈悲トス。

（一五九頁）（20）

とあることが、今西祐一郎氏により指摘されている（21）。

池田利夫氏は『唐物語』が儒教的な価値観に基づきながらも、第九話の則天武后と張文成の密通や第十話徐徳言説話における再婚など儒教道徳とは反する情的なものを重視した作品であるとし、そのキーワードのひとつとして「なさけ」を指摘している（22）。先述の通り「なさけ」には恋愛や風情を解するといった感情的・情緒的な側面が強い用法から「仁」に対応するようなものまで幅広く（23）、先の孝恵帝の造型など、

『唐物語』においても「仁」に近い用例もある。とにかく『蒙求和歌』に先行して漢故事を題材とした『唐物語』が「なさけ」を重要視している点は注目される。

三、『蒙求和歌』と「なさけ」〈1〉

『蒙求和歌』の説話部分における「なさけ」とそれに関連する派生語は、管見の限り、片仮名本で二十一話中に見られ（24）、用例数は二十五例（25）となる。これに加えて和歌の中に「なさけ」が含まれている場合が十七例あるが、登場人物の人物造型に着目したいため、本稿では説話部分の用例を対象として検討していく。和歌の用例の中には「はかなくてふもとのゐひにしづまし山路のきくのなさけならずは」（「桓景登高」第三・秋・菊）のように草木の風情を詠んだ例もあるが（26）、説話本文中の用例では、管見の限りすべて主人公をはじめとする登場人物の造型か、彼らの行動について言ったものである。また『源氏物語』など平安文学では、「なさけあり」よりも「なさけなし」といった否定形の用例が多いというが（27）、説話中の用例では、「先ノメノママコノタメニナサケナキコトヲサトリエテ」（「閔損衣単」第四・冬・霜）と、友を裏切り殺害したことを「酈寄ナサケナク」（「酈寄売友」第十一・哀傷）と非難した以外に否定形の用例はない。しかも肯定形（否定形でない）の用例二十三例中、十四例が「事ニ触レテ、ナサケフカカリキ。」のような「なさけふかし」の用例であり、登場人物の「なさけ」あるさまを肯定的に捉え描き出そうという光行の姿勢がうかがえる。

『蒙求和歌』の説話部分における「なさけ」の用法は、大きく分けて、①花鳥風月をめでる・風情を解する意と、②相手の意を酌んで思いやった行動をとるの意に分類でき、上述の平安時代の「なさけ」の範疇におさまるものである。

①の風情を解する意の「なさけ」としては次のような例がある。「袁宏泊渚」（第七・祝）では、袁宏が詩をよくすることを

晋ノ袁宏、アザナ彦伯ト云フ。ワカクヨリ、文道ヲコノミテ名ヲエタリキ。コトニフレテナサケフカカリシ人也。

と説明している。光行が見ていたとされるのは古注本系『蒙求』であるが、その古注『蒙求』を見るに「晋書、袁宏字は彦伯、少くして文彩を以て名を著せり。」（国立故宮博物院本、上巻三四頁）（28）とあり、古注の内容から「なさけ」の語が加えられたと考えられる。さらに古注『蒙求』が出典として引用する『晋書』では、「曾て詠史詩を為る。是れ其の風情の寄する所なり」（列伝六十二、一一六五頁）（29）とあり、当該箇所の「なさけ」は「風情を解する」の意であると言えよう。

次に②相手の意を酌んで思いやった行動をとる意の「なさけ」である。具体的には、秀才に推挙してくれたことなどから、困窮する相手に食べ物を施す、賢人を推挙する、さらには、罪人に寛大な処置をとるといった慈悲深い行動まで幅がある。

秀才に推挙してくれたことを「なさけ」という例としては、王密が推挙の返礼として楊震に金を渡そうとして「昔ノナサケヲムクユルナリ」（「震畏四知」第四冬部・落葉）と言った例がある。食べ物を施すという意の例としては、「漂母進食」（第二夏部・郭公）で、漂母が貧しい韓信

に食べ物を与えたのに対して韓信は「此ガナサケヲ思ヒシリテ、オモクムイムト云フニ、」と感謝していることがあげられる。

そして『蒙求和歌』の「なさけ」を考える上で重要となってくるのが、賢人を推挙する、さらには、罪人に寛大な処置をとるなど、「慈悲深い」という部類に入る言動である。これらが重要となってくる理由は、単に古注や他出典の内容に依拠して「なさけ」あると規定しただけでなく、改変を加えて「なさけ」あることを際立たせようという作為が見られる例が含まれているからである。

四、『蒙求和歌』と「なさけ」〈2〉

まずは古注や出典に即した例を確認しておきたい。先に、孝恵帝の人柄について「慈仁」と「ナサケフカキココロ」が対応することを述べたが、他にも次のような例もある。「何武去思」（第九・懐旧部　※片仮名本のみ）では、進んで人を推挙し、善い行いを称揚した何武の為人について、

漢書ニ云、何武、アザナハ君卿、蜀郡ノ人也。コトニフレテナサケフカカリキ。コノミテ人ヲススメテ、人ノヨキ事ヲアラハサムト思ヘリ。ソノ所ヲサリテ後、ツネニ何武ガ事ヲオモハズト云フ事ナシ。

と評している。なお蒙求古注には、

漢書にいはく何武子は君卿、蜀郡の人なり。仁厚にして士を進むるを好み、人の善を称す。吏を除せんと欲するに、先づ科例を為し、以て請託を防ぐ。其の居る所も亦赫々たるの名無し。去りて後、人常に之を思はせらる。（真福寺蔵本、上巻一八九頁）

とあり、「仁厚」（なさけ深く手厚い）が『蒙求和歌』では「コトニフレテナサケフカカリキ」と言い換えられたことがわかる。「仁」とは、『論語』に「樊遲仁を問ふ。子曰く、人を愛すと。」（二七七頁）（３０）とあるように、人を「いつくしむ。」「親しむ。」ことであり、「あはれむ。」「なさけ。」「おもひやり。」の意にもなる（３１）。そしてこの「仁」こそ孔子の政治思想の根幹にあったものであるという（３２）。

「なさけ」と「仁」と結び付けることは「虞延剋期」（第四・冬部・歳暮　※片仮名本のみ）の説話本文と和歌の関係からも明らかである。虞延は投獄されている罪人たちを憐れみ、年末のみ家に帰ることを許してやった。すると罪人たちは「ツミ人、虞延ガ仁徳アフギテ、期ヲタガヘズ、獄ニカヘリ来リニケリ。（後略）」というのであるが、この章段に対する和歌は以下のようにある。

トシクレシ雲ノトザシヲフキトケバミネノアラシノナサケナリケリ

和歌自体は自然の景物を詠んだものであるが、年の暮れに「雲ノトザシヲフキト」くことを「ミネノアラシノナサケ」と表現するのは、監獄を開放してやった「虞延ガ仁徳」のことを暗示しており、「ナサケ」は「仁徳」の言い換えであることがわかる。

五、「なさけふかき」人物像の創出

上述の例は、古注『蒙求』やその他の典拠に「なさけ」に対応する内

容や語句が含まれている場合であったが、『蒙求和歌』の中には、その記述が、主人公の情け深さを強調するものへと改変されている例がある。次の引用は『蒙求和歌』第一、春部（柳）の「張敞画眉」である。

張敞、京兆尹タリ。経術ニ明ラカナリ。所所ニ賢ヲアラハシ、善ヲホドコセリ。人ノ過ヲナダメ、事ニ触レテ、ナサケフカカリキ。（後略）

張敞は、経学の教えに明るく、これに基づいて賢者を顕彰し、善政を行った。そして罪を犯した者にも寛大に対応した。これらのふるまいが「事ニ触レテ、ナサケフカカリキ」と評されている。しかし古注本『蒙求』（真福寺蔵本）の当該箇所には以下のようにある。

漢書、張敞字は子高、平陽の人なり。京兆尹と為る。経術を以て自ら輔く。（輔―筆者注）々　任賢を表し善を顕し、醇ら誅罰せず、此を以て自ら全うす。然れども威儀无し。（後略）（二一九頁）

「々　任表賢顕善、不醇誅罰」（輔任賢を表し善を顕し、醇ら誅罰せず）ということは部分否定であるから、時には厳罰をもって対処したことになる。古注が出典とする『漢書』には詳細な記述がある。書き下し文に改めて引用したい。

敞為人敏疾にして、賞罰分明たり。悪を見て輒ち取り、時時に法を越えて縦舎す。足犬（大カ）なる者の有り。其京兆を治むること略趙広漢の迹に循ふ。方略耳目をして、伏を発し姦を禁ずること、広漢に如かず。然れども敞本春秋を治め、経術を以て自ら輔く。其の政頗る儒雅を雑へ、往往にして賢を表し善を顕し、醇ら誅罰を用ひず。此れを以て能く自ら全し、竟に刑戮を免る。

（『漢書』列伝第四十六　張敞伝、（二）七九四頁）

悪人がいれは取り締まり、時に法規を逸脱し放免してやったため、付き従うものが多くなったという。この「時時に法を越えて縦舎す。」という側面が、『蒙求和歌』の「人ノ過ヲナダメ、事ニ触レテ、ナサケフカカリキ。」につながったのであろうか。それにしても『蒙求和歌』では、厳罰をもって臨む一面は切り捨てられており、「事ニ触レテ、ナサケフカ」き面が強調されている。

第五恋部「斉后破環」では、片仮名本と平仮名本に異同があり、平仮名本では斉后の人物造型として「なさけ」が強調される叙述となっている。これは斉の襄王とのちの斉后である激氏の女との出会いを語る前半部にあたるところであるが、秦始皇帝が斉后に連環を贈るという後半部にも異同がある。さらに平仮名本は恋部ではなく冬部（霰）に分類されているなど、検討課題の多い章段であるが、今回は前半部分を中心にとりあげたい。

その前半について、片仮名本と古注『蒙求』を並べて引用する。

〈片仮名本〉

斉ノ襄王ノキサキハ大史激ガムスメ也。昔、楽毅ガ斉ノ国ヲヲカストキ、襄王カクレ給フアヒダニ、タレトシモシラヌサマニテ、大史激ガ家ニヤドリヰテマヰリケリ。ソノ家ノムスメ、ヤドリ人ヲタダ人ニハアラヌサマニミナシテ、ヒソカニキモノクヒモノヲオクリテ、ナサケヲホドコシケリ。カクレツツ、タガヒニココロカヨヒニケレバ、ツヒニアヒタマヒニケリ。後ニ襄王クラヰニカヘリツキテ、此女ヲキサキニタテラレニケリ。

〈古注『蒙求』〉

春秋後語にいふ。斉の襄王の后は、太史激の女なり。初め、楽毅斉を屠る。襄王出奔して、激の家傭と為る。激の女其の状貌を奇として、窃かに之に衣食をす。遂に之と私通す。後に襄王復位し、激の女を后と為す。（国立故宮博物院蔵本、上巻四〇頁）

片仮名本では、「ヤドリタル人」つまり襄王が「タダ人」とは思えない風貌をしていたので、衣食の面倒をみてやったというのであり、これは古注『蒙求』と同じである。そのあとの展開についても、襄王が復権した後激の女が后に迎えられており、蒙求注に即し翻訳となっている。

それに対して平仮名本では二人の出会いが異なった展開となっている。

〈平仮名本〉

斉の襄王の后は、大夫激がむすめなり。初、家にありし時、情深く、悟り賢かりし事を聞きて忍びて召しけるに、終に后に立ちにけるなり。

平仮名本では「情深く」は、施しをした行為よりも斉后の性質として用いられている。片仮名本において「なさけ」は、単に衣食を提供したに過ぎず、しかも「ソノ家ノムスメ、ヤドリ人ヲタダ人ニハアラヌサマニミナシテ、」と、斉后が襄王の資質を見抜いた上での行為であった。それに対して平仮名本では「情深く」を斉后の性格とすることで、その為人が「賢かりし」だけでなく「情深」さも持ち合わせているというより重層的な人物像に改変されている。『蒙求和歌』では片仮名本と平仮名本いずれが先行するのかという問題があるが、本章段に限っていえば、片仮名本の方が古注『蒙求』に近く、平仮名本はそこから派生したものであるという推測が成り立つ（３３）。

説話後半は、秦の始皇帝が斉后の賢女ぶりを試したものである。まずは古注『蒙求』を引用しておこう。

秦始皇后の賢にして智多きを聞きて、之に連環を遺り、之を解かしむ。后引きて摧破し、秦使に謝して曰く「謹んで以て解く。」と。使者以て報ず。始皇女［　　］、益敢へて斉を謀らず。

（国立故宮博物院蔵本、上巻四〇頁）

※［　　］…判読不能。宮内庁書陵部蔵本は「状其志」とある。

秦の始皇帝はこの后が賢女であることを聞き、連環（知恵の輪）を贈ってこれが解けるか試した。すると后はこれを打ち砕いて秦の使に持たせた。難題に答え、それも打ち割ってみせたことに一目置いた始皇帝は、斉を攻めることはなった。『戦国策』により補うと、襄王の死後子の建が王位を継いだが、斉后は秦には謹み深く仕え、諸侯とも信頼関係を築いたため、建が即位して四十年あまり国は安寧を保っていたという（３４）。連環のエピソードは后の賢女性を示すその具体例である。

それに対して『蒙求和歌』では連環の捉え方が異なっている。

〈片仮名本〉

秦始皇、斉ノ国ヲウチトラムト思ヒテ、マヅキサキノココロヲハカラムタメニ、連環ヲオクリタルヲ、キサキソノココロヲサトリエテ、コレヲウチクダキテ、秦ノツカヒニ謝シケリ。

〈平仮名本〉

秦の始皇、斉の国をはからんとして、此后の心をまひなはん為に、

窃に連環を送り給へるを、后、気色替りて、ことはず珠を打破りてけり。

とくに平仮名本では、連環を解くという知恵試しというよりは、賄賂として贈ったという意味合いになっている。これは説話前半部において、やはり平仮名本が斉后の知性とともに情け深さにも言及していたことと関連があるだろうか。「斉后破環」については前述の通り、和歌と部立ての移行の問題があるため、さらに慎重に検討する必要があるが、『蒙求和歌』では、配偶者や主従関係において古くからの関係を大切にし、裏切らないことを「なさけ」ありと評した例もある。たとえば第九懐旧部「宋弘不諧」は、後漢の明帝が宋弘を湖陽公主の婿にしようとしたが、宋弘はその縁談を断りもとの妻を大切にした、という話である。その様子を『蒙求和歌』の本文は「帝キキ給ヒテ、ススメ給ヘドモ、昔ノナサケヲアラタメガタク思ヒトリテ、ツヒニウケ申サズ。」と表現している。同巻「華歆忤旨　陳郡感容」では、魏の文帝に仕える事になっても漢朝への思いを忘れられない司徒華歆と尚書令陳群を、文帝は咎めるどころか「帝、フタリガフルキナサケヲホメテ、アハレミ給ヒテ、弥オモクシ給ヘリ。」と感心していた。

第五恋部「楚荘絶纓」もまた『蒙求』注や原典から比べると主人公の荘王の人柄として「なさけ」が強調されている。この一話は、酒宴の灯りが落ちた隙に、后に手を出そうとした臣下がいたが、荘王は免じて罪を問わなかった。すると後に楚が晋と戦い窮地に立たされた時、その男一人が奮闘し、そのおかげで難をまぬかれることができた、という話である。「なさけ」の語は荘王が、男の纓をとりその罪を明らかにしようとした后の行動をたしなめる場面に見える。

王、モトヨリ人ヲアハレビ、ナサケフカキ心ニテ、ソノトガヲナダメムタメニ、「人ニススムルニハ酒。人ヲセムルニハ礼ヲモテス。コヨヒトモシビヲカカゲザルサキニ、人人、ミナ纓ヲトルベシ。」トオホセラレケレバ、オノオノ纓ヲトリテタテマツリケリ。

荘王の為人を「なさけふかし」としている。この部分については古注『蒙求』が残っていないため、準古注本に依らざるをえないが、準古注本とそこで出典とされる『説苑』巻六にはただ、

王の曰く、「人に酒を賜ひて、酔はしめて礼を失はしむ。奈何ぞ婦人の節を顕さんと欲して士を辱しめんや」と。（四七頁）　（３５）

とあるのみで、その行動を荘王の人柄に直接結び付けて論じるような記述にはなっていない。『説苑』において荘王の徳性に言及するところとしては、かつて荘王にかばってもらった臣下が奮闘し、今度は荘王の危機を脱したことを評したところに「陰徳有る者は必ず陽報有るなり」（四八頁）とある。

この「楚荘絶纓」の話は、『唐物語』にも第二十二話「楚の荘王、后に無礼を働きたる家来を咎めざる語」として採録されている。そして前掲の『蒙求和歌』の傍線部「王、モトヨリ人ヲアハレビ、ナサケフカキ心ニテ、ソノトガヲナダメムタメニ、」は、『唐物語』の、

あるじもとより人をあはれみなさけふかくおはしければ、「ともし火きえたる程に、これに侍人くをのくえいをとりてたつまるべし。其後火はともすべし」とのたまはするに、このおとこ涙もこぼれてうれしくおぼえけり。（三〇一頁）

に近似している（３６）。『唐物語』からの直接の影響関係があるかどうかは不明であるが、本説話の改編は平安時代後期の共通認識に基づいていると考えられ、光行がこのかたちを選択したという点はやはり注目してよいであろう。

六、「無塩如漆」における改変

さらに一段階進んで、古注『蒙求』のプロットを変形させて、「なさけ」ある人物像を創出したのが、巻五恋部「無塩如漆」である。その梗概は以下のようなものである。斉の国の鍾離春は、容姿が醜かったため、三十歳になっても夫がいなかった。市場に出て身売りをしても買い手がつかなったため宣王に頼んだところ、宣王は鍾離春を不憫に思い、后として据えてやった。さらに鍾離春は酒宴にふける宣王に対して、このままでは斉の国が滅んでしまうと、「四殆」（四つの危険）をあげて諫めた。宣王が鍾離春の言うことを聞いて政治を正したところ斉の国は安泰になった。

まずは『蒙求和歌』の本文と古注『蒙求』（真福寺蔵本）、古注『蒙求』で出典とされている『列女伝』を並べて提示したい。

〈蒙求和歌〉　※便宜上【Ⅰ】【Ⅱ】に分ける。

【Ⅰ】斉ノ鍾離春ハ無塩邑ノ女也。ミニクキコトタグヒモナカリケリ。カシラハ臼ニニタリ。目フカク、頸長ナガク（３７）、フシフトク、鼻タカク（３８）ノドムスボホレ、ウナジコエ、髪スクナク、ムネイデ、コシヲレテ、ハダヘウルシノゴトシ。四（ママ）十ニナルマデ（３９）、ヲトコナカリケリ。市ニイデテヲトコヲカヘドモ、メヲカクル人ナシ。オモヒワビツツ、宣王ニマヰリテ、キサキニソナハラムトノゾミコフニ、マコトニウトマシク、オソロシキケシキナリケレドモ、ナサケフカキ御心ニテ、コレヲイトハバ、イタヅラニナリハテムコトバカリヲアハレミタマヒテ、人ハワラヘドモ、キサキニタテタマヒテケリ。

【Ⅱ】無塩（鍾離春カ）、漸台ニハベリテ、殆哉トヨタビ云ヘリ。宣王ユヱヲ問ヒ給フニ、申シテ云ハク、「西ニハ秦ト衛トノウレヘアリ。南ニハ強楚ノアタアリ。外ニハ三国ノ難有リ。内ニハ奸臣アリテ、衆賢ススマズ。一旦山崩、社稷シヅカナラジ（４０）。コレ一ツノ殆也。次ニ漸台五重ヲカザルトテ、万民ツカレタリ。コレ二ノ殆也。次ニ賢者山林ニカクレ、讒臣左右ニコハクシテ諫者ナシ。コレ三ノ殆也。次ニ耽酒沈湎、以夜継昼。女楽（４１）縦横無度。コレ四ノ殆也」ト申セリ。ココニ宣王コトワリヲオボシシリテ、無塩（鍾離春カ）ガコトバニシタガヒテ、漸台ヲトドメ、女楽ヲヤメ、讒臣ヲシリゾケ、直諫ヲススメ、四門ヲヒラキテ、衆ノ賢ヒトヲイレテ、ヨ、ヲサマリニケリ。

〈古注『蒙求』〉

列女伝、斉の鍾離春は无塩邑の女、宣王の正后なり。極めて醜きこと双無し。臼頭深目、長状大節、昴鼻結喉、肥項少髪、折腰出胸、皮膚漆たり。行年卅にして容入する所無く、衒嫁をすれども售れず。流棄して執る莫し。乃ち短褐を払拭し、宣王に請ひて後宮に備はらんことを願ふ。遂に后と為す。　（真福寺蔵本、上巻二二四頁）

〈『列女伝』巻六弁通伝〉

鍾愛離春は斉の無塩邑の女にして、宣王の正后なり。其の為人極めて醜きこと双び無きなり。臼頭にして深目、長指にして大節、卬鼻にして結喉、肥項にして少髪、折腰にして出胸、皮膚は漆のごとし。行年四十なれども容入する所無し。衒嫁すれども售れず。流棄すれども執るもの莫し。是に於て乃ち短褐を拂拭して、自ら宣王に詣る。謁者に謂ひて曰く「妾は斉の售れざる女なり。君王の聖徳を聞き、願はくは後宮の掃除に備られん。司馬門外に頓首す。唯だ王幸に之を許せ。」と。謁者以て聞す。宣王方に漸臺に置酒す。左右之を聞き口を掩ひて、大笑せざる莫し。曰く「此れ天下の強顔の女子なり。豈に異ならずや。」と。是に於て宣王乃ち之を召見す。謂ひて曰く、「昔者先王寡人の為に妃匹を娶り、皆已に備りて列位有り。今夫人郷里に容れられずして、布衣にして、万乗の主に干めんと欲す。亦た何の奇能か有る。」と。鍾離春対へて曰く「特に有る無し。特に竊に大王の美義を慕ふのみ。」と。王曰く「然りと雖も何をか喜ぶ。」と。良久くして曰く「竊に嘗に隠を喜ぶ。」と。宣王曰く「隠固より寡人の願ふ所なり。試みに一たび之を行へ。」と。言未だ卒らざるに忽然として見えず。宣王大いに驚きて立に隠書を発きて之を読み、退きて之を推すに、又た未だ得る能はず。明日又た更に召して之を問ふに、隠なるを以て対へず。但だ目を揚げ、歯を銜み、手を挙げ膝を拊ちて曰く「殆かな。殆かな。」と。此のごときは四たびす。宣王曰く「願はくは遂に命を聞かん。」と。鍾離春対へて曰く「今大王国に君たるや、西に衡秦の患ひ有り。南に強楚の讎有り。外には二国の難有るに、内に姦臣を聚め、衆人附せず。春秋四十なるに壮男立たず。衆子に務めずして衆婦に務め、好む所を尊び、恃む所を忽にす。一旦に山陵崩弛すれば、社稷定まらず。此れ一の殆なり。漸臺五重、黄金、白玉、琅玕、籠疏、翡翠、珠璣、幕絡して連飾す。万民は罷れ極まる。此れ二の殆なり。賢者山林に匿れ、諂諛左右に強し。邪偽本朝に立ち、諫者通入するを得ず。此れ三の殆なり。飲酒沈湎、夜を以て昼を継ぎ、女楽、俳優、縦横に大笑す。外諸侯の礼を修めず。内国家の治を秉らず。此れ四の殆なり。故に曰く殆かな。殆かな。」と。是に於て宣王喟然として嘆じて曰く「痛なるかな、無塩君の言。乃ち今一に聞く。」と。是に於て漸臺を拆き、女楽を罷め、諂諛を退け、雕琢を去り、兵馬を選び、府庫を実たし、四に公門を辟き。直言を招進し、側陋に延及す。卜して吉日を擇び、太子を立て慈母を進め、無塩君を拝し后と為す。而して斉国大いに安きは醜女の力なり。君子謂ふ。「鍾離春正にして辞有り。」と。詩に云く「既に君子を見て、我が心則ち喜ぶ。」と。此を之れ謂ふ。頌に曰く「無塩の女、斉の宣に干め説く。四殆を分別し、国の乱煩を称ふ。宣王之に従ひ、公門を四辟す、遂に太子立て、無塩君を拝す」と。（42）

『蒙求和歌』の【Ⅱ】に該当する記述は真福寺蔵本古注『蒙求』にはない。「無塩如漆」については他に古注『蒙求』が残っていないため、これ以上は確かめられないのであるが、光行が見た古注には【Ⅱ】に該当する注もあった可能性はもちろんある（43）。あるいは光行自身が『列女

伝』をも参考にして増補したのかもしれない。光行がどのように後半部分の内容を知り得たのかは保留にするほかないが、『蒙求和歌』の鍾離春説話は、『列女伝』の内容を簡略化し、表現を平易にしたかたちと位置づけることができる。

『蒙求和歌』と『列女伝』の記述をさらにくらべてみたい。語句レベルの異同については、注として列挙した通りであるが、『蒙求和歌』鍾離春説話の最も顕著な独自性は、宣王が鍾離春を后として迎えた理由を、

マコトニウトマシク、オソロシキケシキナリケレドモ、ナサケフカキ御心ニテ、コレヲイトハバ、イタヅラニナリハテムコトバカリヲアハレミタマヒテ、人ハワラヘドモ、キサキニタテタマヒテケリ。

と、宣王の情け深き人柄に起因させているところである。

『列女伝』ではどのようになっていたかというと、宣王は、

「昔者先王寡人の為に妃匹を娶り、皆已に備りて列位有り。今夫人郷里に容れられずして、布衣にして、万乗の主に干(もと)めんと欲す。亦た何の奇能か有る。」と。

と特技を尋ねて鍾離春を試したのであった。その結果鍾離春は謎かけをもって斉の国が直面する四つの危機を説いて聞かせた。宣王は胸をうたれて鍾離春の助言を聞き入れたところ、斉の国は治まった。そして次に引用するように、鍾離春はその功績により后に立てられたのであった。

是に於て宣王喟然として嘆じて曰く「痛なるかな、無塩君の言。乃ち今一に聞く。」と。是に於て漸臺を拆き、女楽を罷め、諂諛を退け、雕琢を去り、兵馬を選び、府庫を実たし、四(よも)に公門を辟き、直言を招進し、側陋に延及す。卜して吉日を擇び、太子を立て慈母を進め、無塩君を拝し后と為す。而して斉国大いに安きは醜女の力なり。

このように『列女伝』では、『蒙求和歌』のような、醜女に対する憐れみによるものではなかった。

両者の違いは各書の部立てからも説明できる。『蒙求和歌』においては恋部であったが、『列女伝』では、巻六の弁通伝（弁論に長けた女性の説話）に分類されている。つまり説話の主眼は鍾離春が四殆の諫めを宣王に説くところにあるのであり、后として迎えられたという結末は鍾離春の賢女ぶりを称揚するものとして機能している（44）。

一方真福寺蔵本古注『蒙求』では、「乃ち短褐を拂拭し、宣王に請ひて後宮に備はらんことを願ふ。遂に后と為す。」と、簡潔に述べるに留まっている。『蒙求』では藐姑射山に住む仙女の美貌を書いた「姑射若氷」と対になっていることから、その主題は女性の「醜美」であったことがわかる（45）。『蒙求』の興味の中心は鍾離春の結婚や賢女性ではなく、その醜貌にあったはずである。

このように比較すると恋部として展開される『蒙求和歌』の鍾離春説話の独自性が際立ってくるのではないだろうか。鍾離春が后に迎えられた経緯は、現存の古注『蒙求』やその原典である『列女伝』からかけ離れたものになっており、何かしらの書物を参考にしたとしても、光行の判断による改変である可能性が高いと考えられる。『蒙求和歌』には光行が『蒙求』注に加筆することで、意図的に恋部に組み込まれたと思われる例が山部和喜氏により指摘されており、その中には鍾離春と同じく醜女であった宿瘤の例も含まれている（46）。『蒙求和歌』「無塩如漆」で

は末尾に付された和歌においても、

イロナクテサカリスギヌトミシホドニ名高クナリヌアキノミヤマギ

（片仮名本）

いろなしとながめし秋のみ山にも心の月はあり明の空（平仮名本）

と、鍾離春が后に迎えられた部分を和歌に詠んでいるが、章剣氏によると恋部における説話の改変の多くは、和歌の内容に影響されたものだという（47）。

さらに言えば「オソロシキケシキナリケレドモ、ナサケフカキ御心」によって鍾離春を迎えたというプロットは、在原業平が「思ふをも、思はぬをも、けぢめ見せぬ心にて」（48）老女と契った『伊勢物語』の九十九髪章段（六十三段）や、『源氏物語』の醜女末摘花（49）をも想起させる。『蒙求和歌』の改編方法のひとつとして和歌や王朝物語の世界を取り入れることは、先行研究においても指摘されている（50）。してみると「無塩如漆」の改変にも『伊勢物語』や『源氏物語』のプロットが踏まえられた可能性があるのではないだろうか。

プロット構成の方法はともかく、『蒙求』の漢故事を改変する際に、情け深い宣王を登場させ、その慈悲深さに助けられ后に据えられたとしたのは、光行が為政者の造型として「なさけ」あることを理想と捉えていたからであるということが考えられる。

七、為政者と「なさけ」

宣王についての「ナサケフカキ御心ニテ」という動機付けは、「楚荘絶纓」の「モトヨリ人ヲアハレビ、ナサケフカキ心ニテ」臣下をかばった荘王を想起させる。前述の通り、「ナサケフカキ」荘王は、『唐物語』にも見えたが、『蒙求和歌』よりあとの鎌倉期の説話集では、為政者の理想像を述べる際に用いられている。

『十訓抄』十の七十六では、厳罰をもって対処せず、臣下や民の苦しみを慮り、罰を軽減しようとした仁君の例として引用されている。

すべて、慈悲、刑の疑はしきは、軽きにつくべきの由、法令の定めありとかや。されば疑ひ犯すことろの咎、なほきはめずして、その疑ひ残らむ輩におきては、君のため、世のため、させる苦しみあるまじくは、□付きて、その罪をなだめ、軽めむこと、ひとへに徳政なるべし。あまねき慈悲なるべし。楚国の王の、纓をまぎらかして、臣下の咎を隠し給ひけむ、世に越えたる御情けなり。また、夏の禹王の御時は、「罪を行はざれば、天下いましめがたし。行はむとすれば、人々痛みしのびがたし」といひて、つねに泣き給へり。時務策といふ文には、「夏禹、罪に泣く」と申したるは、これなり。また殷の成湯は四つの罪、三つを除きて、一つを行はれけり。「四面の網、三面をとく」といへり。その心、史記に見えたり。されば、わが朝には、嵯峨天皇の御時より、死罪をばとどめられにけり。かやうのこと、もとより、その品上がれるはことはりなり。下れるものの中にも、その情ありけり。（四八五頁～）（51）

『古今著聞集』第八（好色第十一）「後嵯峨天皇某少将の妻を召す事并びに鳴門中将の事」は、後嵯峨院が探し求めていた女に夫があることを知ると、女をもとの夫である某少将に返してやり、さらに少将を中将に

昇進させて重用したという話である。その評語の中に君主が臣下を思いやった一例として荘王の話が引用されている。

凡君と臣とは水と魚とのごとし。上としてもおごりにくまず。下としてもそねみみだるべからず。もろこしには楚の荘王と申君は、寵愛の后の衣をひく物をゆるして情をかけ、唐の太宗と申かしこき御門は、すぐれておぼしめしける后をも、臣下のやくそくありとて、くだしつかはされけり。我朝にも、かゝるふるきためしもあまたきこえ侍にや。今の後嵯峨の御門の御心もちひのかたじけなさ、かの中将のゆるし申しけるなさけの色、いづれもまことに優にありがたきためしには申つたふべきものをや。君とし臣としては、何事もへだつる心なくて、たがひになさけふかきをもとゝすべきにこそと、昔より申つたへたるも、ことはりにおぼえ侍り。（二六七頁）（５２）

『十訓抄』と『古今著聞集』とでは、引用の仕方が多少異なるものの、荘王を「なさけ」ある君主の先例として引き、天皇の情け深い行為を説明している点は共通している。天皇の資質として「なさけ」が重んじられることは、すでに『栄花物語』（巻一、月の宴）にも見える。

かくて、今の上の御心ばへあらまほしく、あるべきかぎりおはしましけり。醍醐の聖帝世にめでたくおはしましけるに、またこの帝、堯の子の堯ならむやうに、おほかたの御心ばへの雄々しう気高くかしこうおはすますものから、御才もかぎりなし。和歌の方にもいみじうしませたまへり。よろづに情あり、物の栄えおはしまし、そこらの女御、御息所参り集りたまへるを、時あるも時なきも、御心ざしのほどこよなけれど、いささか恥がましげに、いとほしげにもてなしなどせさせたまはず、なのめに情ありて、めでたう思しめしわたして、なだらかに掟てさせたまへれば、（①二〇頁～）（５３）

「堯の子堯ならむやうに」とは『世俗諺文』の「堯子不堯」をもじったもので、父の醍醐天皇とともに村上天皇もまた聖帝であったことを示す（５４）。二回目の「なさけ」はとくに後宮運営に引きつけた表現であるが、聖代の一要素として「なさけ」があげられていることは確認できよう（５５）。してみると光行は平安期以来の為政者観に基づき「無塩如漆」の宣王を造形したことになる。

第五恋部「斉后破環」では平仮名本が片仮名本よりも斉后を情け深い人物として描かれていると述べたが、皇后の場合も同様である。『栄花物語』巻一では皇后安子の薨去をうけて、他の女性達がその人柄を偲んだ中に、

おほかたの御心ざま広う、まことのおほやけとおはしまし、かたへの御方々にもいと情あり、おとなおとなしうおはしましをぞ、御方々も恋ひきこえたまふ。（①五四頁）

とある（５６）。これは妻妾同士で「うはべのなさけ」を交わす意に近いかもしれないが、皇后の造型としてやはり「情あり」とする点は注目される。

ともあれ、古注『蒙求』から発展して、「なさけ」あることが強調されたり、プロットの改編にともない新たに情け深い人物像が構築されたりする場合、為政者を中心に改変が行われていた。しかも規範性の強い『蒙求』を通して語ろうとしたとのであるから、光行は為政者の資質として「なさけ」あることを重んじていたと言えるのではないだろうか。

八、おわりに

前述の通り『蒙求和歌』の序文ではその編纂方針として『蒙求和歌』の故事の心を明らかにするために、賞賛されるべき行いと思慮に欠けた行いを選んで翻訳しようとしたことが示されていた。その見習うべき人物像の一つとして、「なさけ」ある人物像、その中でも「慈悲深い」といった意で用いられている例について論じてきた。古注『蒙求』との比較から、特に為政者の造型について誇張や改変が見られ、光行が伝えたかった人物像の一端を明らかにすることができた。従来の研究では、『蒙求和歌』の翻訳手法に重きをおかれることが多かったが、光行が称揚しようとした人物像と合わせ説話の改編方法を検討することにより、両者の方向性には関連があることが見えてきた。しかし今回の考察で明らかにできたのはほんの一端に過ぎない。光行が『蒙求和歌』を通して伝えようとした人間像とその方法についてさらに検討を重ねていく必要がある。

注

（1）『蒙求和歌』の本文は、すべて「新編国歌大観」編集委員会編『新編国歌大観』第十巻（角川書店、一九九二年四月。池田利夫・佐藤道生校訂・解題）による。ただし句読点など表記を改めた箇所がある。また傍線は私に付したものである。本稿では原則片仮名本により本文を引用する。各説話の出典などについては、章剣『蒙求和歌』校注』溪水社、二〇一二年一〇月）をも参照した。

（2）池田利夫「源光行の生涯とその文学」吉岡曠編『源氏物語を中心とした論攷』（笠間書院、一九七七年三月）。

（3）前掲注（2）池田氏論文。田坂順子「『蒙求和歌』叙述の方法」『福岡大学人文論叢』四六―三（二〇一四年一二月）は、『蒙求和歌』の翻訳の手法のひとつとして、「人物の心情・言動の意味を詳述する」ことを挙げている。

（4）山部和喜「『蒙求和歌』における〈翻訳〉」『川口短期大学紀要』八（一九九四年一二月）、山部和喜「『蒙求和歌』小考」『川口短期大学紀要』一〇（一九九六年一二月）、柳瀬喜代志「『百詠和歌』『蒙求和歌』を媒體とする軍記所載の漢故事―受命の君と忠臣像の變容譚二、三題をめぐって―」『日中古典文学論考』（汲古書院、一九九九年三月、一九九七年二月初出）、田坂憲二「『蒙求和歌』と『源氏物語』『源氏物語の政治と人間』（慶應義塾大学出版会株式会社、二〇一七年一〇月）、前掲注（1）章氏注釈など。

（5）「なさけ」については、秋山虔編『王朝語辞典』（東京大学出版会、二〇〇〇年三月）を中心に以下注にあげる論考を参照した。

（6）『源氏物語』の本文は、『新編日本古典文学全集』（小学館）による。傍線は私に付した。

（7）『うつほ物語』の本文は『新編日本古典文学全集』（小学館）による。傍線は私に付した。

（8）『枕草子』の本文は『新潮日本古典集成』（新潮社）による。傍線は私に付した。

（９）大野晋『新版日本語の世界』（朝日新聞社、一九九三年一〇月）
（１０）藤原克己「漢語の「情」と和語の「なさけ」」（鈴木日出男編『ことばが拓く　古代文学史』（笠間書院、一九九九年三月）
（１１）今西祐一郎「「なさけ」の系譜―物語史一面―」『叙説』一二（一九八六年三月）
（１２）『伊勢物語』の本文は『新編日本古典文学全集』（小学館）による。傍線は私に付した。
（１３）注（１１）今西氏論文。
（１４）大野晋編『古典基礎語辞典』（角川学芸出版二〇一〇年一〇月）
（１５）『今昔物語集』の本文は『新日本古典文学大系』（小学館）による。
（１６）『唐物語』の本文は小林保治全訳注『唐物語』（講談社、二〇〇三年六月）による。傍線は私に付したものである。
（１７）前掲注（１６）注釈書の指摘による。
（１８）『漢書』の本文は『和刻本正史漢書　漢書（二）』（汲古書院）による。本文は書き下し文にして示し、句読点を付すなど表記を改めた箇所がある。傍線は私に付した。
（１９）なお『史記』呂后本紀でも孝恵帝の為人を「慈仁」と表現する。川口久雄『三訂　平安朝日本漢文学史の研究　下篇』（明治書院、一九九〇年九月）参照。
（２０）『沙石集』の本文は『日本古典文学大系』による。傍線は私に付した。
（２１）今西祐一郎「「なさけ」私論」『京都府立大学学術報告人文』三四（一九八二年一一月）の指摘による。今西氏は『伊勢物語』の業平（昔男）の「なさけ」深いことを論じた中で、「なさけ」と「仁」が近しい言葉であることに言及している。
（２２）池田利夫「唐物語序説」『日中比較文学の基礎研究　翻訳説話とその典拠』（笠間書院、一九七四年一月）。
（２３）『広辞苑』など近代以降の辞典を対象とした調査だが、深津胤房「中國文化と日本文化―「仁義」をめぐって―」『東洋学研究所集刊』三二（二〇〇二年三月）も「なさけ」のうち「人間としての心。感情。」「ものをあはれむ心。慈愛。人情。思いやり」（『広辞苑』）の用法が、「仁」に相当することを指摘している。
（２４）二十一話中には、平仮名本が存在しない標目が三話含まれている。
（２５）片仮名本と平仮名本が同一本文である場合は、両方で一例と見なし、重複は数えない。
（２６）この場合にも、費長房が桓景に対して、九月九日に災いがあるが、高い所に登って菊の花の酒を飲めば災いが去ると教えたという説話の内容がかけられていよう。
（２７）中川正美「文化と文体―源氏物語の「情けなからず」―」『源氏物語文体攷―形容詞語彙から―』（和泉書院、一九九九年一〇月）
（２８）『蒙求』の古注・準古注については、池田利夫編『蒙求古註集成上・中』（汲古書院、一九八八年一一月～一九八九年一月）

による。原則書き下し文にて引用した。句読点を付し、字体等表記を改めた箇所がある。傍線は私に付した。訓読については、章剣『『蒙求和歌』校注』溪水社、二〇一二年一〇月）をも参照した。

（29）前掲注（1）章氏注釈書参照。『晋書』の引用は『和刻本正史晋書（三）』（汲古書院）による。本文は書き下し文にして引用した。句読点や傍線等は私に付した。

（30）『論語』の引用は『新釈漢文大系』（明治書院）による。

（31）『大漢和辞典』（大修館書店）による。

（32）宇野精一『儒教思想』（講談社、一九八四年一〇月）

（33）池田利夫「蒙求和歌伝本系統詩論―旧説への再吟味―」『鶴見大学紀要』一五　第一部国語・国文学篇（一九八三年三月）、章剣「『蒙求和歌』の片仮名本と平仮名本について」『中国学研究論集』二六（二〇一一年四月）、とくに注（3）田坂氏論文を参照。

（34）『戦国策』斉巻第四。『新釈漢文大系』（明治書院）による。

（35）『説苑』の本文は、『和刻本諸子大成　第三輯』（汲古書院）による。書き下し文にて引用した。本文は句読点を付す等表記を改めた箇所がある。

（36）なお小林保治全訳注『唐物語』（講談社、二〇〇三年六月）では、『説苑』で荘王のふるまいを「陰徳」と評していることに対して、「徳行と呼ぶにはその正しさが前提とされるのだが、「なさけ」の場合はそうとは限らない。ことの正否ではなく、対象への情愛が優先され、人の本位とされる」と説明している。

（37）平仮名本では「辟長く」。「辟」には「肱」の意味がある（『大漢和辞典』）。古注本『蒙求』では、「長状」、『列女伝』には「長指」とある。

（38）古注本『蒙求』「昴鼻」、『列女伝』「卬鼻」。平仮名本のみ「鼻曲り」とする。

（39）平仮名本と古注『蒙求』では三十歳とある。

（40）平仮名本では「社稷閑かならん」。

（41）平仮名本では「女楽偶遊」

（42）『列女伝』の本文は『百部叢書集成』（藝文印書館）により、訓読については、下見隆雄『劉向『列女伝』の研究』（東海大学出版会、一九八九年二月）を参照した。なお、字体等表記を改めた箇所がある。私に傍線を付した。

（43）後の徐子光注本には該当するところがある。

（44）なお、『三国伝記』、『塵囊鈔』、流布本『保元物語』など日本において流布している鍾離春説話はいずれも『列女伝』系である。ただ『三国伝記』のみ、『列女伝』系のプロットをとりつつも、鍾離春が後宮に入れてほしいと頼んだ直後にも「宣王遂ニ漸台ニ置キテ后ト為ス」（『中世の文学』三弥井書店）が入り込んでいる。

（45）真福寺蔵本では二つの標題を並べた下に「醜美」との注記が施されている。

（46）前掲注（4）山部氏「『蒙求和歌』小考」。醜女であった宿瘤と呼ばれる女が、その賢女ぶりを斉の閔王に認められ、后に迎え

られる話である。閔王が宿瘤にはじめて話しかける場面において、故宮本『蒙求』注では「閔王召して之に問ひて曰く」とあるところを、『蒙求和歌』では「王チカクヨリテミ給ニ、ナマメキ、ヨシアリテ、カホアカメテハヂシメラヘルサマナリ。」（片仮名本）とするなど、恋愛関係を意識した描写が書き足されている。その一方で、宿瘤の醜貌に言及した箇所や、宿瘤の賢女ぶりを示した記述は省かれているという。

（47）章剣「『蒙求和歌』における漢故事の受容―恋部を中心に―」『中国中世文学研究』五二（二〇〇七年九月）

（48）前掲注（11）（21）今西氏論を参照。

（49）田中隆昭氏は、末摘花が醜女であると同時に、光源氏をいつまでも待ち続ける貞女であることについて、鍾離春を含む『列女伝』の醜女たちが、同時に賢女でもあるということに則った造型であることを指摘している。（「滑稽譚から賢女伝へ―末摘花の物語―」『交流する平安朝文学』勉誠出版、二〇〇四年三月）なお同氏「女性列伝と「列女伝」『源氏物語　歴史と虚構』（勉誠社、一九九三年六月）をも参照した。

（50）注（4）、山部氏、田坂憲二氏の論考参照。

（51）『十訓抄』の本文は『新編日本古典文学全集』（小学館）による。傍線は私に付した。

（52）『古今著聞集』の本文は『日本古典文学大系』（岩波書店）による。傍線は私に付した。

（53）『栄花物語』の本文は山中裕他校注・訳『新編日本古典文学全集三一　栄花物語①』（小学館、二〇〇八年一二月）による。傍線は私に付した。

（54）『新編日本古典文学全集』三一、二〇頁頭注。なお『世俗諺文』の引用は『続群書類従』（続群書類従完成会）による。

（55）今西氏前掲注（11）論文は、どの女性にも気を配る村上天皇を、業平を継ぎ、光源氏へとそそぐ色好みの系譜として捉えている。

（56）『大鏡』にも「かたへの女御たちの御ためも、かつは情あり御みやびをかはさせたまふに、」（『新編日本古典文学全集』）とある。桜井宏徳「「さがなき」安子―嫉妬深き「聖后」の肖像―」『物語文学としての大鏡』（新典社、二〇〇九年一〇月）は、『大鏡』の方がより安子を美化しているという。嫉妬深さなど多面的な造型の一端として「なさけ」ある一面にも言及している。

第二章　『百詠和歌』における破鏡説話の改変

一、はじめに

本稿では、『蒙求和歌』とともに三部作の一つとして著された『百詠和歌』のうち第一天象部「月」「分レ暉度二鵲鏡一」の句注として引かれる夫婦離別の破鏡説話を取り上げて検証したい。後述するようにこの話の原典は、すでに先行研究により指摘されている。しかし破鏡説話は、平安後期に漢故事への興味関心が昂揚する中で、説話集や歌学書にも散見する。夙に池田亀鑑氏の指摘にあるごとく、『百詠和歌』に見える学風は光行個人の傾向であるとともに、「時代の精神と好尚の中に成長したもの」（1）である。よって平安後期に流布していた破鏡説話との関連を視野に入れ、再度検討を試みたい。なお、『百詠和歌』の当該箇所は、のちに『七毫源氏』の須磨巻に引用されており、『源氏物語』注釈とも無縁ではない（2）。

二、『百詠和歌』研究の限界

『百詠和歌』は、『李嶠百詠』一二〇篇について、張庭芳注本によって各詩から二句を選び、それに関する故事を翻訳し、さらに和歌を付したものである。『李嶠百詠』は初唐の詩人李嶠の詠物詩で、日本おいても幼学書の一つとして流行した。『百詠和歌』の序文に

夫、鄭国公始賦二百廿詠之詩一。以諭二于幼蒙一。張庭芳追述二数千言之注一。以備二于後鑑一。（3）

（夫れ、鄭国公始め百廿詠の詩を賦す。以て幼蒙を諭す。張庭芳追て数千言の注を述ぶ。以て後鑑に備へり。）

とあることから、光行の所持していた『李嶠百詠』も張庭芳注を伴っており、『百詠和歌』の漢故事も、この注に基づき翻訳したものとされている。しかし張庭芳注の伝本は日本に残る①天理図書館蔵本系、②慶應義塾大学図書館蔵本系、③陽明文庫蔵本系で、十本に満たない。このうち②の系統を代表する慶応義塾大学図書館蔵本（室町時代写）が、書写年代も古く完本であることから最も善本とされている。張庭芳注は『和漢朗詠集私注』『幼学指南鈔』をはじめ諸書に引用されているが、現存本と隔たりもあることから、改竄増益がなされ、平安時代すでにさまざまな異本を生じていたと考えられている（4）。

池田利夫氏の研究によると、『百詠和歌』の記述は陽明文庫蔵本に近いという。しかしながら、陽明文庫蔵本は、第四嘉樹部、第五霊禽部、第六祥獣部しか現存しないことに加え、陽明文庫蔵本が残っている箇所でも、慶應義塾大学図書館蔵本の記述に近いものや、どちらに依っても説明できない注がかなりあるという（5）。このように光行が参照した『李嶠百詠』張庭芳注の実態が明らかにならないところに、『百詠和歌』の創作過程を追究することの限界がある。

しかし一方で池田氏は、「注は注である限り、説明であって繁簡は自由である。興が乗り、知識が加われば原拠より詳しく語ろうが一向差支えはない。だから百詠和歌が、どちらかの注と一致して、一方とは合わない、というような整頓された形で結果が出ないのは寧ろ当然」（6）と、

作者の創作性をも重視されている。その後の研究においても、慶應義塾大学図書館蔵本との比較ではあるが、張庭芳注に引用されているもの以外にも漢籍を参照した痕跡があることや、和歌表現や『源氏物語』をはじめとする物語に影響を受けたと考えられる表現が含まれていることも報告されている（7）。

本稿で取り上げる『百詠和歌』第一天象部「月」に対応する『李嶠百詠』張庭芳注も陽明文庫蔵本を欠いているため、慶應義塾大学図書館蔵本に基づき検証していくことになる。そのため『百詠和歌』独自の記述が光行の創作に基づくものか否か、最終的には保留せざるをえない。しかし『百詠和歌』の破鏡説話は、どのような要素から成り立っていたのか、たとえ張庭芳注に依ったものであったとしても、光行がどのように破鏡説話を理解していたのか検討するという次元において、その検証結果は有効なものであると考える。

三、『百詠和歌』所収の破鏡説話

『百詠和歌』第一天象部「月」「分レ暉度二鵲鏡一」の句注には以下のようにある。

月の一の名に破鏡と云ふ。光をわかつとは月の影はじむるなり。昔女をとこありけり。①世のみだれにあひて、わかれてとほき国へゆくとき、鏡をわりてかた鏡づつ取りて、かたみとしてさりぬ。②この女心ならず夫してけり。時にかたがみかささぎになりてはるかにとびて、をとこのかがみと一になりぬ。をとこあはれとおもひしりぬ。後の人鏡をいてうらにかささぎをうつせり。③このことは鄭の人曹文といへり。

へだてこし昔のかげもかへりきてあひ見る月の鏡なりけり

それに対して『李嶠百詠』第一乾象部「月」「分レ暉度二鵲鏡一」張庭芳注は、『神異経』を指摘する。

神異経曰、昔有二夫婦一。将レ別打レ鏡破、方執二一片一以為レ信。其妻与レ人和通。其片鏡化為二飛鵲一、至二夫前一。夫乃知レ之。後人鋳レ鏡因為レ鵲安二背上一也（六頁）（8）。

（神異経に曰く、昔夫婦有り。将に別れんとして鏡を打ちて破り、方に一片を執り以て信と為す。其の妻人と和通す。其の片鏡化して飛鵲と為りて、夫の前に至る。夫乃ち之を知れり。後人鏡を鋳るに因りて鵲を為りて背上に安くなり。）

張庭芳注の引く『神異経』（成立は漢代というが晋代の偽作か。）は、『百詠和歌』の「昔女おとこありけり」以降と対応している。夫婦離別、形見としての半鏡、妻の不義、鵲と化した半鏡の飛来、鵲鏡の由来など、『百詠和歌』の記述は、張庭芳注の引用する『神異経』を和文化したものと思われる。一方で『神異経』にない要素も加わっている。傍線部①のように夫婦離別の理由を「世のみだれにあひて、わかれてとほき国へゆくとき」と具体化する点、②のように、妻が新しい男を儲けた心境を「この女心ならず夫してけり」と描写する点である。また③の曹文についても張庭芳注では言及されていない。

四、徐德言説話の要素

前掲の『百詠和歌』のうち傍線部①と②は、徐德言説話の要素が入り込んだものと考えられる。

徐德言説話は、唐代の地理書『両京新記』（韋述撰、開元年間〈七一三～七四一〉成立。）の「延康坊」「西南隅、西明寺」条に見え、その後『本事詩』、『独異志』、『太平広記』、『類説』、『続釈常談』、『太平御覧』『古今詩話』などに多少の改変・省略を経つつ採録されている。その本文を『両京新記』により示すと以下の通りである。

本隋尚書令越国公楊素宅。（中略）有二美姫一。本陳太子舎人徐德言妻、即陳主叔宝之妹。才色冠代、在レ陳封二楽昌公主一。初与二德言一夫妻情義甚厚。属二陳氏将一レ亡、德言垂レ泣謂レ妻曰、「今国破家亡、必不二相保一。以二子才色一、必入二帝王貴人家一。我若死、幸無二相忘一。若生、亦不レ可二復相見一矣。雖レ然、共為二一信一」。乃撃二一破一鏡一、各収二其半一。德言曰、「子若入二貴人家一、幸将二此鏡一令下於二正月望日市中一貨上レ之。若存、当下冀一志之一知中生死上耳」。及二陳滅一、其妻果為二隋軍所一レ没。隋文以賜レ素、深為三素所二寵嬖一。為営二別院一、恣二其所一レ欲。陳氏後令下閹奴望日齎二破鏡一詣上レ市、務令二高価一。果値二德言一、德言随レ価便酬。引レ奴帰レ家、垂レ涕以告二其故一、並取二己片鏡一合レ之。仍寄二其妻一題レ詩云、

鏡与レ人俱去、鏡帰人不レ帰。
無二復恒娥影一、空余二明月輝一。

陳氏得レ鏡、見レ詩、悲愴流レ涙。因不レ能二飲食一。素怪二其慘悴一而問二其故一、具以事告。素憮然為レ之改レ容、使レ召二德言一、還二其妻一、並衣衾悉与レ之。陳氏臨レ行、素邀令二作レ詩叙一レ別、固辞不レ免、乃為二絶句一曰、

今日何遷次、新官対二旧官一。
笑啼俱不レ敢、方験作人レ難。

時人哀二陳氏之流落一、而以レ素為二寛恵一焉。（三八頁～）（9）

陳氏（楽昌公主）は陳の後主叔宝の妹で、もとは陳の太子舎人徐德言と夫婦であった。しかし陳末期の戦乱に巻き込まれ、陳氏と徐德言は離別を余儀なくされる。そこで一つの鏡を割り、それぞれその半分をとって形見とした。その際徐德言は陳氏に、貴人の家に召されたならば、この鏡を正月十五日に市に売るようにと言う。生死を確認する手がかりにするためである。陳の国が滅亡するにあたり、陳氏は隋軍の捕らわれの身となり、その後隋の文帝から越公楊素に下賜された。陳氏は楊素の格別な寵愛をうけていたが、徐德言との約束を守り、宦官に鏡を市場で売らせる。やがて徐德言はその半鏡を発見し、陳氏に詩を贈った。これを受け取った陳氏が涙にくれていると、楊素はそれ見とがめ理由を問いただした。事情を知った楊素は、徐德言を呼び寄せて陳氏を返してやった。世間の人々は楊素の寛恵を称賛した。

鏡を半分に分けて離別する点、妻に新しい男ができるという点で、徐德言説話も『神異経』の類話と言えるが（10）、徐德言説話では、夫婦は再会し、妻はもとの夫のもとに返され添い遂げるところが『神異経』とは異なっている。

『百詠和歌』所収の破鏡説話の出典として徐徳言説話を指摘することはすでに栃尾武氏の『百詠和歌注』(汲古書院、一九七九年四月)(11)にあり、『神異経』と『本事詩』があげられている。『本事詩』は唐の光啓二年(八八六)に孟棨によって撰せられた詩話集であるが、『両京新記』とでは叙述に差異があり、それについては、すでに諸氏により検討が行われている(12)。よってこれらを参照しつつ、『百詠和歌』における徐徳言説話の要素について再度検討してみたい。また『唐物語』(第十話)には、『両京新記』に基づき翻案された徐徳言説話が掲載されている(13)。これも検討に含めたい。

五、『百詠和歌』への受容

まず、『百詠和歌』が、離別の原因を「世のみだれにあひて、わかれてとほき国へゆくとき」(傍線部①)としていた点である。『神異経』ではただ「将に別れんとして鏡を打ちて破り」とあるのみであった。それに対して徐徳言説話では、「属二陳氏將一レ亡」(『両京新記』)、「時陳政方乱」(『本事詩』五九五頁)(14)とあり、ともに陳滅亡に伴う戦乱によるとしていた。なお『唐物語』においても「思のほかに世中みだれて」(八九頁)とあり、翻案物同士『百詠和歌』に近い表現となっている。

しかし傍線部②の新しい男を儲けた時の女の心情を「心ならず」と説明する点については差異が生じてくる。『両京新記』では以下のようにある。書き下しの形で示す。

陳の滅ぶるに及びて、其の妻果たして隋の文帝の没する所と為る。隋の文以て素に賜ひ、深く素の寵嬖する所と為る。為に別院を営み、其の欲する所を恣にす。

陳氏が楊素のもとに至った経緯について、隋軍の捕虜となり隋の文帝から楊素に下賜されたと説明しており、これは『隋書』の記録とも合致する。楊素は陳制圧の際の功労者であり、陳氏の下賜はその戦功をねぎらったものであった(15)。このことから、楊素のもとへ引き取られたのは陳氏の意志ではなかったことが察せられる。一方の『本事詩』はと言うと、「陳亡ぶるに及び、其の妻果して越公楊素の家に入り、寵嬖殊に厚し。」(五九六頁)とあるのみである。

陳氏が半鏡を市場に売りに出す場面においても、『両京新記』では、「陳氏後に閹奴をして望日破鏡を齎し市に詣らしめ、務て高価にせしむ。」とある。楊素に寵愛され何不自由ない生活を送っていたにもかかわらず鏡を売りに出し、しかもなるべく高値で売ろうというところに、今なお消えることのない夫徐徳言への愛情と、余人の手に渡ることなく、確実に徐徳言に見いだされようという気概がうかがえる。『本事詩』では、

徳言流離辛苦し、僅に能く京に至る。遂に正月望日を以て都市に訪ふ。蒼頭の半照を売る者有りて、大に其の価を高くす。人皆之を笑ふ。(五九六頁)

と、徐徳言の流離の方に重点が置かれ、陳氏が鏡を売りに出した様子は描写されていない。『本事詩』においても、徐徳言との約束を守り、鏡を売りに出しているのであるから(16)、陳氏は徐徳言を思い続けており、楊素のもとへ引き取られたのは彼女の意志ではなかったことが読み取れる。しかしその時の状況を直接説明しているという点では『両京新記』

の方がより近い。

すでに知られているとおり、この相違は両者の視点の違いに由来するものである。『両京新記』は、地理書として延康坊の「西南隅、西明寺」の来歴を語ることを目的としている。そのためこの場所に楊素の邸宅があったことが説明され、楊素にまつわるエピソードとして陳氏の一件が語られる。よって、楊素と陳氏に関することに詳しく、徐徳言側の動静については自ずと簡素化されている。それに対して、詩が詠まれた経緯を語る『本事詩』において、当然西明寺についての説明はない。『本事詩』は、「徐徳言夫妻の数奇な運命を語るところに主題」があり、「楊素は主人公から脇役」に転じている（17）。そのことを最も端的に表わすのが最後の締めくくりである。『両京新記』では、「時の人陳氏の流落を哀みて、素を以て寛恵と為す。」と陳氏を徐徳言のもとへ返してやった楊素を「寛恵」とする世評を載せて閉じる。それに対して『本事詩』では、「遂に徳言と江南に帰り、竟に以て終老す。」（五九六頁）と陳氏と徐徳言が終生添い遂げたことをもって終わっている。

また『両京新記』の翻案である『唐物語』では以下のようにある。

時の親王にておはしける人にかぎりなくえ思かしづかれてとし月をふるに、ありしにはにるべくもなきありさまなれど、このかゞみのかた〳〵をいちにいだしつゝ、むかしの契をのみこゝろにかけてよのつねはしたもへにてのみすぐしけるに、（九〇頁）

親王が『両京新記』で言えば楊素にあたる現在の主人である。親王に寵愛されていたものの、「むかしの契」を忘れることなく心の底では徐徳言を思い続けていたとある。増田欣氏によると、このように陳氏の心情を詳述するのは『両京新記』から『唐物語』へと翻案される際に発生した改変要素のひとつであるという（18）。

以上のように『百詠和歌』の徐徳言説話の要素は、夫婦離別の理由については『両京新記』『本事詩』どちらにも当てはまるが、陳氏の心境に言及している点を見るに、『両京新記』あるいはその翻案である『唐物語』の記述に依ったと見なければならない。

六、末尾の曹文説話について

前掲の『百詠和歌』の末尾に「このことは鄭の人曹文といへり。」（傍線部③）とあるのも、張庭芳注に引く『神異経』にはない要素である。曹文にまつわる破鏡説話は、藤原仲実の歌学書『綺語抄』に歌語「野守の鏡」の由来譚として見える。

昔 A曹文と云ける人ありけり。B おほやけにつかまつりて仰をうけ給はりて、とをきゐ中へくだりける。C かさゝぎのかたをうらにいつけたりけるかゞみを、中よりわりて、かさゝぎのはねをこなたあなたにつけて、かた〳〵をばめにとらせ、いまかた〳〵をばおのれもちて、女のをとこせん事は、このかゞみにてしらん、我も女せん事は、このかゞみにてしれ、とちぎりて、めを京にをきてくだりたりけるに、さてをんなのをとこをしたりければ、D このかさゝぎのかたはねつきたるかゞみがはるかにとびて、曹文がもたりけるかたにつきにけり。それをみて、ちぎりたがへておとこしてけりとなんしりにける。日本記に委はあり。（六五オ～）（19）

やはり『神異経』の類話であるが、独自の点として、傍線部A主人公の名前が曹文であること、傍線部B夫婦離別の理由を勅使として田舎へ下向するためとしていることがある。さらに『神異経』や『百詠和歌』では鏡が鵲と化して男のもとに飛んできたのであり、それにちなんで鏡の裏に鵲の模様を鋳るようになったとあったが、曹文説話では、傍線部Cのようにあらかじめ鏡には鵲が鋳られており、傍線部Dではこの鏡自体が飛来する。

曹文説話を引く「野守の鏡」は、『綺語抄』の他、『俊頼髄脳』、『和歌童蒙抄』、『奥義抄』、『顕秘抄』、『袖中抄』、『和歌色葉』といった平安後期から鎌倉初期の歌学書に頻出する歌語である。野守とは、禁猟の野を見張る番人をさすが、『袖中抄』によると野守の鏡の由来には、曹文の破鏡説話の他にⅠ雄略天皇（または天智天皇）の鷹の居場所を野守がたまり水を鏡として映し出したこと、Ⅱ徐君が持っていた人の心の中を映す鏡、Ⅲ鬼の持っていた人の心の中を映す鏡、Ⅳ始皇帝の持っていた五臓六腑を映す鏡、Ⅴこの始皇帝の鏡を高祖が咸陽宮で見つけたという説、Ⅵ轎のことと諸説ある。その中で曹文の破鏡説話に言及するのは『綺語抄』の他、顕昭撰の『顕秘抄』『袖中抄』のみで、そこでは「又綺語抄云、曹文が破鏡の事にやと釈たり。其は鵲鏡也。はし鷹の野守の鏡と云べからず。」（二八七頁）（２０）と否定されている。しかし曹文の説話を採用していない歌学書も、諸説あるうちの一説として、曹文説話を把握していた可能性は十分にある。また『綺語抄』の末尾に「日本記に委はあり。」とあることについて、黒田彰子氏は「日本紀にむろん鵲鏡譚はないから、これは日本紀の注と考えるべきである」（２１）と想定されている。このように曹文説話は当時さまざまな分野で比較的流布していた説話であったと考えられる。

七、平安後期における破鏡説話の展開

曹文説話だけではない。平安時代後期には『神異経』の類話が他にも伝えられている。

『注好選』『今昔物語集』では、主人公の名前を蘇規として採録されている。『注好選』上巻「蘇規は鏡を破る第七十五」により引用する。

此の人は、勅使と為て外の州に行く。即ち妻に談じて云はく、「吾が鏡を二つに破りて、半ばは君に得せしめ、半ばをば吾賫たらむ。由は、若し吾他の女を娶ぎせば、此の半ばの鏡飛び来りて君が鏡に合へ。若し君他の男に有らば、亦以て此の如し」と。妻許諾して、之を得て箱の内に置きて思惟らく、「実に然ること難し」と。即ち蘇規家を出でて十日有りて、妻犯すこと有り。半ばの鏡、蘇規が所に飛び来りて合ふこと約の如し。（二六七頁）（２２）

夫婦が相思相愛の証として鏡を割り別れたものの、妻が欺いたため、半鏡が夫のもとへ飛んでいったという粗筋は『神異経』と同じである。また夫が勅使として地方へ下るという設定、あるいは鏡が鵲と化すことなくそのまま夫のもとに飛来するのは曹文説話と同様である。一方で、傍線部のように妻が夫を欺く経緯を詳述している点が特徴的である。「実に然ること難し」と夫の言葉を信用しておらず、妻が積極的に新しい男と通じたということになっている。なお、この蘇規の破鏡説話は、同話が『今昔物語集』巻第十第十九話に採録されているが、そこでは再婚にいたる経緯は次のように描写される。

其ノ後、程ヲ経テ、妻、家ニ有リテ他ノ男ニ娶ニケリ。蘇規、其ノ事ヲ不知ズシテ外洲ニ有ル間、妻ノ半鏡、忽ニ飛ビ来テ蘇規ガ半鏡ニ合フ事、沙（２３）ノ如シ。然レバ蘇規、我ガ妻忽ニ約ヲ誤テ、他ノ男ニ娶ニケリト云フ事ヲ知テ、契ヲ違タル事ヲ恨ケリ。然レバ、実ノ心ヲ至ス時ニハ、心無キ物ソラ如此クゾ有ケルトナム語リ伝ヘタルトヤ。（三三二頁）

ここではむしろ蘇規の言動に詳しく、裏切られた蘇規の姿を描き出すことにより、妻の不貞が浮き彫りになっている。また、末尾の評語も『注好選』にはないなど、粗筋は同じながら多少の差異もある。

その他『散木奇歌集』にも『神異経』の故事をふまえたと考えられる一首がある。

修理大夫顕季の八条の家にて人人こひの歌よめる

ますかがみうらづたひするかささぎに心かろさのほどをみるかな

（『散木奇歌集』第八、恋部下一一二四）（２４）

ここでも「心かろさのほどをみるかな」と相手の心変わりを詠んでいる。このように平安後期においてもまた、『神異経』の類話は「女の不義」「心変わり」をテーマとする説話として享受されていた。

一方で徐徳言説話も伝来していた。『両京新記』については、『日本国見在書目録』、『入唐新求聖教目録』、『通憲入道蔵書目録』に書名が見える（２５）。そして前述の通り『唐物語』は『両京新記』に基づき翻案されたものであった。その他、『為忠家後度百首』（「寄鏡恋」為経、六六一）の「からひとのいもとわかちしからかがみわれてもきみにあはむとぞおもふ」をはじめ、とくに「寄鏡恋」の題で和歌に詠まれるようになる（２６）。

八、『百詠和歌』における改変

このような破鏡説話の展開に『百詠和歌』を位置づけるのであれば、『神異経』の類話のひとつであり、そこに徐徳言説話の要素が融合したものと説明できる。

まず『百詠和歌』の記述には、曹文説話や蘇規説話など、『神異経』から派生した類話の方に影響を受けたかと思われる記述がある。男が妻に離別し「とほき国へゆくとき」（『百詠和歌』）とあるのは、曹文説話に「とをきゐ中へくだりける」とあるのに影響されたものであろうか。前掲の蘇規説話でも「勅使と為て外の州に行く」（『注好選』）、「国王ノ使トシテ遙カニ遠キ洲へ行ケルニ」（『今昔物語集』）とあり、夫が地方へ下るというのは、『神異経』の類話に共通する要素であった。また『百詠和歌』で、飛んできた鵲が「をとこのかがみと一になりぬ。」とあるのは、曹文説話の「曹文がもたりけるかたにつきにけり」や、蘇規説話の「半ばの鏡、蘇規が所に飛び来りて合ふこと約の如し」（『注好選』）などに影響を受けたものかも知れない。『神異経』では、ただ鏡が鵲となって飛来したというだけで、男の半鏡と合わさり一枚になったとは明言していない。このように『百詠和歌』の破鏡説話は、単なる『神異経』の和文化ではなかった。

そしてここに徐徳言説話の要素が取り入れられたことにより、さらに一話のテーマは変容を来している。前述のように、『神異経』や平安後期に流布した『神異経』の類話では、妻の不義は重要な構成要素であった。

しかし『百詠和歌』では、その点を徐徳言説話により「心ならず」と、妻にとって再婚が不本意なものであったとすることにより、『神異経』やその類話において決定的であった妻の背信性が緩和されている。一方で妻の再婚を知った夫の心境も「あはれとおもひしりぬ」と描写されており、簡潔な叙述の中に、仕方なく再婚することになった妻と、その妻の思いを知るよしもなく約束が破られたことを悲嘆する夫という、夫婦それぞれの苦悩が提示されている。夫の悲嘆を描くことは、『今昔物語集』の蘇規説話にもあるが、そこでは妻の裏切りが強調されるに留まっている。『百詠和歌』では、夫婦離別の理由が「世のみだれ」とされたことも相俟って、一話の趣意は、妻の不義よりも運命に翻弄される夫婦の姿やそれに付随する苦悩へと移り変わっている。そして徐徳言説話を取り入れつつも二人が再会しないことで、より厳しい状況を呈しているといえる。

池田利夫氏によると、『百詠和歌』『蒙求和歌』は、単に幼学書の内容をわかりやすく和訳するだけでなく、故事に含まれる「人間の葛藤」や「男女の機微」を解き明かすことも目的の一つであると言い（２７）、『百詠和歌』の序文にも「十歳の昔、此文を読伝へて、四旬の今、心をしるしあらはせり。」とある。諸氏の注釈作業からは、句注の翻訳に留まらず、他の漢籍からの引用や和歌表現などの摂取、さらに光行独自の見解と見るべき箇所も報告されており、中には心境描写を加筆した例もある（２８）。

このように『百詠和歌』の記述がある程度自由なものであり、そのまなざしが登場する人物（時に動物）の葛藤に向けられていたとしても、種々の改変がどの程度光行独自の着想であったのかについては、なお慎重に判断しなければならない。当該箇所においても、曹文説話は原拠が不明であり、さらに前述の通り、平安後期において比較的流布していたことが考えられる。その中で現在伝わっている『綺語抄』の引く曹文説話は、『百詠和歌』が「このことは鄭の人曹文といへり」というには少し径庭がある。『綺語抄』では曹文が鄭の国の人であるということも明かされていない。してみると『百詠和歌』の展開に近い曹文説話が他に存在し、光行はそちらを参照した可能性がある。さらに言えば、徐徳言説話の要素との融合もすでに曹文説話の段階で行われており、融合したものを光行が参照したということさえ考えられる（２９）。それでも『百詠和歌』があらかじめ曹文のこととして翻訳していないところをみると、光行の見た張庭芳注に曹文説話のみが記載されていた可能性は低く、やはり中心は『神異経』であり、それを翻訳したものと思われる。そもそも『神異経』には、再婚にいたる妻の心境もそれを悟った夫の悲嘆も描かれていなかった。あらかじめ徐徳言説話の要素が融合された曹文説話を参照したのかもしれないが、それを取り入れることにより、『神異経』の女の不義をというテーマを超えた世界に仕立てたのは、光行の選択であったと考えてよいのではないだろうか。

九、おわりに

『百詠和歌』所収の破鏡説話の構成要素について、中国の原典に加え、平安後期における受容を含め再検討を行った。『百詠和歌』所収の破鏡説

話には『神異経』をベースに、『両京新記』『唐物語』による徐徳言説話、さらには曹文説話をはじめとする『神異経』の類話の要素も加えられて構成されており、先行研究で指摘されているよりもさらに重層的で混沌とした要素から成り立ていた。これらはいずれも平安後期に流布していた破鏡説話の範囲に収まるものであり、時に歌学や日本紀注の領域とも関わるものだとすると、光行が破鏡説話に触れた経路として、漢籍からの直線的な引用だけでなく、説話集や歌学書をはじめとする国書を経由した可能性もある。

どこまでが光行の創作であるのか保留せざるをえないが、『百詠和歌』では、『神異経』やその類話とは異なった夫婦それぞれの苦悩や生き難さを描き出しおり、それを実現させたのが徐徳言説話の要素であったと考えられる。

注

（1）池田亀鑑「河内本とその成立」『源氏物語大成』巻七（中央公論社、一九五六年一二月）。池田氏は、説話集の他に隣接する分野として、「和漢の辞書の編纂」「文選・蒙求・漢書・白氏文集等の訓釈」「和漢朗詠集・新撰朗詠集・梁塵秘抄等の編纂」をあげている。池田氏もまた、『蒙求和歌』『百詠和歌』における翻案作業は「光行の学殖とその学風を物語るものであつて、その基盤の上に萬葉集・源氏物語などの劃期的な研究業績が打ち樹てられるに至つたのである」とする。

（2）稲賀敬二「中世源氏物語注釈の一問題―『正和集』から『原中最秘抄』へ―」『源氏物語の研究―物語流通機構論―』（笠間書院、一九九三年七月、一九七二年七月初出）、山崎誠「百詠和歌の一伝本の紹介と翻刻」『広島女子大学文学部紀要』二〇（一九八五年二月）参照。最近では、太田美知子「七毫源氏「須磨」巻の頭注「百詠注」について―破鏡の寓意がもたらすもの―」（豊島秀範編『源氏物語本文の研究』國學院大學文学部日本文学科、二〇一一年三月）がある。

（3）『百詠和歌』の本文は、すべて「新編国歌大観」編集委員会編『新編国歌大観』第十巻（角川書店、一九九二年四月。池田利夫・佐藤道生校訂・解題）による。ただし句読点や返り点を付すなど表記を改めた箇所がある。また傍線は私に付したものである。

（4）張庭芳注については、以下の論考を参照した。神田喜一郎『李嶠百詠』雑考」『神田喜一郎全集』第二巻（同朋出版、一九八三年一一月、一九四九年一月初出）、池田利夫「百詠和歌と李嶠百詠」『日中比較文学の基礎研究　翻訳説話とその典拠　補訂版』（笠間書院、一九七四年一月、一九六九年一二月初出）、山崎誠「「李嶠百詠」雑考　続貂」『中世学問史の基底と展開』（和泉書院、一九九三年二月、一九八三年七月初出）、胡志昂「日本現存『一百二十詠詩註』考」『和漢比較文学』六（一九九〇年一〇月）、福田俊昭『李嶠と雑詠詩の研究』（汲古書院、二〇一二年二月）。なお敦煌本残簡も同系統の注であるともされている。諸書に引用された張庭芳注については、柳瀬喜代志『李嶠百二十詠索引』（東

方書店、一九九一年三月）を参照されたい。

（5）注前掲（4）、池田氏論文。たとえば「雁の「寄語能鳴伴」に対する荘子の逸話」について、「陽明注の方が簡略であるが、慶応注でも、足りないばかりか、話が少し違う」とする。

（6）前掲注（4）、池田氏論文。

（7）山部和喜「翻訳における和歌の機能―『蒙求和歌』と『百詠和歌』を基点として―」『説話文学研究』三二（一九九七年六月）。胡志昂・山部和喜・中村文「『百詠和歌』注釈（一）～（三）」『埼玉学園大学紀要　人間学部篇』七～九（二〇〇七年一二月～二〇〇九年一二月）など。

（8）張庭芳注の本文は、胡志昂『日藏古抄李嶠詠物詩注』（上海古籍出版社、一九九八年八月）による。字体、返り点を付すなど表記を私に改めた箇所がある。

（9）『両京新記』の引用は、辛徳勇輯校『兩京新記輯校大業雑記輯校』（三秦出版社、二〇〇六年一月）による。字体、返り点を付すなど表記を私に改めた箇所がある。

（10）小林保治『唐物語』（講談社、二〇〇三年六月）第十話評説参照。なお、『唐物語』の本文引用も本書による。

（11）『百詠和歌』の当該箇所については、前掲注（7）「『百詠和歌』注釈（二）『埼玉学園大学紀要　人間学部篇』八（二〇〇八年一二月）胡氏注にも詳解がある。

（12）古田島洋介「『唐物語』第十話原拠再考」『比較文学・文化論集』一（一九八五年三月）、新間一美「大和物語蘆刈説話の原拠について―本事詩と両京新記―」『平安朝文学と漢詩文』（和泉書院、二〇〇三年二月、一九九一年三月初出）、増田欣「「陳氏の鏡」と両京新記―唐物語の翻訳手法―」『中世文芸比較文学論考』（汲古書院、二〇〇二年二月、一九九七年三月初出）、日向一雅「平安文学における『本事詩』の受容について―徐徳言条・崔護条を例として―」『源氏物語　東アジア文化の受容から創造へ』（笠間書院、二〇一二年三月、二〇一一年三月初出）

（13）『唐物語』が『両京新記』により翻案されたことについても、前掲注（12）の諸論文を参照されたい。

（14）『本事詩』の本文は、内山知也「本事詩校勘記」（『隋唐小説研究』木耳社、一九七七年一月）による。字体や表記を私に改めた箇所がある。書き下しの文で引用した箇所がある。

（15）楊素については、前掲注（12）、増田氏論文に詳しい。

（16）『両京新記』と『本事詩』では、半鏡を分けた時の徐徳言の発言が多少異なっている。『両京新記』では、「子若入二貴人家一、幸将二此鏡一令下於二正月望日市中一貨上レ之。若存当下冀二一志之一知中生死上耳」とあり、徐徳言は半鏡を陳氏の安否を知るってとしたいと言うのみである。それに対して『本事詩』では、「以二君之才容一、国亡必入二権豪之家一、斯永絶矣。儻情緣未レ断、猶冀相見。宜レ有二以信一レ之。」と再会することを期待している。

（17）前掲注（12）、日向氏論文。

（18）前掲注（12）、増田氏論文。

（19）『綺語抄』の引用は、徳川黎明会編『徳川黎明會叢書　和歌篇

四』（思文閣出版、一九八九年七月）徳川美術館蔵本の影印により、濁点や句読点を補うなど一部表記を改めた。

（２０）引用は『袖中抄』による。『日本歌学大系』別巻二（風間書房）を参照した。一部表記を改めた。傍線は私に付した。

（２１）黒田彰子「野守鏡考―俊頼髄脳から謡曲『野守』まで―」『中世和歌論攷―和歌と説話と―』（和泉書院、一九九七年五月）

（２２）『注好選』の引用は、『新日本古典文学大系』（岩波書店）による。傍線は私に付した。

（２３）小峯和明校注『新日本古典文学大系』三四（岩波書店、一九九九年三月）の脚注は、「沙」について、「注好選「如」約」。本集の誤読であろう。」とする。なお、『今昔物語集』の引用も同書による。

（２４）和歌の引用はすべて、『新編国歌大観』（角川書店）による。

（２５）前掲注（１２）、新間氏、増田氏論文参照。『本事詩』についても、『大和物語』第一四八段の蘆刈説話に影響を及ぼしており、伝来していたものと見られる。前掲注（１２）、日向氏論文参照。

（２６）佐々木孝浩氏は、『唐物語』が「漢故事題歌を詠む際の手引き書的」役割を果たし、歌学書に準じる性格を有しているのではないかと指摘する。（佐々木孝浩「歌書としての『唐物語』」『説話文学研究』三九、二〇〇四年六月）

（２７）池田利夫「源光行の生涯とその文学」吉岡曠編『源氏物語を中心とした論攷』（笠間書院、一九七七年三月）

（２８）前掲注（７）、胡氏・山部氏・中村氏注釈。例えば、陽明文庫本張庭芳注のない箇所であるが、第二坤儀部「原」「長在二鶺鴒篇一」の句注がある。これは『詩経』小雅の「常棣」を踏まえた句である。『百詠和歌』の一節に、「この鳥、水をはなれて原にあり。古郷の浪をこひてとび、ともをよびてなく、と云り。」とあるのは、『毛詩鄭箋』の「Ⅱ渠水鳥。而今在レ原。失二其常処一、則飛則鳴求二其類一、天性也。猶三兄弟之於二急難一。」に拠るとされる（Ⅱは、「雝」の「隹」が「鳥」）。しかし『百詠和歌』の「古郷の浪をこひて」にあたる描写はない。山部氏の注では、この加筆が「旧里はさぞなこひしき水鳥のおもはぬくさの原になく声」の和歌を導き出す役割を担っていると指摘しているが、水辺を離れた鶺鴒の望郷の思いを描き出している点でも注目される。『百詠和歌』注釈（三）」参照。

（２９）後世になるが、『一滴集』（永享一二年〈一四四〇〉成立、正徹著）では、あらかじめ曹文のこととして語り出されている。

鄭人曹父（ママ）遠国ニユク時鏡ヲ破テカタ〳〵ヲ妻ニアタフ。此事ヲ思トイヘリ。此女心ナラズ夫シケルニ、此片ノ鏡鵲ト成テ飛テ、旧夫鏡トヒトツト成レリ。後人鏡裏ニ鵲ヲ鑄ツクル也。（『未刊国文古註釈大系』〈清文堂出版株式会社〉）

「曹父」とあるのは「曹文」の誤りであろう。特に「此女心ナラズ」以降の後半は、『百詠和歌』の叙述とも近似しており、なんらかの影響関係があろうか。『一滴集』は奥書によると、正徹が「或人源氏本之巻々首書等注」を書き写したものだが、旅の際携帯しやすいよう要約したという。

第三章　『百詠和歌』傅説（ふえつ）説話の成り立ちについて

一、はじめに

『百詠和歌』第二坤儀部「野」の「独在二傅巖中一」は、『源氏物語』明石巻で明石の入道が光源氏を迎えにきた経緯を説明した「他の朝廷にも、夢を信じて国を助くるたぐひ多うはべりけるを、」(②二三一頁)(1)の典拠として、『紫明抄』などに引用されている。また『光源氏物語抄』の西円注・素寂注もほぼ同文の説話を引用しており、『源氏物語』注釈に用いられた『百詠和歌』説話のひとつである。この『百詠和歌』「独在二傅巖中一」と『源氏物語』注釈の関係については、山部和喜氏の研究において、一通りの考察は尽くされている(2)。しかし『百詠和歌』「独在二傅巖中一」の説話の成り立ちについては、もう少し補足できる点がある。またそれにより、『源氏物語』注釈との関係についても異なる見方もできるのではないかと考えている。

二、『百詠和歌』「独在二傅巖中一」

まず、『百詠和歌』第二坤儀部「野」「独在二傅巖中一」を引用したい。便宜上①～⑦に分けた。

独在二傅巖中一　①殷武帝、位につきて後、三年まつりごとをいはず、②夢の中に傅説をみる。③さめて其形をうつしてもとむるに、傅巖の野にしてえたり。④武帝まつりごとをまかせて、⑤海をわたらんには、汝を舟かぢとせむとぞ聞こえける。⑥武丁は高宗也。⑦草枕ゆめぢにさきしいろながらさむるうつつにみよし野の花(3)

簡単にプロットを整理すると以下のようになる。

①殷の武帝は、即位後三年間、政治をしなかった。
②夢に傅説の姿を見る。
③夢に見た傅説の容姿を描かせて探したところ、傅巖の野で傅説を発見した。
④武帝は傅説に政治をまかせた。
⑤海を渡る時は傅説を舟楫（船頭）にすると言った。
⑥武帝は高宗のことである。
⑦和歌

『百詠和歌』の記述は陽明文庫所蔵の張庭芳注に近いとされているが、第二坤儀部については散逸している(4)。現存する慶應義塾大学図書館蔵本では、「書曰、傅説築傅岩之野也」(5)とあり、『尚書』(書経)が指摘されている。傅説の故事は『尚書』の説命上篇だけでなく、『史記』の殷本紀にも見える。『百詠和歌』と『史記』『尚書』との対照は、山部氏も行っているが(6)、わたくしに改めて比較してみたい。本文は書き下し文にて引用する。

『史記』殷本紀（便宜上①～④に分割する）

①帝武丁位に即き、復た殷を興さんことを思へども、未だ其の佐を得ず。三年言わず。政事は冢宰に決定し、以て国風を観る。
②武丁、夜夢む、聖人を得、名を説と曰ふ。

③夢に見る所を以て、群臣百吏を視るに、皆非なり。是に於いて廼ち百工をして之を野に営求せしめ、説を傅険（7）の中に得たり。是の時説は疋靡と為り、傅険に築けり。武帝に見ゆ。武丁曰く、「是なり。」と。得て之と與に語るに、果たして聖人なり。

④挙げて以て相と為す。殷国大いに治まる。故に遂に傅険を以て之を姓とし、号して傅説と曰ふ。（一三〇頁）（8）

故事の中核となる①～④までのプロットは概ね同じである。とくに重なる部分については、傍線を付した。ただ③の部分で、『百詠和歌』では、夢に見た傅説の容姿を書き取って探したとあるが、このことが『史記』では書かれていない。それに対して、『史記』では、まず朝廷に仕える臣下の中に、その姿を求めたことが記されている。また『史記』は傅説が発見された時の様子を詳しく描写しており、それによると、囚人として傅険という場所で道路工事に従事していたところを見いだされたという。

それに対して『尚書』説命上篇では以下のようにある。書き下し文にて引用する。

『尚書』説命上（便宜上①～⑤に分割する）

①王憂ひに亮陰に宅ること三祀、既に喪を免ずれども、其れ惟言はざるのみなれば、群臣咸王を諫めて曰く、「嗚呼、之を知るを明哲と曰ひ、明哲実に則を作る。天子惟ち万邦に君として、百官式を承く。王言へば惟て命と作れども、言はざれば、臣下令を稟くる攸罔し。」と。王庸て書を作り以て誥げて曰く、「台四方に正たるを以て、台ち徳の類せざることを恐る。茲の故に言はず、恭黙して道を思ひ、

②夢に帝予に良弼を賚ふ。其に予に代りて言はんとす」と。

③乃ち厥の象を審かにし、形を以て旁く天下に求めしむ。説傅巖の野に築く、惟れ肖たり。

④爰に立てて相と作し、王、諸を其の左右に置く。

⑤之に命じて曰く、「朝夕に誨を納れ、以て台が徳を輔けよ。若し金ならば、汝を用て礪と作さん。若し巨川を済らば、汝を用て舟楫と作さん。若し歳大いに旱すれば、汝を用て霖雨と作さん。乃の心を啓きて、朕が心に沃げ。若し薬瞑眩せざれば、厥の疾瘳えず。若し跣して地を視ざれば、厥の足用て傷つく。惟れ乃の僚と、心を同じうして、以て乃の辟を匡さざること罔れ。先王と、迪れ我が高后とに率ひ、以て兆民を康んぜしめよ。嗚呼、予が時の命を欽み、其れ終り有らんことを惟へ。」と。説王に復して曰く、「惟れ木縄に従へば則ち正しく、后諫に従へば則ち聖なり。后克く聖ならば、臣は命ぜざるも其に承けんとす。疇か敢て王の休命に祇み若はざらんや。」と。（五九四頁～）（9）

①には政治をしない武帝を諫めるという臣下とのやりとりがある点、②の夢に傅説を見たことが、武帝が臣下に向けた書の中に示されている点が、『史記』や『百詠和歌』と異なっている。換言すれば、この部分については、『史記』と『百詠和歌』の記述が近いことを示していよう。一方で、『百詠和歌』の夢に見た傅説の容姿を描き、傅説を探したことは、『尚書』の③に見える。そして『尚書』⑤は、武帝が傅説に対して、臣下が皇帝の政治を補佐するさまを説いた部分であり、これは、『百詠和歌』には一部見えるものの、『史記』では全く触れられていない。

また、『百詠和歌』⑥で、「武丁は高宗也。」とあるのも、『尚書』によ

らなければ得られない記述である。これは説命上篇の序に

高宗夢に説を得、百工をして諸を野に営求せしめ、諸を傅巖に得たり。説命三篇を作る。（五九四頁）

とある。

このように、『百詠和歌』の記述は、『史記』と『尚書』を合わせたような記述になっている。これは山部氏の「『書経』説命、『史記』三殷本紀の記述からも、『紫明抄』の記述は導き出せ」ないという検討結果（10）とも通じていよう。ただし、『百詠和歌』⑤の「海をわたらむには、汝を舟かぢとせんとぞ聞こえける。」についてはさらに検討を要する。前述のとおり、この部分は、『尚書』にのみ見られ、武帝が、臣下が君主を助ける様子を様々なものにたとえた箇所である。『尚書』では、他にも「若し金ならば、汝を用て礪と作さん。」という鉄と砥石のたとえ、「若し歳大いに旱すれば、汝を用て霖雨と作さん。」という旱と長雨のたとえも見える。にもかかわらず、大河と船楫のたとえが用いられたのはなぜだろうか。これについては、平安期の傅説の故事の受容を視野に入れる必要がある。

三、平安時代における傅説の故事の受容

傅説の故事は、『和漢朗詠集』や『本朝文粋』所収の漢詩文に引用されている（11）。それらの中で傅説は、皇帝をよく輔佐した理想の臣下として、あるいは隠逸の聖人として登場する。ここで検討するのは、前者の方である。たとえば『和漢朗詠集』では、巻下「丞相付執政」の部に『白氏文集』を出典とした以下の句が見える。

孫弘が閤鬧しくして閑かなる客無し
傅説が舟忙しくして人に借さず　白　（三五三頁）（12）

孫弘とは、漢の武帝時代の丞相で、東閤に賢人たちを招き入れた人物である。白居易の詩では、孫弘は賢人を招いて政治を行うのに忙しかったため、風雅の文客までは招く余裕がなかったとする。それに対して傅説も武帝の舟楫となって政治を助けることに忙しく、舟を人に貸しているひまがなかったとしている。

舟楫のモチーフは登場しないものの、『和漢朗詠集』の「丞相」には、次のような例もある。

傅氏巖の嵐は　殷夢の後に風雲たりと雖も
厳陵瀬の水は　猶ほ漢聘の初めに涇渭たり　菅三品（菅原時文）（三五四頁）

これは貞元二年（九七七）六月十四日に出された、源雅信の右大臣辞表の一部である。この全文は『本朝文粋』巻五に「一条左大臣の為に右大臣を辞する第三表」として掲載されている。『和漢朗詠集』に引用された部分は、明王と賢臣それぞれの役割を説いた一節である。書き下し文にて引用する。

臣聞く。賢を求めて官を審らかにするは、明王の世を御するの彝訓なり。己を量り任を受くるは、貞臣国に奉ずるの忠規なりと。故に傅氏巖の嵐は、殷夢の後に風雲にせりと雖も、厳陵瀬の水は、猶ほ漢聘の初めに涇渭たり。（一九八頁）（13）

柿村重松『本朝文粋注釈』（内外出版印刷、一九三〇年九月）によると、

これと似た表現が同じく『本朝文粋』巻五の大江朝綱作、清慎公（藤原実頼）の右大臣辞表第二表（天慶七年〈九四四〉六月二十三日）のうちにもある。

臣聞く。官を設けて賢を択ぶ。聖主の慎む所の者は、匪徳の挙なり。己を量りて任を受く。人臣の避くる所の者は、過才の譏なり。故に孤巌雲を排き残夢を写して貌を求め、五湖薬を売り、宿霧に隠れて名を逃る。（一九五頁）

前の源雅信辞表と同じく、皇帝は賢臣を選び、臣下は各の才覚に応じて職につくべきだと述べた場面の引用である。

そして源雅信の辞表では、雅信自身が出自の上からも、才覚からも右大臣にふさわしくないことを述べた部分において、またも舟楫のモチーフが用いられている。

臣が身山東に長ずるに非ず。寧んぞ棟梁の器に堪へんや。誉海表に覃ぶる無し。争でか舟檝の功を効さん。（一九八頁）

「海表」は、海外の意味だが、表現上のつながりとしては、次の「舟檝」を意識した選択であったと考えられる。『尚書』が「巨川」とするところを、『百詠和歌』のように「海をわたらむには、汝を舟かぢとせん」につくる例は、管見の限り他に見当たらない。しかしこの源雅信の辞表を見るに、海を渡るとする例があったとしてもおかしくはない。『本朝続文粋』第十三所収の藤原明衡作の藤原実資の四十九日追善願文では、実資の功績を列挙した部分に、「浴二恵沢一而済レ人、傅説之舟自開」（恵沢を浴びて人を済し、傅説の舟自ら開たり）（二三二頁）（14）とある。このように、傅説は皇帝の政治を輔佐する賢人であり、その功績は舟楫のモチーフによって象徴されている。しかもこれらの例はいずれも大臣経験者について述べている点が、傅説自身の経歴とも一致している。もちろん『和漢朗詠集』で丞相の部に採録されていたことも当時の傅説像の反映であると考えられる。

平安後期以降の歌学書や説話集にも傅説の故事が掲載されている。『和歌童蒙抄』では、『堀河百首』の藤原仲実歌「夢に見し人をうつゝにえしよりぞ世もすなほにはや成にける」の説明として、傅説の故事を引用している。

（前略）殷武丁位につきてまた殷をおこさん事を思ふに、其佐を得ずして三年まつりごとをいはず。武丁夢に聖を得たり。名を説といふ。夢に見し処をもて群臣百吏に見せしむるに、皆非也。爰に則百工をして野にいとなみ求しむるに、説を傅巌の中にえたり。武丁にまみゆ。のたまはく是也。是をかたらふに、はたして聖人也。挙して為レ相。殷国大きに治る。終に傅巌を姓として、号して傅説といふと云々。見二殷本紀一。（一九二頁）（15）

末尾に「殷本紀」とあるように、『史記』とほぼ同じ内容である。『宝物集』巻五では、「正法ヲ以テ国ヲ治ル」例として傅説の故事を引いている。

殷高宗ハ、夢ニ賢人ヲ見テ求給フニ、傅巌野ニシテ傅説ヲ求テ、政ヲ執テ世間ナヲリシ事也。（一〇八頁）（16）

武帝を「高宗」と称しており、『尚書』によったことがわかる。

以上のように、平安期の傅説故事の享受を見ると、『百詠和歌』の叙述を構成する要素がすべて出そろっている。平安時代には、『史記』殷本紀、『尚書』説命上篇どちらの傅説説話も享受されており、『尚書』の舟楫は、

傅説が武帝の政治を輔佐したエピソードを象徴するモチーフとしてくり返し用いられていた。してみると『尚書』（前掲⑤）では、臣下が君主を助ける様子を複数列挙していたところを、『百詠和歌』では舟楫のみが選ばれたのも、平安時代からの受容のあり方を継承したものと考えられる。

また『百詠和歌』よりあとの時代になるが、『十訓抄』にも傅説の故事が見られる。『十訓抄』は、建長四年（一二五二）の成立とされており、『光源氏物語抄』と同時代の説話集である。この『十訓抄』においても、生まれは賤しくても才能をもって名を著した人物のひとりとして傅説が引用されており、「傅説が殷宗の夢の内に入りし志、すみやかに民を渡す船となり」（一四三頁）（17）とある。武帝を殷宗としていることからすると『尚書』によったものであろうか。傅説が自らの意志で武帝の夢の中にあらわれたかのような記述になっているが、傅説の功績をあらわすモチーフとして舟楫が引き合いに出されている点は、平安期の漢詩文における引用や『百詠和歌』と同じである。冒頭でも触れた通り、『光源氏物語抄』明石巻においても、『百詠和歌』とほぼ同文の傅説説話が引用されているが、源氏注釈がなされた同時代にも平安朝から引き継いだ傅説像が生きていたことがわかる。

四、和歌について

つぎに和歌についても検討したい。前掲『百詠和歌』「独在二傅巖中一」⑦の和歌を再度引用しておこう。

草枕ゆめぢにさきしいろながらさむるうつつにみよし野の花

この和歌は、傅説説話とどのように関係してくるだろうか。

問題となるのは、なぜ吉野なのかという点であろう。吉野は大和国吉野郡に位置し、当該和歌においても「みよしの野花」とあるように、桜の名所であった。吉野の桜が「春の美の一典型」（18）となるのは、『千載和歌集』『新古今和歌集』時代にいたってからで、

・御よしのの花のさかりをけふみればこしのしらねに春かぜぞふく
（『千載和歌集』七六）（19）

・昔誰かかるさくらの花をうゑてよしのをはるの山となしけむ
（『秋篠月清集』一）

・よしの山こぞのしをりのみちかへてまだ見ぬかたの花をたづねん
（『新古今和歌集』八六）

などの例がある。しかし『古今和歌集』の仮名序には、「春のあしたよしのの山のさくらは人まろが心にはくもかとのみなむおぼえける」とあり、また同集（巻第十二、五八八）の紀貫之歌では、

やまとに侍りける人につかはしける
こえぬまはよしのの山のさくら花人づてにのみききわたるかな

とあるなど、吉野の桜が評判であったことをうかがわせる。『百詠和歌』の当該歌も吉野で見た桜は、旅寝の夢の中で見た通り美しく咲いていたということを詠んでいよう。または、実際の目の当たりにした吉野桜は思っていた以上に見事であったという解釈も可能である。そしてここに傅説の故事を重ねれば、夢に見た通りの姿をした傅説を旅先で得た、あるいは傅説が夢で見たよりもさらに素晴らしい人物であったことを言っていると解釈することができる。

しかし吉野と傅説の重なりはこれだけではない。吉野山は桜の名所であると同時に、金峯山寺を中心とした山岳修験道の聖地であり、奈良時代には役小角も修行した場所である（２０）。そして平安中期以降になると、弥勒信仰に基づく金峯山浄土の地として広く信仰を集めるようになった。そのため、人里離れた場所、あるいは隠棲地としても歌に詠まれてきた。

・みよしのの山の白雪ふみわけて入りにし人のおとづれもせぬ
（『古今和歌集』巻第六、三二七、壬生忠岑）

・みよしのの山のあなたにやどもがな世のうき時のかくれがにせむ
（『古今和歌集』巻第十八、九五〇）

・もろこしのよしのの山にこもるともおくれむと思ふ我ならなくに
（『古今和歌集』巻第十九、一〇四九、藤原時平）

わらはともだちにていみじうかたらひ侍りし人、もろともにとちぎり侍りしを、山にまかりのぼり侍りし時、かの人もならにまかりて、よそよそにすぐし侍れど、なほおもひやられ侍りし、あらしのふき侍りしころ、よしの山にこもりたりときき侍りて

・よしの山もみぢのいほりいかならん夜半のあらしのおとのはげしさ
（『山田法師集』三三）

三つ目の時平歌は、『伊勢集』では、伊勢を思い続ける気持ちを詠んだものとして配されているが、吉野山に「もろこしの」と冠しているところに、空間的な遠さや隔絶性がよく表現されている。また、光行と同時代の歌にも、

・世を捨てばよしののおくにすむべきを猶たのまるる春日山かな
（『俊成五社百首』二八六）

・いまはわが住家とすべき吉野山花ゆゑにこそ入りはじめけれ
（『正治初度百首』一七一八、静空）

・花ならでただ柴の戸をさして思ふ心の奥もみよしのの山
（『新古今和歌集』一六一六、慈円）

など、用例は多数ある。

それに対して、傅説もまた、平安時代の漢詩文において、隠棲の人として捉えられる一面があった。『本朝文粋』巻第一、大江以言「雲を視て陰を知る賦」がある。これは、賢人が隠棲しているところには、五色の雲が立ち、天子はそれを手がかりに賢者を捜し当て出仕させるべきだということを詠んだものである。賦の中では、天文博士が雲気を捉えてから隠者を招聘するプロセスを以下のように表現している。引用は書き下し文にて示す。

廊廟其の材を掄ぶと雖も、巌穴猶ほ汝の徳を毓ふ。司天遙に識る。自ら栖遁の蹤に契す。望気潜に通ず。遂に束帛の色を致す。（一三〇頁）

そしてその一例として、傅説にも言及しており、「殷氏を傅野に感ず」（一三〇頁）と記述されている。また、『和漢朗詠集』巻下・草（慶滋保胤）の句では、

華山に馬有つて蹄猶露なり　傅野に人無くして路漸く滋し　保胤
（二三四頁）

と、傅説が見いだされた「傅野」が人里離れた場所として捉えられている。『本朝無題詩』でも、傅説の住処が、景勝地や隠棲の地を描写した表

現の中に組み込まれている。

遙訪前日布金跡　遙かに訪ふ　前日　布金の跡
勝概雖多不外尋　勝概多しと雖も　外は尋ねず
碧樹陰深随地勢　碧樹　陰深くして　地勢に随ひ
翠花南幸備天臨　翠花　南に幸して　天臨に備へたりき

去々年秋。天子臨二幸茲地一。故献二此句一。

（去々年の秋。天子茲の地に臨幸せり。故に此の句を献ず。）

傅巖昔夢非真境　傅巖の昔の夢は　真境に非ず
曲阜春雲隔法林　曲阜の春の雲は　法林を隔てたり
豈若相門営梵字　豈に若かん　相門の梵字を営みて
朝々辱運至誠心　朝々辱けなくも至誠の心を運ぶに

（藤原周光　二五一）（２１）

この詩は、藤原忠通の法性寺を詠んだもので、途中の「去々年の秋。天子茲の地に臨幸せり。故に此の句を献ず。」は、久安四年（一一四八）七月一七日の近衛天皇の行幸を示したものとされている（２２）。他にも次のような例がある。

一尋泉石対澄湾　一たび泉石を尋ねて　澄湾に対ふ
鬱々林羅礎日間　鬱々たる林羅　日を礎ふる間
傅氏巖頭苔色老　傅氏が巖の頭に苔の色老い
鄭公渓裡浪声閑　鄭公が渓の裡に　浪の声閑かなり

安和大相国至二于此地一。故有二此句一。

（安和大相国此地に至る。故に此句有り。）

身馴鸞鶴疑仙洞　身は鸞鶴に馴れて　仙洞かと疑ひ
境隔風塵似故山　境は風塵を隔てて　故山に似たり
濺砌潺湲忘景気　砌に濺く潺湲に　景気を忘れ
対之争得夏中還　之に対へば　争でか夏中に還ることを得ん

（藤原敦光、三七六）

「安和大相国」とは安和年間に太政大臣であった藤原実頼のことで、「此地」とは小野宮邸のことではないかとされている（２３）。ここでは単なる文飾であるとは言え、「傅氏が巖」が、「鬱々たる林羅」「浪の声閑かなり」「仙洞かと疑ひ」「境は風塵を隔てて　故山に似たり」など、仙境や人里離れた隠棲の地を想起させる風景描写とともに用いられている。こうした傅説が人里離れたところに住んでいたという隠者性が、同じく隠棲の地である吉野に結び付けられたのではないだろうか（２４）。

五、光行と吉野

山部氏は、『百詠和歌』の当該和歌について、「草枕」とあり、旅の途中で見た夢を詠んでいるものの、『百詠和歌』の傅説説話では、武帝は夢に傅説を見てから探しに出かけており、「この歌は元々の故事と微妙な齟齬を来している」という（２５）。にもかかわらず『百詠和歌』が「草枕」としたのには、『紫明抄』で、『百詠和歌』の傅説説話が引用されている『源氏物語』明石巻の一節が関わっているとしている。それは、明石入道が光源氏を迎えにやってきて、その経緯を良清に説明する場面である。

（前略）こころみに舟のよそひを設けて待ちはべりしに、いかめしき雨風、雷のおどろかしはべりつれば、他の朝廷にも、夢を信じて

国を助くるたぐひ多うはべりけるを、用ゐさせたまはぬまでも、このいましめの日を過ぐさず、このよしを告げ申しはべらんとて、舟出だしはべりつるに、（後略）　（明石巻、②二三二頁～）

傍線部について、まず『紫明抄』では以下のようにある。

殷武丁夢傅説尚書

殷武丁、位につきてのち三年、政をいはず。夢のうちに傅説を見る。さめてその形をうつしてもとむるに、傅巖の野にしてえたり。武丁政をまかせて、海をわたらむには汝を舟かぢとせんとぞきこえける。武丁は高宗なり。（六九頁）（２６）

当該場面で明石入道の舟が現れる前に、光源氏は夢で父桐壺院から、「などかくあやしき所にはものするぞ」（②二二八頁～）「住吉の神の導きたまふままに、はや舟出してこの浦を去りね」（②二二九頁）と啓示を受けているが、この場面で、「草枕」の「ゆめぢ」に合致するのは、須磨に退去中の光源氏のみとなる。よって、これをもって『百詠和歌』の和歌を理解しなければ、傅説説話と「草枕」「ゆめぢ」の接点が見いだせないという（２７）。

たしかに、「草枕」「ゆめぢ」と言えば、

・草まくら結ぶ夢路は都にてさむれば旅の空ぞ悲しき
（『月詣和歌集』藤原実定）

・まどろまぬその夜な夜なをかぞふればゆめぢもとほきくさ枕かな
（『六百番歌合』恋部上・旅恋、藤原隆信）

など、旅の途中で見た夢のことである。また平安朝の享受も含め、武帝が旅の途中で傅説を夢に見るというパターンは、管見の限り見当たらない。しかし、旅路や旅寝、旅路に見る夢は、「吉野」「桜」ともよく詠まれるモチーフでもある。

・よしのやまみねのさくらをみしほどにたびのそらにてはるのくれぬる
（『経衡集』三〇、「よしのやまのさくら」）

・さくらばなさかりになれば芳野山ふもとのさとに旅ねをぞする
（『中宮亮重家朝臣家歌合』八、右京大夫殿下女房）

・花にあかぬよしのの山の旅ねには夢にもみゆる峰の白雲
（『玄玉和歌集』五六九、巻題六「題不知」平康頼）

・よし野山みねのさくらのさきしよりはなによがれぬたびねをぞする
（『千五百番歌合』三六八、春三、一四八番、三宮）

・よし野山ゆめにもはなをながむればこころのおくにかかるしらくも
（『雲葉集』一〇〇、「百首歌よみて大神宮へたてまつりし時」慈鎮和尚）

また、「ゆめぢにさきしいろながら」と、いまはじめて本物の吉野桜を目の当たりにしたかのような読みぶりは、前掲の『古今和歌集』の貫之歌「こえぬまはよしのの山のさくら花人づてにのみききわたるかな」も参考にしていた可能性があろう。

さらに、光行自身にも、建久六年（一一九五）『民部卿家歌合』で、

よしの山花ゆゑむすぶたびの庵をながき棲となしやはてなん
（山花、二十番、四〇）

と、吉野の桜に対する憧憬を詠んだ歌がある。この歌合において「前大和守光行」と称されているように、光行は大和守であったことがあり、吉野は光行にとって実生活においても身近な地であり、実際に訪れてい

た可能性もあろう（２８）。光行が大和守であった期間については、池田利夫氏の考証により、文治四年（一一八八）～建久元年（一一九〇）までとされている（２９）。光行が吉野を詠み込んだ和歌は他にも、正治二年（一二〇〇）十二月二十八日『石清水若宮社歌合』では、

みよしのはゝれぬやはるのいろならんかすみのひまに花のしらくも

とあり、『百詠和歌』では第五祥獣部「象」にも、

草枕たびねの夢をみよし野のきさ山風のおどろかしける

と、旅路の夢と吉野が詠みこまれている。なお、この和歌に対する説話部分については以下の通りである。

万推方二演夢一　会稽の張茂、夢に大象をみる。万推ときて云、象は獣也。此字のこゝろは守なり。汝郡守になるべしと云へり。張茂が云、象は有牙焚其身、このゆゑによしとおもはずといへり。則呉興太守になりぬ。後に王敦がためにころされぬ。

ここでは象をあらわす「きさ」と吉野の「象山（きさやま）」がかけられている。

してみると、光行は、武帝がついに傅説を見いだした時の喜びを、吉野桜を目の当たりにした時の感動に匹敵するものとして、解釈していたということになるのではないだろうか。この発想や感覚は歌学に由来するものであり、『史記』や『尚書』の知識や『百詠和歌』のもととなっている『百詠注』との直線的な関係のみでは捉えきれない。

また、山部氏の指摘するように、須磨流離中の光源氏のことを詠んだものとして理解するのであれば、むしろ『水原抄』との関わりを意識した方がよいのではないだろうか。

『七毫源氏』所引の『水原抄』の逸文では、明石の巻の同一箇所にやはり傅説の故事を指摘している。

殷武帝位ニついて三年、夢に傅説を見てさめて其形を求に、傅巖の野に得たり。武丁政を任て殷国大興。尚書。水原云、黄帝風何と云臣をえんとて大風の塵を吹払と夢にみる。又殷の湯賢人を求めしかば、伊尹と云人鼎俎をゝひて夢のうちにきたり。同高宗夢の中に傅説を得たるためし等也。（３０）

『水原抄』の逸文とみなすことができるのは、「水原云」以下の部分である。ほかの故事とあわせて、夢の中に聖人を得た例のひとつとして傅説が提示されているが、これが光行の説であるとすると、『百詠和歌』の創作時においても両者の関係を想起した可能性がある。本稿では、「吉野」という歌枕との関連で和歌を解釈したが、この『水原抄』の注釈があることによって、『百詠和歌』の当該歌と『源氏物語』を関連付けていた可能性をも想定しておく余地が生まれてくるように思う。

六、鎌倉中期以降の注釈書における周公旦故事との関係

最後に、『百詠和歌』第二坤儀部「野」の「独在二傅巖中一」が、『源氏物語』注釈の中でどのように受容されていくかを整理しておきたい。

『水原抄』は「高宗」とあることから『尚書』を念頭に置いたものであろうが、『百詠和歌』の「海をわたらんには、汝を舟かぢとせむとぞ聞こえける」に該当する記述がない。もし『水原抄』の当該注が光行によるものであったとしても、あくまで、夢に聖人を得た例をあげるに留めたものと言える。傅説のみならず、他の聖人をも列挙するのは、本文に

「他の朝廷にも、夢を信じて国を助くるたぐひ多うはべりけるを」とあるのに則した注であるといえる。

前述の通り、『光源氏物語抄』では、明石巻の同一箇所に『百詠和歌』ときわめて近い叙述が、西円注・素寂注として引用されている。

殷武丁位ニつきて後三年政をいはず。夢のうちに傅説をみて、さめてそのかたちをうつして求むるに、傅巌の野にしてえたり。武丁政をまかせて殷国大興。海をわたらむには、汝を舟かぢとせんとぞきこえける。武丁は高宗也　西円　素寂　（二五四頁）（３１）

『光源氏物語抄』では、「殷国大興。」という一節が入り込んでいるが、これは『史記』（前掲④）に「殷国大いに治まる。」とあるのに類似している。なお、前掲の『七毫源氏』所引の注記のうち、「尚書」とあるところまでの前半部分の叙述は、この『光源氏物語抄』を簡略化した格好になっている（３２）。

そして前述の通り、『紫明抄』の注は『百詠和歌』の本文と同文である。『百詠和歌』の本文は、『史記』殷本紀と近い部分もあったものの、『紫明抄』では、注釈の冒頭に「殷武丁夢傅説尚書」とあることから、『尚書』であるという意識のもとに引用していることがわかる。

第Ⅲ部第二章で述べる通り、素寂は須磨流離を中心に『源氏物語』の周公旦故事の引用を、『尚書』引用へと位置づけを変化させ、引用を拡大させた人物である。引用拡大のひとつとして、『紫明抄』明石巻「光源氏君［還住員外納言］事」では、光源氏の帰京についても、『尚書』金縢篇を引くようになる。書き下し文に改めて引用する。

昔公王家に勤労せしも、惟れ予沖人、知るに及ばざりき。今天威を動かして、以て周公の徳を彰す。惟れ朕小子、其に新ら逆へんとす。我が国家の礼も、亦之れに宜しと。王郊に出づ。天乃ち雨りて風を反し、禾則ち尽く起つ。二公邦人に命じ、凡そ大木の偃せし所、尽く起てて之を築かしむ。歳則ち大いに熟す。尚書（七三頁）

『光源氏物語抄』素寂注の段階においては、「権大納言の又なりくはゝるを云也」（二五八頁）とするのみで、周公旦の故事との比較は行っていない。一方で、前述の通り、『紫明抄』では、明石の入道が光源氏を迎えに来た場面では、傅説が引用されているのであり、「『源氏物語』に経書の思想を読もうと」する姿勢が強化されている（３３）。さらに『原中最秘抄』行阿注にいたると、傅説と周公旦を同一視するような記述もある。澪標巻「源氏の大納言、内大臣になりたまひぬ」の注釈である。

行阿云、周公旦といひし賢人、弟二人讒奏により被二左遷一たりしに、国土に風雨の災害ありしによりて被二召返一て後、天下の政被仰て柱石の国として舟楫の用となれりし也。周公旦は文王の太子、源氏君は桐壺の御子也。周公旦は為二丞相一、源氏君は任二内大臣一、相二叶此儀一者歟。［裏にあり］（３４）

これは、須磨流離から帰還した光源氏が、内大臣に任じられた場面である。東遷から帰還した周公旦が、丞相として政治を輔佐したことを引いているが、周公旦の説明をする際、「舟楫」という表現が用いられている。これだけでは、傅説の故事を意識したとは言い切れないものの、「舟楫」は傅説の故事をもとにした表現であるだけに、周公旦と傅説の故事が融合したような記述になっている。

七、おわりに

光行が意識していたか否かは不明であるが、『百詠和歌』第二坤儀部「野」の「独在二傅巖中一」の描写は、中国の典拠そのままの翻訳ではなく、平安時代の傅説説話の享受を経たものであった。また、光行が登場人物の心情を和歌の知識と結びつけて把握していたという、思考回路の一端を提示した。一方で、『百詠和歌』の傅説説話への『源氏物語』受容については、慎重であるべきだということを述べた。『源氏物語』と『百詠和歌』の傅説説話が深く関わってくるのは、『光源氏物語』以降とくに『紫明抄』であるが、素寂がなぜ原典ではなく、『百詠和歌』の記述を選んだのかについては言及することができなかった。先行研究では河内方の祖光行の学問を絶対視する姿勢（35）などが指摘されているが、次の第Ⅲ部で述べるように、周公旦の故事など、『蒙求和歌』に掲載されていても、『蒙求和歌』に拠らないこともあるため、内容面など他の側面から『百詠和歌』の傅説説話が選ばれた事情を考えていく必要がある。

注

（1）『源氏物語』の本文は、すべて『新編日本古典文学全集』（小学館）による。傍線は私に付した。

（2）山部和喜「翻訳における和歌の機能―『蒙求和歌』と『百詠和歌』を基点として―」『説話文学研究』三二（一九九七年六月）。山部氏は、『百詠和歌』が創作されるにあたり、『源氏物語』が踏まえられているということをめぐって、以下のような想定をしている。まず『源氏物語』が中国の故事を引用し、その『源氏物語』の記述を光行の『百詠和歌』が取り込んだという。さらに『百詠和歌』を『原中最秘抄』『紫明抄』『河海抄』といった注釈書が引用することにより、注釈として再生産されていくという「故事の往還」「故事の照り返し」があるという。

（3）『百詠和歌』の本文用は、すべて「新編国歌大観」編集委員会編『新編国歌大観』第十巻（角川書店、一九九二年四月。池田利夫・佐藤道生校訂・解題）による。ただし句読点を付すなど表記を改めた箇所がある。また傍線は私に付したものである。

（4）池田利夫「百詠和歌と李嶠百詠」『日中比較文学の基礎研究　翻訳説話とその典拠』（笠間書院、一九七四年一月）など。

（5）張庭芳注の本文は、胡志昂編『日藏古抄李嶠詠物詩注』（上海古籍出版社、一九九八年八月）による。

（6）前掲注（2）、山部氏論文。

（7）『新釈漢文大系』語釈に「巖」につくる本もあり、「険」と「巖」は同じであることが見える。

（8）『史記』の本文は、吉田賢抗『新釈漢文大系三八　史記（一）』（明治書院、一九七三年二月）による。句読点を付すなど表記を改めた箇所がある。また傍線は私に付したものである。

（9）『尚書』の引用は、すべて池田末利『全釈漢文大系』第十一巻（集英社、一九七六年四月）による。句読点を付すなど表記を改めた箇所がある。また傍線は私に付したものである。

（１０）前掲注（２）山部氏論文。
（１１）傅説の故事が平安時代に流布していたこと自体は、阿部秋生他校注・訳『新編日本古典文学全集二一　源氏物語②』（小学館、二〇〇六年八月）漢籍・史書・仏典引用一覧にも指摘がある。
（１２）『和漢朗詠集』の本文は、すべて『新編日本古典文学全集』一九（小学館）による。引用は書き下し文による。
（１３）『本朝文粋』の本文は、すべて『新日本古典文学大系』（岩波書店）による。訓読については、柿村重松『本朝文粋注釈』（内外出版印刷、一九三〇年九月）をも参照した。傍線は私に付した。
（１４）『続本朝文粋』の本文は、『新訂増補国史大系』第二九巻下（吉川弘文館）による。表記は私に改めた。
（１５）『和歌童蒙抄』の本文は、『日本歌学大系』別巻一（風間書房）による。字体は通行のものに改めた。
（１６）『宝物集』の本文は、『大日本仏教全書』（第一四七冊）（有精堂書店）による。表記は私に改めた。
（１７）『十訓抄』の本文は、『新編日本古典文学全集』五一（小学館）による。
（１８）久保田淳・馬場あき子編『歌ことば歌枕大辞典』（角川書店、一九九九年五月）。その他吉野については、糸井通浩・吉田究編『小倉百人一首の言語空間―和歌表現史論の構想―』（世界思想社、一九八九年一一月）、大阪成蹊女子短期大学国文学科研究室編『吉野の文学』（和泉書院、一九九二年六月）、藤原成一「吉野考　癒しのユートピア」『癒しの地形学』（法蔵館、一九九九年三月）、黒田彰子「花の吉野―平安末期成立の本意をめぐって―」『俊成論のために』（和泉書院、二〇〇三年五月）、前園実知雄・松田真一編『吉野　仙境の歴史』（文英堂、二〇〇四年六月）、小町谷照彦「み吉野の山の白雪踏み分けて」『国文学』四九―一二（二〇〇四年一一月）、山本啓介「西行と吉野山」『国文学』七六―三（二〇一一年三月）などを参照した。
（１９）和歌の本文は、すべて『新編国歌大観』（角川書店）による。便宜上表記を改めたり、傍線を付したりした箇所がある。
（２０）前掲注（１８）参考文献による。小町谷照彦・倉田実編『王朝文学文化歴史大事典』（笠間書院、二〇一一年一一月）をも参照した。
（２１）『本朝無題詩』の本文は、本間洋一『本朝無題詩全注釈』一（新典社、一九九二年三月）による。傍線等は私に付した。
（２２）本間洋一『本朝無題詩全注釈』一（新典社、一九九二年三月）による。
（２３）前掲注（２２）に同じ。
（２４）『懐風藻』に残された吉野行幸従駕詩の吉野の描写は、仙境の景物によって詠まれている。また柘の枝が美女と化して吉野の漁師味稲と結婚するものの、やがて女は昇天してしまうという柘枝伝説の地でもある。『千五百番歌合』雑一、一四一三番右（二八二七）の俊成卿女の歌にも、「もろともにすめばなりけりあしたづもよしののおくの松のこのもと」とあり、これに対する判詞には、「仙人のすみかめかしきよしなれやよしのの山のおくの松風、

仍以右為」勝。」と評されていることから、神仙としてのイメージも後世まで保たれていたことがわかる。なお、平安時代の傅説説話においては、傅説が囚人として工事作業に従事していたところを発見されたという点については、あまりクローズアップされない傾向がある。ただし『菅家後集』「叙意一百韻」で「傅築巌辺耦」（傅が築は巌辺に耦せり。）とあるのは、傅説が工事作業をしていたことを意識したものか。

（25）前掲注（2）、山部氏論文。

（26）『紫明抄』の本文は、玉上琢彌編『紫明抄・河海抄』（角川書店、一九九一年二月）による。句読点や傍線を付すなど表記を改めた箇所がある。

（27）前掲注（2）、山部氏論文。

（28）木村尚志「中世の旅と歌枕―浜名の橋を中心に―」『国語と国文学』八六―六（二〇〇九年六月）は、光行が、『蒙求和歌』「広徳従橋」の和歌に「ナミアラキハマナノウミヲアヤブミシ心ノハシノアサカラヌカナ」と「ハマナノウミ」を詠んでいることについて、伝統的な浜名の詠み方から逸脱したものであり、光行の旅の経験がもたらした表現であることを論じておられる。この指摘は、光行の翻案物の構成要素を立体化するという点においても注目される。他に『蒙求和歌』『百詠和歌』の光行歌と同時代の和歌の関係を述べたものとして、小山順子「『蒙求和歌』『百詠和歌』の表現―歌人としての源光行―」『京都大学国文学論叢』三五（二〇一六年三月）がある。

（29）池田利夫『新訂河内本源氏物語成立年譜攷』（貴重本刊行会、一九八〇年五月）。それによると、治承四年（一一八〇）六月二十九日から寿永二年（一一八三）十二月十日までは源兼忠（『公卿補任』）、『吾妻鏡』の文治元年（一一八五）十月二十四日条と文治三年（一一八七）年五月十五日条には「重弘」なる人物が大和守であったことが見える。その後四年間の空白を経て、『吾妻鏡』の建久二年（一一九一年）三月三日条に広田維業が大和守であることが見えると同時に、同じ建久二年（一一九一年）三月二日に催された『若宮社歌合』では、光行のことをすでに「前大和守従五位上源光行」と称している。このことから光行が大和守であった期間は、文治四年（一一八八）から建久元年（一一九〇）の間であったと見られている。

（30）稲賀敬二「中世源氏物語注釈の一問題―『正和集』から『原中最秘抄』へ―」『源氏物語の研究―物語流通機構論―』（笠間書院、一九九三年七月）による（表記については改変を加えた。）。日向一雅「源氏物語古注釈における『尚書』と周公旦注」同氏編『源氏物語　注釈史の世界』（青簡舎、二〇一四年二月）をも参照した。

（31）『光源氏物語抄』の引用は、中野幸一・栗山元子編『源氏物語古註釈叢刊』第一巻（武蔵野書院、二〇〇九年九月）による。句読点や傍線を付すなど表記を改めた箇所がある。

（32）稲賀氏前掲注（30）論文にも同様の指摘がある。なお、稲賀氏は、「殷国大興。」が入り込んでいることについて、西円が『百

詠和歌』に、この一文を取り入れることで、自説としたものかという可能性を提示している。他に当該箇所に触れたものとして、前掲注（３０）の日向氏論文がある。本稿においても参考した。

（３３）前掲注（３０）の日向氏論文。

（３４）『原中最秘抄』の本文は、『源氏物語大成』巻七（中央公論社）による。表記を改めたり、傍線を付したりしたところがある。［　　］は割注。

（３５）前掲注（３０）稲賀氏論文。

小括

第Ⅱ部では、『蒙求和歌』や『百詠和歌』の記述から参照した漢籍をはじめとする典拠を見極め、その上で光行の創作意図がどのようなものであったのかを検討した。

第一章では、比較的個別研究も行われている『蒙求和歌』について、光行が一貫して理想とする人物像を探し、そのひとつとして「なさけ」ある人物を提示した。巻五恋部「無塩如漆」を分析した部分で述べたごとく、光行は「なさけ」ある為政者を作り出すため、もともとのプロットを改変させていた。『蒙求和歌』では、宣王は情け深さから醜女を娶ったことになっていたが、古注『蒙求』「無塩如漆」のテーマはあくまでも鍾離春の醜貌であった。また古注『蒙求』の出典であり、『蒙求和歌』の記述にも踏まえられている『列女伝』でも宣王に迎えられたのは鍾離春が賢女だからであった。『蒙求和歌』では、宣王の情け深さが結果、賢女の助言を得られることにつながり、国が安泰に治まったという徳目につながっているのであるが、この部立が恋部であることから、醜女鍾離春の結婚にも重きがおかれていたものと考えられる。

こうした人間同士の機微を書き加えるところは、第二章で論じた『百詠和歌』の破鏡説話にも通じる。光行の創作のもとになったとされる『李嶠百詠』張庭芳注の破鏡説話は、『神異経』型であると見られ、その主題は夫婦離別と妻の不義密通であった。それに対して光行の『百詠和歌』では、やはり妻は夫以外の男を儲けるが、そこにまつわる夫婦それぞれの心情を書き足すことによって、他の男を儲けたという不義の話を越え、夫婦それぞれの苦悩や生き難さを語ることへと主題が深化している。

第三章においては、『百詠和歌』第二坤儀部「野」「独在二傅巖中一」傅説説話の構成について考察した。『百詠和歌』の傅説説話は、平安期の当該説話の受容のあり方を継承していたが、光行が漢故事から登場人物の心情を読み取り、それをどのように表現しているのか、思考の跡をたどることができた。一方、先行研究（1）で指摘されている『源氏物語』の受容については、全く否定される訳ではないものの、なお慎重であるべきことを述べた。

『百詠和歌』については、『蒙求和歌』ほど研究が進展していないものの、やはり光行の故事の解釈が示されているという点では注釈書ということができ、それを物語として一話の流れの中に提示しているという意味では、創作ということができることを具体的な検証をもって示した。

注

（1）山部和喜「翻訳における和歌の機能―『蒙求和歌』と『百詠和歌』を基点として―」『説話文学研究』三二（一九九七年六月）。

第Ⅲ部

『源氏物語』注釈における男性文人と漢籍典拠

――『光源氏物語抄』を中心に

第一章　『光源氏物語抄』編者の注釈態度について

一、はじめに

『光源氏物語抄』（『異本紫明抄』とも）は、建長四年（一二五二）から文永四年（一二六七年）頃にかけて成立した『源氏物語』の諸注集成である。伊行や定家など前代の注釈に加え、清原教隆、西円法師、素寂など関東で活躍した人物の注釈を多く載せることから、その周辺で成立したとみられている。しかし、具体的な編者については、堤康夫氏の金沢実時説が有力視されているものの（1）、近年、栗山元子氏（2）や李興淑氏（3）により、なお検討の余地を残すことが指摘されている。

編者像を探るためには、「今案」とする注記を吟味することが不可欠である。堤氏の調査によると、「今案」注は一七九項目あり、素寂、定家、西円、伊行についで五番目の多さであるが、項目のみで注記のない箇所が五七項目もあり、実質的には一二二項目にとどまるという（4）。

しかし編者を特定することを目的としたこれらの諸論の多くは、人間関係が浮き彫りになる一部の注記に関心が集中しており、「今案」注記全般を通した編者の学問態度については、十分な検討が尽くされていない。本稿ではその点について検討考察する。

堤氏は「今案」注が玉鬘巻で玉鬘と大夫監の居場所をめぐり、別の解釈を生む余地がない部分に疑問を抱いていることから、編者は初学者ではないかとされた。初学者が『光源氏物語抄』ほどの注釈書を編集できるかは疑問が残るものの不可能ではなく、本書は「諸注・諸説の集覧を企図した注釈書であり、諸家の注記を集大成したものにすぎない」、「編者の見解がみえる注記は、ごく限られたものと言わざるを得ない。とすれば、編者＝「今案」の注記者が専門的源氏学者である必然性はなく、初学の人であっても、諸説収集の意欲と性向をもった人物であれば、十分可能な作業であった」という（5）。しかしたとえ少数であったとしても編者による注記が掲載されているということは、編者は単なる編集者の位置に留まらず、独自の見解を持った源氏注釈者だったといえよう。この問題については、すでに栗山氏による反論があり、問答において「今案」注が回答する側にまわっていることや本文を読み込んでいなければなせないような注記があることなどから、編者は「漢学に詳しく、かつ『源氏物語』にも一家言持つ人物」と指摘した（6）。本稿もまた編者が初学者とは言い難いという立場にあるが、その論証過程を異にする。また問題の発端となっている玉鬘巻の注記について異なる理解もできるように思う。

二、玉鬘巻「ひせんの国」と「ひこのくに」

まずはその玉鬘巻の注から検討することにする。

【例1】※返り点は私に付した。

このすむところはひせんの国とぞいひける云事

肥前国也［教隆］　今案云備前肥前有二両国一。故被了（ママ）尋云、以レ何両国之中知二肥前国一。畢。　今案　（二九七頁）（7）

【例2】※返り点は私に付した。

ひこのくにの事　肥後国也。教隆曰備後肥後有二両国一之故注レ之。尋云両国之中以レ何知二肥後国一乎。[今案]　（二九七頁）

【例1】は、玉鬘の居場所について言及した箇所である。意味が取りにくい箇所もあるが、同じ形式の【例2】を参考にすると、教隆は「肥前」と解するが、濁点のない「ひせん」という仮名表記からは、「肥前（ひぜん）」「備前（びぜん）」両方とも可能性があるわけで、「今案」注はそのうちなぜ「肥前」とわかるのかと疑問を呈している。【例2】では、「ひこのくに」について、教隆は「肥後」とするが、「今案」注は「肥後（ひご）」と「備後（びんご）」両方考えられるのになにゆえ「肥後」とわかるのかと食い下がる。確かに濁点の付されていない仮名表記では、いずれの可能性もあり得るが、備前、備後は山陽道に属し、それに対して肥前、肥後は西海道であるから、場所が全く異なってくる。

ここではいずれも教隆の「肥前」「肥後」説が正しい。

①その御乳母の夫少弐になりて行きければ、下りにけり。かの若君の四つになる年ぞ筑紫へは行きける。　（③八八頁）（8）

②むすめどもも男子どもも、所につけたるよすがども出で来て、住みつきにたり。心の中にこそ急ぎ思へど、京のことはいや遠ざかるやうに隔たり行く。もの思し知るままに、世をいとうきものに思して、年三などしたまふ。二十ばかりになりたまふままに、生ひととのほりて、いとあたらしくめでたし。この住む所は肥前国とぞいひける。　（③九三頁）

③君にしも心たがはば松浦なる鏡の神をかけて誓はむ　（③九七頁）

④ただ松浦の宮の前の渚と、かの姉おもとの別るるをなむ、かへりみせられて、悲しかりける。　（③一〇〇頁）

玉鬘巻によると、①のように玉鬘は、乳母の夫が大宰少弐に任じられともに下向したのだから、玉鬘一行の滞在先は九州ということになる。②は、少弐が筑紫の地で病死した後、子供達はその地で家族を儲け、土着化しつつあったことを述べた箇所である。傍線部が【例1】の項目に採られている部分であるが、他の子供達がそのまま土着していたというのだから、玉鬘と乳母の住んでいた場所も同じ九州の「肥前」と解するのが自然である。③は、求婚してきた大夫監が玉鬘に詠み送った歌である。歌中の「松浦宮なる鏡の神」は、肥前国松浦郡（今の佐賀県唐津市）に鎮座する祭神である。④のように上京する際、兵部の君が西国の地に留まる姉との別れを悲しむ場面にも「松浦の宮」と見えることから、玉鬘と乳母の住んでいた場所は肥前と解するのがよいと判断できる。また大夫監については以下のように紹介されている。

大夫監とて、肥後国に族ひろくて、かしこにつけてはおぼえあり、勢ひいかめしき兵ありけり。むくつけき心の中に、いささかすきたる心まじりて、容貌ある女を集めて見むと思ひける。（③九三―九四頁）

大夫監は、大宰府の三等官で、三等官以下はその土地の出身者が任じられた。大宰府の三等官は大監と少監があり、大監は正六位下相当だが、

その中でも「土地の有力者で功績のあった者は、大夫である五位に叙せられることもあ」った（9）。官職からはもちろん、九州の地に住み着いている乳母の息子たちが大夫監を怖れて「これに悪しくせられては、この近き世界にはめぐらひなむや。」（③九四頁）と言っていることからも、【例2】の「ひこ」もまた、備後ではありえず、肥後でなくてはならない。このように物語本文を普通に読み進めて行けば、備前・備後という解釈が生じるはずはない。よって堤氏は、編者は『源氏物語』に関して熟知していない、初学の人であるかもしれない。それ故、このような通常の範囲を逸脱した初歩的な疑問が生じたのではあるまいか」（１０）としたのだろう。

これに対して、栗山氏は検討の余地を残すとしながら、『光源氏物語抄』には音の清濁や訓か音か等の読み方についての注釈が多く採られており、これもその一環ではないかという。あるいは『光源氏物語抄』は、建長四年（一二五二）から文永四年（一二六七年）という十五年以上の編集期間があるとされていることから、この間に編者の学習も進んでいたはずであり、【例1】【例2】は編者の初期の注で、その後訂正・削除が行き届かずそのまま残ったものかとも想定した（１１）。

【例1】【例2】の本質が音の清濁をめぐる注記であったことは間違いない。栗山氏も指摘するように、【例2】に「教隆曰」として、「備後肥後有二両国一之故注レ之。」とあることからその意図は明らかである。しかし問題は、当該箇所が読み進めて行けば明らかな箇所であるにも関わらず、何度も「今案」注が食い下がって質問していることにある。そこで、初学者説を批判的に継承するような格好で初期の注記の残存ではないかとしてみても、編集初期段階を示す指標となる建長四年（一二五二）十月二十八日から半年足らずしか経過していない建長五年（一二五三）三月二十八日の談義（１２）で堂々と西円説に反論する「今案」注をどのように解釈すべきだろうか。

この談義は、初音巻の明石の君の歌「めづらしや花のねぐらに木づたひて谷のふる巣をとへる鶯」（③一五〇頁）の結句について、「とへる鶯」と、「とづる鶯」いずれがよいかという議論である。本文は、四つに分けた上、返り点を付して引用する。

【例3】

めづらしや花のねぐらに木づたひて谷のふるすをとづる鶯と云事

A　問、閑本々不レ同。随又有レ議。多存二問之由一、且冷泉民部卿家問也云々。然而愚意之所レ存、偏閑也。義理相応之故也。其上証歌有レ之乎。所謂

紫式部

誰が里の春のたよりに鶯の霞にとづる宿をとふらん

大納言公任

谷の戸をとぢやはてつる鶯のまつにをとせで年の暮ぬる西円

B①閑義、尤非也。其故ハ、此歌の前後の意をみるに、明石上姫君御返事悦思之由也。閑ならば、うらみおもへるなるべし。理其不可。然随五文字ニめづらしやとをけり。此詞称美由也。若いたみなげく心ならば、うらめしやなどやうに悲傷之詞たるべき也。証歌又不レ足二指南一。鶯のふるすを〻とへる〻とづる伏所可レ詠也。何必一准。且此事去建長五年三月廿八日談議之時、西円云閑也。教隆予等曰問也。両方相論終以不二心行一。仍相議云、尋二一問当世和歌之有議一、付二彼返状一、各為二自身簡一之

由二可二出押一畫（ママ）云々。然間尋三—申典廐相二—訪壱州・河州李部・東禅門等之処一、皆いと（ママ）つる（へカ）也云々。仍播公出二押書一云、此字文の心と申、地体と申、可レ為レ閑之由、喧詞令二論申一之処、如レ此御報等者料簡之瑕瑾和歌之恥辱也。仍自レ今如レ此之固論二僻案一不レ可レ出レ言。廿余年此道之稽古所一時空成畢。就中於二源氏事一者、於二此御亭一雖レ為二先達一、為二未学一顕二不覚条一（被カ）彼レ教レ負レ子之謂歟。但愚意之所レ覃者不レ顧二短慮一、雖レ為二自レ今以後一所存之趣一往者可レ令二言上一也。是只手斧者雖レ休有レ廉之謂歟。仍令レ進二—上押書之状一、如レ件。建長五年三月廿八日、楡柳営隠倫釋西円［在判］

※　II…「才」に「段」

B②凡其人性分有二四種一。一者（料カ）数知諳誦其以兼備。二者雖レ無二諳誦之徳一有二了知之性一。三者雖レ無二了知之性一、有二諳誦之一。四者（料カ）数知諳誦共闕。今於二播公一者、所謂第三之有二諳誦之徳一、無二了知之性一（后カ）仁也。且非二啻是一、先々僻料簡多、其事故也［今案］

C　追云其後ことのついで有て（て）、河妙（州カ）に重而問答のところに、河妙（州カ）の云、とづる也。またく先年の沙汰の時とづると云義申さず。もとよりとづるよしを存する也と云々。此条比興也。能々談すべきことなり。今案　（三〇五—三〇六頁）

一連の流れを整理すると（13）、西円が「とづる」とする（A部分）のに対して、「予」すなわち編者や教隆らは「とへる」を支持する。談義では両者譲らず決着が着かなかったため、和歌の見識ある人々に問い合わせたところ「とへる」で意見が一致し、西円が負けを認める結果となった（B①部分）。「今案」つまり編者は、西円はこれまでにもたびたび失敗をしでかしてきたとその性向を痛烈に批判する（B②部分）。しかし、後日「河妙（州カ）」なる人物に再び質問したところ、実は「とづる」を支持するという見解だったため、編者も「能々談すべきことなり」と態度を一歩後退させている（C部分）。稲賀氏によると、「河妙（州カ）」とあるのは、「河州」の誤りで、B①部分で諮問を受けた一人「河州李部」と同一人物であり、具体的には源親行をさすという（14）。

B①で編者は、場面状況を加味して「とづる」が非なることを解き明かしていくが、B①部分傍線部に「且此事去建長五年三月廿八日談議之時、西円云閑也。教隆予等曰問也。」とあり、談義当時を遡って回想していることから、この詳細な反論が談義当時からのものか、後から肉付けされているのか判然としない。しかし、一連の注記の決着点であるC部分では、談義当時のことを「先年の沙汰の時」と表現し、「河妙（州カ）」の告白を受け、編者は「とへる」と断定することをやや躊躇している。これが編集現在の最終的な編者の立場と考えられるから、B①部分の前半で、「とづる」を支示する西円説を批判しているのは、建長五年（一二五三）当時の編者の意見と見なせるのではないか。もし談義当時の見解だとすると、談義が行われた建長五年（一二五三）三月二十八日は、『光源氏物語抄』の編集の初期段階を示す建長四年（一二五二）十月二十八日から半年足らずしか経過していないことになる。すると、半年間に成長を遂げたとも考えられなくもないが、編者が編集の初期段階においては初学者だったと考えることは難しくなってくるのではないか。

ところで、B①部分の編者の注釈態度について、稲賀氏は「文意を考え、証歌の必ずしもよるべからざる旨を指摘し、この異本紫明抄の撰者の見解はまことに理の通った説」と一目おいているが（15）、このような論理的で実証的な学問姿勢は、先行する注釈書が指摘する典拠について妥当性を検討する箇所においても見られ、編者の注釈態度の一傾向と言える。

三、典拠をめぐる検証

次の場面は、蓬生巻で須磨から戻った光源氏が、久々に末摘花邸に立ち寄った箇所である。

月入り方になりて、西の妻戸の開きたるより、さはるべき渡殿だつ屋もなく、軒のつまも残りなければ、いとはなやかにさし入りたれば、あたりあたり見ゆるに、昔に変らぬ御しつらひのさまなど、忍ぶ草にやつれたる上の見るめよりはみやびやかに見ゆるを、昔物語に、たふこぼちたる人もありけるを思しあはするに、同じさまにて年ふりにけるもあはれなり。ひたぶるにものづつみしたるけはひの、さすがにあてやかなるも心にくく思されて、さる方にて忘れじと心苦しく思ひしを、年ごろさまざまのもの思ひにほれぼれしくて隔てつるほど、つらしと思はれつらむといとほしく思す。（②三五二頁）

末摘花の邸宅の荒廃ぶりは甚だしく、崩れかかったところから月の光が注しこみ室内の様子があらわになっている。忍ぶ草が生い茂っている外観に比べ、室内は昔に変わらない雰囲気を残しており、昔物語を彷彿とさせる様子である。この傍線部について、『光源氏物語抄』は以下のような注を付している。便宜上四つに分割して検討していきたい。漢文体の部分には返り点を付した。

【例4―A】

むかし物語に丁こぼちたる女もありけるを、おぼしあはするにと云事

奥顔叔子と云女男他行の跡（ママ）件男のうたがひの（疑をのかれんかために）○塔（ために）の壁をこぼちて、夜もすがらともしあかしてゐたる事也。［定家／伊行釋］

まず先行する説として、定家の注と「伊行釋」つまり『源氏釈』をあげている。その内容は顔叔子という女が、夫の留守の間、貞節を証明するために塔の壁を壊して中が見えるようにして、一晩中灯をともしたままで過ごしていたというものである。『源氏釈』では、冷泉家本（時雨亭文庫本）に同内容の注が見られる。「定家」とあるのは、おそらく「定家釈」のことで、『奥入』と「密接な関係がある」ものの別個の注釈書とされている（16）。

まずこの部分から『光源氏物語抄』の項目に引かれた本文では、「丁こぼちたる」とあるが、定家や伊行の注ではこれを「塔こぼつ」と解釈していることがわかる。『源氏物語大成』によると、河内本系では、高松宮家本・尾州家本・鳳来寺本・曼殊院蔵耕雲筆本が「丁こほちたる女も」につくり、七毫源氏・大島本が「堂こほちたる女も」とする。一方青表紙本系では「塔（塔を）こほちたる人も」とある。

これに対する「今案」の意見が以下の部分である。

【例4―B】

今案日此事毛詩ノ傳而彼文意者、顔叔子隣女来臨之時、為二其人疑一、使レ執レ燭放乎。且(旦カ)遂尽摘レ屋而継レ之。然者文理已異。豈引為レ証哉。

顔叔子説話の梗概を毛伝（漢、毛亨）によって示している。それによると、顔叔子は男で、隣の女がやってきた時、叔子は実事があったと疑われないよう女に燈燭に持たせて夜を明かし、燭が尽きてしまうと、屋根を葺いた草を抜いて灯をともし続けた、というものである。なお毛伝には以下のようにある。

昔者顔叔子独処二于室一。隣之嫠婦又独処二于室一。夜暴風雨至而室壊。婦人趨而至。顔叔子納レ之而執レ燭。放二乎旦一而蒸尽縮レ屋而継レ之。自以為辟レ嫌之不レ審矣。若其審者、宜レ若二魯人一然。（以下略）（七六七―七六八頁）（17）

これにより補足すれば、女は貧しい孀であり、叔子の家を訪れたのは、嵐で家が崩れたためであった。『源氏釈』や『奥入』の引く顔叔子説話は、別伝かもしくは誤認だろうか。ともかく「今案」注は、傍線部において、「然者文理已異。豈引為レ證哉。」と、男の貞操を守った話では、典拠として不適当と判断する。

【例４―Ｃ】

爰かつらの中納言ト云物がたりに云、あらたまのとしのむかへのためしなれば、しづのめがあさのしたひもをひきかさぬるならひなるに、きさせ給ふべき物もなし。思ひあまりにこ大夫は、あはれ少将殿のうへにも、などかとぶらひまいらせ給はざらん、とうち恨れば、姫君かくないひそとて、たゞ仏神にをはしませばたすけ給ひなん、とうちなげき給ふ。小太夫はきる物もなければ、ふるき机丁(帆歟)のかたびらをきぬにぬひてぞきたりけると云り。　此文尤相叶。今義但此物語源氏以前以後不審也。　可レ勘也。

「今案」注は、顔叔子説話に代わる典拠として『桂中納言物語』を指摘する。『桂中納言物語』は散逸物語で、その内容を確実に伝える資料としては、『光源氏物語抄』の他に『原中最秘抄』があるにすぎない。『光源氏物語抄』によりその梗概を示すと以下の通りである。正月を迎えるための衣装も用意できないほど困窮した姫君がいた。乳母子のような立場である「こ大夫」（小大輔）は、少将の訪れが途絶えていることを恨むが、姫君は神仏がきっと助けて下さるとこれをなだめる。「こ大夫」は着る物もないため、几帳の帷子を衣に仕立て直してしのいでいた。早く堀部正二氏が検討するように、確固たる後見がないこと、住居は荒廃し困窮していること、唯一頼りにしている男君の訪れも絶えてしまっている状況が末摘花と一致する（18）。「今案」注は、これが末摘花の状況に最も適っているが、「但此物語源氏以前以後不審也。」とあるように、この物語が『源氏物語』より早く成立したのか、遅れるのか不明であり、典拠として確定はできないとする。このことは、同じく『桂中納言物語』を指摘する『原中最秘抄』が、「私云、桂中納言物語も源氏以前事也。然者丁とあらむも有二其謂一歟。」（五六二頁）と断言するのにくらべても慎重である。（19）

【例４―Ｄ】

如二太平御覧一者、塔者仏菩薩奉二居住一所也。堂同レ前。然而堂者多為二人家一。堂上堂下勿論也。此事或文士云、毛詩并史記共

以為レ屋云々。注文選ニ顔子加レ堂事有レ之。可ニ勘引一云々。而未勘書者也。不審之。（二六五―二六六頁）

そして改めて「塔」「堂」の可能性が検討されている。ここでもう一度振り返ってまとめてみたい。「塔」「堂」「丁」のうち、いずれの本文を採用するかは、どの故事に従って読むかということと関連して、今日も決着を見ていない（２０）。『光源氏物語抄』の項目には「丁」とあって、先行する『源氏釈』や定家の注釈書とは異なっていた。しかし【例４―Ｂ】で『光源氏物語抄』が顔叔子の説話をしりぞけた理由は、それが「塔」につくる本文に基づいた指摘だったからではなく、男の貞操の話と困窮にたえながら光源氏を待ち続ける末摘花とでは、「文理」すなわち話の筋が全く異なるからであった。【例４―Ｄ】の後半に「此事或文士云、毛詩并史記共以為レ屋云々。」とあり、『河海抄』も「此事毛詩史記以下共以為レ屋歟。堂といふ事如何。」（三三九頁）と指摘するように（２１）、そもそも毛伝には、「屋」あるいは「室」はあっても、「丁」「塔」「堂」いずれの表現も含まれていない。つまり【例４―Ｂ】では本文の異同についてはとりあえず据え置かれているのではないか。そして【例４―Ｄ】に至って、今度は本文異同が注目され、塔は仏像を安置するところであるが、堂については人家のこともいうとして完全には否定されていない。

「今案」注は、先行する注記の妥当性を慎重に検討していた。まず故事の内容面から検討を加え、次に視点を変えて本文異同からも可能性を探るという多角的な検証がなされていた。とくに『桂中納言物語』を保留とした慎重な判断は、【例３】のＣ部分で親行の意見を受け「能々談すべきことなり」と思い直していたことに類似する。【例３】Ｃ部分については、栗山氏も「今案」注の態度を「あくまで冷静」と評されている（２２）。

こうした注釈態度は、河内方の源氏研究と相通じるとされる諸注を網羅的に配列することとも相関関係にあろう。岩坪健氏は、『光源氏物語抄』が他の古注釈と異なり、出典を明記して自説と他説を明確に分けていることを指摘した上で、「自他を厳密に区分するのは考証学的態度の芽生えといえよう。」という高津孝氏の私信を紹介している（２３）。また堤康夫氏は、「勘文」という注釈書が若菜上巻くらいで途絶えると、その続きを別の注釈書「勘物」で継いでいることに対して、「編者は「勘文」の途絶を断じて放置してはおけない性向を有していたのではあるまいか。そこには諸注・諸説の集成への飽くなき意図が感ぜられる」と評価する。そしてここに、後の河内方の詳細な諸注・諸説集成の萌芽がすでに見られるとして、編者像についても、「河内方の源氏学への展開・発展の契機を有する人物という側面からも、再検討の必要が生じるのかもしれない」と見通している（２４）。

してみると【例１】【例２】についても、この枠組みの中で捉えられないだろうか。再度【例１】【例２】の「今案」注の問い直しに着目してみたい。「以レ何両国之中、知ニ肥前国一畢。」（【例１】）、「両国之中、以レ何知ニ肥後国一乎」（【例２】）とあるように、「今案」注が教隆に繰り返し要求しているのは「肥前」「肥後」と判断できる根拠であった。他人の説に対して明確な根拠を求める姿勢は、【例３】のように他人の説に対して理路整然と反論することと表裏一体である。また一見わかりきったところまで突き詰めていこうとするのは、【例４】のように他説を徹底的に検証

していくことや、【例3】C部分や【例4―C】にみえる慎重さと相通じているように思う。なお、【例1】【例2】では、「今案」注に対する教隆の回答はなく、編者も何も補足しないが、前後には大夫監、鏡の神についていずれも、

【例5】

だゆふのげんとて、ひごのくにゝぞうひろくかしこに（筆者注―挿入符あり）つけてはおぼえありと云事

肥後国大夫監也。　府官帥大貳之被官也。教隆　大宰府ヲ官人二大監小監々代ト云つかさあり。其中に五位なるは大夫監ト云也。　勘文　（二九七頁）

【例6】※返り点は私に付した。

まつらなるかゞみのかみと云事

大宰少貳（鏡宮縁紀）橘（藤原歟）廣継被二追討一之後、鎮二其霊一為二鏡大明神一。［教隆］（二九八頁）

といった教隆の説が掲載されており、『光源氏物語抄』の注記全体としては、実証性の保たれた注釈になっている。

では次の場合はどうであろうか。【例7】は、須磨巻で須磨に退去している光源氏を見舞いに訪れた宰相中将（頭中将）が帰京する場面である。

【例7】

ゆゝしくおぼさるとも風にあたりてはいばえぬべければと云事

胡馬嘶　比（北カ）風［伊行釈］今案曰、此文言嘶二北風一之馬者有レ超二―過于余馬一之由歟。文之前後猶（可）〇二勘文一也。〽或嘶二北風一者恋二旧里一也。是我類也。仍奉レ里歟。〽式（或カ）胡国馬。是駿也。仍奉由歟。可レ案也。肥馬（文集）当レ風嘶。廻頭忌（忘カ）二相識一。古道上二沙堤一。昔年洛陽徒。貧賤相提携。今日長安道對面。〻二雲泥一。近日多如レ此。非二君独惨悽一。死生不レ変者、唯聞任与レ黎。　西円（二五一頁）

※　〻…「β」に「𦍒」で、「至」の部分が「用」。「隔」か。

光源氏は「ゆゆしう思されぬべけれど、風に当たりては嘶えぬべければなむ」（②二一五頁）と憚りながら、餞別にと黒駒を贈呈する。この箇所をめぐって『光源氏物語抄』は、まず『伊行釈』つまり『源氏釈』をあげ、「今案曰」というかたちで、その妥当性を検討する。

前田家本『源氏釈』に「胡馬嘶二北風一（ニ）　文選」（一五〇頁）とあるように（25）、この詩は『文選』巻第二十九「古詩十九首」の第一首目である。

行行重行行　行き行きて重ねて行き行く
與君生別離　君と生き別離（わかれ）して
相去万余里　相去ること万余里
各在天一涯　各天の一涯に在り
道路阻且長　道路は阻しくして且つ長し
会面安可知　会面安んぞ知るべけん
胡馬依北風　胡馬は北風に依り
越鳥巣南枝　越鳥は南枝に巣ふ
相去日已遠　相去る日（ひび）に已に遠く
衣帯日已緩　衣帯は日（ひび）に已に緩む
浮雲蔽白日　浮雲白日を蔽ひて

遊子不顧反　遊子顧反せず
思君令人老　君を思へば人をして老いしむ
歳月忽已晩　歳月忽ちにして已に晩れぬ
棄捐勿復道　棄捐てて復た道ふこと勿けん
努力加餐飯　努力して餐飯を加へよ

（二二二―二二三頁）（２６）

この詩の解釈については、「残された妻が遠行の夫を思う」とするもの、八句目までを「遠行の夫の立場から」、それ以降を「とどまっている妻の立場」から詠んだと見るもの、「遠行する夫の立場から歌ったもの」、「主君から放逐された臣が、遠行の地で歌ったもの」など諸説ある（２７）。その七、八句目に「胡馬依二北風一、越鳥巣二南枝一」とある。李善注に『韓詩外伝』を引き説明するように、胡は北方に位置するため、胡馬は北風が吹くと懐かしがり、南方に住む越鳥は南の枝を求めて巣を作り、いつまでも故郷を忘れないことをいう（２８）。「今案曰」以下では、『源氏釈』が指摘するねらいをさまざまに検討しているが、その一節に「或嘶二北風一者恋二旧里一也。是我類也。」とある。つまり胡馬が郷里を懐かしんで北風に向かって嘶くということをふまえているのであれば、光源氏の置かれている状況と類似するという。ここについては、光源氏自身の望郷の思いを馬に託したと解するか、きっと馬も京の風を受けて嘶き勇んで帰るにちがいない、と中将の帰路を寿いだ言葉ととるか解釈が分かれているが、光源氏の発話であるから、「今案曰」の言う「我類」は光源氏のことを指していよう。よって光源氏の望郷の思いが重ねられると解釈していると思われる。

【例７】の場合、末尾に「西円」とあり、書写の通りに受け取るならば、「今案曰」もまた西円注の一部であり、「今案曰」に続く見解は西円のものということになる。しかし、一連の『源氏釈』の説に対する検討は、「式（或カ）胡国馬是駿也。仍奉由歟。可レ案也」で完結しており、「文集」と傍注が付されている「肥馬当レ風嘶。廻レ頭忌（忘カ）二相識一」（文集）。古道上二沙堤一以下とは内容的に断絶がある。これは『白氏文集』巻二「傷友」の一部であり、貧しかった時親好のあった友人が、出世を遂げると道で出会ってももはや素知らぬふりで肥馬に跨り通り過ぎて行った、という友情の軽薄さを詠んだものである。また物語本文と『源氏釈』の指摘とでは、「馬」が「風」に当たって「嘶ゆ」という点が合致しているにもかかわらず、先行説を鵜呑みにすることなく詳細に検証するさまは、【例４】で見た編者の注釈態度とも通うようにも思われる。【例７】については複数の可能性があることを指摘するに留め、詳しい検討は今後の課題としたい。

四、「心」の一致

【例４】で見たように、「今案」注は典拠を検討する際、実証的な手続を踏み、慎重な検証を行っていた。その一方で表現として完全に一致していなくても、内容上の響き合いがあれば、典拠と認め積極的に読み込んでいく一面もある。

次の箇所は【例７】と同じく、須磨へ光源氏を訪れていた宰相中将（頭中将）が、帰京する場面である。傍線部は、供人たちも別れを惜しむ中、

帰京する宰相中将に対して光源氏の詠んだ一首である。

さ言ひながらも、ものの聞こえをつつみて、急ぎ帰りたまふ、いとなかなかなり。（中略）おのがじしはつかなる別れを惜しむべかめり。朝ぼらけの空に、雁連れて渡る。主の君、

ふる里をいづれの春か行きて見んうらやましきは帰るかりがね　（②二一四―二一五頁）

歌には、北へと飛び去る雁を見上げ、自分はいつになったら帰郷することができるだろうか、という雁たちそして今都へ帰っていく宰相中将に対する羨望がこめられている。この箇所について『光源氏物語抄』は、以下のように指摘する。

【例８】

古郷をいづれの春か行て見むうらやましきは帰鴈金

菅家後集　聞鴈鳴

我為遷客ハ汝来賓、共是蕭々旅漂レ身。欹レ枕思二一量帰去日一、我歳知何○汝明春。　今案　（二五一頁）

「今案」注が指摘するのは、傍注にもあるように『菅家後集』「聞二旅雁一七言」である。

我は遷客たり汝は来賓
共に是れ蕭蕭として旅に漂はさるる身なり
枕を敧てて帰り去らむ日を思ひ量らふに
我は何れの歳とか知らむ汝は明春　（四八三頁）（２９）

大宰権帥に左遷された道真が、同じ旅住まいでも、雁は春が来れば北へ帰って行くが、自分はいつ帰京できるのかわからない、と雁に対する羨望と自己の悲運を嘆いた詩である。この道真詩は、『岷江入楚』まで省みられていないようであるが、『岷江入楚』は前掲の道真詩を引き以下のように述べている。

是は菅家来鴈を聞て作り給へる詩なり。只今の帰鴈なれど、心はかよふにや。来鴈の明年帰べきさへうらやましければ、まして只今帰る鴈を聞てかくよめるはことはりなるべし。箋聞ニこれをひけり。（二、九五頁）（３０）

つまり、季節・情景の齟齬はあるけれども、道真のように、来年の春になれば帰ることができる雁でさえうらやましいのであるから、今まさに帰って行く雁を目の当たりにする光源氏の感慨はひとしおであろうという。確かに須磨巻には「帰るかりがね」とあり、少し前にも「年かへりて日長くつれづれなるに、植ゑし若木の桜ほのかに咲きそめて、空のけしきうららかなるに」（②二一二頁）とあるように季節は春であり、北へ帰って行く雁である。それに対して道真詩は「聞二旅雁一」と題し、結句に「我は何れの歳とか知らむ汝は明春」とあるから、こちらは秋に飛来した雁であった。しかし、春には故里へと帰ることが保障されている雁との対比のうちに、帰京できる見込みのない我が身を見つめる点は合致しており、これを『岷江入楚』は「心はかよふにや」と、趣向のレベルでの一致と評価している。

次の【例９】は、松風巻の明石の君が、母や姫君とともに京を目指して明石の浦を出立する場面である。

辰の刻に舟出したまふ。昔人もあはれと言ひける浦の朝霧隔たりゆくままにいともの悲しくて、入道は、心澄みはつまじくあくがれなながめゐたり。　（②四〇六頁）

娘たちを見送る入道は、これが永遠の別れになると思うと、悲しみをこらえることができない。『光源氏物語抄』「今案」注は、本文の傍線部について以下の証歌を指摘する。

【例9】

むかしの人もあはれといひけるうらの朝霧へだゝりゆくまゝにト云事

ほのぐゝと明石のうらの朝霧に嶋かくれ行船をこ（しカ）そ思ふ今案　（二七四頁）

「今案」注が指摘するのは、『古今和歌集』巻第九、羇旅歌、四〇九番歌で、読み人知らずとするが、左注では柿本人麿歌とする。ほのぼのと夜が明ける頃、あたりは朝霧にかすんでいて、その中を島伝いに舟がこぎ出していく。大海原へとこぎ出していく小舟の頼りなさに、旅人の心細さが重ねられている。当該歌は、『和漢朗詠集』に採録され、公任、俊成など平安中期以降の歌学において高く評価されている。

「今案」注の指摘は、『紫明抄』以下の注釈書にも引き継がれていき、「此歌に哀といふ詞はなけれども其心あるべき歟（後略）」（『河海抄』三五一頁）、「島がくれ行舟をしぞ思ふといへることはの中に、あはれなる心はをのづからこもり侍るなり。都へのぼる舟の島がくれ行を、入道のながめゐて、物がなしく思ふ。このほか別の子細あるべからず。」（『花鳥餘情』一二七頁）（31）、「（前略）此歌にあはれといふ詞なし。されど一首の内にあはれはそなはりたる也。」（『細流抄』一六一頁）（32）などと評されている。すなわち、明石の浦、こぎ出していく舟、朝霧と表現上の一致度も高いが、『古今和歌集』の四〇九番歌には、肝心の「昔人もあはれと言ひける」に該当する部分がない。しかし歌の趣向が「あはれ」そのものであるから、引歌として認定できるということである。もちろん、こうした後代の注釈書の評価と『光源氏物語抄』編者の意図が同じであるとは限らない。しかし、同じようなパターンが複数あることからすると、「今案」注のねらいも同様のところにあったのではないか。

五、おわりに

本稿では『光源氏物語抄』編者の注釈態度について検討した。まず一つの特徴として、極めて慎重で実証的な面があり、その一方で、表現上の重なり合いが不完全であっても、その「心」が響き合えば典拠として指摘して、読み込んでいく積極性も持ち合わせていた。こうした多様な読みを見せる編者はやはり初学者とは言い難く、この編者を単なる編集者の位置に押しとどめておくのはあまりにも惜しい。なお、本論の目的はあくまで「今案」注の検討を通して編者の注釈態度の一端を明らかにすることであったが、昨今盛んな編者論の一助となればなお幸いである。

注

（1）堤康夫「『異本紫明抄』編者に関する一考察―清原教隆との関係を中心にして―」『源氏物語注釈史の基礎的研究』（おうふう、一九九四年二月、一九八七年一月初出）。織田百合子「北条実時と

『異本紫明抄』『源氏物語と鎌倉―「河内本源氏物語」に生きた人々―』（銀の鈴社、二〇一一年一二月）などにより継承されている。

（2）栗山元子『『光源氏物語抄』編者考―金沢実時説の検討を中心に―』陣野英則他編『平安文学の古注釈と受容』第二集（武蔵野書院、二〇〇九年九月）

（3）李興淑『『光源氏物語抄』編者をめぐって』『文学研究論集』三六（二〇一二年二月）

（4）前掲注（1）堤氏論文。筆者が数えた結果も、巻により一、二箇所の増減はあるもののほぼ同数となった。しかし「今案」としていなくても編者の注と思われるものがあるなどさらなる検討を要する。

（5）前掲注（1）堤氏論文。

（6）前掲注（2）栗山氏論文。栗山氏は、堤氏が「今案」の問答の相手が清原教隆一人であるとされたことにも反論している。

（7）『光源氏物語抄』は、中野幸一・栗山元子編『源氏物語古註釈叢刊』第一巻（武蔵野書院、二〇〇九年九月　ノートルダム清心女子大学図書館黒川文庫蔵本）による。また影印本（『光源氏物語抄　正宗敦夫収集善本叢書　第Ⅰ期』第一巻、武蔵野書院、二〇一〇年二月）をも参照した。濁点や返り点を付したり、字体を改めたりした箇所がある。割注は［　］に入れ、改行は／で示した。

（8）『源氏物語』の本文は、『新編日本古典文学全集』（小学館）による。傍線は私に付した。

（9）新川雅朋「大夫監―その人物像について―」平田喜信編『源氏物語の鑑賞と基礎知識　№12　玉鬘』（至文堂、二〇〇〇年一〇月）

（10）前掲注（1）堤氏論文。

（11）前掲注（2）栗山氏論文。

（12）古注釈では「談義」「談議」「談儀」などさまざまに表記されている。ここでは、地の文においては「談義」とする。詳しくは第四章注（3）を参照されたい。

（13）稲賀敬二「源氏釈から紫明抄へ」『源氏物語の研究―成立と伝流―』（笠間書院、一九六七年九月）の注解を参照した。

（14）前掲注（13）稲賀氏論文。

（15）前掲注（13）稲賀氏論文。

（16）寺本直彦『『定家（卿）釈』『定家（卿）説』『難義』『源氏物語論考　古注釈・受容』（風間書房、一九八九年一二月）

（17）毛伝の本文は『十三経注疏　毛詩正義』（北京大学出版社）による。返り点を私に付し、通行の字体に改めた。

（18）堀部正二「桂中納言物語と末摘花」『中古日本文学の研究』（教育図書株式会社、一九四三年一月）、三角洋一「蓬生巻の短篇的手法（二）」（『源氏物語と天台浄土教』（若草書房、一九九六年一〇月）も、『堤中納言物語』説を支持する。

（19）『原中最秘抄』の本文は、『源氏物語大成』巻七（中央公論社）による。濁点、句読点は私に付した。

（２０）前掲注（１８）の他、まとまった論考としては以下のものがある。島津久基「桂中納言物語」（『国文学の新考察』至文堂、一九四一年九月）、小木喬「桂の中納言」（『散逸物語の研究　平安・鎌倉時代編』笠間書院、一九七三年二月）、藤井日出子「蓬生巻における末摘花の形象―「昔物語」の古注をめぐって―」（『解釈学』四、一九九〇年一一月）。「丁」説の問題点としては、『桂中納言物語』の成立時期とともに、「丁」を「こぼつ」という言い方が成立するか不安が残る。この問題については早くから、「丁の帷をこぼつとあらむも聊不審なり」（『原中最秘抄』）と疑問視されている。

（２１）『河海抄』のこの箇所の注については、吉森佳奈子「『河海抄』の「毛詩」」（『『河海抄』の『源氏物語』』和泉書院、二〇〇三年一〇月）に分析がある。なお、『河海抄』の引用は玉上琢彌編『紫明抄・河海抄』（角川書店一九九一年二月）により、句読点、濁点などは私に付した。

（２２）栗山元子「鎌倉時代の『源氏物語』享受について―『光源氏物語抄』における西円の源氏学―」中野幸一編『平安文学の交響―享受・摂取・翻訳―』（勉誠出版、二〇一二年五月）

（２３）岩坪健「『異本紫明抄』の編集方法―依拠本文と校異―」『源氏物語古注釈の研究』（和泉書院、一九九九年二月）

（２４）堤康夫「『源氏物語』注釈書における文献摂取の一位相―『異本紫明抄』所引「勘文」・「勘物」をめぐって―」『源氏物語注釈史の基礎的研究』（おうふう、一九九四年二月）

（２５）『源氏釈』の本文は渋谷栄一編『源氏物語古注集成』第一六巻（おうふう、二〇〇〇年一〇月）による。なお、『光源氏物語抄』所引の『源氏釈』の性格については、堤康夫「『紫明抄』の方法―『異本紫明抄』から『紫明抄』へ―」（『源氏物語注釈史の基礎的研究』おうふう、一九九四年二月）に詳しい。

（２６）『文選』の本文は、『全釈漢文大系』（集英社）による。表記を改めた箇所がある。傍線は私に付した。

（２７）花房英樹『全釈漢文大系　第二十九巻　文選（詩騒編）四』（集英社、一九七四年一二月）解説。

（２８）「韓詩外傳曰、詩曰、代馬依二北風一、飛鳥棲二故巣一。皆不レ忘レ本之謂也。」（李善注）。ちなみに『文選』の本文では、「胡馬依二北風一」とあるのに対して、『伊行釈』では「胡馬嘶二北風一」につくる。出典には「文選」とあったが、これは『玉台新詠』所収のものに依拠したのであろうか。

（２９）『菅家後集』の引用は『日本古典文学大系』（岩波書店）による。

（３０）『岷江入楚』の引用は『源氏物語古注集成』（桜楓社）による。句読点や濁点、傍線は私に付した。

（３１）『花鳥餘情』の引用は『源氏物語古注集成』（桜楓社）による。句読点や濁点は私に付した。

（３２）『細流抄』の引用は『源氏物語古注集成』（桜楓社）による。句読点や濁点は私に付した。また、通行の字体に改めた箇所がある。

第二章　素寂注における周公旦故事の受容
――『尚書』引用にいたるまで

一、はじめに

本章と続く第三章では、『光源氏物語抄』における経書引用の問題について検討する。第三章で、経書引用の位置付けを論じる前作業として、本章では、中でも重要な位置を占める素寂注の『尚書』引用について、先行研究を踏まえつつ整理し、さらに若干の補足を試みたい。『源氏物語』における『尚書』の引用は、周公旦の故事を中心に、光源氏の政治家としてあり方や須磨流離に関わる典拠として、先行研究においても繰り返し論じられてきた（1）。注釈史の問題としては、日向一雅氏が、『河海抄』を中心にその意義を検討され、以下のように結論づけている。

『尚書』注の儒教的言説は物語の「君臣の交、仁義の道」という王権の主題を明らかにする上で重要な意味をもったと言ってよいであろう。『尚書』は『白氏文集』の引用とは異なる次元で物語を内部から支える働きをしていたと考える（2）。

日向氏の調査を見ても明らかなように、『尚書』引用を一気に拡大させたのは、『光源氏物語抄』の素寂注である。その要因としては、『奥入』など前代の『源氏物語』注釈からの継承と、当時の貴族や武家が『尚書』を学んでいたという同時代的な潮流が指摘されている（3）。これらに加え、父源光行の『蒙求和歌』との共通要素や、河内方宗家の学問との関係、素寂自身の漢籍受容の手法的特徴も関わっていることを提示していきたい。

二、『光源氏物語抄』素寂注の周公旦故事

『光源氏物語抄』の素寂注は、光源氏の須磨流離にたびたび周公旦故事を引用しているが、それらの根幹になるのが、賢木巻で光源氏が自分自身を周公旦になぞらえた場面である。

（光源氏）わが御心地にもいたう思しおごりて、「文王の子武王の弟」とうち誦じたまへる、御名のりさえぞげにめでたき。成王の何とかのたまはむとすらむ。そればかりやまた心もとなからむ。

（②一四三頁）（4）

「文王の子武王の弟」とは、『史記』魯周公世家の一節を踏まえたものである。書き下して引用する。

是に於いて卒に成王を相く。而して其の子伯禽をして代りて封に魯に就かしむ。周公、伯禽を戒めて曰く、我は文王の子、武王の弟にして、成王の叔父なり。我、天下に於て、亦賤しからず。然れども我は一沐に三たび髪を捉り、一飯に三たび哺を吐き、起ちて士を待つ。猶ほ天下の賢人を失はんことを恐る。子、魯に之かば、慎みて国を以て人に驕ること無かれ、と。（一一八頁）（5）

周公が子の伯禽を魯に赴任させる際に、諫めて聞かせた場面である。周公旦は、自分は文王の子で、武王の弟、成王の叔父という高貴な身である。しかし髪を洗っている時も、食事をとっている時も、賢人が尋ねて来たら、自分のことを中断し面会した。それほど賢人が離れていかない

よう配慮しているのであり、決して驕りたかぶってはいけない。この台詞を光源氏が言うとなると、光源氏には、父に桐壺帝、兄には朱雀帝がいる。光源氏は、自分自身を周公旦になぞらえているのであり、自ら理想的な為政者を自負しているということになる（6）。

この賢木巻の当該箇所について、『光源氏物語抄』の素寂は以下のように注を付している。便宜上三つにわけて引用する。

①周公旦者、文王之子、武王之弟。自知二其貴一。忠仁公者、皇帝之祖、皇后之父。世推二其仁一。貞信公 弟（第カ） 三表。江相公。

②於レ是卒相二成王一。而使二其子伯禽一、代就二封於魯一。或（戒カ） 伯禽曰、我文王之子、武王之弟、成王之叔父也。我於二天下一、亦不レ賤矣。然我一沐三捉レ髪、一飯三起、以待レ士。於（猶カ） 恐レ矣（失カ） 二天下之賢人一。子之レ魯、慎無二以レ国驕一レ人。［史記魯世家／奥素］

③云心は六條院［于時／大将］自 談（讃カ） の詞に周公旦文王之子、武王之弟との給へば、我は桐壺帝の子、朱雀院の弟也とまではさもときこゆ。成王のをぢとはの給にくき 子（事カ） 也。冷泉院には父子の御事なれば、こゝこそわづらはしけれとあざむきたるおもしろくたくみなる詞にぞあらむ。（二四一―二四二頁）（7）

①は、『本朝文粋』巻四所収「貞信公天皇元服後摂政を辞する表」（大江朝綱作）、②は前掲の『史記』魯周公世家、③は、それに対する素寂の評である。

先行研究（8）で、すでに明らかにされているごとく、①の『本朝文粋』貞信公辞表は、『源氏釈』の時点から典拠として指摘されている。そして②の『史記』魯周公世家が注釈書に登場するのは『奥入』からである。こちらも便宜上①②に分けて引用する（9）。

①史記魯世家

於レ是卒相二成王一。而使二其子伯禽一、代就二封於魯一。戒二伯禽一曰、我文王之子、武王之弟、成王之叔父也。於二天下一、亦不レ賤矣。然我一沐三捉レ髪、飯三起、以待レ士。猶恐レ失二天下之賢人一。子之レ魯、慎無二以レ国驕一レ人。

②周公旦者、文王之子、武王之弟。自知二其貴一。忠仁公者、皇帝之祖、皇后之父。世推二其仁一。

貞信公第三表江相公

（一〇三頁）

点線部は、『源氏釈』では引用されなかった部分である。儒教的な為政者像と関わる部分で、尊貴な身分であるとしても驕り高ぶらず、賢人を重用するよう、周公旦が子の伯禽に説いて聞かせている。ここまで引用されることにより、いよいよ光源氏が「自分を儒教的な理想的為政者」であることを顕示していると言える（10）。

三、『蒙求和歌』ならびに河内方注釈との関係

当該箇所の『原中最秘抄』の注を引用しておきたい。

・『原中最秘抄』（完本系）

①史記曰、我文王子、武王之弟、成王叔父也。

②又云周公旦者、文王之子、武王之弟。自知二其貴一。忠仁公は皇帝之后之父、世推二其仁一。忠仁公者［良房］号二白河大臣一。清和天皇外

祖父、皇太后宮［明子］之父。明子者文徳天皇之后也。

（系図省略）　（五五七頁）（１１）

・『原中最秘抄』（略本系）

①史記魯世家、周公戒［伯禽］辞曰、我文王子、武王之弟、成王叔父也云々。

（系図省略）

②文王をば桐壺帝に比す。武王をば朱雀院に比す。成王をば冷泉院に比す。源氏みづから周公に比す。しかれば冷泉院には叔父の分なれども実は父なれば、なにとかのたまはむといふ。（五二六頁）（１２）

『原中最秘抄』では、完本系と略本系（１３）いずれも『史記』魯周公世家を引くが、直接「「文王の子武王の弟」とうち誦じたまへる」（賢木巻）に該当する部分のみだけが引用されており、後半部分の賢人を歓待し、驕ることのないようにという儒教的な為政者像の理想に触れた部分については言及されていない。しかし『原中最秘抄』が儒教的な為政者像について、無関心であった訳ではなく、『源氏物語』全体を評したところでは、以下のようにある。

私云、此物語は内外典を始として君臣父子のたゝずまひ、夫婦兄弟のまじはり、煙霞雪月のあそび、詩歌管絃の道までもかきのこせる事なきか。

（『原中最秘抄』・完本系）（五四九頁）

さらには「是をまなび（ママ）は仁義徳行の道にも達しぬべし」（五四九頁）ともある。「私云」について、日向氏は、『原中最秘抄』のうち、行阿を指す場合は「行阿云」とあることから、「私云」は親行のことであると判断し、当該箇所の説について、「あるいは光行まで遡らせることも可能かもしれない」とも言う（１４）。この「光行まで遡らせることも可能かもしれない」という点については、第Ⅱ部第一章で述べた『蒙求和歌』における人物造型の特徴からも補強することができる。『蒙求和歌』では「なさけ」が「仁」の意で用いられていることがあり、光行は、この「なさけ」が強調されるように描写を変更し、臣下をかばい、賢人を重んじる為政者を描いていた。とくに巻五恋部「無塩如漆」では、もとの古注『蒙求』のプロットを改変し、「なさけ」により醜女の鍾離春を后に向かえた宣王を描いていた。さらに言えば、これは『源氏物語』の末摘花に対する光源氏の配慮を彷彿とさせるものがあった。

また、光行が『蒙求和歌』を著すにあたって、「なさけ」や「仁」のある為政者を重要視していたことは、その配列からもうかがえる。『蒙求和歌』の巻第一春部の巻頭は、漢の高祖が即位するまでとその治世を描いた「漢祖龍顔」から始まる。長文の章段であるため、全体の構成を示すと以下の通りである。

Ⅰ若き日の高祖

①高祖の家系。②高祖の誕生。③高祖の容貌。④呂公高祖の帝王相を見抜く。⑤呂公の娘（後の呂后）との結婚。⑥秦始皇帝高祖の「天子ノ気」に憤る。⑦高祖隠居する。⑧妻（呂后）、紫雲をしるべに高祖を訪ねる。

Ⅱ秦朝の混乱、高祖・項羽の覇権争い。

⑨二世の即位。⑩趙高の専政。⑪趙高、子嬰に討たれる。⑫楚懐王のもとで、高祖と項羽挙兵。⑬項羽の違反。⑭項羽懐王を殺害する。⑮高祖、項羽追討を決意。⑯高祖の劣勢、天意高祖に味方する。

Ⅲ高祖の治世

⑰高祖の即位。⑱父大公を太上皇帝となす。⑲高祖の仁政。⑳四季の調和。㉑高祖の子孫。

Ⅳ和歌

仁政に関わるのはⅢの部分である。一話を総括した⑲～㉑に該当する部分を引用する。

凡ソ政ヲオコナフコトニ仁徳ヲホドコシ給ヘリ。賢者ヲススメ讒ヲシリゾケ、能ヲホメ忠ヲ賞シ給ヘリ。カクテ四海タヒラギ万民タノシベリ。春ハ和暖ノ気トトノホリ、秋ハ清涼ノ景ソナハレリ。スベテ高祖ヨリ献帝ニイタルマデ、子孫ヲカサヌル事廿七代四百十八年也（１５）。

これに対して、古注『蒙求』では以下のようにある。

漢書、高祖姓は劉、名は邦、字は季。為人高準にして龍顔、鬚髯を美しくして左の股に七十二の黒子有り。父は太公と曰ひ、母は媼と曰ふ。［　　］公往視其妻見蛟［　　］高祖後帝位（国立故宮博物院本、二二三頁）（１６）。

現存する古注本（国立故宮博物院本・書陵部本）では、後半部分に欠損があり大部分が読み取れない。そこで準古注本の中で、もっとも古注本の内容に近い国会図書館蔵大永五年書写本を参考として次に引用する。

漢の高祖諱は邦、姓は劉氏、為人隆準にして竜顔あり。鬚髯美し。仁にして人を愛し、意豁如たり。左の股に七十二の黒子有り。父を大公と曰ひ、母を媼と曰ふ。嘗て大沢の坡に息ふ。電雷眈く。大公往きて其の妻を見るに、蛟竜を其の上に見る。因って娠めること有り。遂に高祖を産めり。后（のち）に帝位に登るなり。（一七頁）

母が大沢の辺で休んでいるとき、夢に龍神と逢って孕んだ子供が後の高祖であったという出生秘話が明かされている。これは『蒙求和歌』の構成で言えばⅠ①～③にあたる。『蒙求和歌』はかなりの部分を増補しており、これらは④以降⑲までは概ね『史記』の秦始皇本紀第六、項羽本紀第七、高祖本紀第八に則した記述になっている。古注『蒙求』から受け継いだⅠ①②③までの部分も、そもそもは古注本が出典とする『漢書』や、『史記』にも述べられており、『蒙求和歌』では原典に回帰するような構成になっている。

古注『蒙求』において「漢祖龍顔」は、「晋宣狼顧」（晋の宣皇帝が振り向いた時、狼のごとく頭は後ろに向くが体は前を向いたままであったという故事）とペアになっていることから、『蒙求』の本来の主眼は皇帝の異常な身体的特徴を語るところにあったことがうかがえる。それに対して、『蒙求和歌』はかなり長大化させて、高祖の即位までの経緯、高祖により徳政が実現されたこと、さらにそれに対する称賛へと一話の主題を変化させている。それを『蒙求和歌』の巻頭に置いているのであり、これは、光行が『蒙求和歌』の基調として為政者の徳を重要視していたことの表れではないだろうか（１７）。

四、『蒙求和歌』「周公捉髪」

『蒙求和歌』にも周公旦の故事は第十四　雑部「周公捉髪」として見えるが、特段『源氏物語』と重ね合わせている様子はうかがえない。

周公ハ、周成王ノ執政ナリ。周公ノ子伯禽ニ、魯国ヲタマハリケリ。伯禽、国ヘオモムクトキ、周公、イサメテ云ハク、「国ニシテオゴルコトナカレ。ワレハ、文王ノ子、武王ノオトト、成王ノ叔父也。天下ニオキテシカハアレドモ、ヒトタビカシラアラフトキ、ミタビカミヲトリ、ヒトタビモノヲクフトキ、ミタビハキテ人ニアフナリ。天下ノ士ヲウシナハムコトヲオソルナリ」トイヒケリ。

コトシゲシシバシト思フ事ゾナキワレタヅネクル人ハカハレド

傍線を付したように、こちらでは儒教的な為政者像に関わる部分まで、記述されている。和歌も、入れ替わり立ち替わり人がやってきても、その人を待たせたりすることなく面会したという、まさに一話のうち傍線部を詠んだものである。ちなみに和歌の「コトシゲシシバシ」は、『後撰和歌集』（巻第一五、雑一、一〇八〇）の次の歌を踏まえたものであろう（18）。

まだ后になりたまはざりける時、かたはらの女御たちそねみたまふ気色なりける時、みかどの御ざうしにしのびてたちよりたまへりけるに、御たいめんはなくて、たてまつれたまひける

嵯峨后

事しげししばしはたてれよひのまにおけらんつゆはいでてはらはん

（19）

このように、『蒙求和歌』の当該箇所については、光源氏を念頭においたような記述にはなっておらず、あくまで周公旦のエピソードとして語られている（20）。しかも、『蒙求和歌』の「周公捉髪」は、片仮名本にのみある章段で、平仮名本には存在しない。両系統の前後関係については、いまだ決着のつかないところであるが、どちらかと言えば片仮名本の方が先行するのではないかと言われている（21）。もし両系統の差異が、光行による編集だとすると、片仮名本の段階では「周公捉髪」の章段が存在したものの、平仮名本として再編集する段階で削除されたことになる。してみると、『蒙求和歌』において、当該章段はそれほど重要視されていなかったと考えることもできる。

このことは、前掲の『原中最秘抄』の姿勢とも通底するのではないだろうか。『原中最秘抄』も『史記』魯周公世家の記述のうち、人物関係の重なりに関わる部分しか引用しておらず、儒教的な為政者の理想について述べている部分は捨象されていた。つまり、注釈書全体の方向性としては、『源氏物語』には儒教的な為政者の理想が書かれているとしながらも、賢木巻の周公旦の注についてはそこまで立ち入ることはせず、あくまで賢木巻の当該箇所で問題になっている人物関係のみをクローズアップしている。『蒙求和歌』「周公捉髪」においても、後半部分の儒教的為政者の理想についても述べられているが、周公旦と光源氏を同一視することは行われていない。

それに対して、素寂は、後述するように、賢木巻の当該注を起点に光源氏を周公旦へとどんどん近づけていく。これは、父光行が『蒙求和歌』で「仁」の訳語として「なさけ」を用い、慈悲深い為政者を作り出した

り、仁徳のある為政者を重視したりしたことと通底した行為であると言える。また、『源氏物語』に儒教的な理想性を見いだすこと自体は河内方宗家の学問でも重要視されていた。しかし、賢木巻の当該箇所の周公旦故事の引用にそれを見いだすことについては、『原中最秘抄』では行われておらず、むしろ『奥入』の流れを継承したことになる。同じ河内方でも『原中最秘抄』にくらべ素寂が注釈を自由に発展させることができたのは、彼が光行・親行という学問系統をはずれた傍流であったことが要因のひとつとして考えられる（２２）。

五、周公旦故事の『尚書』引用への波及

すでに先行研究で指摘されているごとく、周公旦故事の引用が、『尚書』引用へと波及するのは、『光源氏物語抄』素寂注からである（２３）。まず、先行研究で指摘されている部分について整理してみたい。

A．にはかに風吹き出でて、空もかきくれぬ。御祓もしはてず、立ち騒ぎたり。肱笠雨とか降りきて、いとあわたたしければ、みな帰りたまはんとするに、　（『源氏物語』須磨巻、②二一七頁～）

【『光源氏物語抄』須磨巻・当該箇所素寂注】（二五二頁）

東二年秋大熟未穫、天大電雷以風。禾（盡）偃、大木斯抜。郡（邦カ）人大恐。

尚書　素寂

（東二年秋大に熟し未だ穫らず、天大いに電雷し以て風く。禾盡く偃し、大木斯く抜く。邦人大いに恐る。）

B．なほ雨風やまず、雷鳴り静まらで日ごろなりぬ。　（『源氏物語』明石巻、②二二三頁）

【『光源氏物語抄』明石巻・当該箇所素寂注】（二五二頁）

后蒙風若　尚書文　素寂

A・Bにともに須磨退居中の光源氏が暴風に見舞われる場面である。Aの注は『尚書』金縢篇に、ほぼ同文の記述が見える。周公旦も、武王の死後、兄弟の讒言にあい、東方に退去することを余儀なくされた。Aにあるような天変地異が起きたが、武王の生前、自分が武王の身代わりになって、武王を助けてくれるよう頼んだ書が金縢の中から発見された。これによって、周公旦の真意を知った成王は、自ら周公旦を出迎えに行くと、今までとは逆の方向に風が吹き、なぎ倒されていた稲がことごとく起き上がったという。

次にBの明石巻についてである。『紫明抄』にも同文の注記があり、「后（キミクラキトキハカゼシタガフ）蒙風若　尚書文」（六九頁）（２４）とある。これは、『尚書』洪範篇で、雨、日照り、風などという天象現象がそれぞれどのようなものを表わしているのかを、災異思想的な観点から述べた部分の一節に、「曰蒙恒風若」（曰く蒙なれば恒風あり（若））（二五八頁）（２５）とあるのによるものと考えられており（２６）、王の愚蒙が暴風を引き起こすということを説明した注である。

『紫明抄』にいたると、さらに『尚書』引用が拡大されていく。以下の引用は、『源氏物語』明石巻で光源氏が都に召還され、権大納言に任じ

られる場面である。

ほどなく、もとの御位あらたまりて、数より外の権大納言になりたまふ。次々の人も、さるべきかぎりは、もとの官還し賜り世にゆるさるるほど、枯れたりし木の春にあへる心地していとめでたげなり。

（②二七三頁）

これに対して『紫明抄』の素寂の注は、「光源氏君［還住員外納言］事」として、次のように注をつける。注は書き下し文に改めた。

昔公王家に勤労せしも、惟れ予沖人、知るに及ばざりき。今天威を動かして、以て周公の徳を彰す。惟れ朕小子、其に新ら逆へんとす。我が国家の礼も、亦之れに宜しと。王郊に出づ。天乃ち雨りて風を反し、禾則ち尽く起つ。二公邦人に命じ、凡そ大木の偃せし所、盡く起てて之を築かしむ。歳則ち大いに熟す。尚書　（七三頁）

これは金縢篇で、周公旦の冊書が発見され、周公旦に対する成王の誤解が解けて、召還される場面である。一致するのは、周公旦・光源氏ともに流離の地から召還された点、そして「枯れたりし木の春にあへる心地して」が、『尚書』の「凡そ大木の偃せし所は、尽く起して之を築かしむ。」（二七一頁）と類似しているところである。この箇所について、素寂は『光源氏物語抄』の段階においては、「権大納言の又なりくはゝるを云也」（二五八頁）とするのみで、周公旦の故事との比較は行っていない。

その他、『紫明抄』で追加された例としては、須磨巻で、光源氏の処遇に対する朝廷への不満がくすぶっていることを言った、「世ゆすりて惜しみきこえ、下には朝廷を譏り恨みたてまつれど、」（②一八四頁）に対しても、「后蒙風若（キミクラキトキハカゼシタガフ）　尚書文」（六五頁）という注が付されている。これは前掲B「なほ雨風やまず、雷鳴り静まらで日ごろなりぬ。」の注と同じであり、『紫明抄』では、政治の乱れと天変の結びつきがより明確になっている。

また、少女巻では「皇子摂録例」として「漢家周公旦」（八八頁）をあげるが、これは『光源氏物語抄』においては、西円注だったもので、素寂が自らの注に取り入れたものと考えられる。

六、素寂の漢籍引用の手法

素寂注における周公旦故事、『尚書』引用の拡大の裏には、「歴代天皇への『尚書』進講」や「鎌倉幕府の博士家の招聘」など、明経道の学者たちの活躍があることを示唆されている（２７）。博士家の学者達の活躍については、稿者も注目するところであるが、一方で、前代の注釈を起点に漢籍受容の引用典拠を拡大させていくことは、『光源氏物語抄』所収の他の素寂注にも見られる傾向である（２８）。

まず、桐壺巻冒頭近くで、桐壺の更衣が帝の寵愛を独占し、その様子が目にあまるほどであったことが語られる場面である。

上達部、上人などもあいなく目を側めつつ、いとまばゆき人の御おぼえなり。唐土にも、かかる事の起こりにこそ、世も乱れあしかりけれと、やうやう、天の下にも、あぢきなう人のもてなやみぐさになりて、楊貴妃の例もひき出でつべくなりゆくに、いとはしたなきこと多かれど、かたじけなき御心ばへのたぐひなきを頼みにてまじらひたまふ。（①一七頁～）

点線を付した「唐土にも、かかる事の起こりにこそ」以下の「楊貴妃の例」がどのようなものであったのかについて、『光源氏物語抄』では、

唐玄宗楊玄睒がむすめ楊貴妃をときめかし給ひし程に、世の政を楊国忠楊貴妃セウトにまかせて、しろしめさず。安禄山と（ママ）いくさをおこして、陣（陳カ）玄礼と云者楊国忠并楊貴妃をころしつ。此側（例カ）を云也。素寂　（一四九頁）

とあり、さらに「開元中、泰階平、四海無事。」から始まる「長恨歌伝」（清原教隆注）が引用されている。『光源氏物語抄』では引用されていないが、この箇所に「長恨歌」説話を踏まえることは、すでに『源氏釈』以来説明されているところである（２９）。また、後続の桐壺の更衣が亡くなって以降の場面では『光源氏物語抄』でも、「太えきのふようと云事」「あさゆふのことぐさには、はねをならべえだをかはさむ」の項目をはじめ、「伊行釈」・「定家釈」・『奥入』がたびたび「長恨歌」を引用している。

これら前代から継承した注釈に加え『光源氏物語抄』の素寂注は、前掲の桐壺巻本文の傍線部「あいなく目を側めつつ」にも、

長根（ママ）歌伝云　京師長吏為レ之　素寂　（一四八頁）

という注を加えている。「京師長吏為レ之」とは、「長恨歌伝」に「京師長吏為レ之側レ目」（二八五頁）（３０）とあるのを言ったものであろう。これは官人たちが、楊貴妃とその親族が、玄宗皇帝から寵愛をうけていることに眉をひそめる場面である。この素寂注の指摘が加わることにより、物語のプロットが「長恨歌」説話に依っているという認識がさらに強化されたことになる。

また、『源氏物語』賢木巻で、桐壺院亡き後、太后の恨みを恐れ、出家を決意する藤壺の心中描写に、

戚夫人の見けむ目のやうにはあらずとも、かならず人笑へなることはありぬべき身にこそあめれ、（②一一四頁）

という一節がある。これに対して、『光源氏物語抄』は以下のように説明している。

史記［呂后本紀］、戚夫人ハ趙王如―意ガ母也。漢高祖后呂后怨二ム戚夫人其子趙王一ヲ。囚二ヘテ戚夫人一ヲ、断二ツテ手足一ヲ、去レテ眼ヲ、煇レテ耳ヲ、飲二マシ瘖薬一ヲ、使レム居二ラ厠ノ中一ニ、命ヅケテ曰二フ人―彘一ト。　（二三八頁）

これは、『史記』の呂后本紀で、呂后が、高祖の寵愛をほしいままにした戚夫人を惨殺するという有名なくだりである。『光源氏物語抄』では、無記名注であるが、当該箇所に呂后本紀を引くことは、前田家本『源氏釈』や『奥入』などによりすでに確立されている注釈である。

この注に加え、『光源氏物語抄』では、前掲の部分よりも先立つ場面で、藤壺と大后の確執に触れた部分においても、素寂が呂后本紀を引用している。

場面は、桐壺院の四十九日法要も終わり、仕えていた女性達が次々と実家に退出していくところである。

十二月の二十日なれば、おほかたの世の中とぢむる空のけしきにつけても、まして晴るる世なき中宮の御心の中なり。太后の御心も知りたまへれば、心にまかせたまへらむ世のはしたなく住みうからむを思すよりも、馴れきこえたまへる年ごろの御ありさまを思ひ出で

きこえたまはぬ時の間なきに、かくてもおはしますまじう、みな外々へと出でたまふほどに、悲しきこと限りなし。

（『源氏物語』賢木巻、②九八頁～）

傍線部でも、藤壺は、敵対する太后が幅をきかせるようになり、自分の立場が危うくなることを予感している。ここについて、『光源氏物語抄』素寂注は以下のように指摘している。便宜上①②に分けて引用したい。

①史記呂后本記云、呂后為レリ人ト剛毅、佐二テ高祖一ヲ定二天下一ヲ。

②同記云、三月中ニ呂太后祓シテ還ル。過二グルニ軹道一ヲ、見下ル物ノ如二蒼犬一ノ據中カムト高后ノ腋上ヲ。忽弗二復見一。トレスルニ之云、趙王如意為レセリ崇ヲ。高后遂二病一ムト腋傷一ヲ。素寂（二三七頁）

①は呂后本紀のうち、冒頭部分に続く部分にある。呂后は、性格が「剛毅」であり、高祖が世を治めることができたのはこの后の助力によるところであることが述べられている。そして②は、戚夫人の子趙王が呂后への恨みを募らせていたことを語る部分である。祓の帰り道に、蒼い犬のようなものが、后の腋に取りついて、悩ませるようになった。占ってみえるとこれは趙王の祟りであったという。してみると素寂は、①から『源氏物語』の太后の人柄について、呂后の「剛毅」と類似するものと考えていること、②から藤壺と後の冷泉帝を戚夫人と子の趙王に見立てていたことがわかる。この素寂注は、前代の注釈書にでも指摘されている「戚夫人の見けむ目のやうにはあらずとも」の注を前提に、呂后本紀を一回的なたとえとしてのみならず、場面全体に踏まえられている典拠として拡大させようとしたのではないだろうか。

七、『源氏釈』『奥入』と素寂注の関係

おそらく『光源氏物語抄』の素寂注は、『源氏釈』や『奥入』を見た上で付加されたものと考えるのが自然であろう。そうでなければ、多数の注釈を残すのは困難である。この点については、稲賀敬二氏も素寂が『源氏釈』や『奥入』を参照していたことに言及している（31）。稲賀氏の研究を確認した上で、さらに若干の補足を試みたい。

稲賀氏によると、吉川家本『源氏物語』（室町期の写本）は、源親行の奥書を有する河内本の『源氏物語』であるが、素寂が所持していた形跡があり、勘物も素寂注と深い関わりがあるとされている。なおこの勘物の多くは『源氏釈』と一致するものであるという。その中には『光源氏物語抄』の素寂注に一致するもので、他本には見られない注釈もあるという。たとえば、『光源氏物語抄』総角巻の「常不軽」の注釈として、

法花経
我深敬二汝等一、不二（素寂）■（敢カ）軽慢一。所以者何。汝等皆行二菩薩道一、当レ得二［作仏一。同］（三九五頁）（32）

とあるのは、他本になく、『源氏釈』の吉川家本に「常不軽」とする注にほぼ同文であるという（33）。また、『光源氏物語抄』東屋巻の「かゝる御心をやむるみそぎをせさせたてまつらまほしくおぼすト云事」の注として以下のようにある。

古今
恋せじとみたらし河にせしみそぎ神はうけずも成にける哉［西素］

（四〇六頁）

これも稲賀氏が指摘するように、『源氏釈』の吉川家本に見られる注釈である。なお後人による編集が加えられているという都立図書館本『源氏

釈』にも指摘自体はあるが、「恋せじと」までしか載せていない（３４）。

さらに稲賀氏によると、『光源氏物語抄』真木柱巻の末尾には桜人に関する注記があり、これは前田家本『源氏釈』にのみ見られる注である。ここからも素寂が『源氏釈』の伊行注を見ていた可能性は十分に考えられるということである。

これら稲賀氏の研究によって明らかにされたものの他に、漢籍引用の部分のみであるが、以下のような例も『源氏釈』と素寂注の関連をうかがわせる。

『光源氏物語抄』賢木巻の「紅葉はひとり見給ふるにしきもくちをしう思給へられ侍ればなむと云事」では、

見る人もなくて散ぬるおく山の紅葉は夜のにしきなりけり　同（素寂）古今　（二三九頁）

とある。これに対して『紫明抄』では、右の古今集歌に続けて、『史記』項羽本紀の「富貴不レ帰二故郷一、如二衣レ錦夜行一」（六〇頁）を引いている。これは冷泉家本・前田家本・吉川家本『源氏釈』に見える典拠であり、『光源氏物語抄』の素寂注にはないところを見ると、『紫明抄』は直接『源氏釈』によった可能性が高いと言えるのではないだろうか。

さらに柏木巻で夕霧が柏木を偲んで「右将軍が塚に草初めて青し」（④三四〇頁）と口ずさむ場面がある。『河海抄』が指摘するところによれば、これは逸書『本朝秀句』所収の句で、紀在昌が藤原保忠の死を悼んだ「天与二善人一吾不レ信。右将軍墓草初秋。」（３５）というものであるという。そのうち「草初秋」とあるところを物語の季節が初夏であることから、作者が「青」に改変したとされている。しかしこれと同様の説明は、すでに『光源氏物語抄』にも見える。便宜上三つに分けて引用する。

①天ノ与二スルコト善人一吾不レ信。右将軍ガ墓ニ草初メテ青シ。［奥／伊行］

②西円云、八条大将保忠墓所にて作レ之。あをしとは四月なれば同平とのもじにていはるゝ也。

③此詩の韻字は秋なりとこそ侍を、青しと書たるは、作者のあやまりなりと申人も侍るにや（後略）素寂　（三五八頁）

①では、あらかじめ「青」で句が引用されている。これは『奥入』（自筆本）によるもので、冷泉家本・吉川家本・都立図書館本『源氏釈』では、「秋」とある。前田家本は「青」を見せけちにして「秋」とする。そして③の素寂注であるが、冒頭の「此詩」として、何か前提となる詩があるかのような書きだしであり、その内容は①に合致する。してみると素寂も①『源氏釈』や『奥入』の句を念頭において③の注釈を付したと考えられる。ただ③はもとの字を「秋」と認識していることからすると、これに合致するのは、冷泉家本・吉川家本・都立中央図書館本『源氏釈』となり、素寂が依拠した本文もこれらの『源氏釈』と同様であった可能性が高い。

八、おわりに

最後に、これまで論じてきたところを、先行研究で明らかにされている部分も含めて整理してみたい。『光源氏物語抄』素寂注が、『源氏物語』賢木巻「「文王の子武王の弟」とうち誦じたまへる」に対して『史記』の周公旦故事を引用することは、『奥入』など前代の注釈書が参考になった

ものと考えられる。また、『原中最秘抄』は、『史記』を引用しながらも、儒教的な為政者の理想については言及していなかった。ただし、『源氏物語』に儒教的為政者の理想を見いだそうとすることは、『原中最秘抄』にも見え、『蒙求和歌』でもそうした為政者を意図的に作り出しており、時には光源氏を彷彿とさせる改変もあった。してみると、光源氏を中国の聖人と対峙させること自体は、河内方の学問の在り方に沿ったものであると考えられる。さらに前代の注釈書から継承した要素のみならず、須磨流離から政界へ復帰するまでの流れを『尚書』の周公旦東遷になぞらえたのは、当時の学問状況に即したものであったが、一方で先行する注釈書が指摘する漢籍故事の引用を拡大させて、場面そのものを同一の漢籍で捉えようとするのは、素寂自身の注釈の方法でもあった。このように、素寂の周公旦引用はさまざまなルーツに根ざし構成されたものであった。

さらに前述の通り、『光源氏物語抄』少女巻では、「皇子摂録例」として西円注が「漢家周公旦」をあげている。須磨巻においても「つみにあたる事は、もろこしにもわが御門にも、かくよにすぐれ、なにごとも人にことになりぬる人のかならずある事也」の注に対して、

周公菅家（漢家）等已下（本朝）其例不レ可レ勝事（後略）（無記名、二五〇頁）

とある。これらの注は、素寂の周公旦関係の注から影響を受けているのか、それとも逆に、素寂の『尚書』引用を助長したのか、その影響関係の有無は不明である。しかし、これらの注記は、『光源氏物語抄』の中において、素寂注の『尚書』引用の妥当性を高めるものとして機能しているといえる。『紫明抄』の段階で、『尚書』引用がさらに補強されていく背景には、素寂本人の注釈の深化のみならず、こうした他の注釈者とその注の存在も影響を与えているのではないだろうか。他にも『光源氏物語抄』には経書からの引用が多いのであるが、それについては章をかえて言及する。

注

（1）清水好子「須磨退居と周公東遷」『源氏物語論』（塙書房、一八六六年一月）、田中隆昭「光源氏における孝と不孝―『史記』とのかかわりから―」『東アジアの平安文学　論集平安文学』第二号（勉誠社、一九九五年五月）、岡部明日香「光源氏と周公旦」『和漢比較文学』一八（一九九七年二月）、日向一雅「光源氏の物語と『尚書』―注釈史における儒教的言説と物語の方法―」『源氏物語　東アジア文化の受容から創造へ』（笠間書院、二〇一二年三月）、同氏「源氏物語古注釈における『尚書』と周公旦注」同氏編『源氏物語　注釈史の世界』（青簡舎、二〇一四年二月）、鄭寅瓏「『源氏物語』における周公旦の受容―平安漢文に見られる周公旦と比較して―」『和漢比較文学』五三（二〇一四年八月）など。

（2）注（1）日向氏「源氏物語古注釈における『尚書』と周公旦注」

（3）注（2）日向氏論文。

（4）『源氏物語』の引用は、『新編日本古典文学全集』（小学館）による。傍線は私に付した。

（5）『史記』の引用は、『新釈漢文大系』（明治書院）による。傍線は私に付した。
（6）注（2）日向氏論文。
（7）『光源氏物語抄』の引用は、中野幸一・栗山元子編『源氏物語古註釈叢刊』第一巻（武蔵野書院、二〇〇九年九月　ノートルダム清心女子大学図書館黒川文庫蔵本）による。また影印本（『光源氏物語抄　正宗敦夫収集善本叢書　第Ⅰ期』第一巻、武蔵野書院、二〇一〇年二月）をも参照した。返り点、濁点を加えたり、傍線などを付したりしたところがある。割注については、［　］で示した。
（8）注（2）日向氏論文。
（9）『奥入』の引用は、『源氏物語古註釈叢刊』第一巻（武蔵野書院）による。返り点や句読点、傍線等は私に付した。その他便宜上表記を改めた箇所がある。冒頭の「史記魯世家」と「於是」は挿入符で結ばれている。それに従い順番を入れ替えた。
（10）注（2）日向氏論文。
（11）『原中最秘抄』（完本）の引用は、『源氏物語大成』巻七（中央公論者社）による。句読点や返り点を打つなど、私に表記を改めた箇所がある。便宜上二つに分けて引用した。
（12）『原中最秘抄』（略本）の引用は『群書類従』（続群書類従完成会）による。便宜上私に表記を改めた箇所がある。
（13）『原中最秘抄』の完本と略本の関係については、田坂憲二「『原中最秘抄』の完本と略本」『源氏物語享受史論考』（風間書房、二〇〇九年一〇月）を参照されたい。
（14）注（2）日向氏論文。
（15）『蒙求和歌』の引用は『新編国歌大観』（角川書店）による。句読点や傍線を付すなど私に表記を改めた箇所がある。片仮名本と平仮名本の内容に異同がない場合は、片仮名本による。
（16）『蒙求』の古注・準古注については、池田利夫編『蒙求古註集成』（汲古書院）による。原則書き下し文にして引用した。句読点を付し、字体等表記を改めた箇所がある。
（17）この章段の改変には、雲気の強調など他にも言及するべき点があるが、今回は先行研究を紹介するにとどめたい。柳瀬喜代志「『百詠和歌』『蒙求和歌』を媒體とする軍記所載の漢故事―受命の君と忠臣像の變容譚二、三題をめぐって―」『日中古典文学論考』（汲古書院、一九九九年三月）、三田明弘「劉邦と始皇帝―『今昔物語集』第巻十冒頭三話の描く君主像―」（梶尾正昭他編『軍記文学の系譜と展開』汲古書院、一九九八年三月）など。また、漢高祖の徳を巻頭「春」に据えた例として、『資実長兼両卿百番詩合』（藤原教家編。一二二五年までの成立）がある。巻頭に配された藤原資兼の句は「春作二四時始一」という題で、「漢十二皇高祖徳。唐三百載太宗功。」（続群書類従）という高祖の徳を詠んだものであった。『明月記』正治二年（一二〇〇）二月九日条によると、この句は元来九条良経の邸宅で行われた詩歌会で披露されたものであり、秀句として「満座感嘆」（国書刊行会本）したという。ちなみに『蒙求和歌』の成立は元久元年（一二〇四）である。『資実長兼両卿百番詩合』については、栗生育美「『資実長兼両卿百番詩合』考―尊敬閣文庫「百番詩

合」を中心に―」『語文』八四・八五（二〇〇六年二月）を参照した。

（18）章剣『『蒙求和歌』校注』（溪水社、二〇一二年一〇月）にも指摘がある。

（19）和歌の引用はすべて『新編国歌大観』（角川書店）による。

（20）この章段は、『蒙求和歌』のもととなった古注『蒙求』は残っておらず、準古注本とされる国会図書館蔵大永五年書写本と応安頃五山版は、いずれも『韓詩外伝』を出典としている。それらは、小異こそあるものの、『史記』魯周公世家と同内容である。

（21）池田利夫「蒙求和歌伝本系統詩論―旧説への再吟味―」『鶴見大学紀要』一五　第一部国語・国文学篇（一九八三年三月）、章剣「『蒙求和歌』の片仮名本と平仮名本について」『中国学研究論集』二六（二〇一一年四月）、田坂順子「『蒙求和歌』叙述の方法」『福岡大学人文論叢』四六―三（二〇一四年一二月）など参照。

（22）田坂憲二氏は、素寂の注釈について以下のように指摘している。

「河内方宗家に対して独自の注釈世界を確立しようとした素寂は、『水原抄』に代表される宗家の説を常に乗り越えるべき物として措定した。あえて異説を立てる態度は、時として行き過ぎる傾向もあったが、先行説に安住することなく多くの新見を提出することを可能とした。」（「河内本の注釈」『源氏物語享受史論考』風間書房、二〇〇九年一〇月）素寂の伝記については、『紫明抄』の序文から主殿助正六位であったこと、鎌倉で紫雲寺を開き『紫明抄』を執筆し、永仁三年（一二九三）に将軍久明親王に献上されたことなどが知られるものの、詳細は不明である。俗名は、「孝行」とも「保行」とも言われる。田坂憲二編『源氏物語古注釈集成　第一八巻　紫明抄』（おうふう二〇一四年五月）解説に諸説整理されている。

（23）注（2）日向氏論文。『光源氏物語抄』素寂注は、『紫明抄』（京都大学国文研究室蔵本）にいたる以前の素寂の初期の注釈が掲載されているが、田坂憲二氏は、内閣文庫蔵三冊本を『紫明抄』の初期段階を伝えるものとして位置づけている（「『水原抄』から『紫明抄』へ」『源氏物語享受史論考』風間書房、二〇〇九年一〇月、一九九四年三月初出）。田坂氏は、この内閣文庫蔵三冊本所収の注釈を『光源氏物語抄』素寂注よりも先行するとするが、これには岩坪健氏による反論もある（「『紫明抄』の成立過程―『異本紫明抄』との関係―」『源氏物語の享受　注釈・梗概・絵画・書道』和泉書院、二〇一三年二月、一九九九年三月初出）。本稿では、『光源氏物語抄』所収の素寂注を初期の注、それに対して京都大学国文研究室蔵本『紫明抄』所収の注を後発の注釈として捉え、この前後関係での注釈の変遷を扱っていきたい。実際のところ、周公旦故事の引用については、内閣文庫蔵三冊本『紫明抄』の方が、『光源氏物語抄』所収の注よりも、京都大学国文研究室蔵本『紫明抄』に若干近い。この事情を考慮しても、『光源氏物語抄』所収の注を初期の注釈とみることには問題ないと考える。

（24）『紫明抄』の本文は玉上琢彌編『紫明抄・河海抄』（角川書店、一九九一年二月）による。漢文体の部分は、書き下し文に改め、送り仮名を付すなどした箇所がある。句読点や濁点は補った。

（２５）『尚書』の引用は、『全釈漢文大系』（集英社）による。字体を通行のものに変えるなど、表記を改めた箇所がある。
（２６）注（２）日向氏論文。
（２７）注（２）日向氏論文。
（２８）これは、『源氏釈』から始まり『河海抄』にいたるまでの注釈書が、「意味の拡大」「深い読み」を追求していったという注釈史のながれにも即したものであるといえる。（井爪康之「中世源氏物語注釈書の方法と目的―漢籍・仏典の取扱い方―」『源氏物語注釈史の研究』新典社、一九九三年一〇月）参照。）
（２９）たとえば、前田家本には「たうの玄そうの楊貴妃をときめかし給ほどに、世のみだれいできける事なり」（『源氏物語古注集成』）とある。
（３０）『長恨歌伝』の引用は『新釈漢文大系』（明治書院）による。
（３１）稲賀敬二「岩国吉川家蔵源氏物語の親行奥書と素寂の周辺」『中古文学』一（一九六七年三月）、同氏『源氏物語の研究―成立と伝流―』（笠間書院、一九六七年九月）。以下、稲賀氏の研究はいずれもこの稲賀氏著書によるものである。
（３２）返り点等は私に付したものである。
（３３）吉川家本は、末尾に「法花経文」とある。
（３４）田坂憲二氏によると、都立中央図書館本は、『源氏釈』そのものではなく、中世最末期頃に作成された引歌集成中心とした書物であり、『源氏釈』的な要素」も他書を媒介したものであるという。（「都立中央図書館本『源氏釈』について」『源氏物語享受史論考』風間書房、二〇〇九年一〇月）
（３５）『河海抄』の本文は玉上琢彌編『紫明抄・河海抄』（角川書店、一九九一年二月）による。返り点や句読点を付すなど表記を改めた箇所がある。

第三章　『光源氏物語抄』編者の経書引用に対する意識

一、はじめに

『光源氏物語抄』には、『源氏物語』を読み解くために、多くの漢籍が援用されており、その中には経書も含まれている。このことについては、李興淑氏や河野貴美子氏の研究がすでに注目しており、鎌倉幕府の政治方針（1）、あるいは当時の学問のあり方（2）との関連づけが行われている。前章で述べたとおり、『光源氏物語抄』の素寂注に『尚書』の引用が見られるようになったのも、こうした時代的特性の一環であると考えられ、それについては、日向一雅氏によりすでに指摘されている（3）。『光源氏物語抄』で、経書を引用しているのは、素寂、清原教隆、行平（4）、晴宗（5）、晴義、今案（『光源氏物語抄』編者）、葉連、西円であり、「勘物」とする注釈にも経書の引用が見える。しかし素寂をはじめ、伝記的に不明な人物も多く、彼らが実際どのような環境や人物関係のなかで、『源氏物語』の解釈に経書を援用するようになっていったのか、明らかにすることは難しい。このような中で『光源氏物語抄』の編者については、編者の注と考えられている「今案」注を分析することにより、編者が経書引用をどのように捉えていたのかある程度明らかにすることができる。

二、『光源氏物語抄』編者の経書引用

『光源氏物語抄』の編者のことを指す「今案」注は、三箇所に経書に関わる注を残している（6）。まず『古文孝経』がある。次の引用は、『源氏物語』帚木巻の雨夜の品定で、左馬頭が、世の中を治めることと、家庭を比較する場面である。

されど、かしこしとても、一人二人世の中をまつりごちしるべきならねば、上は下に輔けられ、下は上に靡きて、事ひろきにゆつろふらむ。狭き家の内のあるじとすべき人ひとりを思ひめぐらすに、足らはであしかるべき大事どもなむかたがた多かる。（①六二頁）（7）

当該箇所の注として『光源氏物語抄』には以下のようにある。便宜上分割して引用する。

①立レ国副（制カ）レ人、資二股肱一以合レ徳、宜（宣カ）レ風導レ俗侯二賢明一而寄レ以（心カ）。是以列宿騰レ天、助二陰光之夕照一、百川決（訣カ）レ地、添二溟渤之添源一ヲ。以二海月之凝朗一ヲ、於二假レ物（心カ）而為レ大。況若レ人御レ下、統レ極理レ時。独運二方寸之必（心カ）一。以括二九区之内一。不レ資二衆力一何以成レ功ヲ。必須二明レ二レ職（職カ）一ヲ審レ賢、択レ才ヲ分レ禄。得二其人一、則風行化洽。失二其用一、則虧（傷カ）レ教ヲ優レ民ヲ。

※二…「職」の偏が「貝」。

②史記五秦本紀　上含二淳徳一遇二スルトキニハ其ノ下一、々懐二ヒテ忠信一ヲ以事二其上一。

③上以風二化下一々以風二刺ス上一。主文而譎諫。言之者、無レ罪聞レ之者、足二以自戒一。故曰レ風。

④上　為　敬レ則下不レ慢。上　好　レ譲ヲ則下不レ争。上之化レ

スルトキニハ下ヲ猶ヲ風之靡草ヲ。

⑤居家理。故治可レ移レ於官。注曰能理レ家者、則其治用可レ移於宮。今案（一七六頁）（8）

①は『帝範』審官からの引用である。『帝範』は唐の太宗が撰して太子（後の高宗）に与えた書である。帝王学の書として平安時代以降に読まれ、清原教隆も将軍九条頼嗣、宗尊親王に進講している（9）。②は『史記』秦本紀、③は『詩経』の序、④⑤は『古文孝経』からの引用である。①～⑤まですべて「今案」の注記と判断してよいものか若干ためらわれるが、少なくとも⑤が「今案」であることは確実である。⑤は『古文孝経』広揚名章第十八の一節で、君子は家庭の中の秩序を保つことができ、その人が朝廷に仕えればおのずと君臣の関係も良好となり、世の中が治まることを説いた部分である。政治と家庭を治めることを比べることが儒教的な発想であることを述べた注である。

次の注は、紫の上の妻として立場について、編者（今案）が『礼記』を引いて言及したものである。

さるやうありてしんでんはふたげ給はずト云事（松風巻）

尋云さるやうとは何事哉。

答云内則曰聘則為レ妻奔則為妾ト。注云聘問也。妻之言斉也。以レ礼見問。則得レ与レ夫敵体。妾之言接也。言得レ接レ見於君子。不レ得レ与レ之敵体也。依此文之意以妻可レ在レ寝殿レ歟。而此度上者寵愛雖レ無レ雙無レ聘之儀、仍為レ妾。故当時依レ無レ妻さるやうありてふたげきと云歟。而を紫上猶気色をよばざる事あるによりて、しむでんにゐずとおもへるは其以非也。今案（二七二頁）

「さるやうありて」という一節が入るのは、河内本系統の伝本の独自異文である（10）。「しんでん」とは二条院東院の寝殿である。松風巻の冒頭で寝殿が空いている理由について、編者は『礼記』内則第十二によって解釈しようとしている。『礼記』によると、「聘」つまり正式な申し込みを経て結婚が成立した場合、妻と言えるが、そうでない場合は妾であるという。すると、紫の上は正式な手続きを経ずに光源氏の妻になったため、妾の待遇であり、だから寝殿にも住まわせなかったのではないかと解釈している（11）。

三、春秋左氏伝序「先レ経以始レ事」の説

次の注もまた経書の引用に関わる「今案」の注である。二つに分けて引用する。

【Ⅰ】しりへの山にたちいでゝ、京のかたを見やり給と云事　（中略）

①左伝序云　先レ経起レ伝者此義也。　葉連

②此事於箒木巻　頭中将　読（談カ）夕顔上事之所沙汰了。仍今令省略畢。今案　（若紫巻、二〇五頁）

これは北山において療養中の光源氏が、気分転換に従者たちと裏山を散策する場面である。

背後の山に立ち出でて京の方を見たまふ。はるかに霞みわたりて、四方の梢そこはかとなうけぶりわたるほど、（源氏）「絵にいとよくも似たるかな。かかる所に住む人、心に思ひ残すことはあらじかし」とのたまへば、（供人）「これはいと浅くはべり。他の国などにはべ

る海山のありさまなどを御覧ぜさせてはべらば、いかに御絵いみじうまさらせたまはむ」、「富士の山、なにがしの岳」など語りきこゆるもあり。また西国のおもしろき浦々、磯のうへを言ひつづくるもありて、よろづに紛らはしきこゆ。（良清）「近き所には、播磨の明石の浦こそなほことにはべれ。何のいたり深き隈はなけれど、ただ海のおもてを見わたしたるほどなん、あやしく他所に似ずゆほびかなる所にはべる。かの国の前の守、新発意のむすめかしづきたる家いといたしかし。（若紫巻、①二〇一頁～）

光源氏が都の眺望を絵に描いたようであると言うのに対し、従者たちが地方にはもっと風光明媚なところはいくらでもあると言い（傍線部）、富士山や西国の海岸、近場では明石が紹介される場面である。そしてそこから話題は明石入道と明石の君へと発展していく。

『光源氏物語抄』の当該箇所の注釈を検討してみたい。①葉連の注釈にいう「左伝序」の「先経起伝」とは、「春秋左氏伝序」（杜預『春秋経伝集解』序）の以下の注を示している。

左丘明受経於仲尼、以為経者不刊之書也。故伝或先経以始事、或後経以終義、或依経以弁理、或錯経以合異、隨義而発。

（二八頁）（12）

（左丘明経を仲尼に受けて、以為へらく経は不刊の書なりと。故に伝或は経に先んじて以て事を始め、或は経に後れて以て義を終へ、或は経に依りて以て理を弁へ、或は経を錯へて以て異を合はせ、義に隨ひて発す。）

左伝の作者である左丘明は、『春秋』の経文は神聖なものであるため、一字一句変更することはできないと考えた。そのため普通は経の後にそれを説明する伝が来るところを、時に経文より先行する伝の時点から、その経についての説明を始めたり、経文よりかなり後の伝においてその顛末が明らかになったりすることもあるという。

『春秋左伝注疏』は、「先」経以始」事」と「後」経以終」義」についてそれぞれ具体例を示している（13）。まず「先」経以始」事」の例としては、隠公元年の隠公即位の条と、隠公四年の州吁による桓公殺害の条を指摘する。

隠公元年正月の経文は「元年、春、王正月。」（元年、春、王の正月。）で始まるが、それに先んじて伝が配され、隠公が即位にいたる経緯が説明されている。本文は書き下し文にて引用する。

〔伝〕恵公元妃孟子。孟子卒。継室以声子。生隠公。宋武公生仲子。仲子生而有文在其手。曰、為魯夫人。故仲子帰于我。生桓公而恵公薨。是以隠公立而奉之。

（四五頁）

（〔伝〕恵公の元妃は孟子なり。孟子卒す。室に継ぐに声子を以てす。隠公を生む。宋の武公、仲子を生む。仲子生まれて文の其の手に在る有り。曰く、魯の夫人と為らんと。故に仲子我に帰げり。桓公を生みて恵公薨ず。是を以て隠公立ちて之を奉ず。）

傍線部にあるように、恵公は、桓公（仲子との間に儲けた）が生まれてすぐに薨去している。このため隠公が一時的に即位してまだ幼い桓公の後見役となったという。これについて、経文のあとに続く伝が「元年、春、王周正月。不書即位、摂也。」（元年、春、王周の正月。即位を書せざるは、摂なればなり。）と説明するように、本来即位元年の正月は、即

位があったことを示すのが『春秋』のならわしであるが、隠公の即位が一時的な仮のものであったため、隠公元年条ではそれがない。そこで経の前に伝を置いて説明を始めることにより、その事情が明らかになるしくみになっている（14）。

隠公四年の経に「戊申、衛州吁弑其君完。」（戊申、衛の州吁其の君完を弑す。）とある。この州吁による桓公（完）殺害の条も、前年の隠公三年の伝に、この伏線となる桓公（完）が立太子するに至った経緯が述べられている。それによると、州吁と桓公（完）は、衛の荘公を父とする異母兄弟で、荘公は愛妾の腹から生まれた州吁の方を溺愛していた。しかし州吁は武を好み暴力的であったため、これを懸念した大夫の石碏が進言し、州吁ではなく桓公の方が立太子することでおさまった。しかし結局桓公は殺され州吁が即位したというのが隠公四年の経である。

一方「後レ経以終レ義」の例としては、昭公二十二年の経の例があげられている。昭公二十二年の経に「王室乱」（王室乱る）とあるが、この戦乱は、のちの定公八年の伝に至って収束している。また、哀公二年の経文に「晋趙鞅帥レ師納二衛世子蒯聵于戚一。」（晋の趙鞅、師を帥ゐて衛の世子蒯聵を戚に納る。）とある。晋の趙鞅が衛の太子蒯聵を戚に送り込み、その後、太子が荘公として即位するという顛末は、哀公十五年の伝にあるという例が指摘されている。

では、『光源氏物語抄』若紫巻の当該箇所の注で葉連が「先レ経以始レ事」を持ち出したのは、どういう点が後の内容の先取りになっていると考えたのであろうか。先の若紫巻の本文引用の傍線部のみ、もう一度取り出して引用したい。

他の国などにはべる海山のありさまなどを御覧ぜさせてはべらば、いかに御絵いみじうまさらせたまはむ（若紫巻）

これは、後に光源氏が須磨において郊外の風景を目の当たりして、絵を描いた場面と対応する（15）。

昼は何くれと戯れ言うちのたまひ紛らはし、つれづれなるままに、いろいろの紙を継ぎつつ手習をしたまひ、めづらしきさまなる唐の綾などにさまざまの絵どもを書きすさびたまへる、屏風の面どもなど、いとめでたく見どころあり。人々の語りきこえし海山のありさまを、はるかに思しやりしを、御目に近くては、げに及ばぬ磯のたたずまひ、二なく書き集めたまへり。（供人）「このごろの上手にすめる千枝、常則などを召して作り絵仕うまつらせばや。」と心もとながりあへり。

（須磨巻、②一九九頁～）

してみると葉連注は、若紫巻の当該場面が、光源氏自ら須磨という郊外の地に赴き、卓越した風景画を描く一件の伏線になっていると捉えたのではないだろうか。さらに言えばこのような風景を目にすることになる須磨流離の伏線になっていると考えていた可能性もあろう。

ところで、この葉連なる人物の伝記は不明である。葉連の注は、桐壺巻にもう一例見える。桐壺巻の更衣の説明として、『史記』外戚世家第十九の、衛子夫（後の衛皇后）が、武帝の着替え（更衣）に侍りそこで寵愛を得たという故事が引用されている。前後は親行説であるが、この衛皇后の一節を引用する注も親行注であるのかは、不明である。その末尾に双行注で葉連の見解が見える。

葉連云、称下可二更衣一之由上、武帝相二一具子夫一起、其宴座行因所

也。　　（『光源氏物語抄』桐壺巻）

このように葉連は漢籍の素養ある人物であることがわかるが、前掲【Ⅰ】①の「先経起伝者此義也」というのは、何かを踏まえたような言い方である。さらにこの【Ⅰ】①葉連注を受けて【Ⅰ】②では、今案注が、「此事於箒木巻　頭中将　読（談カ）二夕顔上一事之所沙汰了。仍今令二省略一畢。」と補足していた。そこで帚木巻の当該箇所を見ると以下のようにある。

【Ⅱ】中将なにがしはしれ物のものがたりをせむとて、いとしのびて見そめたりし人のト云事

是夕顔のうへの事是　艮（即カ）上二所レ云乃或ハ伝ヲ先レニシ経一ヲ　与（ママ）始ムル事者蓋此謂歟。　（『光源氏物語抄』帚木巻、一八一頁）

これは雨夜の品定めで頭中将が夕顔の話をする場面である。夕顔巻に先行して既に夕顔のことが示されており、それを「先レ経以始レ事」と捉えたものと考えられる。この【Ⅱ】は無記名であるが、【Ⅰ】②との対応を考えると今案注と考えてよいだろうか。【Ⅱ】と【Ⅰ】が同一人物の注であればもちろん、そうでなくても【Ⅰ】の「今案」は【Ⅱ】の注記を肯定することにより、『源氏物語』に「先レ経以始レ事」という考え方をあてはめることに対して肯定的に捉えていたことがわかる。

四、清原教隆注との関係

ところで、今言及した【Ⅱ】の帚木巻注に「是　艮（即カ）上二所レ云」とあるのは、同じく帚木巻冒頭にある次の清原教隆の注記を踏まえたものと考えられる。若き日の光源氏にはいくつも通い所があり、浮き名を流していたことを語り手がほのめかす部分である。便宜上二つに分けて引用する。

【Ⅲ】ひかる源氏なのみ事〳〵しういひけたれ給とがおほかなるに、いとゞかゝるすき事どもをする世にもきゝつたへてかろびたる名をやながさんと、しのび給かくろへごとをさへ、かたりつたへたる人の物いひさかなさよと云事　（中略）

①尋云、今所云之義等不レ見二桐壺巻一如何。答、文をつくるならひ、或はさきにあげたる事を後　給（ママ）釈する事あり。是常の例也。或又後に有べき事をまづ述釈して兼てさる事のあらむずる由をしらする事あり。今の文即此義也。故左伝序云或伝先レ経而始レ事。或後レ経終義レ歟。是則存二此両意一也。　教隆

②重尋云、若然者已下巻々之内指二何事一哉。答云、所謂空蟬夕顔等事也。不レ可二　勝計一也。（帚木巻、一六八頁）

①において、桐壺巻では「かかるすきごとども」に該当するような部分がないという質問に対して、教隆は後に来るべき事柄を見越して先に述べることもあると言い、『春秋左氏伝』の序文を引用している。さらに【Ⅲ】②では、教隆は「かかるすきごとども」の具体的内容を、空蟬、夕顔をはじめ、後続の巻々で展開される女性との関係であると説明している。つまり、教隆が説明したかったことは、空蟬や夕顔など光源氏と女性とのエピソードが語り始められるのは、帚木の後半からであるが、先に光源氏が色好みであることが示されており、後の具体的なエピソードの伏線になっているということである。それを説明するために持ち出したのが『春秋左氏伝』の考え方であった。

清原教隆（一一九九～一二五六）（16）は、明経道の学者である。平安末期の大儒清原頼業の孫、庶流仲隆の息で、『古文尚書』『春秋経伝集解』『古文孝経』『論語集解』など清家代々の家説を継承している。仁治二年（一二四一）四十二歳の時に鎌倉に下向し、九条頼嗣や宗尊親王への『帝範』を講義に関わった。『光源氏物語抄』内には教隆の注が一五六例あり、その内容は、字訓、語釈、典拠、有職故実関係、巻名注記、解釈、諸本間の異同まで全般的に網羅している。引用書についても傍記のあるものだけでも、『春秋左氏伝』（3例）、『礼記』（3例）、『論語』、『史記』、『文選』、「長恨歌」、「長恨歌伝」といった漢籍、さらに『日本紀』（4例）、『東宮切韻』（2例）、『北山抄』（2例）、『鏡宮縁紀』、『万葉集』、『古語拾遺』、『延喜式』、『玉造伝』（『玉造小町子壮衰書』）、「僧尼令」など国書からも引用している。

『春秋左氏伝』は、清原家が家学として代々読み方を伝えてきた書であった。宮内庁書陵部蔵旧金沢文庫本『春秋経伝集解』三十巻（17）は、建長五年（一二五三）から文永二年（一二六五）までの十三年間、金沢実時への講義に用いられたテキストである。その左伝学は、清原頼業以降代々継承してきたもので、教隆は建保三年（一二一五）四月十七歳の時、父仲隆から家説を受けている（18）。その後も兄の仲宣の所持本を移点し、没する前年まで証本作りに励み、直隆・俊隆という二人の息子に家説を伝授している。このように『春秋左氏伝』は教隆にとって重要な書であり、それを『源氏物語』を理解する時にも想起していたことになる（19）。

先行研究の指摘する通り、「今案」注記者と教隆は、問答のやりとりが散見するなど近しい関係にあった（20）。また前掲【Ⅱ】と同様に、「今案」注が『源氏物語』の構造を説明する際に、教隆の見解を引用している箇所が他にもある。

【Ⅳ】内侍退出事（中略）答、今有二免許之詞一。以レ之知レ之也。以レ今知レ古者此物語之例也。道理又不レ違歟。此等之儀之箒木抄源氏任二中将一之処委記リ。　今案　（須磨巻、二四七頁）

これはある人が、光源氏との関係が露見した後、朧月夜が退出して蟄居していたことが書いていないのに、須磨巻で、再び参内したとあるのはどういうことなのかと尋ねた時の、「今案」の回答である。それによると、参内を許されたと書くことにより、退出・蟄居があったということをほのめかしているのであり、傍線部のように、そのことについては帚木巻の光源氏が中将に任じられた箇所に詳細があるという。そこで帚木巻の当該箇所を見てみると、これを説明しているのは教隆注であった。

【Ⅴ】尋云此文以前源氏任官事不レ見云々。仍不レ歴二少将一任二中将一之由存歟。若然者其例如何。答此文可レ有二両意一。一には問意也。其例者時平不レ歴二少将一而仁和三年二月廿七日任二右近権中将一。一には以前任二少将一事ありけりと可レ存也。此物語中任不レ見。其人存二容有之義一事多レ之故也。　教隆尺（一七〇頁）

桐壺巻に光源氏の任官の記事がなく、いきなり中将になっていることについて、教隆は二つの可能性を挙げている。一つは少将を経ずに中将に任じられたことで、その例として藤原時平をあげる。もう一つは、少将に任官されたものの、物語中にはそれが書かれていない可能性である。栗山氏は、【Ⅴ】が問答をそのまま掲載していることから、「今案」の文

字こそないが、その場に編者も同席しており筆録したものとではないかと推測している（21）。

してみると、「今案」が「先レ経以始レ事」の考え方にたびたび言及しているのも、教隆の影響を受けている可能性が高いのではないだろうか。とくに左伝が教隆にとって家学であったことが、この考えが尊重されている要因のひとつであったと考えられる。博士家の注釈と家学との結びつきについては、第四章で詳しく検討することとする。

五、おわりに

『光源氏物語抄』の編者の注釈には、経書を用いた注があり、そこには内容に関わる注も含まれていた。また、教隆が提唱した『春秋左氏伝』の「先レ経以始レ事」を用いて『源氏物語』の構造を把握しようとすることにも肯定的であり、経書を『源氏物語』に関わらせることに積極的な編者ということができる。

してみると、第二章で論じた周公旦故事にまつわる『尚書』引用も、単に諸注を集成する一環として取り入れただけでなく、編者も素寂注に賛成の立場であった可能性が高いのではないだろうか。かりに編者はこの素寂注に否定的であったとしても、編者の基本的な姿勢として、経書を踏まえて『源氏物語』を読むことに肯定的であり、そうした方針のもとに編まれた注釈書のうちに取り入れられることで、この素寂注は『源氏物語』を理解するのに有益な注釈としての位置づけを獲得したのではないだろうか。

注

（1）李興淑「『光源氏物語抄』における儒教的言説」『日本古代学』四（二〇一二年三月）

（2）河野貴美子「『源氏物語』古注釈書にみる和漢の往還―『光源氏物語抄』所引漢籍考―」小山利彦・河添房江・陣野英則編『王朝文学と東ユーラシア文化』（武蔵野書院、二〇一五年一〇月）

（3）日向一雅「源氏物語古注釈における『尚書』と周公旦注」日向一雅編『源氏物語注釈史の世界』（青簡舎、二〇一四年二月）参照。

（4）行平の注は桐壺巻から夕顔巻にかけて二十四例あるが、具体的な人物像については不明である。

（5）堤康夫「『異本紫明抄』編者考―その周辺の人々を探る―」『源氏物語注釈史の基礎的研究』（おうふう、一九九四年二月）は、建長四年（一二五二）に将軍宗尊親王と鎌倉へ下った陰陽師の安倍晴宗をあげる。

（6）栗山元子「『光源氏物語抄』編者考―金沢実時説の検討を中心に―」陣野英則他編『平安文学の古注釈と受容　第二集』（武蔵野書院、二〇〇九年九月）の指摘するごとく、「今案」注記者自身も漢籍の素養を持ち合わせており、経書の他にも『白氏文集』『菅家後集』が引用されている。

（7）『源氏物語』の本文は、『新編日本古典文学全集』（小学館）による。

（8）『光源氏物語抄』の本文は、中野幸一・栗山元子編『源氏物語古註釈叢刊』第一巻（武蔵野書院、二〇〇九年九月　ノートルダム清心

女子大学図書館黒川文庫蔵本）による。割注は［　　］で示すなど、表記を私に改めた箇所がある。便宜上傍線を付した。影印本（『光源氏物語抄　正宗敦夫収集善本叢書　第Ⅰ期』第一巻、武蔵野書院、二〇一〇年二月）をも参照した。

（9）当該箇所の『帝範』引用については、注（2）河野氏論文に詳しい。本稿においても参照した。

（10）池田亀鑑『源氏物語大成』（中央公論社）の校異による。

（11）この箇所については、注（6）栗山氏論文に言及がある。

（12）『春秋左氏伝』の引用は、『新釈漢文大系』（明治書院）による。

（13）『春秋左伝注疏』については、『十三経注疏附校勘紀六　左伝』（中文出版社、一九七七年一〇月）を参照した。

（14）鎌田正『新釈漢文大系第三〇巻　春秋左氏伝一』（明治書院、一九七一年一〇月）四六頁「余説」参照。

（15）この部分の対応関係は、阿部秋生、秋山虔、今井源衛、鈴木日出男校注・訳『新編日本古典文学全集二一　源氏物語②』（小学館、二〇〇六年八月）二〇〇ページ頭注にも指摘されている。

（16）教隆の伝記については主に以下を参照した。和島芳男『日本宋学の研究』（吉川弘文館、一九六二年七月）、武内義雄「群書治要と清原教隆」『武内義雄全集』第四巻（角川書店、一九七九年八月）、永井晋「中原師員と清原教隆」『金沢北条氏の研究』（八木書店、二〇〇六年一二月）。とくに加点状況や家説の継承については主に小林芳規「清原家訓読における頼業と教隆」「漢籍古点本奥書識語集附・博士家関係者人名索引」『平安鎌倉時代に於ける漢籍訓読の国語史的研究』（東京大学出版会、一九六七年三月）を参照した。

（17）書陵部蔵『春秋経伝集解』と清原家の家説継承については宮内庁書陵部編『図書寮典籍解題　漢籍篇』（一九六〇年三月）を中心に、鎌田正「清家に於ける左伝の伝授とその学問について」『漢文教室』二九（一九五七年二月）をも参照した。

（18）鎌田氏は頼業から仲隆への伝授記事が見えないことから、頼業から宗家を継承した良業の本を書写して伝えたものかとも推測する。鎌田正「旧鈔巻子本春秋経伝集解に於ける頼業の訓説とその伝授について」『書陵部紀要』八（一九五七年三月）

（19）前掲注（2）河野氏論文も、この注と教隆の家学との関係について注目されている。河野氏は、教隆の家学と『源氏物語』注釈の関係に加え、『源氏物語』の構造が、中国伝統の重要経典『春秋左氏伝』と並べて説かれることによって、『源氏物語』という作品を経書と同様の仕組みを備えた読み学ぶべき「古典」として位置づけ捉えることをも可能にする」と、『源氏物語』の古典化への契機として捉えておられる。

（20）前掲注（5）堤氏、注（6）栗山氏論文。

（21）前掲注（6）栗山氏論文。一方で【Ⅳ】の傍線部「箒木抄」が『光源氏物語抄』の帚木巻を指すのではなく、別の注釈書である可能性もある。その場合でも、『光源氏物語抄』帚木巻の当該箇所にも教隆の注として内容的にも当てはまる注釈が載っているということになり、教隆自身の注か、もしくは教隆が支持していた注釈であったことが確認できる。

第四章　『光源氏物語抄』「俊国朝臣」について
――鎌倉期における紀伝道出身者の源氏学をめぐって

一、はじめに

建長四年（一二五二）から文永四年（一二六七）ごろに関東で編集された『源氏物語』の諸注集成『光源氏物語抄』（『異本紫明抄』とも）や、同時代の河内方の注釈書『原中最秘抄』などには、清原教隆、菅原為長、南家藤原氏の孝範・経範・茂範といった当時の学者たちの注記が散見される。紀伝道出身者の名前がその多数を占めるものの、彼らの注記は各人数例程度しか残っておらず断片的であるため、その源氏学が具体的にどのようなものであったのかについては不明な部分が多い。

本稿では『光源氏物語抄』桐壺巻の「内裏御沙汰の時俊国朝臣の申すと云々」（1）という一節をめぐって、まず「俊国朝臣」が、生存年代、経歴や学問的素養、また親族に『源氏物語』享受者がいることなどから、代々紀伝道の学者を輩出した北家藤原氏内麿流の俊国であることを検討する。さらに『光源氏物語抄』よりもやや遅れて成立した源氏注釈書『雪月抄』の記述を援用することにより、博士家のうち紀伝道出身者による源氏学の一端を明らかにしたい。俊国注もまた一例のみであるが、注記の内容を詳しく知ることができ、「内裏御沙汰」という発言の場も明らかになっていることから、彼らの注釈活動をうかがい知るひとつの手がかりとなる。

二、「行平」注に見える「俊国朝臣」説

「俊国朝臣」の名前は、『光源氏物語抄』桐壺巻に一例確認できる。場面は、桐壺更衣が帝の所へ行くことができないよう他の女御たちが「あやしきわざ」を行ったという箇所である。「あやしきわざ」とはいかなることか、各注が先例を列挙している。その概要は以下の通りである。

①『栄花物語』巻二、花山天皇女御藤原姫子の凋落（「西円釈」）
②『大鏡』師輔伝、中宮安子と女御芳子の村上天皇の寵愛をめぐる争い（「勘文」）
③『後漢書』皇后紀第一〇下、宋皇后紀（無記名）
④『後漢書』皇后紀第一〇上、鄧皇后紀（2）（無記名）

そしてこれら四つを総括するような格好で続くのが⑤「行平」注である。

⑤源氏物語ハ長徳長保之比作之。閑院大将姫入内事寛和年中也。年記十余年以後歟。不可為例乎。後漢書皇后（マヽ）記　令書歟之由内裏御沙汰之時俊国朝臣申云々。　行平

（桐壺巻、一五一―一五二頁）

（源氏物語は長徳長保の比之を作る。閑院大将姫入内の事寛和年中なり。年記十余年以後か。例と為すべからずや。後漢書皇后記により書かしむるかの由内裏御沙汰の時俊国朝臣の申すと云々。）

「閑院大将姫入内事」とは、「西円釈」（前掲①）が指摘した『栄花物語』巻二の例である。女御姫子に対する花山天皇の寵愛が急に衰えたのは継母（故源延光室）の策謀によるかというものであるが、これに対して⑤の「行平」注は、寛和年間（九八五―九八七）の出来事であり、『源氏物

語』の成立した長徳（九九五―九九九）・長保（九九九―一〇〇四）年間から一〇年あまりしか隔たっていないため、先例にはなりえないという。その上で、「内裏御沙汰」つまり内裏における談義（3）の際に、『後漢書』皇后紀によるかということを「俊国朝臣」が発言したと続けている。

では、この「俊国朝臣」とは誰に該当するのだろうか。「俊国朝臣」の発言は「行平」注に引用されたものであり、すると行平はその談義で「俊国朝臣」と同席していたか、あるいは後日「俊国朝臣」の説をなんらかのかたちで知ったということになる。談義の日付については、『河海抄』橋姫巻所引『水原抄』に「後嵯峨院の御時、此の物語の御談義ありけるに、扇を以て月を招く事、諸道に尋られけるに、いづれも所見無し。」（五四八頁）（4）とあることや、『岡屋関白記』建長二年（一二五〇）六月一日条に「午時許り六条殿に参る。数刻祇候す。去んぬる四月廿一日より、毎旬源氏物語の沙汰有るなり。夕に及びて退出す」（『大日本古記録』）（5）とある頃かと推測されてきたが（6）、特定することは難しい。

また行平注は『光源氏物語抄』内に二四例注記が見いだせるものの、伝記的な手がかりがつかめない。しかし前掲の『光源氏物語抄』引用部⑤では、宇都宮歌壇で活躍した僧侶歌人西円の『栄花物語』説を否定していた。西円は当時の『源氏物語』享受者のひとりでもあり、『光源氏物語抄』に多数の所説が見え（7）、建長五年（一二五三）三月二八日には『光源氏物語抄』の編者や清原教隆と議論したこともあった（『光源氏物語抄』初音巻注）。すると、その西円説に異を唱えており、前代あるいは後の時代の人物と判断するべき特段の理由も見当たらないことからすると、行平もまた同時代に生存していた可能性が高い。

行平が『光源氏物語抄』成立当時の人物であるならば、その行平注において話題に上がっている「俊国朝臣」もまた、『光源氏物語抄』編纂期か、もしくはそれに先行する時期を生きた人物でなければならない。

『尊卑分脈』『系図纂要』をはじめ、管見の限りにおいて「俊国」という人物は一五名確認できる。生存年代のみであれば、これから述べる藤原俊国以外にも可能性のある人物はいる。しかし経歴や文学的素養、そして内裏の御談義に参加していることなどを考慮すると、すべてに当てはまるのが藤原氏北家内麿流の藤原俊国である。

三、藤原俊国の経歴

藤原俊国は北家藤原氏内麿流のうち広業流に属する鎌倉中期の学者である。父は宗親（俊親とも）、祖父に『新古今和歌集』の真名序作者で知られる藤原親経がいる。母は名儒菅原為長女であり、為長とは祖父と孫の関係になる。内麿流は、代々文章博士、弁官、蔵人、式部大輔などに任じられ、侍読や東宮学士として「皇室と学問を媒介に関係を結ぶことで」宮廷社会での地位を獲得してきた家柄である（8）。俊国も寛喜二年（一二三〇）正月に秀才に補され（9）、蔵人や右少弁を歴任し（10）、極官は正四位下左京大夫であった（11）。

『吉続記』文永八年（一二七一）八月二九日条に「昨日卯刻俊国朝臣下泉す。生年六十所労雑熱」（『増補史料大成』）とあり、中原師光勘文に「嘉禄三年二月九日己丑、藤原資定七歳・藤原俊国六歳十両人穀倉院学問料を給はる。」（『葉黄記』宝治元年四月二七日条所収）（『史料纂集』）と見えることか

ら逆算すると、生年は建暦二年（一二一二）で、『光源氏物語抄』が編集された建長四年（一二五二）から文永四年（一二六七）頃には四〇代から五〇代前半にさしかかっていた。

前掲の卒去記事の続きに「明儒の名誉有り」と評されている通り、俊国は後嵯峨院や亀山天皇周辺の文事に多く関与していた。後嵯峨院文殿作文会や亀山天皇主催の詩会に参加し（12）、『二十八品并九品詩歌』や『鳩嶺集』に詠作が見える。表や願文の代作（13）、亀山天皇皇子知仁親王の誕生による御湯殿の儀式では読書役を務めている（14）。また後嵯峨院下命の『続古今和歌集』撰集の際には、『新古今和歌集』真名序作者藤原親経の孫として真名序の作者候補にもあがっていた（15）。『関東御式目』の奥書によると、作者（斎藤基茂とされる）は、文永年間に俊国と『文選』の読み合わせを行っており、その際に『御成敗式目』についても言及があったという（16）。

そして『光源氏物語抄』の「俊国朝臣」注を考える上で最も注目されるのが、文永三年（一二六六）から文永六年（一二六九）にかけて、俊国は亀山天皇に『後漢書』を進講しており（17）、その中には『光源氏物語抄』で指摘されていた皇后紀も含まれていたということである。

本云文永三年窮臘之日伏玉炉前奉授天子了　右少弁藤原信國

（歴博本、皇后紀第一〇上奥書）

（本に云ふ、文永三年窮臘の日、玉炉の前に伏し、天子に奉授し了んぬ。右少弁藤原信國）

傍線部を付したように「右少弁藤原信國」とあるが、『弁官補任』などで確認しても文永三年（一二六六）の右少弁は俊国であり、「信國」は誤りと考えられる（18）。後に詳しく述べるが、『光源氏物語抄』において「俊国朝臣」が指摘したのもまた『後漢書』皇后紀であり、それが「内裏御沙汰」において披露されたものであったことを思い合わせると、学者としての職分と『源氏物語』注釈との関連が浮かび上がってくる。

さらに俊国は鎌倉方とも交流があった。金沢文庫本『群書治要』の現存四七巻のうち、巻二一から巻三〇（史部）は、奥書のない巻や補写の巻もあるが、北条（金沢）実時から依頼を受けて俊国が加点したとされている（19）。巻二一奥書には以下のようにある。

当巻点の事、去んぬる文永二年四月の比、左京兆俊国朝臣に誂へ畢んぬ。而して同四年三月廿五日下し遣はす所なり。（中略）越州刺史平（実時花押）（20）

俊国は文永二年（一二六五）四月ごろ北条実時から依頼を受けて加点し、文永四年（一二六七）三月二五日には実時の手元に届けられたという。北条実時は河内本『源氏物語』を所持していたことで知られ、『光源氏物語抄』の編者とする説もある（21）。俊国が鎌倉に下向した事実は確認できないものの（22）、まさに『光源氏物語抄』が編纂された当時に、関東の『源氏物語』享受者とも交流を持っていた。俊国の見解を引用する「行平」の素性は不明であるが、俊国説が鎌倉に流入しても受け入られるだけの基盤があったことが確認できる。

四、俊国周辺と『源氏物語』の享受

藤原俊国が、「俊国朝臣」にふさわしい理由のひとつとして、血縁者に『源氏物語』享受者がいることがある。

俊成、定家、為家と続く御子左家や、河内方の源光行、親行、聖覚、行阿をはじめ、ある『源氏物語』享受者がいると、その周辺にも『源氏物語』に一家言持つ人物がいる場合が多く、血縁的、学統的なまとまりを見せることが、田坂憲二氏の『原中最秘抄』における調査により明らかになっている（２３）。紀伝道では、菅原氏や南家藤原氏の永範・孝範・経範・茂範四代の享受が指摘されており（２４）、その他学問の家では、栗山元子氏によると、『光源氏物語抄』桐壺巻に見える「俊隆」は、清原教隆息ではないかという（２５）。

さて、藤原俊国の場合、父方母方それぞれの祖父が『源氏物語』の注を残している。

父方の祖父親経は、東宮学士、文章博士、右大弁、蔵人頭などを経て、正治二年（一二〇〇）に参議、建仁元年（一二〇一）に従三位。その後も左大弁、勘解由長官、式部大輔を歴任し、承元二年（一二〇八）に権中納言、同年一二月従二位に至った。後白河院、後鳥羽院、宜秋門院や九条兼実などの貴顕に仕え、元号勘申や文案の作成を手がけている。とくに後鳥羽院とは東宮学士となって以来の関係であり、五帝本紀進講や東大寺総供養の願文作成など重用され、『新古今和歌集』の真名序も親経の手によるものである（２６）。

親経の説は、『光源氏物語抄』帚木巻「そこにこそト云事」の項に見える。

親経卿抄物に足下の詞秦本紀に出づと云々（一七三頁）

「そこにこそ」とは、相手に呼びかける表現で、親経は『史記』の秦本紀をあげて説明している。藤原親経は、承元四年（一二一〇）六〇歳で薨じているが、『公卿補任』や『尊卑分脈』を見るに、管見の限りでは『光源氏物語抄』と同時代かそれ以前において、「親経」という名で、「卿」と称されるにふさわしい公卿に至った人物は他に見いだすことができず、これは俊国の祖父である親経を指すと思われる。

俊国の母方の祖父は鎌倉時代前期の鴻儒菅原為長（一一五八―一二四六）である。八九歳の長寿を保ち、その官歴も正二位大蔵卿式部大輔という栄達を遂げた。土御門、順徳、後堀河、四条、後嵯峨天皇という五代の侍読を勤め、『文鳳鈔』『管蠡抄』をはじめとする著作を残している（２７）。北条政子の求めに応じて『貞観政要』を仮名書きに仕立てたともされる（２８）。

為長の『源氏物語』注は、『原中最秘抄』に四例見え、いずれも「為長卿」あるいは「菅大府卿」として引用されている（２９）。

前述の通り、『源氏物語』享受者がある程度血縁的なまとまりをみせていることからすると、『源氏物語』について見解を有する人物を祖父に持つ藤原俊国は、彼自身もまた『源氏物語』を読んでいた可能性がある。そしてその藤原俊国の説が、『光源氏物語抄』桐壺巻の「あやしきわざ」をめぐる「俊国朝臣」説なのではないだろうか（３０）。

このように生存年代や経歴、学問的素養に加え、親族に『源氏物語』享受者がいることからして、『光源氏物語抄』の「俊国朝臣」は、藤原俊国である可能性が高い。そして『源氏物語』享受群としても、為長との関係のみならず、親経とその孫の俊国という北家藤原氏内麿流の系統をも想定することができる。

五、「俊国朝臣」説と家学

この「あやしきわざ」をめぐる藤原俊国の説がどのようなものであったのかについては、陽明文庫所蔵『長珊聞書』桐壺巻所引『雪月抄』の同じ箇所の注記により知ることができる（３１）。

雪月抄（中略）いつぞや内裏にて源氏物語の御談議（ママ）ありけるに、桐壺の更衣のおぼえすぐれたるによりて、うちはしわたどのにあやしきわざなどをしをきけるは、さる本文（ホンモン）のあるかと御尋ありけるに、或人申けるは、後漢書皇后記（ママ）上巻云、後漢主桓帝最愛の后鄧皇后（トウクワウコウ）を餘の后たち嫉妬（ハサメリ）のあまり狹二巫蠱道（フコノヲ）一といふた（ママ）。彼本文は後漢書皇后記（ママ）巻にくはしく見えた。もし此心かとそうしければ、さもいはれたりと云御さたにて有けるよし、つたへうけたまはると申た（ママ）（３２）。

『雪月抄』は弘安末年（一二八八）から正応末年（一二九三）にいたる頃に撰述された非河内方系の注釈書である。編者は不明だが、注記からは、文永からこの頃にかけて京と鎌倉を往還し、親行や藤原公世から教えをうけた人物であることがうかがえる（３３）。『光源氏物語抄』の成立から二〇年ほど経過しているものの、同じ箇所について、内裏における談義の際に『後漢書』皇后紀を引き合いに出したとあるのは、前掲の『光源氏物語抄』と同じ出来事を指しており、『雪月抄』の「或人」とは、藤原俊国のことと判断される。

してみると「俊国朝臣」こと藤原俊国が指摘した『後漢書』皇后紀というのは、鄧皇后の故事であったことがわかる。『雪月抄』のいう桓帝の鄧皇后紀は、『後漢書』皇后紀第一〇上ではなく第一〇下にあるものの、「鄧皇后（トウクワウコウ）を餘の后たち嫉妬（ハサメリ）のあまり狹二巫蠱道（フコノヲ）一といふた（ママ）」という内容は、皇后紀第一〇上和帝の陰皇后紀にある鄧皇后の故事に合致する。

和熹鄧后の宮に入りしより、愛寵稍く衰へ、数恚恨有り。后の外祖母の鄧朱宮掖に出入す。十四年の夏、后は朱と共に巫蠱の道を挾むと言すもの有りて、事発覚す。（中略）帝司徒の魯恭をして節を持して后に策を賜ひ、璽綬を上らしめ、桐宮に遷し、憂を以て死す。立つこと七年、臨平亭部に葬らる。（三八九頁〜）（３４）

鄧皇后（当時は貴人）が後宮に入ると、陰皇后に対する和帝の寵愛はだんだんと衰えていく。恨みを募らせた陰皇后は外祖母の鄧朱とともに呪詛を行ったという内容である。『長珊聞書』より『雪月抄』を孫引きする『岷江入楚』でも（３５）「桓帝」につくるが、「桓帝」は「和帝」の誤りであると思われる。

『雪月抄』では「餘の后たち」と複数にしたり、「かくのみさま〳〵てうせられて、鄧皇后つゐにはかなく成給にけり。」と、迫害の末死亡したことになっているなど、その記述には検討の余地を残すものの（３６）、「或人」が「内裏にて源氏物語の御談議（ママ）ありける」時に指摘した内容については、『後漢書』との照合により、鄧皇后の故事と見てよいであろう。この鄧皇后（貴人）に対する陰皇后の嫉妬については、鄧皇后紀にも「陰后后の徳称日ごとに盛んなるを見て、為す所を知らず、遂に祝詛を造し、以て害を為さんと欲す。」（三九二頁〜）とある（３７）。

つまり藤原俊国は、桐壺帝の寵愛をめぐる桐壺更衣と弘徽殿女御をはじめとする他の女性たちの関係を、『後漢書』の和帝をめぐる鄧皇后（貴人）と陰皇后の関係に基づいて創作されたものと理解しており、「あやしきわざ」とは「巫蠱の道を挾む」つまり巫師による呪詛であったと考えていたことになる。そして鄧皇后（貴人）の故事を伝える陰皇后紀と鄧

皇后紀は、ともに『後漢書』の第一〇上に収められていた。前述の通り俊国は、この巻を亀山天皇に進講したことがあり、『源氏物語』解釈と学者としての学問の関連性を史料により確認することができる。

六、紀伝道出身者の注釈と学問

この当時の注釈書『光源氏物語抄』『原中最秘抄』『紫明抄』『雪月抄』に名前の見える紀伝道出身者には、前代の人物も含まれるが、俊国とその両祖父である親経と菅原為長の他、公良(為長息)、南家藤原氏の永範、孝範、経範、茂範、式家藤原氏の基長、大江匡房がいる。彼らの発言に関わる注釈の数は、管見の限りでは一七例と少ない。最も多い例で為長が『原中最秘抄』に四例、式家藤原氏基長が『原中最秘抄』と『雪月抄』逸文とされる注釈とで四例にとどまり、匡房が二例、その他は各一例ずつのみである（３８）。

その中で中国史書を典拠として引用した注記は、俊国注の他、前述の親経が「そこにこそ」の語釈として『史記』秦本紀の「足下」を引いた例（３９）、藤原基長が『漢書』を指摘した例（『河海抄』橋姫巻所引の『水原抄』（４０）の、全三例である。

まず親経と『史記』の関係については、前述の通り、後鳥羽院に五帝本紀を進講したことがあった（４１）。基長については、田坂憲二氏の飛鳥井雅有の弟「基長」とする説もあるが（４２）、落合博志氏の指摘される式家藤原氏出身の紀伝道の学者基長と見る説によるべきであろう（４３）。落合氏、そして田坂氏ご自身も指摘される通り、基長注は、「基長卿」「基長三品」と記されているが、雅有弟は公卿に至っていないからである。

さらにこれらに準じるものとして、『紫明抄』（『河海抄』にも）帚木巻「おさ〳〵」の注に「治天下匡房卿説」（二一頁）とあるのは、『弄花抄』に「又左伝には治（ヲサヲサシ）と云ふ、政事を治理する也と云々」（一九頁）（４４）と説明しているを参考にすると、『紫明抄』の匡房説も『春秋左氏伝』によると判断してよいだろうか。匡房は堀河天皇に『春秋左氏伝』を進講したこともあった（４５）。また『原中最秘抄』紅葉賀巻の注記によると、藤原孝範が「后詞」を『後漢書』皇后紀に基づくものと考えていた可能性がある（４６）。これらを含めれば五例と、中国史書に関する指摘は、全用例数の三分の一に当たる。その他彼らの学識に関連する注として、『原中最秘抄』少女巻に「枝の雪」の典拠をめぐって「基長三品説に云ふ、枝の雪の事猶ほ深意有りと云々」（五六五頁）（４７）とあることや、字訓の指摘などもある。しかし彼らの注釈は、必ずしも史書をはじめとした漢籍に関する指摘に限定されるわけではなく、有職故実や仏典、日本紀と関連のある説もある（４８）。『光源氏物語抄』に一五六例という多数の注記が残っている明経道の清原教隆の例を考えても、経書のみならず、史書や「長恨歌」、国書からの引用も複数ある。してみると、紀伝道の学者たちの場合も、中国史書に基づいた解釈は、あくまでも注釈の一部と考えた方がよいであろう。

七、俊国注の位置づけ

こうした状況を踏まえた上で、俊国説の『後漢書』引用を考える際参考になるのは、同じく談義という場である『河海抄』橋姫巻所収『水原抄』「扇を以て月を招く事」の例である。

後嵯峨院御時、此物語の御談義ありけるに、扇を以て月を招く事、諸道に尋られけるに、いづれも所見無し。後日基長卿云ふ、漢書に扇を以て月をまなぶと云事あり。つ与ふ五音通ずる故歟。然者まなぶと心得可き歟水原

（『河海抄』五四八頁）

宇治の八の宮邸で大君とたわむれる中の君が「扇ならで、これしても月はまねきつべかりけり」（新編日本古典文学全集、⑤―一三九頁）と言った場面である（４９）。御談義において後嵯峨院は、この箇所の典拠について各方面の専門家にお尋ねになったものの、これに応じられる者はいなかった。そして後日になって基長が『漢書』に依るべきことを奏上したという。これだけでは、基長はこの談義に参列しており後日改めて所見を奏上したのか、談義には出席していなかったものの、御下問があったのか、それとも人づてにこの出来事を聞いたのか、その辺の事情が明らかではない。しかし「諸道」に対して下問が行われた際に紀伝道の学者が『漢書』をもって応えたというのは、その専門性が尊重されたためと考えられる。

この注記について『原中最秘抄』の伝えるところでは、「永範卿」の説として以下のようにある。

扇にて月を招ク事永範卿説ニ云、漢書に扇にて月をまねぶと云事あり。ひときと五音通ずるゆへ也。然ばまなぶと得心す可き歟。（後略）

（『原中最秘抄』五九一頁）（５０）

この人名の齟齬について田坂氏は、『河海抄』所引の『水原抄』に言う後嵯峨院時代の御前談義が虚構であるとは考えにくく、「永範の方が基長より約一世紀程溯った人物であるから、基長は永範の言を逆に親行辺りから聞き、それを院に奏上したというような事情でもあったのではないか。」と推測されている（５１）。基長については落合氏の説に従いたいが、もし田坂氏の指摘されるような事情があったとしても、永範もまた、後白河・二条・高倉天皇という三代の侍読を務め、文章博士、正三位宮内卿兼式部大輔に至る栄達を遂げた大儒であるから事情は変わらない。むしろ『明月記』建保五年（一二一七）七月四日条には、永範の子である孝範が定家に語った話として、「漢書の説、故永範卿の説を受け、悉く之を読むと云々。」（国書刊行会本）とある。これにより、永範が『漢書』について家説を伝えていたことが確認できるとともに、学者としての学問と『源氏物語』注釈との関連がより鮮明になる。そして基長が永範の説であることを承知の上で後嵯峨院に奏したのだとしたら、それもまた専門家の意見を重視した行為のひとつと言える。

そして俊国の例も「内裏御沙汰の時」（『光源氏物語抄』）という談義の場であり、「さる本文（ホンモン）のあるかと御尋ありけるに」（『雪月抄』）とあるように、本説本文を尋ねられていた。すると俊国もまた、紀伝道の学者としてその専門性が期待され、それに応えたのが『後漢書』皇后紀の鄧皇后の故事による解釈であったと考えられる。彼らの注はつねに中国史書からの引用であるわけではないが、両者の結びつきを見出すことのできる場のひとつとして、御前談義を想定できるのではないだろうか。

基長の例においては、後嵯峨院との関係は伺えるものの（５２）、その発言がそもそも誰の説であり、どのような状況で後嵯峨院に伝えられたのか定かではなかった。それに対して俊国の事例では、談義の時期は特定できないものの、『源氏物語』解釈と紀伝道の学者としての活動との関連、そして談義に伺候しその場で当意即妙に答えることにより、天皇周辺の『源氏物語』解釈に直接影響を与えていたことが明確になってくる。

また基長の例では、『河海抄』所引の『水原抄』と『原中最秘抄』という河内方の注釈書に限った継承であったが、俊国注の場合、『光源氏物語

抄』と『雪月抄』という、成り立ちの異なる複数の注釈書に採録されている。まず『光源氏物語抄』では西円説に疑問をもった行平注により肯定的に引用されており、『雪月抄』でも、「さもいはれたりと云御さたにて有けるよし、つたへうけたまはると申（ママ）た。」とあるように、編者は俊国（「或人」）の説を人から伝え聞いたこととして自身の注釈書に載せている。後代の注釈書では、『雪月抄』を引く『長珊聞書』から、さらに孫引きした『岷江入楚』くらいにしか引用されていないが（53）、俊国説は当時言い伝えられ、支持を得ていたことがうかがえる（54）。

八、おわりに

俊国の説は一例のみであるが、それによってすでに知られていた基長の例を補完し、従来あまり積極的に評価されて来なかった紀伝道の学者の『源氏物語』注釈と、職分としての学識との関わりについて、その一端を明らかにすることができた。彼らの注釈は、中国史書からの引用に限定されるわけではないが、時として両者は密接に関わっており、そのひとつの場として御前談義が想定できるのではないだろうか。さらに俊国の説は、同時代の複数の注釈書にも肯定的に引用されており、ある程度の影響力を有していたことをうかがわせる。紀伝道をはじめ博士家の学者たちは、天皇の侍読のみならず、貴族たちにも漢籍の講義をするなど、貴族社会の学問を領導する立場にあった（55）。そのような彼らが、『源氏物語』享受と注釈形成においてはどのように位置づけられるのか。漢籍受容以外の注記を含め明らかにしていきたい。

注

（1）『光源氏物語抄』の本文は中野幸一・栗山元子編『源氏物語古註釈叢刊』第一巻（武蔵野書院、二〇〇九年九月　ノートルダム清心女子大学図書館黒川文庫蔵本）により、影印本（『光源氏物語抄　正宗敦夫収集善本叢書　第Ⅰ期』第一巻　武蔵野書院、二〇一〇年二月）をも参照した。引用本文は書き下し、句読点や濁点を補い、傍注を省略するなど表記を改めた箇所がある。

（2）傍注には「和常后竇皇后也」とあるが、「陰皇后見」后―徳―称日盛」不知所為遂造祝―祖（ママ）」は、皇后紀第一〇上、和帝の鄧皇后紀の一節に当たる。

（3）『大漢和辞典』（大修館書店）を見るに、「談義」は「すぢみちをはなす。義理をかたる」、「談議」は「相談してとりはからふ。」とあり、異なる意味を持つが、古注釈では「談義」「談議」「談儀」などさまざまに表記されている。『日本国語大辞典　第二版』（小学館）には語義として「文学、芸術その他種々のことについて解説し、論説して示すこと。（後略）」があり、本稿で取り上げる箇所も「あやしきわざ」の本説・本文を解き明かす場面であることから、熟語の原義に従いひとまず「談義」で統一した。実際には、いずれも周知の例であるが、飛鳥井雅有が藤原為家・阿仏尼のもとを訪れ、教えを受けた講義形式や、『光源氏物語抄』初音巻の建長五年（一二五三）三月二八日に行われた「談議（ママ）」では、和歌の異同をめぐり清原教隆や西円の間で、『弘安源氏論議』に通じるような議論も行われていた。談義の様相については、今後の課題としたい。

（4）『河海抄』『紫明抄』の本文は玉上琢彌編『紫明抄・河海抄』（角川書店、一九九一年二月）による。漢文体の部分は、語順を改め、送り仮名を付すなどした箇所がある。句読点や濁点は補った。

（5）古記録の引用はすべて書き下し文に改めた。

（6）堀部正二「鎌倉末期の古註「雪月抄」逸文について」『中古日本文学の研究』（教育図書株式会社、一九四三年一月）。この論文は『光源氏物語抄』と同じ談義を指すものと考えられる『雪月抄』の注釈について言及したものである。両書の関係については後述する。ただし『岡屋関白記』のいう六条殿は、宣陽門院覲子内親王と近衛兼経の妹鷹司院の御所であった。金光桂子「『風葉和歌集』の政教性（下）―物語享受の一様相―」『国語国文』六七―一〇（一九九八年一〇月。のちに同氏『中世の王朝物語　享受と創造』臨川書店、二〇一七年五月所収。）を参照されたい。

（7）堤康夫氏の調査によると四四一例にのぼる。（「『紫明抄』の方法―『異本紫明抄』から『紫明抄』へ―」『源氏物語注釈史の基礎的研究』おうふう、一九九四年二月）

（8）細谷勘資「内麿流（日野流）藤原氏の形成過程」『中世宮廷儀式書成立史の研究』（勉誠出版、二〇〇七年二月、一九八八年一一月初出）参照。

（9）『葉黄記』宝治元年四月二七日条所収中原師光勘文。

（10）『職事補任』亀山院、『弁官補任』文永二年。

（11）『尊卑分脈』では「右京大夫正四位下」とするが、他史料ではいずれも「左京兆」（『吉続記』文永五年五月一九日条）または「左京大夫」（『民経記』文永五年一〇月五日条など）とあり、こちらが正しいようである。

（12）『葉黄記』宝治元年三月二〇日条、四月二〇日条、『吉続記』文永五年八月三日条、同八年正月九日条など。亀山院主催の詩会では、献題や講師を勤めることもあった。

（13）内大臣九条忠家随身兵仗辞退の表（『葉黄記』寛元四年一二月一九日条）や大宮院姞子御願禅林寺御堂供養願文（『民経記』文永元年一一月二九日条）など。

（14）『新抄』（外記日記）文永二年七月一六日条。

（15）『民経記』文永二年六月二五日条。

（16）池内義資編『中世法制史料集　別巻　御成敗式目註釈書集要』（岩波書店、一九七八年一〇月）、義江彰夫「『関東御式目』作者考」石井進編『中世の法と政治』（吉川弘文館、一九九二年七月）、森幸夫「六波羅奉行人斎藤氏の諸活動」『六波羅探題の研究』（続群書類従完成会、二〇〇五年四月）など参照。管見の限りでは、俊国の伝記的研究は行われていないようであるが、『関東御式目』関係の論文の中で、多賀宗隼「「関東武家式目」―鎌倉時代政治思想の一面―」『論集中世文化史　上　公家武家篇』（法蔵館、一九八五年九月）が比較的詳しく触れている。本稿においても参照した。

（17）国立歴史民俗博物館蔵本（以下歴博本と称する）ならびに宮内庁書陵部蔵本（以下書陵部本）の帝紀第六・第九・皇后紀第一〇上と、歴博本の列伝第六四上、第六六・第六九下・第七三・第七四奥書等による。両本の関係について尾崎康「正史宋元版書誌解題」『正史宗元版の研究』（汲古書院、一九八九年一月）によると、歴博本は平安後期以降の「諸家の読法を集成した三条西家本を、永禄六年（一五六三）に林宗二が移点抄写させた」本であり、

書陵部本の勘記は、同じく三条西家本を抄出したものだという。しかし書陵部本にあり、歴博本にない記述もあるため、なお注意を要する。本稿では、国立歴史民俗博物館所蔵『宋版後漢書』（重要文化財・資料番号H―175）により、引用の際は書き下し文を付した。

（18）すでに小林芳規『平安鎌倉時代に於ける漢籍訓読の国語史的研究』（「漢籍古點奥書識語集」など）（東京大学出版会、一九六七年三月）に指摘されている。小林氏の調査は書陵部本に基づくものである。

（19）他巻の加点者には、清原教隆、藤原茂範がおり、『光源氏物語抄』や『原中最秘抄』に注記の見える人物である。

（20）金沢文庫本『群書治要』の奥書は『古典研究会叢書　漢籍之部　第十一巻　群書治要（三）』（汲古書院、一九八九年五月）による。引用は書き下し文に改め句読点を付した。

（21）堤康夫『異本紫明抄』編者に関する一考察―清原教隆との関係を中心にして―」『源氏物語注釈史の基礎的研究』（おうふう、一九九四年二月、一九八七年一月初出）など。

（22）和島芳男氏も俊国が鎌倉に下向した形跡はなく、『群書治要』の加点はすべて京都で行われたであろうことを指摘されている。（「儒学の受容」『中世の儒学』吉川弘文館、一九六五年三月）

（23）田坂憲二「中世源氏物語享受史の一面―『原中最秘抄』を中心に―」『源氏物語享受史論考』（風間書房、二〇〇九年一〇月、一九八七年一二月初出）。

（24）注（23）田坂氏論文。

（25）栗山元子『『光源氏物語抄』編者考―金沢実時説の検討を中心に―」陣野英則他編『平安文学の古注釈と受容』第二集（武蔵野書院、二〇〇九年九月）。

（26）親経の伝記については、細谷勘資『『親経卿記』と藤原親経」大島幸雄・細谷勘資・木本好信編『親経卿記』（高科書店、一九九四年七月）に詳しい。また堀川貴司「新古今時代の漢文学―真名序を中心に―」『詩のかたち・詩のこころ―中世日本漢文学研究―』（若草書房、二〇〇六年一一月）をも参照した。

（27）菅原為長の伝記については、山崎誠「菅大府卿為長伝小考」『中世学問史の基底と展開』（和泉書院、一九九三年二月）、大曾根章介「中世漢文学の諸相―転換期における漢文学―」『大曾根章介　日本漢文学論集』第一巻（汲古書院、一九九八年六月）、蔭木英雄「中世初期縉紳漢文学概観―菅原為長を手がかりに―」『相愛大学相愛女子短期大学研究論集国文・家政編』三一（一九八四年二月）などに詳しい。

（28）一条兼良『樵談治要』などに伝える。

（29）田坂憲二「『原中最秘抄』の基礎的考察」『源氏物語享受史　論考』（風間書房、二〇〇九年一〇月、一九八六年六月初出）

（30）『源氏物語』について伝授が行われたかは不明だが、俊国は藤氏と菅家両方の家説を継承していた。歴博本・書陵部本の奥書によると、広業流は正家以降『後漢書』の説を代々伝えており、俊国もこれに連なる。（注（26）細谷氏論文参照。書陵部本に基づく）。さらに為長撰の類書である『文鳳抄』への加点も行って

いたことが神宮文庫蔵『文鳳抄』の奥書に残されている（小林芳規「大江家以外の紀伝道諸家の訓法」前掲注（18）同書所収。）。なお歴博本・書陵部本『後漢書』にも帝紀第六奥書に「菅説抄＝注載了少字。合摺本了才字。以此本奉授天子訖。右少弁藤俊國」（菅説抄＝注載し了んぬ少字。摺本を合せ了んぬ才字。此の本を以て天子に奉授し訖んぬ。右少弁藤俊國）（歴博本。改行等略。句読点は私意。＝…「言」偏のみあり。）とある通り、俊国が進講に用いた本には菅家の説が載せられていた。例えば歴博本帝紀第一上奥書によると嘉禎四年（一二三八）に菅原氏長が祖父為長から説を受けており、「菅説抄」もまた菅家の説と判断される。書陵部本に基づく小林氏、細谷氏論文は、俊国が直接為長から菅家の説を知った可能性を指摘するが、歴博本他巻の奥書を参照するに、広業流に菅家の説が流入した経路についてはなお検討を要するように思う。

（31）『光源氏物語抄』と『雪月抄』の当該箇所の関連性、さらに『後漢書』の具体的な箇所については、沼尻利通「「あやしきわざ」と弘徽殿大后」（『平安文学の発想と生成』國學院大學大学院、二〇〇七年一二月、二〇〇六年五月初出）でも触れられている。ただし、『源氏物語』諸本間の異同と、それにより導かれる注釈書の「あやしきわざ」の解釈に論の中心があるため、注記自体についての詳しい検証はなく、俊国のことにも言及されていない。

（32）『雪月抄』の引用は、国文学研究資料館蔵の『長珊聞書』紙焼写真（E1867）による。句読点と傍線は補った。本文中「狭（ハサメリ）二巫蠱道（フコノヲ）」の左注には「セハシ」「カンナキ」「マシワサ」ともある。

（33）注（6）堀部氏論文。

（34）『後漢書』の引用は、渡邉義浩他編『全譯後漢書』第二冊（汲古書院、二〇〇四年一月）による。本文は書き下し文で示した。

（35）『岷江入楚』所引の『雪月抄』については、山脇毅「雪月抄について」『平安文学研究』一一（一九五三年一月）を参照されたい。

（36）実際の鄧皇后は、皇太后として陰皇后や和帝の崩御後も権力を持ち続けた。

（37）これは前掲『光源氏物語抄』の④と一致する。前掲注（2）参照。

（38）『原中最秘抄』の用例ついては注（29）田坂氏論文、『雪月抄』については注（6）堀部氏論文、『紫明抄』については、『紫明抄・河海抄』（角川書店）の索引を参照した。同じ注記が複数の注釈書に採用されている場合は数えない。なお基長の注釈については、落合博志「『原中最秘抄』小見―一、二の人物と逸文資料など―」（『法政大学教養部紀要』九三、一九九五年二月）を参照した。それによると基長注は正徹の『一滴集』にも二例あるという。今回の考察では同時代の注釈書に限定したが、『河海抄』賢木巻には、「孝範朝臣記」からの引用があり、同書松風巻にも「小倉山の黛は簾に当たる色、大覚寺の泉は枕に落つる声（為長卿）」（書き下し文に改めた）とある。

（３９）ただし秦本紀にはなく、秦始皇本紀のことを指すか。
（４０）後述する通り『原中最秘抄』では「永範卿説」とある。
（４１）『玉葉』建久元年一〇月一日条。
（４２）注（２３）田坂氏論文。
（４３）注（３８）落合氏論文。
（４４）『弄花抄』の引用は、伊井春樹編『源氏物語古注集成』第八巻（桜楓社、一九八三年四月）による。本文は書き下し文に改めた句読点を付した。
（４５）『中右記』嘉保二年五月二七日条。
（４６）「孝範卿説云后詞云々。（中略）後漢書后妃伝云、有二四徳一。一ニハ云二婦徳一、二ニハ云二婦容一、三ニハ云二婦言一、四ニハ云二婦功一云々。私云以二此意一加二了見一に後漢書文相叶へり。可レ為二后言一歟。孝光三品対二光行一被レ申侍しは后詞と号するも存二此儀一歟云々」（『源氏物語大成』）。「孝光」について欄外には「範」とあり、それに対して『源氏物語大成』の脚注が、「欄外に「範」トアルハ「光」ノ誤リヲ訂セルナルベシ」としているのに従う。ただし孝範は三位には至っていない。なお検討を要する。
（４７）『原中最秘抄』の引用は、『源氏物語大成』巻七（中央公論社）により、書き下し文に改め句読点を付すなどした。
（４８）注（３８）落合氏論文参照。
（４９）『水原抄』逸文では、「つ与ふ五音通ずる」と説明していたが、本文は「月はまねきつべかりけり」であるから、「つ」と「ふ」の対立では整合性がとれない。後述する『原注最秘抄』が指摘するように、「まねひ」と「まねき」の対立であるべきか。
（５０）漢文体の部分は語順を改め、送り仮名を付すなどした。
（５１）注（２９）田坂氏論文。親行の父光行は、永範の子である孝範に漢学を師事していた。
（５２）注（３８）落合氏論文によると、『鳩嶺集』の基長作には「後嵯峨院御願文」「後嵯峨院五部大乗経供御願文」からの採録があるという。
（５３）『岷江入楚』は「私云此義正説猶可二引勘一」（『源氏物語古註釈集成』）と肯定的に捉えている。
（５４）和歌の例であるが、当時の談義の例の中には非公開のものもあった。飛鳥井雅有の『春の深山路』が伝える弘安三年（一二八〇）六月二日より東宮（後の伏見天皇）方で行われた『古今和歌集』談義は、秘本の伝授があり、出席者は雅有、源具顕、藤原定成といった側近に限れており、他の人が来ると講義は中断されている。俊国の説が当時流布していたところをみると、これよりは開かれた出席者も多い催しであったと推測できる。（『春の深山路』については、岩佐美代子「源具顕―生涯と作品―」『京極派歌人の研究〔改訂新装版〕』笠間書院、二〇〇七年一二月などを参照した。）
（５５）論考中で触れた例の他、経範は後嵯峨院侍読、茂範は宗尊親王侍読、菅原為長息の公良は後深草天皇、亀山天皇の侍読であった。また基長は世仁親王（のちの後宇多天皇）東宮学士に任じられている。貴族に対しては、例えば定家が孝範に『漢書』の説を

伝授してもらう約束をしている（『明月記』建保五年七月四日条）。為長は二条良実に『後漢書』を伝授しており、そこには平経高も同席していた（『平戸記』寛元三年五月一九日条）。漢籍ではないが、俊国は、吉田経長に対して、『寛平御遺誡』を授けている（『吉続記』文永五年五月一九日条）。

小括

第三部の最大の目的は、第三章でも少し言及し、主には第四章で論じた博士家出身者が『源氏物語』を理解する時に、どのような漢籍を用いて、どのような解釈を行っていたのか明らかにするということにあった。博士家の学者たちは、男性文人の中でもまさにその中核に位置する人物である。取り上げたのは、主に紀伝道の学者藤原俊国であったが、『源氏物語』を理解するために用いた漢籍は、彼が家学として読み方を伝えていた『後漢書』であった。つまり『源氏物語』を理解する際にも家学に関連付けようとする思考回路がはたらいていたことが見えてくる。このことは第三章で触れた清原教隆にも言えることであった。教隆は帚木巻の冒頭の構造を家学である『春秋左氏伝』の構造になぞらえて理解しようとしていた。この家学との関連付けというのは、この当時の注釈が専門家の意見を尊重するということを重要視する風潮とも一致するところである。さらにこの教隆の発想は、『光源氏物語抄』の編者とされる「今案」注や、葉連の『源氏物語』理解にも影響を及ぼしていた。経書の引用が博士家の教隆自身のみならず周辺の注釈者たちにも影響を与え、実践されていったということが、『光源氏物語抄』の注記よりうかがえる。してみると、素寂が教隆と直接の交流があったかは不明であるが、素寂の周公旦注釈も、このような博士家を頂点としてその周辺に位置する同時代の経書引用を用いた注釈と位置づけることができるのではないだろうか。その上、『光源氏物語抄』という、経書引用にも肯定的であった編者の注釈書に引用されることで、光源氏の須磨流離を理解するにあたり、『尚書』の周公旦故事を援用した素寂注も妥当性が増したのではないだろうか。『光源氏物語抄』は諸注集成であるから、他の注釈者による周公旦故事の引用とも補完し合い、周公旦故事と光源氏像の結びつきが強化されたものと考えられる。

また、第四章における俊国に関する考察を通して、「行平」の人物像についても少しずつ明らかになってきた。「行平」というのは、『光源氏物語抄』全四冊のうち、第一冊目の夕顔巻までに見える注釈者で、全部で二四例ある。引用書は、『尚書』『後漢書』『淮南子』『文選』など漢籍から、『日本記』『清涼殿記』『万葉集』『こまのの物語』「顕昭抄物」といった和書に及ぶ。注釈も、字訓の提示から語釈、有職関係まであるが、引歌はない。これは八木意知男氏が、清原教隆の注釈の特徴をまとめた中で、やはり引歌が少ないということが想起される（1）。第四章で述べたごとく、編者と同時代の人物と思われるが、

源氏物語ハ長徳長保之比作之。閑院大将姫入内事寛和年中也。年記十余年以後歟。不可為例乎。後漢書皇后記（ママ）令書歟之由内裏御沙汰之時俊国朝臣申云々。　行平

（源氏物語は長徳長保の比之を作る。閑院大将姫入内の事寛和年中なり。年記十余年以後か。例と為すべからずや。後漢書皇后記により書かしむるかの由内裏御沙汰の時俊国朝臣の申すと云々。）

（『光源氏物語抄』桐壺巻、一五二頁）（2）

とあることから、行平は、俊国の談義での発言を知り得る人物ということになる。つまり、ひとつの可能性として、「行平」もまたこの談義に列席していた可能性さえ生まれてくる。行平がこの談義の出席者に含まれ

ていたのか、それとも『雪月抄』にも引用されているくらいであるから、当時の貴族達の間でこの談義は話題になっており、談義の様子をだれかから聞いたのか両方の可能性があるが、俊国の周辺に位置する人物であったことは確かである。前述の通り、俊国は鎌倉に下向したことはなかったようであるが、鎌倉とも交流を持っていたから、行平も京在住・鎌倉在住どちらの可能性もある。多様な書物を引用していることから、知識層であったことがうかがえるが、俊国は、（斎藤基茂とされる）『御成敗式目』作者と、『文選』の読み合わせを行っていることからすると、貴族の可能性もあれば、武家の可能性もある。ひとまず今回第四章の考察を通して見えてきたいくつかの可能性を、覚書として行平という視点からまとめておく次第である。

注

（1）八木意知男「異本紫明抄と紫明抄」『源氏物語講座　第八巻』（勉誠社、一九九二年一二月）

（2）『光源氏物語抄』の本文は中野幸一・栗山元子編『源氏物語古註釈叢刊』第一巻（武蔵野書院、二〇〇九年九月）による。

終章　研究の成果と今後の課題

一、各部の成果

本論文では、まず、平安前・中期の男性文人の物語創作そのものの問題として、『落窪物語』における漢籍受容について検討した。その上で、『落窪物語』を含む平安期の男性文人の物語創作を継承するものとして、創作と注釈両方の性格を合せ持つ源光行の翻案説話『蒙求和歌』『百詠和歌』、さらに『源氏物語』の注釈書『光源氏物語抄』を位置づけ、創作や注釈のために、男性文人が物語と対峙する際、彼らの本業としての漢籍の知がどのように関わってくるのか考察を進めてきた。まず、各部で得られた成果をまとめておきたい。

〈第Ⅰ部＝創作〉

第一部では、まず、平安前・中期の『源氏物語』以前の物語自体の問題として、その中で漢籍受容の研究があまり進んでいなかった『落窪物語』について、新たな典拠を指摘した。そのことにより『落窪物語』もまた継子物語という括りに縛られることなく、男性文人により創作された『源氏物語』以前の物語の一つとして位置づけられることを補強した。

第一章では、先行研究で指摘されている漢籍典拠を、引用の形態別に分類し、物語のどのようなところに漢籍が受容されているのかということを整理した。『落窪物語』内に見いだされている具体的な漢籍典拠は決して多くはないが、登場人物の発言に引用されているもの、物語のプロットに関わるもの、もっと深く思想的な部分に関わるものと、表層部分から深層に至るまで漢籍の受容が見込まれることを整理し、『落窪物語』内に漢籍受容を求めることが研究方法として妥当であることを確認した。

その上で第二章では、『落窪物語』の登場人物や落窪の君と男主人公道頼の恋愛譚の展開に唐代伝奇の『遊仙窟』が受容されている可能性について論じた。落窪の君と道頼が出会ってから逢瀬を経て打ち解けるまでの場面には、①人物関係の対応、②垣間見、③夜明けを告げる鶏鳴、④「あひがたき」女との逢瀬、⑤露骨な性愛描写など、『遊仙窟』を踏まえたと思われる展開がある。つまり、いじめに苦しむ継子姫の前に権門の貴公子が現れ、恋愛関係となり、継子姫を苦境から救うことは、継子物語の基本要素であるが、さらに二人の恋愛を具体的に語る基盤として、『落窪物語』では『遊仙窟』の要素が取り入れられているのではないかということを述べた。『遊仙窟』の張文成と十娘が出会い、恋が成就するまでの展開は、物語の基盤として『伊勢物語』や『源氏物語』にも取り入れられており（1）、唐代伝奇受容の側面からも、『落窪物語』は、平安物語全般の中に位置づけることができる作品であることを示している。その上で『落窪物語』の独自性を示せば、同じく男性文人の作とされる『竹取物語』や『うつほ物語』俊蔭巻は、現実では起こりえない超常現象や仙境的な世界を描いていたが、『落窪物語』はそのような非現実的な部分は捨象されている。捨象されているというよりは、現実世界の中で、落窪という非日常空間をつくり出した。この落窪は、いじめの一環として落窪の君が住まわされている部屋であり、具体的に屋敷のどの部分に当たるのかはわからないが、中納言家の生活空間からは隔離された場所であった。また、情交場面を詳しく書くことについても、『遊仙窟』をはじめとする唐代伝奇の影響を想定したが、それにより、情交の様子より

も、落窪の君の装束が粗末であることが浮かび上がる描写になっており、『遊仙窟』を取り入れることにより、落窪の君が継子として冷遇されていることが強調されるようになっていた。『落窪物語』の唐代伝奇受容については、三木雅博氏により、『鶯鶯伝』との人物関係の対応が指摘されているが（2）、そもそもこの『鶯鶯伝』は、『遊仙窟』の影響下にある作品である。『落窪物語』の『遊仙窟』引用には、『鶯鶯伝』と重層的な受容であるといえる部分も存在しており、『遊仙窟』の引用を認めることにより、人物関係における『鶯鶯伝』の受容の可能性をも高めることができると言える。

第三章では、『落窪物語』に「しれもの」として周囲から嘲笑される面白の駒が登場することについて、作者層とされる男性文人の興味関心から再検討を試みた。「白物（しれもの）」や「痴」は、仕官と関わる概念であり、源順「高鳳が貴賤の交りを同じくするを刺る歌」（『本朝文粋』巻一所収）のように漢籍作品の直接のテーマにも選ばれるなど、男性文人にとって関心の高いテーマであった。才覚はあるものの沈淪を余儀なくされていた男性文人にとって、不才にも関わらず立ち交じらう「しれもの」の存在はとうてい容認できないものであったはずである。物語には公的世界では満たされない心を慰める効果があった（3）とすると、その魂の開放が、負の方向に作用したのが面白の駒の描写ではないだろうか。してみると、面白の駒の大鼻についても、従来の好色性（4）のみに留まらない、賢愚の対比に基づく悪意がこめられたものとして解釈できる可能性を提示した。『斉民要術』「養牛馬驢騾　第五六」や都良香「良馬讃」（『本朝文粋』巻一二所収）によると、鼻の大きいことは良馬の形象とされているが、『落窪物語』の中にも、男主人公道頼が、「（車を）牛よわくは面白の駒にかけ給へ。」（巻二、一四六頁）（5）と面白の駒を罵った場面があり、面白の駒を馬力のある馬と見なしていることが確認できる。『落窪物語』では戯画化されているが、大きな鼻孔は良馬の相でもあり、それをあえて無能な人間の形象としたところに作者のねらいがこめられているのではないだろうか。仕官に関わるテーマは『うつほ物語』などと共通するテーマであり、『落窪物語』と『うつほ物語』の近さ、前期物語同士の共通点を新に加えることができた。

以上のように、従来継子物語の系譜で語られることの多かった『落窪物語』について、男性文人の作品と言えるだけの特徴を有することを漢籍受容の面から補強することができた。具体的な作者名について明らかにすることは難しいが、第三章で論じたように、仕官に関わるテーマをとりあげ、それに対する鬱憤を晴らすような筆致から推測すると、やはり実生活では沈淪にあえぐ不遇の男性文人があてはまるのではないだろうか。

〈第二部＝創作と注釈のはざま〉

第Ⅱ部では、創作と注釈の中間に位置するものとして、源光行の翻案説話である『蒙求和歌』や『百詠和歌』について、光行の参照した典籍を明らかにすることで、その表現や創作意図を考察した。

『蒙求和歌』『百詠和歌』の記述は、単に創作のもととなった『蒙求』『李嶠百詠』の注本を翻訳した訳ではなく、本朝における故事の受容状況を踏まえ、和歌や物語文学の要素を取り入れたものであることは、『蒙

求和歌』を中心に、先行研究（6）でもすでに指摘されている。

そこでまず第一章では、比較的個別研究も行われている『蒙求和歌』について、光行が一貫して理想とする人物像を探し、そのひとつとして「なさけ」ある人物を提示した。「なさけ」あることは平安期より理想とされ、『蒙求和歌』では、「仁」の訳語として「なさけ」が用いられることがあった。そしてその「なさけ」あることが際立つように漢故事の翻案がなされており、とくに巻五恋部「無塩如漆」では、光行が創作のもとにしたであろう古注『蒙求』のプロットを変更し、宣王の「なさけ」あるエピソードを創作していた。『蒙求和歌』では、宣王は情け深さから醜女を娶ったことになっているのであるが、これは独自の展開であった。古注『蒙求』「無塩如漆」が注目していたのは、鍾離春の醜貌であり、また古注『蒙求』の出典で、『蒙求和歌』の記述にも踏まえられている『列女伝』でも、鍾離春が宣王に迎えられたのは、鍾離春が賢女だからであった。してみると『蒙求和歌』の「なさけ」から醜女の鍾離春を娶るという展開は、「なさけ」深い為政者を描こうとした光行の改変であると思われ、さらにこのような展開は、光源氏と末摘花を彷彿とさせるものがある。こうした大きな改変が行われているのは、数ある「なさけ」の語義のうち「慈悲深い」といった意味の場合であり、しかも為政者に目立つことは光行の理想を反映したものと考えられる。

『蒙求和歌』に対して、『百詠和歌』は、一話ごとの検討がほとんどが進んでいない。そこで第二章・第三章では、『百詠和歌』について、創作的要素と注釈的要素両方を持ち合わせていることを、光行の創作過程とともに提示した。

まず第二章では、第一天象部「月」に引用される破鏡説話について論じた。『百詠和歌』第一天象部「月」に引用される破鏡説話の構成要素について、従来明らかにされている漢籍典拠（『神異経』や徐徳言説話）（7）に加え、平安後期における破鏡説話（曹文説話など）の受容を含め再検討することにより、先行研究で指摘されているよりも多岐にわたる類話が取り込まれていることを明らかにした。それにより、一話の主題についても、人間同士の機微に触れたものへと深化していることを指摘した。具体的には、光行が創作に際し参照した『李嶠百詠』張庭芳注では、『神異経』が引かれおり、そこで語られていたのは、妻の不義密通であった。それに対して光行が改変した『百詠和歌』においては、単に他に男を儲けたというのではなく、夫婦の心情を書くことにより、それぞれの苦悩や、生き難さを語ることへと主題が深化している。この改変のどこまでが光行自身の創作であるかは不明だが、他書を参照したとしてもこのような選択をしたのは光行自身であり、それを一話の中で主題化して示すということは、やはり物語創作に相通じるものがある。またこれが光行の破鏡説話の解釈であり説明であると捉えれば、注釈とも言える。

第三章では、『百詠和歌』の第二坤儀部「野」の「独在」傅巖中」」における傅説説話について検討し、原典となる『尚書』や『史記』の叙述そのままではなく、両者を取り合わせ、さらに平安朝の傅説故事の享受を踏まえた展開になっていることを論じた。また、先行研究（8）で行われているように当該章段について『源氏物語』の受容を検討することは、和と漢の融合を考える上で非常に魅力的な観点であるが、『源氏物語』に頼りすぎることなく、光行の創作の可能性を考えるべきであることを

述べた。具体的には、この章段は『紫明抄』明石巻に「他の朝廷にも、夢を信じて国を助くるたぐひ多うはべりけるを、」（明石巻、②二三二頁～）（9）の典拠として引用されている。このため『百詠和歌』の記述が創作される際にも『源氏物語』の当該箇所が踏まえられているのではないかということが指摘されていた。しかし、章段末の和歌を詳しく検討したところ、ことさら『源氏物語』を持ち出す必要はないと判断した。それよりもむしろ、当該の和歌では殷の武帝が傅説を発見した時の喜びを、吉野桜を目の当たりにしたときの感動になぞらえて示しており、光行が登場人物の心情を読み取り、それをどのように表現しているのか、その一端が垣間見られることの方に注目した。このように読み取った心情を和歌の伝統的な表現で説明しようとしたことは、『百詠和歌』の注釈的な部分のひとつであると言える。

また当該箇所が『源氏物語』の注釈で深く関わってくるのは、『光源氏物語抄』以降『百詠和歌』の記述、あるいはきわめて類似したかたちで注釈書に引用されるようになってからである。『光源氏物語抄』や『紫明抄』がどうして原典ではなく『百詠和歌』を引用したのかについては、今後の課題として残るが、『光源氏物語抄』と成立期を同じくする『十訓抄』においても、平安時代以降培われてきた傅説像が継承されており、光行の意図したことが西円や素寂など当時の注釈者にも共有され、理解されていたものと思われる。

〈第Ⅲ部＝注釈〉

第Ⅲ部では、『源氏物語』の諸注集成『光源氏物語抄』に見られる博士家の文人達の注釈を中心に、物語注釈における漢籍引用の問題について検討した。

第一章では、『光源氏物語抄』の編者の注釈傾向を検討した。従来の編者論においては、人間関係が浮き彫りになる一部の注記に関心が集中し、「今案」注記全般を通した編者の学問態度については、十分な検討が尽くされていなかった。別の解釈を生み得ないような箇所にまで疑問を呈していることから、編者は初学者ではないかとさえされてきた。そこで「今案」とある注釈を検討した結果、理路整然とした実証を好む傾向があった。一方で、表現上の重なり合いが不完全であっても、詩や和歌の趣向が響き合えば典拠として指摘していく積極性も持ち合わせていた。こうした多様な読みを見せる編者はやはり初学者ではなく、一人の源氏注釈者として評価すべきである。

第二章から第三章にかけては、注釈における経書引用と、そこに関係する注釈者たちの人間関係について論じた。まず第二章では、『光源氏物語抄』を代表する経書引用である素寂注の周公旦故事の引用について、一連の注釈がどのようなルーツから成り立っているのかということを整理した。そして従来から指摘されている『奥入』など前代の注釈史からの流れ、経書が学問として貴族社会でも鎌倉でも読まれていたということに加え、父光行の創作や河内方の学問系譜、さらに素寂自身の注釈手法も関わっているのではないかということを述べた。周公旦は中国の聖人であるが、光源氏に周公旦の要素を多く見いだそうという姿勢は、第Ⅱ部第一章で検討したごとく、光行が『蒙求和歌』において儒教的な理想の為政者を意図的に創出していこうとしたことに通底するのではないだろうか。また、前代の注釈書で指摘されているところを起点に、同じ

典籍を用いている箇所を他にも指摘することで、『源氏物語』と漢籍典拠をより大きな枠組で重ねていこうとうする素寂の注釈方法との関わりについても言及した。

続く第三章では、『光源氏物語抄』編者の経書引用を検討することで、編者が経書を用いて『源氏物語』を理解することに積極的であったこと、またそうした把握の方法を促進させた要因のひとつとして明経道の学者清原教隆の注釈があったことを述べた。教隆は、帚木巻の冒頭の構造を家学である『春秋左氏伝』の構造になぞらえて理解しようとしていた。さらにこの教隆の発想は、『光源氏物語抄』の編者とされる「今案」注や、葉連の『源氏物語』理解にも影響を及ぼしていた。つまり、専門家の意見を尊重するという当時の注釈の傾向が、漢籍を踏まえた博士家の注を呼び込み、その注は周囲の注釈者により尊重されて、他の場面にも敷衍されていくという流れである。当時の貴顕や幕府によって経書が学ばれていたこと（１０）や、『光源氏物語抄』に経書の引用が多用されていることは指摘されている（１１）が、それがどのような経緯をたどって注釈に反映されていったのかということについては、あまり注目されていなかったため、今回補強できたと考える。素寂が教隆と直接の交流があったかは不明であるが、経書の引用が博士家の教隆自身のみならず周辺の注釈者たちにも影響を与え、経書引用が実践されていったという流れの中において、博士家ではないものの、経書引用に肯定的であった周辺の注釈者の一人として素寂を位置づけられるのではないだろうか。してみると、南家藤原氏の学統を引く源光行の子であるという系譜的な位置づけと、同時代的な注釈方法という多方向から博士家の影響を受けた人物であるといえる。その中で『光源氏物語抄』とその編者の果たした役割も大きいのではないだろうか。博士家の学者教隆の『春秋左氏伝』引用を継承し、経書を用いることに肯定的な『光源氏物語抄』に素寂の『尚書』引用に関する注釈が掲載されることにより、素寂注は、その妥当性を増したはずである。こうした『光源氏物語抄』内の価値付けが、『紫明抄』で『尚書』引用をさらに敷衍させていく契機のひとつにもなっているのではないだろうか（１２）。

第四章では、『光源氏物語抄』桐壺巻に「内裏御沙汰の時俊国朝臣の申すと云々」（一五二頁）（１３）とある一節をめぐって、まず「俊国朝臣」が生存年代、経歴や学問的素養、また親族に『源氏物語』享受者がいることから、代々紀伝道の学者を輩出した北家藤原氏内麿流の俊国であることを指摘した。さらに俊国が、桐壺帝の寵愛をめぐる桐壺更衣と弘徽殿女御をはじめとする他の女性たちの対立を、『後漢書』の和帝をめぐる鄧皇后と陰皇后の関係に基づき理解していることについて、この故事が収められている皇后紀第十上を直接亀山天皇に進講したことがあることを示し、『源氏物語』解釈と学者としての学問の関連性を史料に基づいて明らかにすることができた。俊国の解釈は、御前談義の場において披露されたものであったが、談義の場においては専門性が期待される傾向にあり、さらにこの俊国説は、『光源氏物語抄』『雪月抄』という同時代の複数の注釈書にも肯定的に引用されている。博士家の学者たちは貴族社会の学問を領導する立場にあったことを考えると、鎌倉期の『源氏物語』注釈の形成においても、紀伝道の学者たちの果たした役割はもっと着目されるべきであることを指摘した。

二、物語創作と注釈の近似性

ここで、これまで論じてきたことを踏まえて、男性文人による物語と漢籍の接合ということを軸に文学史の流れを見通したい。

序章でも述べた通り、男性文人によるとされる平安前期物語には、仮名による物語創作でありながら、男性文人たちの基本的な思考を支える漢籍の知が援用されていた。今回論じたところで言えば、『落窪物語』の、①継母による継子いじめ、②求婚者の出現と苦境脱出、③継子の結婚、④継母への報復と父との再会、⑤継子一家の繁栄と父というプロットは、先行するとされる古本『住吉物語』と共通するものであり、そこに恋愛譚の展開として『遊仙窟』や『鶯鶯伝』を取り入れていた。落窪の君が継母に管理されている女性であるという意味では、『遊仙窟』の仙女と同じくなかなか出会うことのできない非日常性をそなえた存在であると言える。しかし落窪にしても、典薬助に襲われそうになった物置部屋にしても、それらはすべて神仙にくらべ、日常の中の非日常である。しかもいずれも負の非日常性に転化されており、それらはいずれも継母のいじめとして機能していた。このように、中国の仙境から継承した非日常性と継子いじめ譚の継母によるいじめをうまく接合させており、それが作品のオリジナリティとなっている。また、古本『住吉物語』と共通するプロットのうち、⑤継子一家の繁栄において、古本『住吉物語』では、継母の零落があわせて語られるが、『落窪物語』では、孝行譚へと変化している。このことはすでに指摘されているとおり（14）、『孝子伝』の継子譚を意識したものであるが、『孝子伝』のような男継子ではなく、女子が継子となる『住吉物語』のパターンを継いだ中に実現しようとさせたところにも、和を中心とした漢の接合があるといえよう。

それに対して、先行研究でも指摘されている通り、中国の漢故事の世界を仮名で書くことで、漢文では十分に表現しきれない心情や人間関係の機微に言及していく（15）のが、平安後期から鎌倉前期にかけて、博士家の学問を継承する人物により著された翻案説話である。つまり漢を軸にして和の要素と結合させるパターンである。たとえば『百詠和歌』の破鏡説話において、光行が創作のもとにしたと考えられる『李嶠百詠』張庭芳注は『神異経』を引いており、妻の不義密通が一話の主題となっていた。それに対して光行の『百詠和歌』の破鏡説話は、説話集や歌学書に見える日本で流布した破鏡説話のパターンを取り入れることにより、一話の話題を妻の不義密通から人生の生き難さ、夫婦両者の苦悩へとその主題を変化させていた。これが光行の破鏡説話の解釈であり、それを提示したという点では注釈と言える。一方でその解釈を物語展開の中に入れ込んで一話に仕立てたという意味では創作活動と言うことができる。そして光行は、『蒙求和歌』『百詠和歌』を漢学の師である紀伝道の藤原孝範に見せており、その労をねぎらわれていることからすると、これも博士家の周辺で行われた和と漢を接合のひとつと位置付けることができる。

一方で物語において和を中心に漢の要素を接合させることは、途絶えてしまった訳ではない。その典型の一つが鎌倉期の『源氏物語』の注釈書である。注釈は、『源氏物語』を理解することを助けるものであり、読むという行為の一環である。しかし、新典拠を指摘して、物語の新たな解釈を生み出すことは、創作と近似した行為と言えるのではないだろう

か。たとえば、第Ⅲ部第四章で考察した藤原俊国の場合では、御前談義で「あやしきわざ」とは何か下問があった際に、『後漢書』皇后紀第十上の鄧皇后の故事に基づいて呪詛であるという見解を示した。これは陰皇后が和帝の寵愛をうける鄧皇后を排除するためにしかけたものである。一方の桐壺巻で、やはり、弘徽殿女御が、桐壺帝の寵愛をほしいままにする桐壺更衣をうとましく思っていた。このような背景を考えると、単に「あやしきわざ」の語釈のみならず、『後漢書』の陰皇后と鄧皇后の関係により、『源氏物語』の弘徽殿女御と桐壺更衣の人間関係を理解していたことになる。和文脈に漢籍の新典拠を接合させて新たな物語世界を構築していることは、平安前期物語の作者である男性文人たちが行った和文脈の物語に漢籍を受容していったことと近似する。つまり、対極に位置するように思われる創作と注釈は表裏一体の行為である。これは『蒙求和歌』『百詠和歌』のようなひとつの作品の内に両方の要素を持ち合わせている場合のみならず、文学史の大局的な展開からも、漢籍を本業とし思考の礎とする男性文人の立場からすると、和と漢を接合し、物語を創作することと、既存の物語を注釈することは、近似する行為であることが言えるのではないだろうか。

このように鎌倉期の男性文人、その中でも中核に位置する博士家の学者たちが、『源氏物語』の注釈に関わり、漢籍に関わる注釈を残すようになったのは、専門家の知見を重要視する当時の風潮によるものである。しかしもとはと言えば、『源氏物語』に漢籍が引用されているからであり、物語を創作する際に、漢籍が欠かせない要素になったのは、『源氏物語』に至るまでの物語創作が主に漢詩文を本業とする男性文人によって担われてきたことによる。つまり、本論文の中でで検討した『落窪物語』までの平安前期中期の男性文人たちの物語創作は、鎌倉期の専門性の重視と呼応して、博士家の学者たちが、『源氏物語』の注釈に関与する遠因となっている。

してみると鎌倉期の博士家の学者達の『源氏物語』注釈は、平安期の男性文人による物語創作を継承する文学活動として位置づけられるのではないだろうか。平安前・中期の物語文学が、男性文人たちの鬱屈を晴らす私的なものであったのに対して、鎌倉期において、『源氏物語』の作品としての地位は上昇していた（１６）。また男性文人についても、平安期前中期の文人達が沈淪にあえいでいたのに対して、鎌倉期の博士家の学者たちは、実務・文雅の両面で貴顕や幕府との関係を深め、重要な地位を占めていた。物語の地位も男性文人たちの位置づけも、どちらも平安期のより高まっており、鎌倉期の男性文人その中でも博士家の学者たちの『源氏物語』注釈は、平安期の男性文人の物語創作にくらべ、専門性の高い高次の文学行為として位置づけられていたと考えられる。そして、『源氏物語』の注釈史の流れでいえば、この漢籍が引用されていることが、『源氏物語』の古典としての正統性を高めるものとして機能していくのであり（１７）、あくまで物語展開を支える構成要素の一つとして投影された物語文学の中の漢籍受容は、鎌倉期にいたると物語そのものの存在意義を高め、権威化される要因へと位置づけを変える。それを担ったのは、博士家の学者やその周辺に位置する河内方の源氏学者たちであり、くしくも平安前期中期に物語を創作していた人々と社会的・学問的な背景を共有する人物であった。

『蒙求和歌』『百詠和歌』の場合、説話部分にしても和歌の部分にしても、注釈書のように、典拠や類例、解釈を個別に示すのではなく、一つの説話として物語展開の中に入れ込んで語っている分、私的な物語創作の性格を多く残している。また博士家の学者の注釈と比較すれば、その周辺に位置する光行は、学問的な権威も低下すると言わざるをえない。しかし『原中最秘抄』など河内方の源氏注釈では、いずれも「蒙求注」「百詠注」として引用されており、河内方の中では尊重されていたことがうかがえる(18)。また説話集や軍記などへの受容も見られることから、信頼を得て一般にも流布したと考えられる（19）。

また典拠の多様性という側面も垣間見えた。『蒙求和歌』『百詠和歌』で漢故事が和文化される際、その骨子となる漢故事は、古注本『蒙求』や張庭芳注『李嶠百詠』の叙述をそのまま引き移して、それを翻案した訳ではないようある。『百詠和歌』の傅説説話は、中国の典籍でいえば、『史記』と『尚書』を合わせたような記述になっており、典拠の重層性が確認できる。また殷の武帝が傅説に行った、臣下が君主を助けるたとえ話のうち、舟舵のみがクローズアップされているのは、平安朝の傅説説話の享受の動向と重なるものであった。また破鏡説話の考察で述べた通り、『両京新記』など他の漢籍ももちろんだが、不義密通の話から夫婦の苦悩や人生の生き難さへと主題をシフトするのに、役立っていたのは、破鏡説話の類話を語る説話集や歌学書であった。このことは、文人の思考が原典となる漢籍との直線的な関係ではなく、本朝における受容の様相の影響を受けており、また中国の典籍のみならず、それを伝える説話集なども漢故事の知識や発想を得る源泉となっていたことを示している（20）。

また、第Ⅲ部で述べた通り、俊国が桐壺巻の「あやしきわざ」を理解するために用いた『後漢書』、清原教隆が帚木巻の冒頭を理解するために持ち出した『春秋左氏伝』は、彼らにとって代々読み方を継承している典籍であった。とくに帚木巻の教隆注は、注釈としての妥当性が高いとは言いにくく、してみると、『源氏物語』を理解しようとした時、家学である漢籍が選択肢としてあったことがわかる。これは、表現や内容との一致を重んじる現在の研究とは異なる観点によるものである。光行の翻案説話も博士家の『源氏物語』注釈も鎌倉期であるため、これをそのまま平安前期中期の物語の創作に当てはめる訳にはいかないが、平安前期物語にも直接的・間接的さまざまな次元における漢籍の受容が行われ、典拠の選択についても作者の背景知識や体験により多様な経路があったことが想定される。

三、今後の課題

まず、今回は『光源氏物語抄』の博士家とその周辺の注釈のうち、物語の解釈や構想に関わるような漢籍受容を中心に考察した。そのため、河内方の注釈については、素寂の注釈、しかもその一部にしか言及できなかった。資料的に限界があるが、『水原抄』逸文や『原中最秘抄』などの注釈を精査し、河内方の中でもとくに光行・親行の注釈における漢籍受容について検討することが必要である。今回の考察を踏まえるならば、河内方光行・親行も南家藤原氏の学統を引くという意味では、博士家の

周辺に位置する注釈者と位置づけることができる。すでに、

『光源氏物語抄』には、北条実時に累代の秘説を授けたりした漢学者清原教隆（一一九九～一二六五）の漢籍の訓みや故実にかかわる説が多く引かれている。光行の源氏学もそういう要素を多分に含んでいたのかもしれない（21）。

という稲賀敬二氏の指摘があるが、この指摘は今回の一連の考察を経てその重要性が増したのではないかと考えている。今後は字訓や語釈レベルの注釈も含めて、総合的に教隆をはじめとする博士家の『源氏物語』注釈と河内方の注釈との比較検討が必要である。博士家の注釈についていえば、有職故実についての注釈など、漢籍引用以外の注釈の考察も行う必要がある。

また、本論文で、男性文人にとって、漢籍を引用して物語を創作することと、既存の物語を理解するために漢籍の知を持ち出して注釈することが表裏一体の行為であることが明らかになった今こそ、検討するべき作品として『松浦宮物語』がある。作者は、藤原定家作とされ漢籍引用も伴う作品である。周知の通り、藤原定家は『奥入』をはじめ、『源氏物語』の注釈を残した人物でもあり、注釈の中には漢籍典拠の指摘も含まれる。同一人物により物語創作と注釈が行われた例として今後研究に着手しなければならない。

注

（1）新間一美「伊勢物語における遊仙窟受容について―第五十三段・第五十四段を中心に―」山本登朗編『伊勢物語　虚構の成立』（竹林舎、二〇〇八年一二月）

（2）三木雅博『『落窪物語』を読む」片桐洋一他編『王朝物語を学ぶ人のために』（世界思想社、一九九二年一一月）

（3）室伏信助「物語と物語文学」（『王朝物語史の研究』角川書店、一九九五年六月）。

（4）高橋亨「中心と周縁の文法」（『物語と絵の遠近法』ぺりかん社、一九九一年九月）、畑恵里子「蔑称という報復」（『王朝継子物語と力―落窪物語からの視座―』新典社、二〇一〇年一〇月）

（5）『落窪物語』の本文は、藤井貞和校注『新日本古典文学大系一八　住吉物語　落窪物語』（岩波書店、一九八九年五月）による。仮名遣については、歴史的仮名遣いに改めた。

（6）山部和喜『『蒙求和歌』における〈翻訳〉」『川口短期大学紀要』八（一九九四年一二月）、山部和喜「『蒙求和歌』小考」『川口短期大学紀要』一〇（一九九六年一二月）、柳瀬喜代志「『百詠和歌』『蒙求和歌』を媒體とする軍記所載の漢故事―受命の君と忠臣像の變容譚二、三題をめぐって―」『日中古典文学論考』（汲古書院、一九九九年三月）、章剣『『蒙求和歌』校注』（溪水社、二〇一二年一〇月）、田坂憲二『『蒙求和歌』と『源氏物語』『源氏物語の政治と人間』（慶應義塾大学出版会株式会社、二〇一七年一〇月）など。

（7）古田島洋介『唐物語』第十話原拠再考」『比較文学・文化論集』一（一九八五年三月）、新間一美「大和物語蘆刈説話の原拠について―本事詩と両京新記―」『平安朝文学と漢詩文』（和泉書院、二〇〇三年二月）、増田欣「「陳氏の鏡」と両京新記―唐物語の翻訳手法―」『中世文芸比較文学論考』（汲古書院、二〇〇二年二月）、日向一雅「平安文学における『本事詩』の受容について―徐徳言条・崔護条を例として―」『源氏物語　東アジア文化の受容から創造へ』（笠間書院、二〇一二年三月）参照。

（8）山部和喜「翻訳における和歌の機能―『蒙求和歌』と『百詠和歌』を基点として―」『説話文学研究』三一（一九九七年六月）

（9）『源氏物語』の本文は、『新編日本古典文学全集』（小学館）による。

（10）日向一雅「源氏物語古注釈における『尚書』と周公旦注」同氏編『源氏物語　注釈史の世界』（青簡舎、二〇一四年二月）

（11）李興淑『光源氏物語抄』における儒教的言説」『日本古代学』四（二〇一二年三月）、河野貴美子「『源氏物語』古注釈書にみる和漢の往還―『光源氏物語抄』所引漢籍考―」小山利彦・河添房江・陣野英則編『王朝文学と東ユーラシア文化』（武蔵野書院、二〇一五年一〇月）。

（12）堤康夫「『紫明抄』の形成―『異本紫明抄』との関連を中心として―」『源氏物語注釈史の基礎的研究』（おうふう、一九九四年二月）は、『紫明抄』が『異本紫明抄』の抄出を中心として成立した」と述べている。

（13）『光源氏物語抄』の本文は中野幸一・栗山元子編『源氏物語古註釈叢刊』第一巻（武蔵野書院、二〇〇九年九月）による。引用に際し書き下し文に改めた。

（14）森あかね「『落窪物語』における孝養―継子いじめとの関わりから―」『国語と国文学』九三―一二（二〇一六年一二月）など。

（15）池田利夫「源光行の生涯とその文学」吉岡曠編『源氏物語を中心とした論攷』（笠間書院、一九七七年三月）。

（16）たとえば『原中最秘抄』の逸文には以下のようにある。「私云此物語は内典外典を始として君臣父子のたゝずまひ、夫婦兄弟のまじはり、煙霞雪月のあそび、詩歌管弦の道までもかきのこせる事なきか。凡以二白居易之文集一、比二紫式部源氏一と古来より申伝たり。詞の優艶更無二比類一ゆへ也。是をまなびは仁義徳行の道にも達ッぬべし。これをたしなまば菩提得脱のたよりとも成ぬべし」。『六百番歌合』冬・十三番の判詞にも「源氏見ざる歌よみは遺恨の事なり」（『新編国歌大観』）とある。

（17）河野貴美子氏は、帚木巻冒頭の注で、教隆が『春秋左氏伝』を踏まえた注を残していることについて、以下のように述べている。「いま注目したいのは、『源氏物語』の構造が、中国伝統の重要経典『春秋左氏伝』と並べて説かれることによって、『源氏物語』という作品を経書と同様の仕組みを備えた読み学ぶべき「古典」として位置づけることをも可能にすること、そしてさらには、この発言が、当時誰よりも『春秋左氏伝』に通じていたであろう清原教隆によってなされていたことである。」前掲注（11）河野氏

論文。

（18）稲賀敬二「中世源氏物語注釈の一問題―『正和集』から『原中最秘抄』へ―」『源氏物語の研究―物語流通機構論―』（笠間書院、一九九三年七月、一九七二年七月初出）『蒙求和歌』『百詠和歌』は、元久元年（一二〇四）当時十三歳であった新将軍源実朝に献上されたとの説もある。（池田利夫『新訂河内本源氏物語成立年譜攷』貴重本刊行会、一九八〇年五月。）

（19）乾克服己「十訓抄と文鳳抄・百詠和歌」『金沢文庫研究』一五―二（一九六九年二月）、池田利夫「百詠和歌と李嶠百詠」「蒙求和歌の成立と伝流」『日中比較文学の基礎研究　翻訳説話とその典拠』（笠間書院、一九七四年一月）、前掲注（6）柳瀬氏論文など。

（20）素寂の『紫明抄』については、漢故事の説話を歌学書から取材していたことが島内景二氏により指摘されている。島内氏「「紫明抄」の注釈態度について―歌学書との関わり―」『国語と国文学』六〇―四（一九八三年四月）参照。

（21）稲賀敬二「源光行・親行と河内学派の形成」（『『源氏物語』とその享受資料　稲賀敬二コレクション3』（笠間書院、二〇〇七年七月）

【主要参考文献】

〈主要使用テキスト〉

・片桐洋一他校注・訳『新編日本古典文学全集一二　竹取物語　伊勢物語　大和物語　平中物語』（小学館、二〇〇六年八月）

・中野幸一校注・訳『新編日本古典文学全集一四～一六　うつほ物語①～③』（小学館、二〇〇八年一二月）

・阿部秋生他校注・訳『新編日本古典文学全集二〇～二五　源氏物語①～⑥』（小学館、二〇〇六年八月～二〇〇八年一二月）

・藤井貞和・稲賀敬二校注『新日本古典文学大系一八　住吉物語　落窪物語』（岩波書店、一九八九年五月）

・大曾根章介・後藤昭雄・金原理校注『新日本古典文学大系二七　本朝文粋』（岩波書店、一九九二年五月）

・「新編国歌大観」編集委員会編『新編国歌大観』（角川書店）

※『蒙求和歌』『百詠和歌』は第十巻。校訂・解題池田利夫・佐藤道生。

・池田利夫編『蒙求古註集成上・中・下』（汲古書院、一九八八年一一月～一九八九年九月）

・蔵中進編『江戸初期無刊記本遊仙窟　本文と索引』（和泉書院、一九七九年八月）

・中野幸一・栗山元子編『源氏物語古註釈叢刊第一巻　源氏釈　奥入　光源氏物語抄』（武蔵野書院、二〇〇九年九月）

・石川一他編『光源氏物語抄　正宗敦夫収集善本叢書　第Ⅰ期』第一巻（武蔵野書院、二〇一〇年二月）

・池田亀鑑『源氏物語大成』巻七（中央公論社、一九五六年一二月）

・玉上琢彌編『紫明抄・河海抄』（角川書店、一九九一年二月）

〈研究書・論文・注釈書など〉※著者名五十音順

・相田満「幼学・注釈の世界と説話―『蒙求』・『職原抄』の注釈学を例として―」『説話文学研究』三四（一九九九年五月）

・秋山虔『王朝の文学空間』（東京大学出版会、一九八四年三月）

・秋山虔編『王朝文学史』（東京大学出版会、一九八四年六月）

・李興淑「『光源氏物語抄』編者をめぐって」『文学研究論集』三六（二〇一二年二月）

・李興淑「『光源氏物語抄』における儒教的言説」『日本古代学』四（二〇一二年三月）

・伊井春樹『源氏物語注釈史の研究　室町前期』（桜楓社、一九八〇年一一月）

・飯沼清子「「白物」攷」『風俗史学』二（一九九八年一月）

・池内義資編『中世法制史料集　別巻　御成敗式目註釈書集要』（岩波書店、一九七八年一〇月）

・池田利夫『日中比較文学の基礎研究　翻訳説話とその典拠』（笠間書院、一九七四年一月）

・池田利夫「蒙求和歌の成立過程と執筆動機」渡辺三男博士古稀記念論文集刊行会編『渡辺三男博士古稀記念日中語文交渉史論叢』（桜楓社、

一九七四年四月）
・池田利夫「源光行の生涯とその文学」吉岡曠編『源氏物語を中心とした論攷』（笠間書院、一九七七年三月）
・池田利夫『新訂河内本源氏物語成立年譜攷』（貴重本刊行会、一九八〇年五月）
・池田利夫「蒙求和歌伝本系統詩論―旧説への再吟味―」『鶴見大学紀要』一五　第一部国語・国文学篇（一九八三年三月）
・池田利夫「源光行における東邑―『河内本源氏物語成立年譜攷』伝記補遺―」『国文鶴見』一七（一九九二年一二月）
・石川徹『古代小説史稿』（パルトス社、一九九六年五月）
・市川本太郎『日本儒教史（三）中世篇』（汲古書院、一九九二年九月）
・稲賀敬二『源氏物語の研究―成立と伝流―』（笠間書院、一九六七年九月）
・稲賀敬二校注『新潮日本古典集成一四　落窪物語』（新潮社、一九七七年九月）
・稲賀敬二『源氏物語の研究―成立と伝流―　増訂版』（笠間書院、一九八三年九月）
・稲賀敬二『源氏物語の研究―物語流通機構論―』（笠間書院、一九九三年七月）
・稲賀敬二『前期物語の成立と変貌　稲賀敬二コレクション2』（笠間書院、二〇〇七年七月）
・乾克己「十訓抄と文鳳抄・百詠和歌」、『金沢文庫研究』一五―二（一九六九年二月）
・猪熊範子「『唐物語』における作中和歌の位相」『国文学研究』一一七（一九九五年一〇月）
・今井源衛『王朝文学の研究』（角川書店、一九七〇年一〇月）
・今井源衛『今井源衛著作集　第8巻　漢詩文と平安朝文学』（笠間書院、二〇〇五年一一月）
・今西祐一郎「「なさけ」私論」『京都府立大学学術報告人文』三四（一九八二年一一月）
・今西祐一郎「「なさけ」の系譜―物語史一面―」『叙説』一二（一九八六年三月）
・今村与志雄訳『遊仙窟』（岩波書店、一九九〇年一月）
・岩佐美代子「源具顕―生涯と作品―」『京極派歌人の研究（改訂新装版）』（笠間書院、二〇〇七年一二月）
・岩坪健『源氏物語古注釈の研究』（和泉書院、一九九九年二月）
・岩坪健『源氏物語の享受　注釈・梗概・絵画・書道』（和泉書院、二〇一三年二月）
・室松岩雄編『国文註釈全書一〇　落窪物語証解（他）』（國學院大學出版、一九〇九年八月）
・岩本憲司『春秋左氏伝杜預集解』上・下（汲古書院、二〇〇一年八月～二〇〇六年五月）
・内田泉之助・乾一夫『新釈漢文大系四四　唐代伝奇』（明治書院、一九九〇年一月）
・内山知也「本事詩校勘記」『隋唐小説研究』（木耳社、一九七七年一月）
・上原作和・正道寺康子『うつほ物語引用漢籍注疏　洞中最秘鈔』（新典

社、二〇〇五年二月）
・宇津保物語研究会編『宇津保物語論集』（古典文庫、一九七三年一二月）
・江戸英雄『うつほ物語の表現形成と享受』（勉誠出版、二〇〇八年九月）
・大井田晴彦『うつほ物語の世界』（風間書房、二〇〇二年一二月）
・大曾根章介『大曾根章介　日本漢文学論集』第一巻～第三巻（汲古書院、一九九八年六月～一九九九年七月）
・太田美知子「七毫源氏「須磨」巻の頭注「百詠注」について―破鏡の寓意がもたらすもの―」（豊島秀範編『源氏物語本文の研究』國學院大學文学部日本文学科、二〇一一年三月）
・大野晋『新版日本語の世界』（朝日新聞社、一九九三年一〇月）
・小川剛生『中世の書物と学問』（山川出版社、二〇〇九年一二月）
・小木喬「桂の中納言」『散逸物語の研究　平安・鎌倉時代編』（笠間書院、一九七三年二月）
・奥津春雄『竹取物語の研究―達成と変容―』（翰林書房、二〇〇〇年二月）
・尾崎康「正史宋元版書誌解題」『正史宗元版の研究』（汲古書院、一九八九年一月）
・尾崎康「群書治要解題」『古典研究会叢書　漢籍之部　第十五巻　群書治要（七）』（汲古書院、一九九一年八月）
・織田百合子『源氏物語と鎌倉―「河内本源氏物語」に生きた人々―』（銀の鈴社、二〇一一年一二月）
・小竹武夫訳『漢書6　列伝Ⅲ』（筑摩書房、一九九八年三月）
・音無幸子「面白の駒に関する五つの考察」『国語と教育（大阪教育大学）』三〇（二〇〇五年三月）
・落合博志「『原中最秘抄』小見―一、二の人物と逸文資料など―」『法政大学教養部紀要』九三（一九九五年二月）
・柿村重松『本朝文粋注釈』（内外出版印刷、一九三〇年九月）
・柿本奨『落窪物語注釈』（笠間書院、一九九一年一月）
・蔭木英雄「中世初期縉紳漢文学概観―菅原為長を手がかりに―」『相愛大学相愛女子短期大学研究論集　国文・家政編』三一（一九八四年二月）
・片寄正義「唐物語考」『今昔物語集の研究　下』（芸林社、一九七四年六月）
・門澤功成「十三世紀の関東における漢籍受容の一側面―『異本紫明抄』に引用された「長恨歌伝」一本文の検討から―」（『アジア遊学』別冊二（勉誠出版、二〇〇三年一〇月）
・門澤功成「十三世紀の関東における漢籍受容の一側面―『異本紫明抄』に引用された「長恨歌伝」本文の検討から―」『白居易研究年報』六（二〇〇五年一二月）
・金光桂子「『風葉和歌集』の政教性（下）―物語享受の一様相―」『国語国文』六七―一〇（一九九八年一〇月）
・鎌田正「清家に於ける左伝の伝授とその学問について」『漢文教室』二九（一九五七年二月）
・鎌田正「旧鈔巻子本春秋経伝集解に於ける頼業の訓説とその伝授について」『書陵部紀要』八（一九五七年三月）
・川口久雄『三訂　平安朝日本漢文学史の研究』上篇～下篇（明治書院、

一九七五年一二月～一九八八年一二月）
・河村全二『十訓抄全注釈』（新典社、一九九四年五月）
・神田喜一郎『李嶠百詠』雑考」『神田喜一郎全集』第二巻（同朋出版、一九八三年一一月）
・工藤重矩「平安朝における「文人」について」『平安朝律令社会の文学』（ぺりかん社、一九九三年七月）
・宮内庁書陵部編『図書寮典籍解題　漢籍篇』（一九六〇年三月）
・倉又幸良「『竹取物語』の帝物語―『漢武帝内伝』からの離陸―」『中古文学』五一（一九九三年五月）
・栗山元子「『光源氏物語抄』編者考―金沢実時説の検討を中心に―」陣野英則他編『平安文学の古注釈と受容　第二集』（武蔵野書院、二〇〇九年九月）
・栗山元子「鎌倉時代の『源氏物語』享受について―『光源氏物語抄』における西円の源氏学―」中野幸一編『平安文学の交響―享受・摂取・翻訳―』（勉誠出版、二〇一二年五月）
・黒田彰子「野守鏡考―俊頼髄脳から謡曲『野守』まで―」『中世和歌論攷―和歌と説話と―』（和泉書院、一九九七年五月）
・河野貴美子「『河海抄』の『源氏物語』注」―和漢の先蹤計ふるに勝ふべからず」小林保治監修『中世文学の回廊』（勉誠出版、二〇〇八年三月）
・河野貴美子「古注釈からみる源氏物語と唐代伝奇」日向一雅編『源氏物語と唐代伝奇　『遊仙窟』『鶯鶯伝』ほか』（青簡舎、二〇一二年二月）
・河野貴美子「和語が漢語を紡ぐ文―古注釈を通してみる」仁平道明編『源氏物語と白氏文集』（新典社、二〇一二年五月）
・河野貴美子「古注釈を通してみる『源氏物語』の和漢世界―『河海抄』、『花鳥余情』―」中野幸一編『平安文学の交響―享受・摂取・翻訳―』（勉誠出版、二〇一二年五月）
・河野貴美子他編『日本「文」学史　第一冊　「文」の環境―「文学」以前』（勉誠出版、二〇一五年九月）
・河野貴美子『源氏物語』古注釈書にみる和漢の往還―『光源氏物語抄』所引漢籍考―」小山利彦・河添房江・陣野英則編『王朝文学と東ユーラシア文化』（武蔵野書院、二〇一五年一〇月）
・河野貴美子「『源氏物語』古注釈書が引く漢籍由来の金言成句」『アジア遊学』一九七（二〇一六年六月）
・河野貴美子「幼学書・注釈書からみる古代日本の「語」「文」の形成―漢語と和語の衝突と融合」『アジア遊学』一九九（二〇一六年八月）
・河野貴美子他編『日本「文」学史　第二冊　「文」と人びと―継承と断絶』（勉誠出版、二〇一七年六月）
・胡志昂編『日藏古抄李嶠詠物詩注』（上海古籍出版社、一九九八年八月）
・胡志昂・山部和喜・中村文「『百詠和歌』注釈（一）～（三）」『埼玉学園大学紀要　人間学部篇』七～九（二〇〇七年一二月～二〇〇九年一二月）
・小島憲之校注『日本古典文学大系六九　懐風藻、文華秀麗集、本朝文粋』（岩波書店、一九八三年一一月）
・古田島洋介「『唐物語』第十話原拠再考」『比較文学・文化論集』一（一

九八五年三月）
・小林賢章『アカツキの研究　平安人の時間』（和泉書院、二〇〇三年二月）
・小林保治全訳注『唐物語』（講談社、二〇〇三年六月）
・小林芳規『平安鎌倉時代に於ける漢籍訓読の国語史的研究』（東京大学出版会、一九六七年三月）
・近藤春雄「愛情小説の世界」『唐代小説の研究』（笠間書院、一九七八年一二月）
・桜井宏徳「「さがなき」安子―嫉妬深き「聖后」の肖像―」『物語文学としての大鏡』（新典社、二〇〇九年一〇月）
・佐々木孝浩「歌書としての『唐物語』」『説話文学研究』三九、（二〇〇四年六月）
・重松信弘『増補新攷源氏物語研究史』（風間書院、一九八〇年一〇月）
・島内景二「「紫明抄」の注釈態度について―歌学書との関わり―」『国語と国文学』六〇―四（一九八三年四月）
・島津久基「桂中納言物語」『国文学の新考察』（至文堂、一九四一年九月）
・下見隆雄『劉向『列女伝』の研究』（東海大学出版会、一九八九年二月）
・章剣「『蒙求和歌』における漢故事の受容―恋部を中心に―」『中国中世文学研究』五二（二〇〇七年九月）
・章剣「『蒙求和歌』の片仮名本と平仮名本について」『中国学研究論集』二六（二〇一一年四月）
・章剣『『蒙求和歌』校注』（溪水社、二〇一二年一〇月）
・新間一美「大和物語蘆刈説話の原拠について―本事詩と両京新記―」『平安朝文学と漢詩文』（和泉書院、二〇〇三年二月）
・新間一美「宮廷文学としての漢詩―平安朝における遊仙窟の受容を中心に」仁平道明編『王朝文学と東アジアの宮廷文学』（竹林舎、二〇〇八年五月）
・新間一美「伊勢物語における遊仙窟受容について―第五十三段・第五十四段を中心に―」山本登朗編『伊勢物語　虚構の成立』（竹林舎、二〇〇八年一二月）
・鈴木日出男「詩と和歌―『和漢朗詠集』前後」『古代和歌史論』（東京大学出版会、一九九〇年一〇月）。
・多賀宗隼「「関東武家式目」―鎌倉時代政治思想の一面―」『論集中世文化史　上　公家武家篇』（法蔵館、一九八五年九月）
・田坂憲二『源氏物語享受史論考』（風間書房、二〇〇九年一〇月）
・田坂憲二編『源氏物語古注釈集成　第一八巻　紫明抄』（おうふう、二〇一四年五月）解説。
・田坂憲二『『蒙求和歌』と『源氏物語』』『源氏物語の政治と人間』（慶應義塾大学出版会株式会社、二〇一七年一〇月）
・田坂順子『『蒙求和歌』叙述の方法』『福岡大学人文論叢』四六―三（二〇一四年一二月）
・高田祐彦「かな文学創造―『竹取物語』と『古今集』」鈴木日出男編『ことばが拓く　古代文学史』（笠間書院、一九九九年三月）
・高田祐彦「かな文学の創出―『竹取物語』の成立と享受に関する若干の覚書―」青山学院大学文学部日本文学科編『文字とことば―古代東

アジアの文化交流』（青山学院大学文学部日本文学科、二〇〇五年五月）
・竹田晃・黒田真美子編『中国古典小説選四　古鏡記・補江総白猿伝・遊仙窟〈唐代Ⅰ〉』（明治書院、二〇〇五年一一月）
・田中隆昭『源氏物語　歴史と虚構』（勉誠社、一九九三年六月）
・田中隆昭「滑稽譚から賢女伝へ――末摘花の物語――」『交流する平安朝文学』（勉誠出版、二〇〇四年三月）
・田中徳定「平安朝物語と儒教――「孝」と「三従」を中心として――」『孝思想の受容と古代中世文学』（新典社、二〇〇七年二月）
・高橋亨「〈落窪〉の意味をめぐって――物語テクストの表層と深層――」『日本文学』三一――六（一九八二年六月）
・高橋亨「〈話型〉継子譚の構造　実例『落窪物語』」『国文学』三六――一〇（一九九一年九月）
・高橋亨「中心と周縁の文法」『物語と絵の遠近法』（ぺりかん社、一九九一年九月）
・高橋亨「竹取物語と漢詩文――月をめぐって」『国文学』三八――四（一九九三年四月）
・武内義雄「群書治要と清原教隆」『武内義雄全集』第四巻（角川書店、一九七九年八月）
・趙力偉「『蒙求和歌』の増補について」『アジア遊学』一九七（二〇一六年六月）
・陳寅恪「附　讀鶯鶯伝」『元白詩箋證稿』（生活・読書・新知三聯書店、二〇〇九年一二月）
・塚原鉄雄「落窪物語の人物とその成立」（日本文学研究資料刊行会編『日本文学研究叢書　平安朝物語Ⅲ』一九七九年一〇月）
・堤康夫『源氏物語注釈史の基礎的研究』（おうふう、一九九四年二月）
・寺本直彦『源氏物語論考　古注釈・受容』（風間書房、一九八九年一二月）
・所弘「落窪物語の成立期に就いて」『国語と国文学』一三――六（一九三六年六月）
・朽尾武編『百詠和歌注』（汲古書院、一九七九年四月）
・冨永美香「よのしれもの――『大鏡』道義評をめぐって――」（『お茶の水女子大学人文科学紀要』五一、一九九八年三月）。
・冨永美香「増賀伝の形成――「道義記」をめぐって――」『中世文学』四〇、一九九五年六月）
・永井晋「中原師員と清原教隆」『金沢北条氏の研究』（八木書店、二〇〇六年一二月）
・中川正美「文化と文体――源氏物語の「情けなからず」――」『源氏物語文体攷――形容詞語彙から――』（和泉書院、一九九九年一〇月）
・長沼英二「作品形成の成立過程――学的方法の批判展開――」『落窪物語の表現構成』（新典社、一九九四年九月）
・中村秋香『落窪物語大成』（成蹊学園出版部、二〇〇〇年五月）
・仁平道明『和漢比較文学論考』（武蔵野書院、二〇〇〇年五月）
・仁平道明「『源氏物語』と史書――清河王慶・光孝天皇・光源氏」仁平道明編『源氏物語と東アジア』（新典社、二〇一〇年九月）
・仁平道明「和漢比較文学研究の射程――〈『源氏物語』と『後漢書』清

河王慶伝）再説―」『和漢比較文学』四六（二〇一一年二月）
・沼尻利通「「あやしきわざ」と弘徽殿大后」（『平安文学の発想と生成』國學院大學大学院、二〇〇七年一二月）
・野村八良『鎌倉時代文学新論』（明治書院、一九二六年五月）
・橋本義彦「貴族政権の政治構造」『岩波講座日本歴史４　古代４』（岩波書店、一九七六年八月）
・橋本義彦「勧修寺流藤原氏の形成とその性格―古代末期中流貴族の一典型として―」『日本古代史論集』（下巻）（吉川弘文館、一九六二年九月）
・畑惠里子『王朝継子物語と力―落窪物語からの視座―』（新典社、二〇一〇年一〇月）
・早川光三郎『新釈漢文大系五八・五九　蒙求　上下』（明治書院、一九七三年八、一〇月）
・原国人「『落窪物語』論―その成立について―」『平安時代物語の研究』（新典社、一九九七年七月）
・春田宣「特に落窪物語における諸問題　面白の駒について」（『中世説話文学論序説』桜楓社、一九七五年四月）
・久木幸男『大学寮と古代儒教』（サイマル出版社、一九六八年三月）
・日向一雅編『源氏物語と唐代伝奇　『遊仙窟』『鶯鶯伝』ほか』（青簡舎、二〇一二年二月）
・日向一雅「平安文学における『本事詩』の受容について―徐徳言条・崔護条を例として―」『源氏物語　東アジア文化の受容から創造へ』（笠間書院、二〇一二年三月）
・日向一雅編『源氏物語　注釈史の世界』（青簡舎、二〇一四年二月）
・福田俊昭『李嶠と雑詠詩の研究』（汲古書院、二〇一二年二月）
・藤井貞和『物語文学成立史』（東京大学出版会、一九八七年一二月）
・藤井日出子「蓬生巻における末摘花の形象―「昔物語」の古注をめぐって―」（『解釈学』四、一九九〇年一一月）
・藤原克己『菅原道真と平安朝漢文学』（東京大学出版会、二〇〇一年五月）
・藤原克己「漢語の「情」と和語の「なさけ」」（鈴木日出男編『ことばが拓く　古代文学史』（笠間書院、一九九九年三月）
・細谷勘資「内麿流（日野流）藤原氏の形成過程」『中世宮廷儀式書成立史の研究』（勉誠出版、二〇〇七年二月）
・細谷勘資『『親経卿記』と藤原親経」大島幸雄・細谷勘資・木本好信編『親経卿記』（高科書店、一九九四年七月）
・堀川貴司「新古今時代の漢文学―真名序を中心に―」『詩のかたち・詩のこころ―中世日本漢文学研究―』（若草書房、二〇〇六年一一月）
・堀部正二『中古日本文学の研究』（教育図書株式会社、一九四三年一月）
・増田欣「「陳氏の鏡」と両京新記―唐物語の翻訳手法―」『中世文芸比較文学論考』（汲古書院、二〇〇二年二月）
・松尾聰・寺本直彦校注『日本古典文学大系一三　落窪物語　堤中納言物語』（岩波書店、一九八三年四月）
・丸山キヨ子『源氏物語と白氏文集』（東京女子大学学会、一九六四年八月）
・三木雅博『『落窪物語』を読む」片桐洋一他編『王朝物語を学ぶ人のた

めに』（世界思想社、一九九二年一一月）
・三角洋一「蓬生巻の短篇的手法（二）」（『源氏物語と天台浄土教』（若草書房、一九九六年一〇月）
・三田明弘「『唐物語』の素材と主題―朗詠注との関わりから―」『説話文学研究』三九（二〇〇四年六月）
・三谷栄一『物語文学の世界』（有精堂出版株式会社、一九七五年二月）
・三谷栄一編『体系物語文学史　第三巻』（有精堂出版株式会社、一九八三年七月）
・三谷栄一・三谷邦明校注・訳『新編日本古典文学全集一七　落窪物語　堤中納言物語』（小学館、二〇〇四年一二月）
・三田村雅子『記憶の中の源氏物語』（新潮社、二〇〇八年一二月）
・室伏信助『王朝物語史の研究』（角川書店、一九九五年六月）
・目加田さくを『物語作家圏の研究―その位相及び教養よりみたる物語の形成―　増訂版』（パルトス社、一九八六年一〇月）
・目加田誠『中国の文芸思想』（講談社、一九九一年一〇月）
・桃裕行『上代学制の研究（修訂版）　桃裕行著作集　第一巻』（思文閣出版、一九九四年六月）
・森幸夫「六波羅奉行人斎藤氏の諸活動」『六波羅探題の研究』（続群書類従完成会、二〇〇五年四月）
・森田実歳「落窪物語論考」（『日本文学試論―異国文化の受容と純化―』明治書院、一九八一年三月）
・諸田龍美「中唐恋情文学と国文学の展開―〈好色・色好み〉篇」『愛媛大学法文学部論集　人文学科編』二三（二〇〇七年九月）
・八木沢元『遊仙窟全講』（明治書院、一九六七年一〇月）
・安田孝子「唐物語―編纂の意図―」太田義憲編『説話の講座　第四巻　説話集の世界Ⅰ　―古代―』（勉誠社、一九九二年六月）
・柳瀬喜代志『李嶠百二十詠索引』（東方書店、一九九一年三月）
・柳瀬喜代志「『百詠和歌』『蒙求和歌』を媒體とする軍記所載の漢故事―受命の君と忠臣像の變容譚二、三題をめぐって―」『日中古典文学論考』（汲古書院、一九九九年三月）
・山折哲雄「中世の武士の顔　倨傲と決死の面魂」『日本人の顔　図像から文化を読む』（日本放送出版協会、一九八六年五月）
・山岸徳平「中世説話の大陸的素材―蒙求及び唐物語と蒙求和歌に就いて―」『国語と国文学』一八―一〇（一九四一年一〇月）
・山岸徳平他校注『日本思想大系八　古代政治社会思想』（岩波書店、一九七九年三月）
・山崎誠「漢籍を媒介とする享受形態の一性格―源氏物語の古注をめぐって―」『平安文学研究』五一（一九七三年一二月）
・山崎誠「「李嶠百詠」雑考　続貂」『中世学問史の基底と展開』（和泉書院、一九九三年二月）
・山崎誠「菅大府卿為長伝小考」『中世学問史の基底と展開』（和泉書院、一九九三年二月）
・山田孝雄「蒙求と国文学（二）」『國學院雑誌』一九―一一（一九一三年一一月）
・山部和喜「『蒙求和歌』における〈翻訳〉」『川口短期大学紀要』八（一九九四年一二月）

・山部和喜「『蒙求和歌』小考」『川口短期大学紀要』一〇（一九九六年一二月）
・山部和喜「翻訳における和歌の機能―『蒙求和歌』と『百詠和歌』を基点として―」『説話文学研究』三二（一九九七年六月）
・山本登朗「「女歌」の源泉―平安時代の女性像と『遊仙窟』―」『礫』二四〇（二〇〇六年一〇月）
・山本登朗「『遊仙窟』文化圏」構想は可能か―「かいまみ」と「女歌」―」『和漢比較文学』四四（二〇一一年二月）
・山脇毅『源氏物語の文献学的研究』（創元社、一九四四年一〇月）
・山脇毅「雪月抄について」『平安文学研究』一一（一九五三年一月）
・幼学の会編『孝子伝注解』（汲古書院、二〇〇三年二月）
・義江彰夫「『関東御式目』作者考」石井進編『中世の法と政治』（吉川弘文館、一九九二年七月）
・吉海直人『落窪物語の再検討』（翰林書房、一九九三年一〇月）
・吉海直人「後朝の時間帯「夜深し」」『源氏物語』「後朝の別れ」を読む』（笠間書院、二〇一六年一二月）
・吉森佳奈子『河海抄』の『源氏物語』（和泉書院、二〇〇三年一〇月）
・和島芳男『日本宋学の研究』（吉川弘文館、一九六二年七月）
・和島芳男『中世の儒学』（吉川弘文館、一九六五年三月）
・渡辺秀夫『平安朝文学と漢文世界』（勉誠社、一九九一年一月）
・渡辺秀夫『和歌の詩学―平安朝文学と漢文世界―』（勉誠社、二〇一四年六月）
・渡辺秀夫『竹取物語』の漢文世界―物語文学における「典拠」「材源」論に向けて―」『中古文学』九九（二〇一七年六月）
・渡邉義浩他編『全譯後漢書』第二冊（汲古書院、二〇〇四年一月）